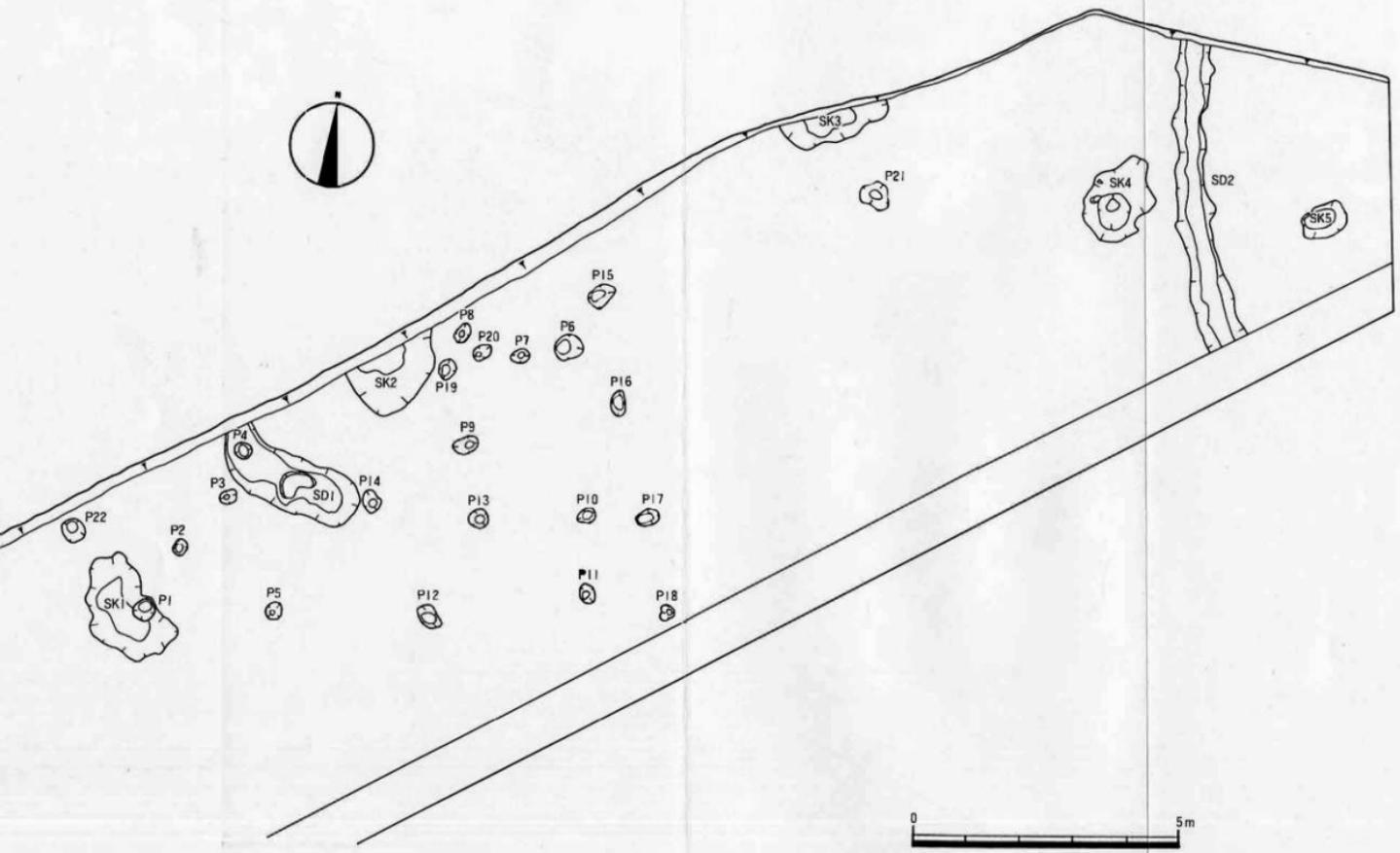


# 南高野古墳・二ノ井遺跡 市場遺跡

2000

財團法人 岐阜県文化財保護センター



第80図 市場造跡造構配圖 (1/80)



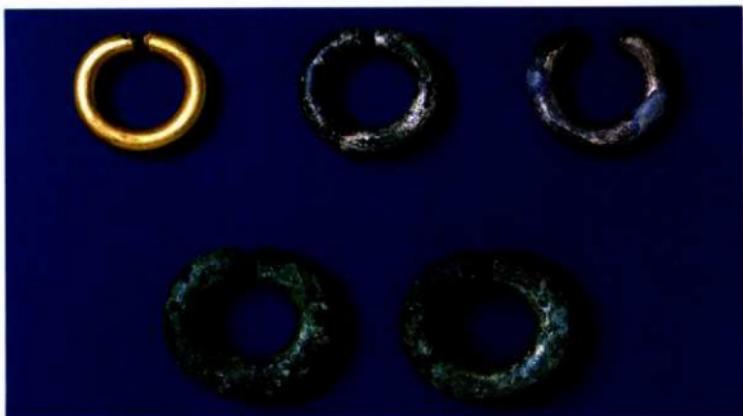
巻頭写真1 南高野古墳近景（東より）



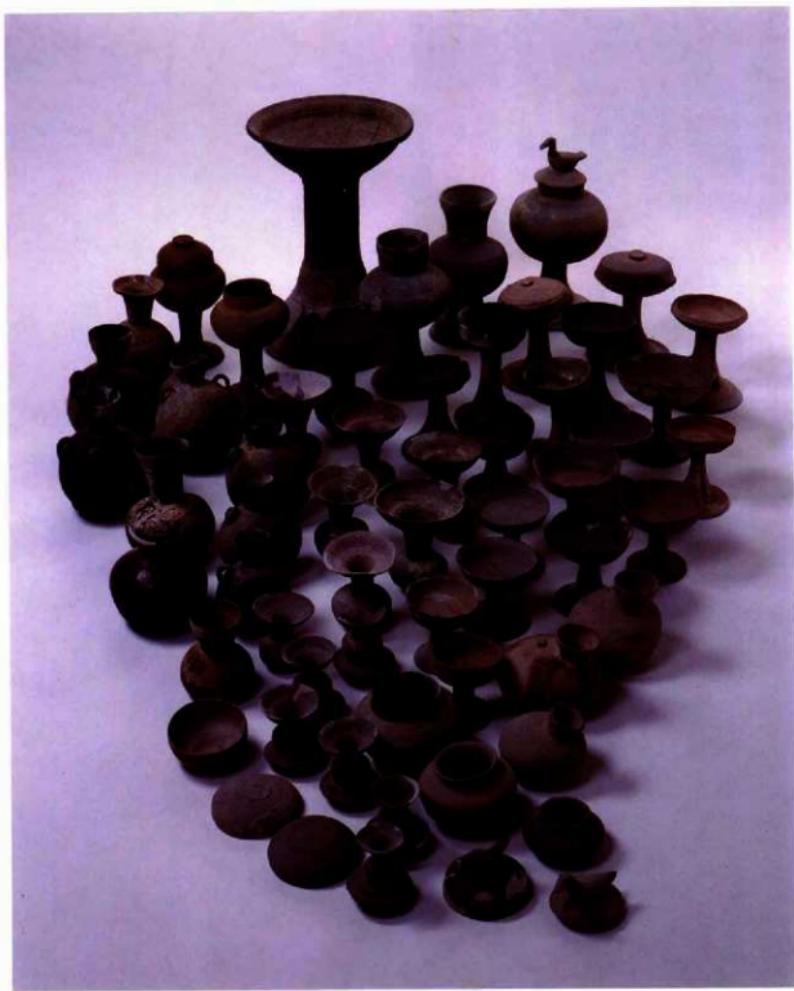
巻頭写真2 南高野古墳石室奥壁



卷頭写真3 南高野古墳出土馬具（鞍金具）



卷頭写真4 南高野古墳出土耳環



卷頭写真5 南高野古墳出土須恵器

## 序

池田町は、県内でも有数の群集墳が点在し「古墳の町」として広く知られています。この地は、古墳だけでなく、先人達が残した足跡が数多く残されています。こうした文化遺産を保護し後世に伝えていくのが我々の責務の一つであると考えられます。

さて、このたび、主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事に伴い、記録保存をはかるため二ノ井遺跡・市場遺跡の発掘調査を実施しました。発掘調査は、岐阜県基盤整備部建設管理局（旧土木部）から岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施しました。二ノ井遺跡の発掘調査を進めておりましたところ、地中に埋没していた古墳を発見しました。新たに発見した古墳を「南高野古墳」とし、調査を行いました。

南高野古墳は、調査の結果、6世紀後半に築造された右片袖式の横穴式石室を有する後期古墳であることが明らかになりました。また、この古墳は、石室（玄室のみ）の内壁が赤く塗られている赤彩古墳で、県内では数例しか確認されていない大変珍しい古墳であることも分かりました。石室内部は後世の地震によって崩落しており、その構造を明らかにすることが十分にできませんでしたが、そのことが幸いしたのか当時の埋葬がそのまま残っており、古墳時代の埋葬形態を知る上で貴重な資料となりました。二ノ井遺跡からは中世の墓や溝を中心とする遺構を検出し、多数の遺物が出土しました。市場遺跡は、時期を特定する遺構を確認することができませんでしたが、縄文時代早期の土器や須恵器などが出土し、古くからの人々の営みを確認することができました。

これらの遺跡の調査によって、池田町片山地区の歴史をさらに深めることができました。今回の調査成果が池田町内及び周辺地域における歴史の解明と後期古墳研究の一助となることを願ってやみません。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたって御協力頂いた関係各機関並びに地元の関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター  
理事長 村木光男

## 例　　言

1. 本書は揖斐郡池田町片山字南高野に所在する南高野古墳（遺跡番号 21404-08769）、二ノ井遺跡（遺跡番号21404-01919）、同町片山字市場に所在する市場遺跡（遺跡番号21404-08768）の発掘調査報告書である。
2. 本調査は主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事に伴うもので、岐阜県基盤整備部建設管理局（旧土木部）から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
3. 発掘調査は南高野古墳・二ノ井遺跡を平成 7 年度（担当安田正枝・飯沼暢康）・平成 8 年度（担当飯沼）に実施し、市場遺跡を平成 9 年度（担当飯沼）に実施した。
4. 本書に記載した遺物の実測（拓本を含む）は、次の者が行った。

福川 威・藤田 英博・青木健太郎・近藤 大典・安田 正枝・飯沼 暢康・高島 桂子  
清水 明美・棚瀬 道子・小田富士子・西垣千賀子・西田 富子・石野理恵子・棚橋 朝子  
米津 光枝・伊藤 節子・豊田 圭子・広瀬千恵美・白垣 若代
5. 実測図等のトレースは次の者が行った。

藤田 英博・高島 桂子・棚瀬 道子・小田富士子・西垣千賀子・西田 富子・石野理恵子  
加納加代子・佐藤まさみ
6. 遺物の写真撮影はフォトスタジオ サトウに委託して行った。
7. 本書は青木健太郎・近藤大典・飯沼暢康が執筆した。
8. 南高野古墳出土金属製品の保存処理は、(財)帝東大学山梨文化財研究所に委託して行った。
9. 地形測量、水準測量、石室三次元測量、C G 復元図作成、空中写真撮影は、株式会社イビソクに委託して行った。
10. 発掘調査作業ならびに調査記録及び出土品の整理等には次の者が参加した。(敬称略、順不同)  
<発掘作業員>

(平成 7 年度 二ノ井遺跡)

池田 満子・今西 猛・今西 一真・岩間 未起・大久保為文・方山 稔吉・勝野千佳子  
勝野ゆきゑ・加納加代子・河村 節子・國枝さと子・國枝小夜美・小寺 正輝・小林 孝美  
小林 文子・小山 則子・末松ますゑ・杉野 良一・杉野嘉津美・杉山 芳男・杉山 千枝  
田中壽朝枝・坪井 和子・成瀬 清・成瀬智恵子・西田 富子・二村久美子・野網貴美子  
野網 義一・野網 光子・野原 明・野原三重子・野原 茂・野原 淑・早野よさを  
樋口 弘子・福田 芳子・増田 昭治・松岡 あや・松岡 正男・松原 勝

(平成 8 年度 南高野古墳・二ノ井遺跡)

今西 猛・野原 茂・杉山 千枝・二村久美子・坪井 和子・國枝さと子・西田 富子  
小寺 正輝・野網 義一・杉野嘉津美・松岡 あや・早野よさを・勝野千佳子・松原 勝

方山 篤吉・松岡 正男・勝野ゆきえ・田中寿躬枝・福田 芳子・小林 孝美  
(平成9年度 市場遺跡)

松岡 正男・坪井 和子・勝野ゆきえ・杉山 千枝・松岡 あや・二村久美子  
勝野千佳子・小林孝美

＜整理作業員＞

(平成9年度)

高島 桂子・西垣千賀子・西田 富子

(平成10年度)

小山 利子・清水 明美・棚瀬 道子・小田富士子・西垣千賀子・西田 富子  
石野理恵子・棚橋 朝子

11. 調査記録および出土品は、財團法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

### 凡　　例

1. 出土遺物の実測図の縮尺は、土器は1/3、石器・石製品は2/3、1/3のいずれかで、金属製品は1/3、1/4のいずれかである。
2. 遺物番号は南高野古墳・二ノ井遺跡を合わせて1番から通番を付し、市場遺跡は別に1番から通番を付した。
3. 本書に掲載してある造構実測図は各々にスケールを付した。
4. 造構の略号は下記の通り用いた。

土坑	.....	S K
溝	.....	S D
その他	.....	S X
柱穴・小穴	.....	P
5. 造構番号は、原則として発掘調査時の番号を用いている。
6. 横穴式石室の側壁については、奥壁から入り口に向かって、右側を右側壁、左側を左側壁とする。
7. 本報告書で使用した土層の色調は、財團法人日本色彩研究所1995『標準土色帖』を目測にて表記した。

## 目 次

序

例言

目次

第1章 発掘調査の経過 .....	1
第1節 発掘調査に至る経緯 .....	1
第2節 発掘調査の経過と方法 .....	2
第2章 遺跡周辺の立地と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	5
第3章 基本層序（二ノ井遺跡・南高野古墳） .....	8
第4章 南高野古墳の調査 .....	9
第1節 墓丘と外部施設 .....	9
第2節 内部構造 .....	16
第3節 遺物の出土状況 .....	27
第4節 考 察 .....	43
第5章 二ノ井遺跡の調査と遺物 .....	79
第1節 A地区の構造と遺物 .....	79
第2節 B地区の構造と遺物 .....	87
第3節 包含層遺物 .....	105
第4節 考 察 .....	108
第6章 市場遺跡の調査 .....	143
第1節 層 序 .....	143
第2節 造 構 .....	147
第3節 遺 物 .....	154
第4節 まとめ .....	156
第7章 調査関連資料 .....	157
第1節 南高野古墳石室内赤色顔料の蛍光X線分析 .....	157
第2節 南高野古墳の3次元測量と復元CGの作成 .....	164

## 挿 図 目 次

第1図 道跡位置図	1	第36図   遺物実測図(14)	60
第2図 周辺の主な道路	7	第37図 遺物実測図(15)	61
第3図 基本地図	8	第38図 遺物実測図(16)	62
第4図 南高野古墳測量図	11	第39図   遺物実測図(17)	63
第5図 墳丘断面図(1)	12	第40図 ニノ井道路地形測量図	80
第6図 墳丘断面図(2)	13	第41図 ニノ井道路A地区遺構配図図	81
第7図 S D1(周溝)断面図	15	第42図   S K 1・7実測図	82
第8図 石室基底石・墓坑平面図	17	第43図 S X 1実測図	83
第9図 墓坑拵方断面図	17	第44図 S X 2実測図	84
第10図 奥壁・両側壁コーナー実測図	18	第45図 S D10実測図	85
第11図 石室実測図	19	第46図 S D16実測図	86
第12図 天井石平面図・石室断面図	21	第47図   S K 2・3・5実測図	88
第13図 棚台壁実測図	24	第48図   B地区第1次遺構面遺構配図	89
第14図 渠道床石・排水溝実測図	26	第49図   S K 6実測図	92
第15図 壁内遺物出土状況図	27	第50図 S D 1実測図	94
第16図 出上遺物分布図	28	第51図 S D 2実測図	97
第17図 玄室内須恵器・群出土位置図	29	第52図 S D 3実測図	98
第18図 玄室内須恵器・群出土位置図	31	第53図 S D 5実測図	99
第19図 玄室内須恵器II・IV群出土位置図	32	第54図 S X 3実測図	100
第20図 金屬製品出土位置図	35	第55図 S K 11実測図	101
第21図 渠道内須恵器・土位置図	36	第56図 B地区第2次遺構面遺構配図	102
第22図 前庭・開口部須恵器出土状況図	37	第57図 S K 12・13実測図	103
第23図 遺物実測図(1)	47	第58図   S K 9・S D 17実測図	104
第24図 遺物実測図(2)	48	第59図 遺物実測図(18)	111
第25図 遺物実測図(3)	49	第60図 遺物実測図(19)	112
第26図 遺物実測図(4)	50	第61図   遺物実測図(20)	113
第27図 遺物実測図(5)	51	第62図 遺物実測図(21)	114
第28図 遺物実測図(6)	52	第63図   遺物実測図(22)	115
第29図 遺物実測図(7)	53	第64図 遺物実測図(23)	116
第30図 遺物実測図(8)	54	第65図 遺物実測図(24)	117
第31図 遺物実測図(9)	55	第66図   遺物実測図(25)	118
第32図 遺物実測図(10)	56	第67図   遺物実測図(26)	119
第33図 遺物実測図(11)	57	第68図   遺物実測図(27)	120
第34図 遺物実測図(12)	58	第69図   遺物実測図(28)	121
第35図 遺物実測図(13)	59	第70図   遺物実測図(29)	122

第71図 遺物実測図 (30) .....	123	第84図 S K 3・4 実測図 .....	151
第72図 遺物実測図 (31) .....	124	第85図 S K 5 実測図 .....	152
第73図 遺物実測図 (32) .....	125	第86図 S D 1・2 実測図 .....	153
第74図 遺物実測図 (33) .....	126	第87図 遺物実測図 (36) .....	155
第75図 遺物実測図 (34) .....	127	第88図 分析試料採集位置図 .....	159
第76図 遺物実測図 (35) .....	128	第89図 灰白色部の螢光X線スペクトル図 .....	160
第77図 瓦呼称模式図 .....	139	第90図 赤色顔料の螢光X線スペクトル図 .....	160
第78図 レンチセクション図 .....	143	第91図 赤色顔料の螢光X線スペクトル図 .....	161
第79図 市場遺跡地形測量図 .....	144	第92図 灰白色部の螢光X線スペクトル図 .....	161
第80図 市場遺跡遺構配置図 .....	145	第93図 赤色顔料の螢光X線スペクトル図 .....	162
第81図 ピット1群実測図 .....	147	第94図 灰白色部の螢光X線スペクトル図 .....	162
第82図 ピット2・3群実測図 .....	148	第95図 灰白色部の螢光X線スペクトル図 .....	163
第83図 S K 1・2 実測図 .....	150		

## 表 目 次

第1表 地区別須恵器出土点数表 .....	27	第19表 鉄釘計測表 .....	77
第2表 様式別石室内遺物 .....	45	第20表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (1) .....	129
第3表 南高野古墳出土須恵器観察表 (1) .....	64	第21表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (2) .....	130
第4表 南高野古墳出土須恵器観察表 (2) .....	65	第22表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (3) .....	131
第5表 南高野古墳出土須恵器観察表 (3) .....	66	第23表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (4) .....	132
第6表 南高野古墳出土須恵器観察表 (4) .....	67	第24表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (5) .....	133
第7表 南高野古墳出土須恵器観察表 (5) .....	68	第25表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (6) .....	134
第8表 南高野古墳出土須恵器観察表 (6) .....	69	第26表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (7) .....	135
第9表 南高野古墳出土須恵器観察表 (7) .....	70	第27表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (8) .....	136
第10表 南高野古墳出土須恵器観察表 (8) .....	71	第28表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (9) .....	137
第11表 南高野古墳出土須恵器観察表 (9) .....	72	第29表 二ノ井遺跡出土土器観察表 (10) .....	138
第12表 南高野古墳出土須恵器観察表 (10) .....	73	第30表 古錢計測表 .....	138
第13表 南高野古墳出土須恵器観察表 (11) .....	74	第31表 石器計測表 .....	138
第14表 南高野古墳出土須恵器観察表 (12) .....	75	第32表 瓦観察表 .....	139
第15表 耳環計測表 .....	76	第33表 二ノ井遺跡遺構別遺物出土点数表 .....	140
第16表 鉄鑑計測表 .....	76	第34表 二ノ井遺跡地区別遺物出土点数表 .....	141
第17表 大刀・刀子計測表 .....	77	第35表 二ノ井遺跡遺構計測表 .....	142
第18表 鉄製品計測表 .....	77	第36表 螢光X線分析した玄室赤色顔料等 .....	157

## 写 真 目 次

- 差額写真 1 南高野古墳近景  
差額写真 2 南高野古墳石板焼  
差額写真 3 南高野古墳出土馬具  
差額写真 4 南高野古墳出土工具  
差額写真 5 南高野古墳出土猪突器  
  
写真 検出した天井石（北より）  
写真 二ノ井遺跡発掘作業風景  
写真 市場遺跡発掘作業風景  
写真 南高野古墳底面観察（西より）  
写真 黒色マウンド検出状況  
写真 墓丘盤土の様子（西より）  
写真 魔界骨面試込め土の様子（南より）  
写真 魔界骨面試込め石の様子（南より）  
写真 交換動物剥製品出土状況  
写真 S D11（横溝）検出状況（西より）  
写真 石室検出の様子（東より）  
写真 番坑検出状況（東より）  
写真 番坑完掘状況（東より）  
写真 奥壁・左側壁コーナー（南東より）  
写真 前壁の様子（奥壁側より）  
写真 玄門立柱石と椎石（奥壁側より）  
写真 玄門石立柱石試込め石（南より）  
写真 空室体石検出状況（奥壁側より）  
写真 空室体石検出状況（玄門側より）  
  
写真 差額天井石除去後の様子（玄門側より）  
写真 差額天井石検出状況（南より）  
写真 差額排水溝蓋石検出状況（南より）  
写真 差門・前庭の様子（東より）  
写真 排水溝（開口部より）  
写真 排水溝（玄室より）  
写真 在宅石下遺物出土状況  
写真 遺物出土状況（地盤右隅）  
写真 遺物出土状況（地盤左隅）  
写真 遺物出土状況（右側壁）  
写真 遺物出土状況（左側壁）  
写真 遺物（鉄鍔）出土状況  
写真 遺物（木刀）出土状況  
写真 遺物出土状況（矢道）  
写真 天井石取り外し作業  
写真 制縫石斜削落の様子  
写真 遺物による石けずれ方向の調査  
写真 左側壁石材にみられるX型の割れ目  
写真 A地区遺跡検出状況（北より）  
写真 B地区第1次遺構面検出状況（北より）  
写真 B地区第1次遺構面検出状況（東より）  
写真 S K 6 遺物出土状況（西より）  
写真 B地区第2次遺構面検出状況（西より）  
写真 3次元測量の様子

## 写 真 図 版 目 次

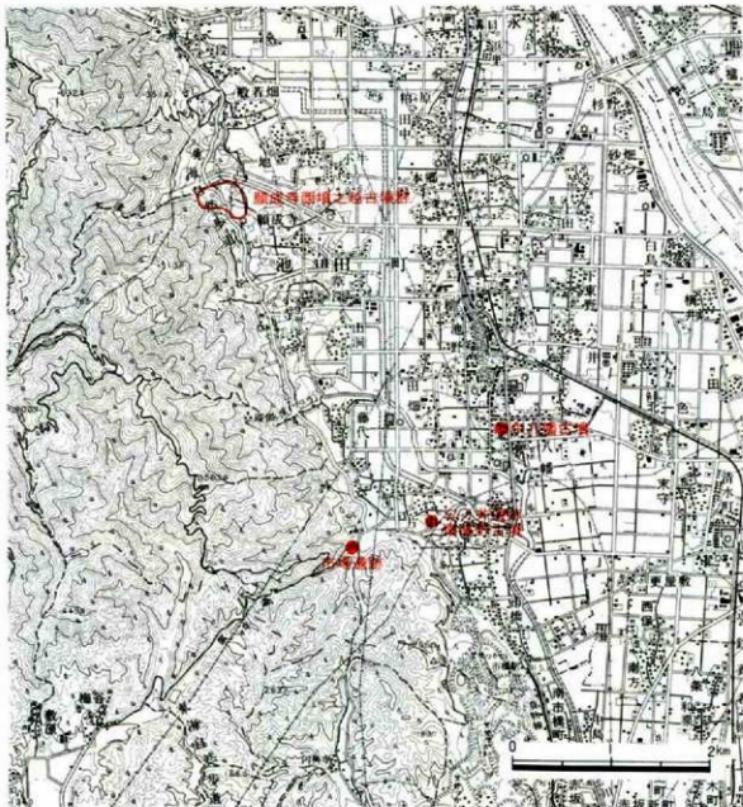
- 図版 1 南高野古墳石室全景  
図版 2 南高野古墳遺構・遺物  
図版 3 二ノ井遺跡遺構・遺物  
図版 4 市場遺跡遺構・遺物  
図版 5 南高野古墳遺物（1）  
図版 6 南高野古墳遺物（2）  
  
図版 7 南高野古墳遺物（3）  
図版 8 南高野古墳遺物（4）  
図版 9 南高野古墳遺物（5）  
図版10 南高野古墳遺物（6）  
図版11 南高野古墳遺物（7）  
図版12 南高野古墳遺物（8）

- |                  |                             |
|------------------|-----------------------------|
| 図版13 南高野古墳遺物（9）  | 図版29 二ノ井遺跡遺物（3）             |
| 図版14 南高野古墳遺物（10） | 図版30 二ノ井遺跡遺物（4）             |
| 図版15 南高野古墳遺物（11） | 図版31 二ノ井遺跡遺物（5）             |
| 図版16 南高野古墳遺物（12） | 図版32 二ノ井遺跡遺物（6）             |
| 図版17 南高野古墳遺物（13） | 図版33 二ノ井遺跡遺物（7）             |
| 図版18 南高野古墳遺物（14） | 図版34 二ノ井遺跡遺物（8）             |
| 図版19 南高野古墳遺物（15） | 図版35 二ノ井遺跡遺物（9）             |
| 図版20 南高野古墳遺物（16） | 図版36 二ノ井遺跡遺物（10）            |
| 図版21 南高野古墳遺物（17） | 図版37 二ノ井遺跡遺物（11）            |
| 図版22 南高野古墳遺物（18） | 図版38 二ノ井遺跡遺物（12）            |
| 図版23 南高野古墳遺物（19） | 図版39 二ノ井遺跡遺物（13）            |
| 図版24 南高野古墳遺物（20） | 図版40 二ノ井遺跡遺物（14）            |
| 図版25 南高野古墳遺物（21） | 図版41 市場遺跡遺物（1）              |
| 図版26 南高野古墳遺物（22） | 図版42 石室石祠頭微鏡写真<br>・鉄鎌茎部拡大写真 |
| 図版27 二ノ井遺跡遺物（11） | 図版43 南高野古墳復元CG              |
| 図版28 二ノ井遺跡遺物（2）  |                             |

## 第1章 発掘調査の経過

### 第1節 発掘調査に至る経緯

池田町には、揖斐郡と周辺の市町村を結ぶ主要幹線である国道417号線をはじめとして県道岐阜関ヶ原線が通っている。県道岐阜関ヶ原線は、岐阜市を起点に不破郡関ヶ原町まで続く延長約27.9kmの道路で、岐阜市の西部放射道路として西濃地域との連絡網の役割を担うほか、地域の生活、経済を支える幹線道路ネットワークを構成する重要な道路の一つとなっている。また、名神高速道路、国道21号の代替機能を持つため、これら主要道路の機能を分担するとともに、災害・事故などによって不通になった場合の迂回路としての性格も持ち合わせている。近年の交通量の増加による道路改良整備の必要性から、主要地方道岐阜関ヶ原線道路改良工事が行われることになった。



第1図 遺跡位置図

## 2 第1章 発掘調査の経過

二ノ井遺跡は揖斐郡池田町片山の渓北地区の集落と金地谷川に挟まれた微高地全体に広がる遺跡である。地元住民によって縄文土器や須恵器などが表採され、遺物散布地として周知の遺跡である。道路改良工事予定区が二ノ井遺跡の範囲内を通るため、2,490m<sup>2</sup>が発掘調査の対象面積となり、平成7・8年度に調査を実施した。(平成7年度 1,050m<sup>2</sup>、平成8年度 1,440m<sup>2</sup>)

南高野古墳は、平成7年度に開始した二ノ井遺跡の発掘調査中に新たに確認された古墳である。本古墳は、地表から完全に埋没していたため、その存在が知られていなかった。古墳の全體規模や石室内部の調査をするため調査区を拡張し、平成8年度に調査を行った。調査面積は510m<sup>2</sup>である。

市場遺跡は、付近の圃場整備の際に採集された遺物によって周知の遺跡となっていたが、その範囲は確定されていなかった。そのため、道路改良工事予定区内において遺跡の範囲確認をするため、(財)岐阜県文化財保護センターが岐阜県基盤整備部建設管理局(旧土木部)からの委託を受け、平成7年度に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、数ヶ所の試掘場所より縄文時代早期～中期の土器・石器が出土した。その中で良好な包含層が残ると思われる500m<sup>2</sup>が本調査の対象面積となり、平成9年度に(財)岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行うことになった。

## 第2節 発掘調査の経過と方法

### 1. 南高野古墳発掘調査日誌

二ノ井遺跡は周知の遺跡であったが、遺物散布地であったため、調査に入る前に試掘調査を実施した。6月13日から8月4日まで試掘調査(試掘坑1～16)を実施した。調査区全体は川の氾濫によると思われる砂礫層が堆積しており、調査の結果、地表から約1～3m下に黒褐色土の広がりを確認した。二ノ井遺跡の本格的な調査は、同時に調査を行っている高畠遺跡発掘調査の進行上、10月中旬から開始した。はじめに、重機による掘削作業(砂礫層除去・黒色土検出)を行った。当初予想された黒褐色土は西から東に向かってゆるやかに下がるのではなく、調査区の中央辺りでマウンド状になっていることが確認された。8mメッシュの杭打ち作業後、11月16日より、調査区の北側と南側にトレントを設定し、作業員の手掘りによる掘り下げを開始した。その後、順次下位層を精査するも遺構プランは検出されなかった。しかし、遺物(弥生土器・土師器中心)は多く出土した。1月上旬、黒色マウンド中央付近で穴が開いた。中を見ると50×30cmほどの直方体の石が数個組まれている様子を観察することができた。統いて、穴を開いたすぐ隣から巨石が検出され始めた。この時点で穴の中に見られた石組みや検出した巨石が古墳石室の石材である可能性が高くなった。そのため、石室予想主軸ラインを設定し、それに直行するトレントを数本入れて土層の確認を行った。

2月中旬までに、古墳の天井石と思われる巨石を4個検出した。また、石室は調査区の東方向へ続いていることが判明した。そのため、調査区を広げないと発掘調査を進めることできないことか



写真 検出した天井石(北より)

ら、年度内に調査を全て終了することを断念し、次年度に調査区を広げて改めて調査を始めることになった。

平成8年4月中旬から再び調査を開始した。黒色マウンド（埴丘）の広がりを確認するため、トレント1を設定し、掘り下げを行った。マウンドは石室主軸より約11m付近で急激に落ち込み、さらにその先の北東部は後世の川の氾濫によって砂礫層が厚く堆積していた。また、湧水が激しいためそれ以上掘り広げることを断念した。古墳の調査は5月末で一端停止し、他の遺跡の調査に入った。その後、7月から11月までは平成8年度分の二ノ井遺跡の調査を行った。調査の経過と方法については後述する。南高野古墳の調査は、11月中旬から再開した。はじめに、重機による調査区域の土砂除去作業を行った。砂礫層を除去したところ、残っていた約1/3の埴丘を検出した。12月上旬から、石室の開口部と予想される箇所に新しいグリッド（S1～6）を設定し、格子状に掘り下げを開始した。12月末には、石室開口部の両側の石組みと玄門を検出した。1月に入り、開口部より羨道部の検出作業に入った。左右両側壁の石が羨道部に落ち込んでいるため、掘り進めるのは困難を極めた。石室内の石材の崩落状況が予想以上に悪いため、玄室の調査は天井石を除去してから始めることになった。1月中旬に、奥壁側の天井石を除去したところ、内部は両側の側壁石材が崩れ落ちていた。玄室中央に位置する天井石は約3mの巨石で大型クレーン車を使用して除去した。玄室中央付近では、天井石を取り除いたところ、左右両側の側壁石材が接するように向かい合わせになっていた。横揺れの巨大な力によって移動したものであり、本古墳は地震によって内部が崩壊していることが明らかになった。羨道部は玄室に比べて比較的残存状態がよかつたため、開口部より鉄パイプのサポートを設置しながら慎重に掘り進めていった。1月下旬、玄門の手前から遺物（須恵器・鉄製品）が出土した。入り口に供えられるように出土したため、今度の玄室内部の調査に期待が膨らんだ。玄室部では、奥壁前の掘り下げで、床面を確認する。2月上旬、元位置を留めているような石材を緩して、崩れ落していたり、危険と考えられたりする石材をすべて取り除いた。その結果、玄室部の奥壁付近と両側壁最下段の石組みだけが辛うじて残された。玄門立柱石も内側に傾いていた。2月中旬、玄室内から完形に近い遺物が次々と出土し始める。石室石組みに比べて遺物の残存状況は極めて良く、広く一般の方に知らせるため3月1日（土）に現場公開を行った。雨天にもかかわらず約250名の参加であった。3月上旬、玄室内の調査を一端停止し、埴丘の除去と墓坑の検出作業に入った。3月中旬に墓坑の検出作業を終了し、空中写真撮影を行った。その後、床面の床石と羨道部の排水路の壁を除去した。最終的にはすべての石を取り除いて、調査を終了した。（天井石や立柱石など主要な石は池田町が保存のため移設し、現在城西公園内に並べて展示している。）

## 2. 二ノ井遺跡発掘調査日誌

南高野古墳の欄で述べたように、当初二ノ井遺跡として調査に入った所は新発見の南高野古墳であった。平成8年度に残りの1,440m<sup>2</sup>の調査を行った。調査は横断道路の関係からA・B地区の2地区に分けて行った。



写真 二ノ井遺跡 発掘作業風景

4月中旬、試掘調査から約1.5～3mの厚さで堆積している砂疊層の下に暗褐色～黒褐色土が堆積していることが分かっていたため、重機により砂疊層の除去を行った。7月1日から手掘りによる調査を開始した。はじめに、断面観察のためのトレンチを調査区北側に入れた。断面観察の結果、Ⅲa層とⅣ層に遺物を混入するプランが確認されたため、Ⅲa層の検出作業から開始した。Ⅲa層及びカクラン層からは溝や土坑・ピットなど多数の遺構や遺物を検出した。特にB地区ではSD1・2の2条の溝が調査区を横切るように検出され、遺物も多数含まれていた。9月下旬に第1次遺構面の検出を終了し、空中写真撮影を行った。A地区は第1次遺構面の検出だけで終了した。10月上旬から第2次遺構面の検出を開始した。第2次遺構面からも溝や土坑・ピットなどの遺構と多数の遺物を検出した。

11月下旬に、高所作業車を使用して第2次遺構面の完掘状況の写真撮影を行って、調査を終了した。

### 3. 市場遺跡発掘調査日誌

平成9年5月6日から平成9年8月8日まで発掘調査を行った。

5月7日 調査始め式（略式）を行った。初めに東西トレンチ北壁の壁削り作業から開始した。

5月中旬 東西トレンチ北壁の壁削り作業終了。柵への進入路を境に調査区を西地区と東地区に分けた。調査は西地区より始めた。手掘りによる掘り下げ作業開始し、水田敷土（Ⅱ層）の除去作業を行った。Ⅱ・Ⅲ層からは須恵器片や山茶醜片、中近世陶器片などが出土したが、遺構は確認できなかった。

5月下旬 Ⅳ層までの掘り下げを行ったが、遺構を確認することはできず、調査区西区の調査を終了した。西地区には、VI・VII層は見られなかった。水田開拓時に削平されたためと思われる。統いて、東地区V層の掘り下げを開始した。調査の進行のためIV層までは重機で除去した。D3グリッドより馬蹄形に回る暗褐色土の溝状プラン（SK1）を検出した。無文の繩文土器が1点出土した。VI層では、いくつかのピットを確認した。ピット内からは1点の土器も出土しなかった。6月上旬までにピット群の完掘を終了した。

6月中旬 VII層の検出作業を開始する。SK1・2・3、SD1等のプランを検出した。

6月下旬 東区東口10グリッド付近のV層中より繩文早期押型文土器片が数点出土した。SD02のプランも検出し、掘り下げを行う。

7月上旬 調査区VI層の精査作業を終了し、VIIa層の掘り下げを開始する。

7月下旬 調査区VII層の掘り下げ作業終了し、

VII層の精査を開始。VII層から遺物は1点も出土しなかった。

8月7日 完掘の空中撮影を行う。

8月8日 発掘調査を終了する。



写真 市場遺跡 発掘作業風景

## 第2章 遺跡周辺の立地と環境

### 第1節 地理的環境

池田町の西部は、池田山地が伊吹山地と平行して南北に走る山岳地帯で、北北東～南南西方向の谷や稜線は古生層の走向に支配されたもので、池田山地北部を東西に流れる柏川、西部を南北に流れる足打谷、大滝等の大きい谷は断層に支配されて生じたものである。池田山地の東端は北北西～南南東に走る顕著な断層線で限られ、その下方に扇状地が発達している。池田山地の南部（梅谷山塊）から赤坂の石灰岩山地までは地質の相違により山のひだが多く、谷密度が高い。赤坂山地は石灰岩のため浸食に強く平坦な山容を示し谷密度が最も低い。調査区のある梅谷山塊は、塊状の砂岩と薄い粘板岩との互層よりなる梅谷層で構成され、その下に大石層が整合に重なっている。梅谷層の砂岩は、厚さ数mないし十数mで、中粒又粗粒であり、しばしばその中に黒色粘板岩の角礫を含む。上部には、厚さ1mないし2m以下の青灰色または灰白色のチャートの薄層が発達している。

東部の平野は池田山塊を浸食した谷が山麓扇状地をつくり、その東部に柏川が西部の山地を浸食し、柏川が北部の山地を浸食して砂礫を運搬し、山地を出てから何回か流路を移動しつつ扇状地をつくり、現在本町の重要な農耕地となりまた集落はこの上に立地している。<sup>1)</sup>

二ノ井遺跡・南高野古墳の位置する片山漢北地区は、金地谷川の形成する扇状地である。本調査区周辺は、川の氾濫によってもたらされた大量の砂礫層によって微高地状の地形を呈しており、周辺の水田区とは様相を異にする。本調査区周辺にかかる水害の歴史をみると、記録に残るものだけでも大化5年柏川の大洪水から何回も数えられる。特に慶安3年（1650）の洪水は未曽有の規模で池田山麓の村々が土砂に埋まったと伝えられている。本調査区に厚く堆積する砂礫層もこの頃のものであると思われる。

### 第2節 歴史的環境

池田町は、「古墳の町」として知られている。県指定史跡「願成寺古墳群」をはじめ約300基の古墳が町内各所に点在している。本遺跡のある片山地区周辺にも60数基の古墳が確認されている。中でも、本遺跡の南東、標高172mの山頂部に位置する遠見塚古墳は、2段築成の円墳であり、池田町最古の古墳である。平成2年度に行われた池田町教育委員会の発掘調査では、葺石、円筒埴輪、朝顔形埴輪などが出土しており、その造営年代は5世紀前葉とされている。<sup>2)</sup> また、本遺跡の北には、標高130mの丘陵尾根突端部に雨乞塚古墳群がある。堅穴式石室を持つ円墳が2基あり、2号墳は、昭和62年度の池田町教育委員会による調査で、その築造年代は5世紀中葉とされている。<sup>3)</sup> 後期の横穴式石室を有する古墳としては、寺大門古墳群、金地谷古墳群、城ヶ谷古墳群、袖ノ木古墳、高畠古墳、一ノ井古墳、大畑古墳群、トンビ塚古墳群、深谷古墳群、社宮寺古墳群、崇輪古墳群、遠見塚古墳群などが知られ、本遺跡の東部・北部の山麓を中心に点在している。

町内の古墳時代の遺跡としては、大池東遺跡、東畑田遺跡、中八幡遺跡が知られる。大池東遺跡は古墳時代初頭の遺跡で、住居跡が検出され、S字状口縁台付甕、高环、器台などが出土している。東畑田遺跡からは弥生～中世の遺物が大量に出土している。中八幡遺跡は弥生～中世の遺跡で同所には全長43mの前方後円墳である中八幡古墳がある。初期の馬具を出土したことで有名なこの古墳は、埴

## 6 第2章 遺跡周辺の立地と環境

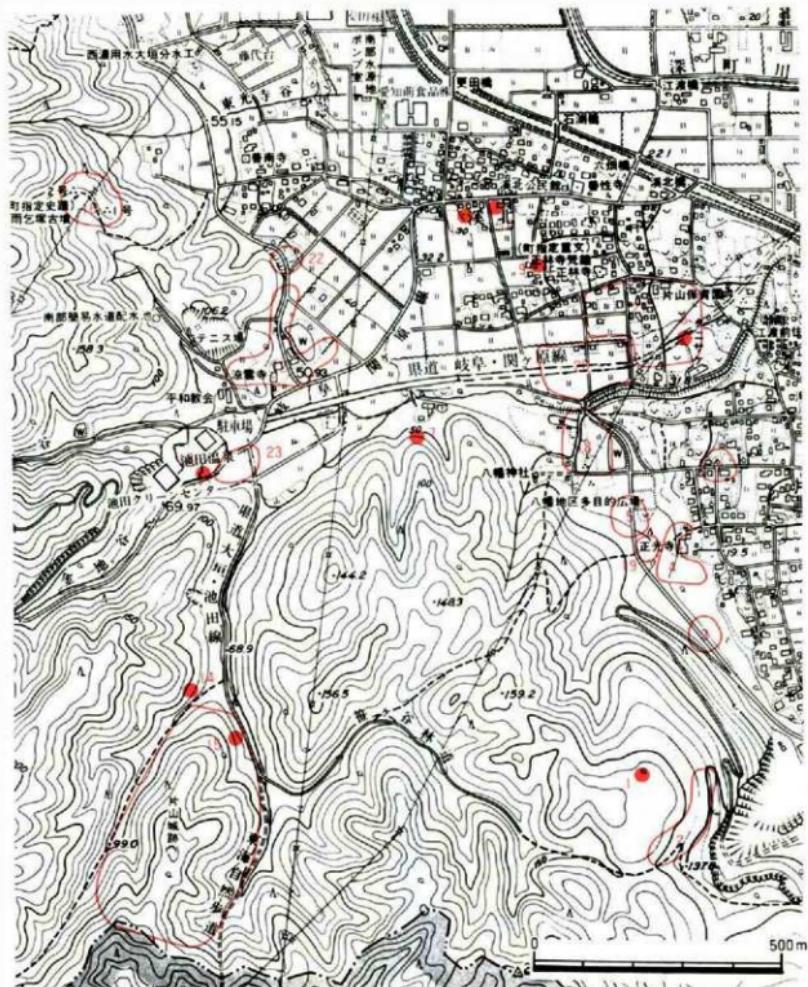
丘盛土に多量の弥生土器を含み、同古墳が先行する弥生時代後期～古墳時代初頭の遺跡を破壊して築造されていることがうかがえる。これらの遺跡は、古柏川が形成した柏川跡起屈状地を中心に点在している。いずれも大量の遺物の出土が認められるものの、その詳しい実態については明らかになっていない。

片山地区周辺は、屈状地の端部であり古柏川をはじめとした河川の氾濫によって形成された湿地帯が北へ東に広がり集落形成には適した立地下にある。古墳時代にかかる集落遺跡については他の町内の遺跡と同様にくわしい実態は明らかになっていないが、古墳を築造することができる集団が定住することができる条件を備えていた。また、東山道も大垣市と境を接する金生山東山麓を北上して片山地区を通っていたとされる。金生山南山麓には延喜大塚古墳をはじめ一大古墳群があり、美濃国が統括される前に存在したと言われる國造の一人である額田國造は、このあたりが根拠地といわれ、その勢力圏は中八幡古墳にまで及んでいたと想定されている。片山地区はまさにその中間地点にあり、交通の要衝としても重要な地域であったと思われる。壬申の乱（672年）では、大海人皇子の舎人として活躍した人物に和邇部臣君手がいる。乱当时、安八磨郡には大海人皇子の私領である湯沐舎が存在しその管理者であった多臣品治とともに片山地区とその周辺は彼らの拠点であったのではないかとする説もある。近年、二ノ井遺跡の西隣にある高畠遺跡から寺院関連遺構と思われる大量の布目瓦を伴った溝状遺構が検出された。（平成7年度、岐阜県文化財保護センター調査）文献資料にもない幻の古代寺院の発掘として話題になったが、古代寺院を建立することができた権力者やその集団が周辺に存在したことは間違いないことである。

このような古墳群の他に、片山地区周辺には縄文時代から中・近世に至るまで各時代を網羅する遺跡が点在している<sup>1)</sup>。主な遺跡として、縄文時代の堀西遺跡、弥生時代の深谷遺跡が知られる。堀西遺跡は、縄文時代の土器や石器（有舌尖頭器）、弥生土器などが出土している。深谷遺跡からは弥生土器が出土している。古代～近世の遺跡としては、高畠遺跡や善南寺跡、善南中世墓群、池ノ谷中世墓群、片山城跡などが知られる。近年、中世の遺跡として六之井深池遺跡が発掘調査され、土器集積遺構から大量の土師器皿が出土した。15世紀後半～16世紀前半の一括資料として注目されている。<sup>2)</sup>

### 註

- 1) 池田町 1978「池田町史 通史編」
- 2) 池田町教育委員会 1991「遠見塚古墳発掘調査報告書」
- 3) 池田町教育委員会 1989「南乞塚2号墳発掘調査報告書」
- 4) 池田町教育委員会 1991「岐阜県揖斐郡池田町遺跡地圖 改訂版」
- 5) 池田町教育委員会 1997「六之井深池遺跡発掘調査報告書」



第2図 周辺の主要な道路

## 第3章 基本層序（二ノ井遺跡・南高野古墳）

Ia 層：にぶい黄褐色砂質土、粗耕作土、 $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ の砂粒

を少し含み、わずかに鉄分の付着有り。

Ib 層：灰黄褐色砂質土、 $\phi 5\text{ mm}$ 前後の亜円礫と拳大の円礫

が大半を占める。

Ic 層：黄褐色砂質土、礫をほとんど含まない

Id 層：にぶい黄褐色砂質土、 $\phi 2 \sim 10\text{ mm}$ の砂礫が大半を占め、拳大の円礫が入る。

Ie 層：黄褐色弱砂質土、礫をほとんど含まない。 $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ の橙色土がブロック状に入る。

IIa 懸：にぶい黄褐色弱砂質土、礫をほとんど含まず、鉄分の沈着有り。

IIb 懸：灰黄褐色弱粘質土、礫をほとんど含まず、下位に鉄分の沈着有り。

IIc 懸：にぶい黄褐色土弱砂質土、礫をほとんど含まず、鉄分の沈着により全体に赤みを帯びる。炭化物をわずかに含む。

IIId 懸：暗褐色弱粘質土、礫をほとんど含まない。

IIIa 層：黒褐色砂質土、しまりあり、 $\phi 1 \sim 2\text{ mm}$ の砂粒と $\phi 5 \sim 10\text{ mm}$ の砂礫多く含む。炭化物も混じる。

IIib 層：黒褐色弱粘質土

IIIc 層：暗褐色砂質土、IIIa 層に似るも砂礫の入り少ない。

IVa 層：黒褐色弱粘質土、しまりややあり、 $\phi 2 \sim 5\text{ mm}$ の砂礫を含む。

IVb 層：黒褐色弱砂質土、しまりややゆるい、 $\phi 5\text{ mm}$ 前後の砂礫を多く含む。

IVc 層：黒褐色弱粘質土、しまりややゆるい、 $\phi 5\text{ mm}$ 前後の砂礫を多く含む。

Va 層：暗褐色弱粘質土、しまりあり、 $\phi 5 \sim 10\text{ mm}$ の均一した砂礫を多量に含む。

Vb 層：褐色粘質土、非常にしまりあり、砂礫をほとんど含まない。南高野古墳墳頂部盛土6層か。

Vc 層：にぶい黄褐色弱粘質土、 $\phi 5\text{ mm}$ 程の円礫と $\phi 20 \sim 50\text{ mm}$ の礫が大半を占める。

VIa 層：黒褐色粘質土、しまりややあり、礫をほとんど含まない。南高野古墳基盤層

VIb 層：暗褐色粘質土、しまりややゆるい、礫をほとんど含まない。

VII 層：褐色粘質土、しまりややあり、礫を含まない。

I a
I b
I c
I d
I e
II a
II b
II c
II d
III a
IV a
IV b
IV c
V a
V b
VI a
VI b
VII

第3図 基本層序(S=1/25)

## 第4章 南高野古墳の調査

### 第1節 墳丘と外部施設

#### 1. 墳丘

発掘調査の経過（第1章）で述べたように、古墳の墳丘は後世（近世初頭と思われる）の大規模な河川氾濫によって堆積した厚い砂礫層の下に完全に埋没していた。そのため、古墳の墳丘はほぼ完全に残っていたと思われる。調査当初は、黒褐色土のマウンドが古墳であるとの認識がなかったため、断面観察のトレンチ位置も墳丘断面を観察するには少しづれた位置（石室主軸に対して直交すべきトレンチが約45°ずれる）になってしまった。

古墳築造当時の旧地表面は西端で25.5m、東端で25.0mである。地形は西から東へ緩やかに傾斜し、墳丘の東端部で一段下がる。約1mの比高差がある。旧地形の想定を肯定するならば、古墳の立地場所は片山渓北地区の東南端にあたり、扇状地の尖端部に張り出すようにこうした段差を利用して古墳が築造されたと思われる。当時、柏川は大水の度にその流路を変えており、古墳の東側は広大な湿地帯になっていたと想像され、実端に築造された古墳は遠方からも容易に確認できたと思われる。

墳丘の規模は径22.0mを測る。墳形は、墳丘の断面観察と墳丘面の検出作業から円墳であったと推定される。墳丘の端には約2mのテラス状の平坦面がつくられ、その外側に幅2mの周溝が巡る。周溝は南西側と北東側の2ヶ所で確認でき、古墳のほぼ全体を巡っていたと思われる。開口部付近については不明である。墳丘の高さは旧地表面から約2.5mである。東側については自然地形の傾斜があり3.5mの比高差になる。墳丘の周りに葺石や外護列石はみられない。

写真 南高野古墳調査前風景（西より）



写真 黒色マウンド検出状況



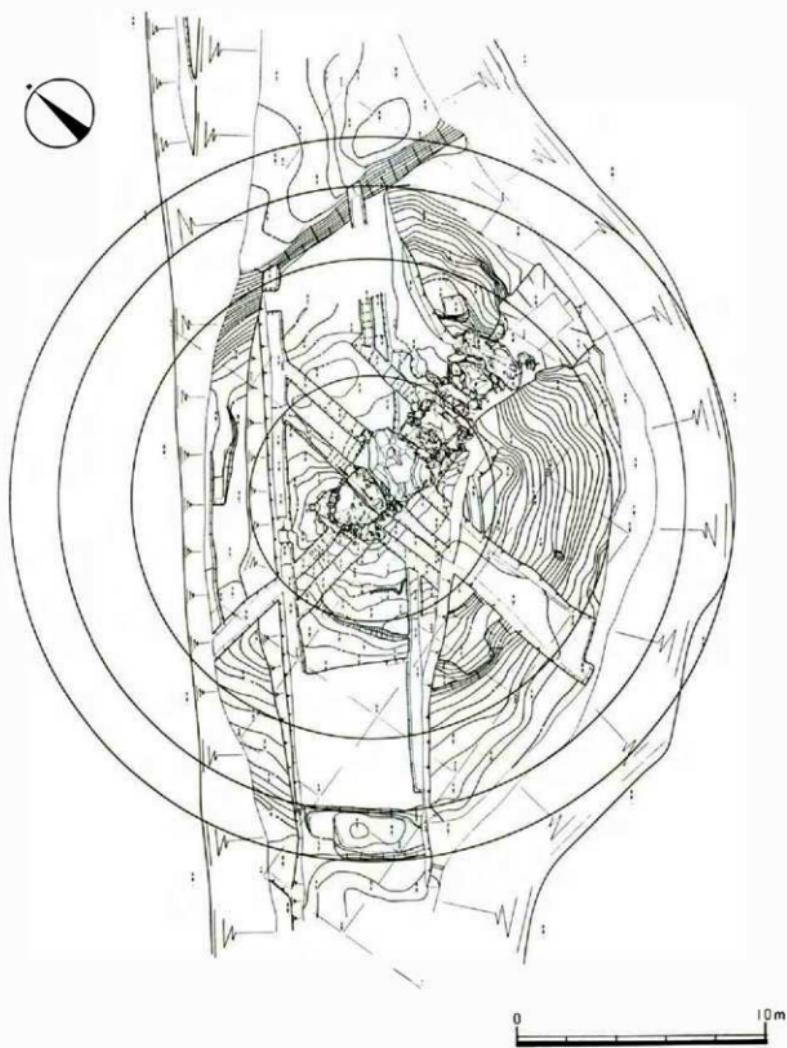
墳丘の構築過程は何段階かに分けられる。以下、工程順に記す。

1. 旧地表を掘り込み、墓坑を確定する。墓坑の深さは、石室石材に使用する奥壁鏡石の高さに合わせていている。
2. 石室の奥壁・玄門立柱石・渓門立柱石を設置する。玄室側壁の基底石を設置する。(以下石室石材の構築については後述する。)
3. 石室石材の積み上げに従って裏込めを行う。裏込めの土には墓坑掘り込みに伴って排出した土を使用する。
4. 地表面まで石室石材が積み上がり、裏込め土の充填が完了した段階で、天井石の架構を行う。
5. 天井石の上に盛土を施す。盛土は天井石全体を覆うように性質の違う土を少しづつ貼り付ける。玄室中央部の最も大きな天井石を中心に凸面を成すように盛土を施す。盛土には墓坑形成の際に排出した土(盛土E・F・G)を使用する。
6. 約1mの凸面状の盛土が完了すると、盛土の最も高い地点から墳丘裾部までの断面が変形した平行四辺形の形になるように盛土を施す。この際使用するのは、古墳周辺の旧地表面を薄く削り取るようにして集めた黒褐色土(二ノ井遺跡層では第V層、盛土B・C・D)である。周辺の地表土を削り出すことで古墳周囲を水平な平坦地にする意図もみられる。
7. 墳丘盛土の最終工程として、墳頂部に黄褐色強粘質土(盛土A)を貼り付ける。蓋的な意図がみられる。この土は、古墳から約30m西の二ノ井遺跡調査区内で検出した溝(S D16)から排出した土を使用したと思われる。

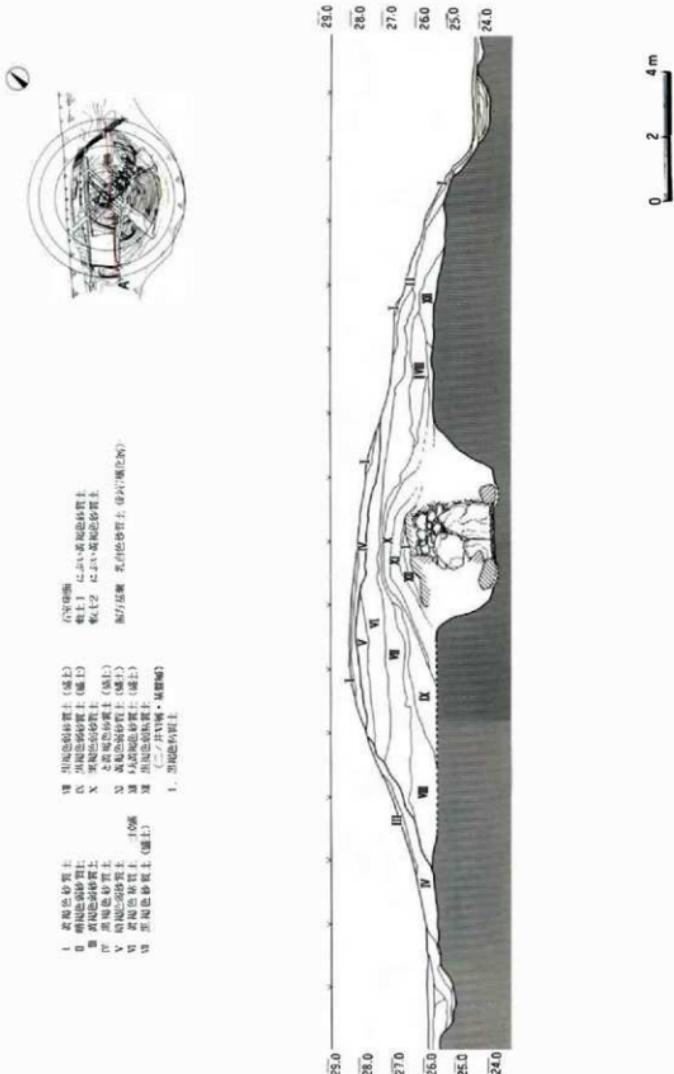
このように、墳丘の構築過程は何段階かに分かれて行われているが、墳丘の構築はそれ自体だけを目的としたのではなく、古墳周辺の外装・外観までも考慮した意図がみられる。古墳から約30m西の山側に掘り込まれた溝(S D16)は外界と古墳との一種の境を成している。さらに、古墳までの地表を2段の平坦面に整地し、周溝をめぐらし、さらにテラス状の平坦面を設けることによって独立した古墳の存在を際立たせようとした意図がうかがえる。

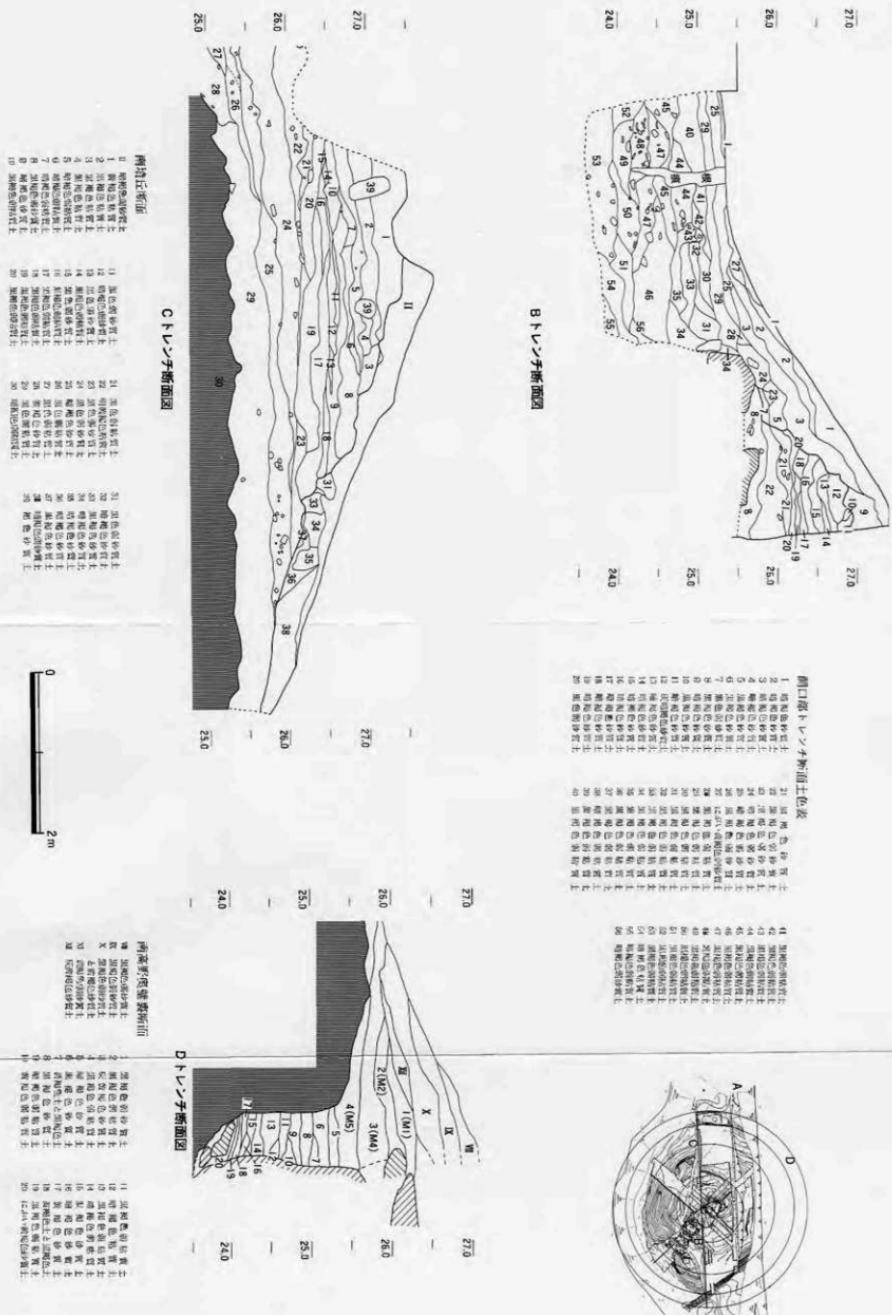


写真 墳丘盛土の様子(西より)



第4図 南高野古墳測量図





第6図 墓丘断面図(2)



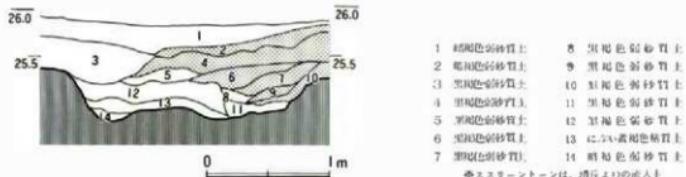
左: 写真 奥壁背面裏  
込め土の様子 (南より)

右: 写真 奥壁背面裏  
込め石の様子 (南より)

## 2. 周溝

周溝 (SD11) は、墳丘の南西部で確認した。標高25.3mのV層で検出した。検出した溝は、長さ4.93m、最大幅2.03m、深さ0.82mを測る。方位は、N-155°-Eで、緩やかに弧をえがく。埋土は墳丘からの流入土と二ノ井遺跡(西)からの堆積土に分かれる。周溝内からは、須恵器の装飾器台面部片や脚部片、装飾片(馬?)が出土している。

墳丘北東部のトレーナーで確認した溝は、幅2.1m、深さ0.5mを測る。トレーナーのみの検出であり、溝の方向は不明であるが、SD16と墳丘中心からほぼ等距離に位置することから古墳に伴う周溝と判断した。トレーナー内から遺物は出土していない。溝の埋土は墳丘からの流入土と後世の堆積層に分かれる。



第7図 SD11(周溝)断面図



写真 装飾動物須恵器片出土状況

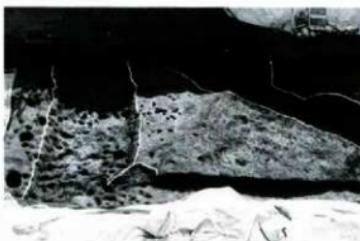


写真 SD11(周溝)検出状況(西より)

## 第2節 内部構造

南高野古墳の内部構造は、東方向に開口する横穴式石室である。石室は、玄室・羨道・前庭からなる単室構造で、玄室及び羨道の入り口には立柱状の石材を設置した玄門及び羨門を有する。石室の全長は10.5mを測る。羨道は、奥壁から見て右側<sup>1)</sup>が片袖になった右片袖式である。また、前述したように玄室内壁にベンガラを塗布した赤彩古墳である。石室に使用されている石材は、全て砂岩であった。

1) 第2節内部構造で使用する「左・右」は、全て奥壁から見た向きである。

### 1. 墓坑

南高野古墳の石室は、旧地表面から掘り抜いた墓坑内に構築されている。墓坑は、黒褐色土の地表面から砂礫層・暗褐色土層を掘り抜いて、灰黄褐色の砂岩風化層まで達しており、地盤の安定した底面を作り出している。墓坑は、奥壁背部から前庭までの長さ12.2m、奥壁部幅6.1m、最大幅6.2m、羨門部幅5.2mを測り、ほぼ長方形の形を呈している。深さは、奥壁部1.85m、羨門部1.65mを測る。玄室背部は、旧地表面をほぼ垂直に掘り下げてあるが、羨道背部ではやや傾斜している。羨門左の立柱石の背部は、石の形に合わせるように掘り抜かれている。前庭部で幅が狭まり、墓道を形成している。奥壁左側の巨石（鏡石）や玄門立柱石、羨門立柱石下には、石材の形状に合わせた掘方が見られる。また、羨道部には、排水溝のための掘方があり、石室床面から約20cm掘り下げられている。奥壁側から羨門に向かって緩やかに傾斜しており、高低差は35cmである。調査の最終段階で石室石材を全て取り外し墓坑の精査を行っていたところ、奥壁右隅より水がしみ出てきた。扇状地伏流水の水道と思われるが、古墳築造当时も湧水はあったであろう。そのためか、墓坑は奥壁から玄門にかけては比較的水平になっているものの、玄門下の排水路から開口部、さらには墓道へと傾斜をつけた掘り込みがされている。



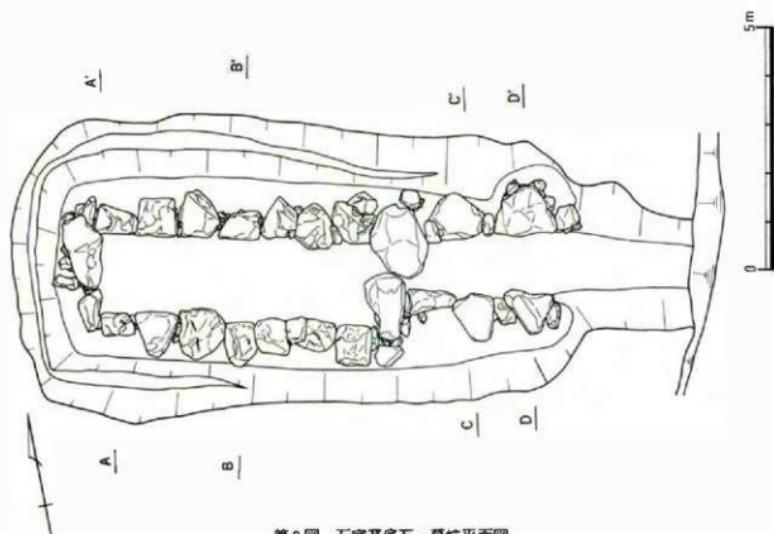
写真 石室検出の様子（東より）



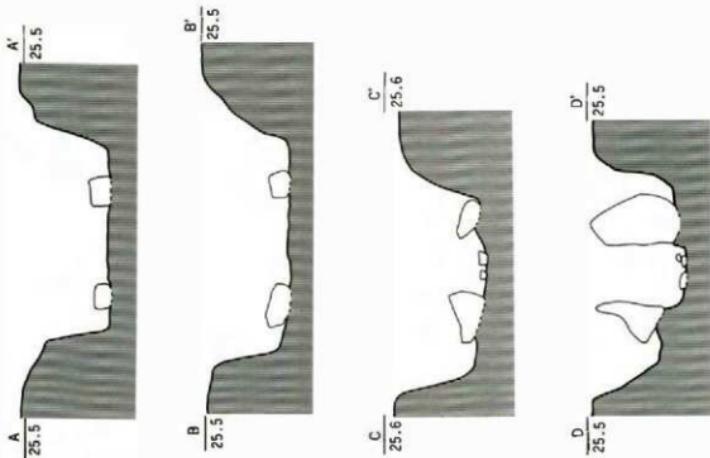
写真 墓坑検出状況（東より）



写真 墓坑完徹状況（東より）



第8図 石室基底石・墓坑平面図



第9図 墓坑掘方断面図

## 2. 石室

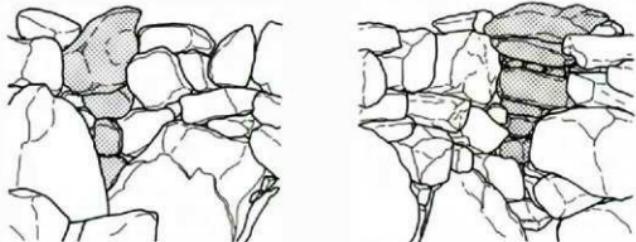
### 玄室

玄室の規模は、全長5.8m、奥壁部幅1.7m、最大幅1.9m、玄門部幅1.8mを測る。玄室長5.8mという数値は、石室全長10.5mの半分を越える。玄室の平面形は、ほぼ長方形の形を呈している。

奥壁は、高さ約1.8mの縦長の巨石を左側に配し、右側は2段の比較的大きな石材で高さを揃えている。その上部は、比較的小さい石材が積まれ、アーチ状を呈す。床面から天井石まで高さは約2.6mである。

玄室内の側壁は、大半が崩落または内部に押し出されていたため、全容をつかむことは困難であったが、奥壁と接する両側壁のコーナー部分だけは上部まで崩落を免れていた。

玄室内両側壁の石組みは、比較的目地を揃えて積み上げられている。最下段～3段目までは中型石材が使われ、3段で奥壁や立柱石と同じ高さに揃えるように垂直に積まれている。石材の形によって足りない部分は、小型石材で補充している。基底石は、直角的な中型石材を配置している。4段目からは、やや小ぶりで細長い石材を用い、面積の小さい面を石室内面に向ける「小口積み」になっており、「持ち送り技法」で内傾させながら積み上げている。奥壁と両側壁の左右コーナー上部には、両壁を繋ぐように積む「渡し掛け技法」が取り入れられている。この技法は玄門右側のコーナー上部でも確認された。



第10図 奥壁・両側壁コーナー実測図

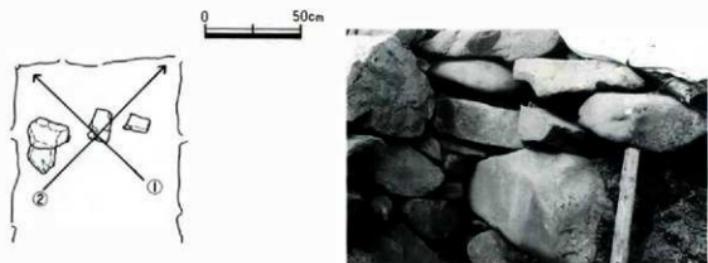
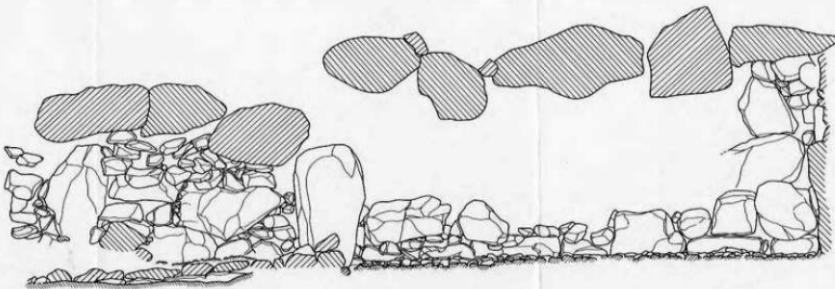
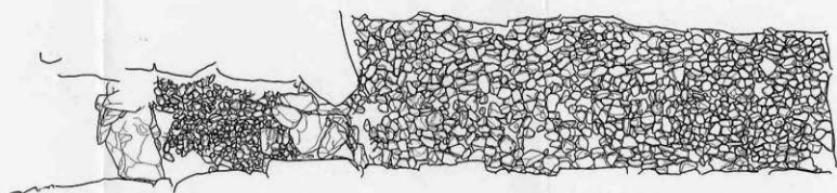


写真 奥壁・左側壁コーナー（南東より）

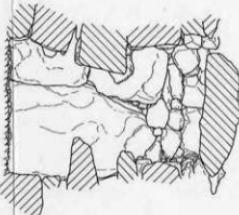
27.00



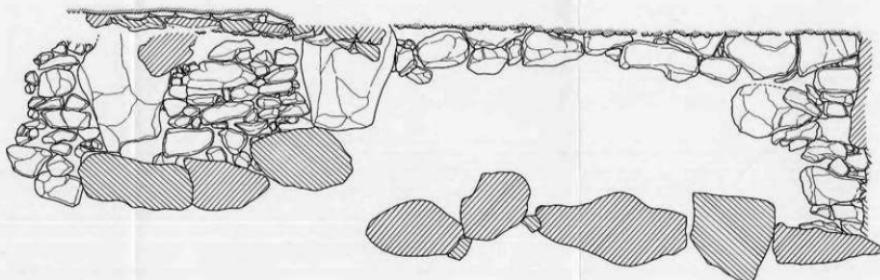
27.00



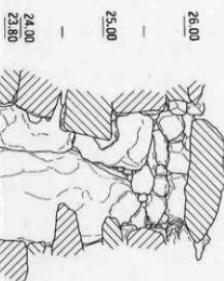
27.00



25.00



25.00

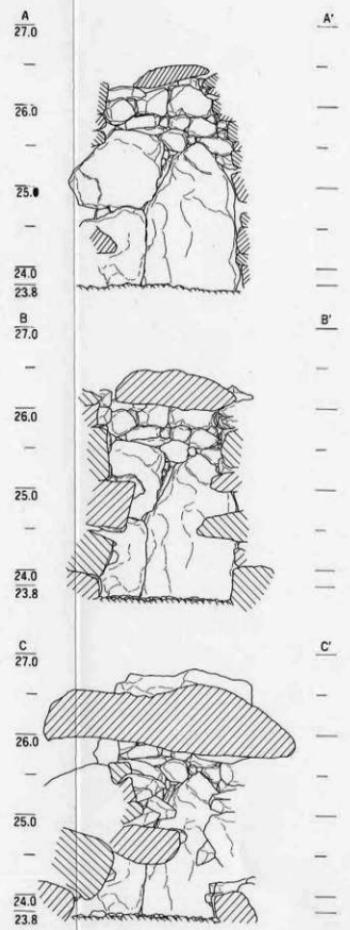
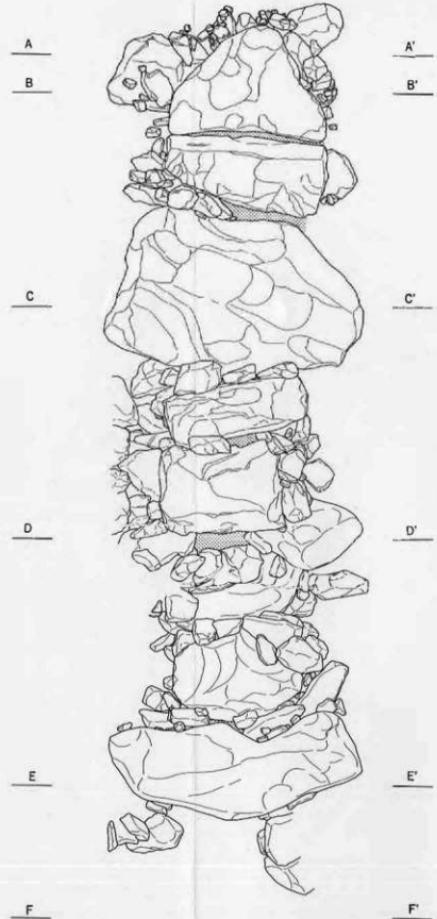


27.00

27.00



第11図 石室実測図



第12図 天井石平面図・石室断面図

玄門部では、左右の玄門立柱石の上に樋石を配し、さらにその上部に1段ないし2段の石積みを施した「前壁」が形づくられている。立柱石の間には、「樋石」が配置されていた。

玄室を覆うために使用された天井石は、全部で5つあり、中でも中央の石材は8tを越える巨石であった。玄室内の天井石は、側壁石材の崩落のため高さは揃っていないが、築造当時は玄門から奥壁までは高さを揃えてあったと思われる。

玄室内壁は、前述したように赤色顔料（ベンガラ）が全体に塗られていた。一部の石材には、水をかけると鮮やかな赤色が浮かび上がるるものもみられたが、全体的には、やや赤っぽい感じがするといった程度の残りであった。特に、奥壁上部の石材や天井石内面、両側壁上部の石材に赤色顔料の残りが良いもの多かった。石室基底石や玄門立柱石は、風化のためか肉眼で確認することはできなかった。（第7章調査関連資料）

玄門立柱石は、両側とも内側に傾いていたが、築造当時の向きに復元すると、樋石から樋石までの高さは1.5mであったと思われる。玄門の下には玄室と漢道の境を明確に分け、漢道から一段下がって入るように樋石が設置されている。玄門立柱石が傾いたため、浮き上がった状態になっている。樋石の下には排水溝の蓋石が設置されている。右玄門立柱石の裏込めは、しっかりした石組みが設置されている。細長い長方形の石材を四角いマス状に設置し、その上に立柱石を架設したようである。

床面は、こぶし大の大きさで梢円形の扁平な石材が多く用いられている。床石の隙間はあまりなく丁寧に敷かれている。側壁と接する部分には、やや細長い石材が用いられ、主軸方向と同じ向きに配設されている。床面は、中央部に比べ両側壁側がやや低くなっている。排水路の役目をしていたと考えられる。また、奥壁前と玄門部付近は他の玄室の床石に比べやや小振りの石が用いられ



写真 前壁の様子 (奥壁側より)



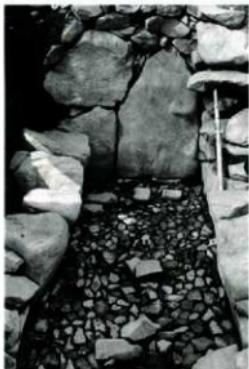
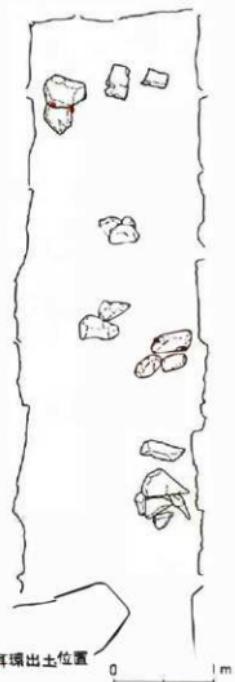
写真 玄門立柱石と樋石 (奥壁側より)



写真 玄門右立柱石裏込め石 (南より)



写真 玄室床石検出状況 (奥壁側より)

写真 玄室床石検出状況  
(玄門側より)写真 玄室床石除去後の様子  
(玄門側より)

第13図 棚台難実測図

ているが、その理由は不明である。また、床石の上には人頭大の礫が10数個検出された。2個ないし3個一組になった状態で主軸方向に1.5～2mほどの間隔を空けて配置されているように看取できた。奥壁の手前、右側壁側に並ぶ2個の礫上から耳環が2点出土した。また玄室中央部左側壁側の礫上からも耳環が2点出土したことから、これらの人頭大の礫は、棺台と考えられる。<sup>1)</sup> 棺台に使用された礫は床石と比べ亜角礫や亜円礫が多く、主軸方向に対し直角に置かれているものが多い。

床石を除去したところ、地山の上に薄く細かな石を含んだ粘土層が張り付けてあった。その土や床石の裏側には、玄室内に塗られた顔料と思われる赤色顔料がかなり付着していた。おそらく、石材から剥がれたり流れ落ちたりした赤色顔料が長い年月の間に沈着したものであると思われる。

1) 横穴式石室の中で床石が散かれている石室は、通常棺台を持たないとする考え方（森岡秀人「道釋と棺体配置」『考古学論叢』1982）もあるが、遺物の出土状況や礫の横山状況から棺台と考えた。

### 羨道

羨道の規模は、長さが3.6m、玄門部幅1.05m、羨門部幅1.3m、最大幅1.35mを測る。平面形は、玄門部側に対し、羨門部側の幅がやや広くなる長方形を呈している。羨道の幅が玄室の幅の約2/3の右片袖式である。羨道の平面形は、玄室の主軸ラインに対して北西—南東方向に約5°ねじれており、このねじれが構築段階からのものなのか、地震などの外部からの圧力によるものなのかは不明である。羨道の側壁や天井石には赤色顔料が塗られていなかった。

羨道の側壁は、比較的残りがよかった。基底石は、玄室内と同様に比較的大きな石材が用いられて

いるが、その上は、大きさが不揃いで、目地も明瞭には通らない。左側壁はほぼ垂直に積まれているが、右側壁は、地震の影響かやや内傾している。

奥門部は、左右に立柱石を配し、奥門天井石は細長い鶴尾状の石材を使用して、石室の入り口らしい様相を呈している。左の立柱石に比べ右の立柱石は小ぶりである。奥門の下には閉塞の基底石と思われる比較的大きな石材が横向きに積まれている。

羨道の床面には、玄室の床面石材に比べて一回り小さな石材が全体に敷かれていた。石材の大きさも均一でなく、2重3重とかなり乱雑に積み重なっていることから、閉塞石あるいは2次的な床面とも考えられる。それらの石の下には乳黃白色の粘土が張り付けてある。この粘土層を床面と考えることもできる。

### 前庭

前庭は、長さ1.1mと非常に短い。側壁は比較的小ぶりの石材を用いて積まれている。羨道の石積みに比べ丁寧である。側壁は縦方向に目地を揃え、2列ないし3列の石積みになっている。奥門から1・2列目は羨道の側壁の延長線上に向きを揃えて積まれているのにに対し、3列目は外側に大きく開いている。側壁は、上部になるほど幅が広くなっている。掘り方と奥門の隙間を埋めるような逆三角形の形を呈している。前庭の前方には、掘り抜き（上部幅3.8m、底部幅1.4m）があり、墓道と思われる。墓道は、緩やかに傾斜しており、さらに調査区外へ続いている。前庭から続く外護列石などの石列は検出されなかったため、前庭の石組みはこれで完結していると思われる。



写真 羨道床石堆出状況(南より)

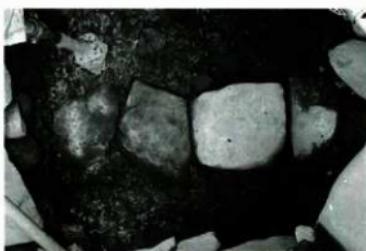


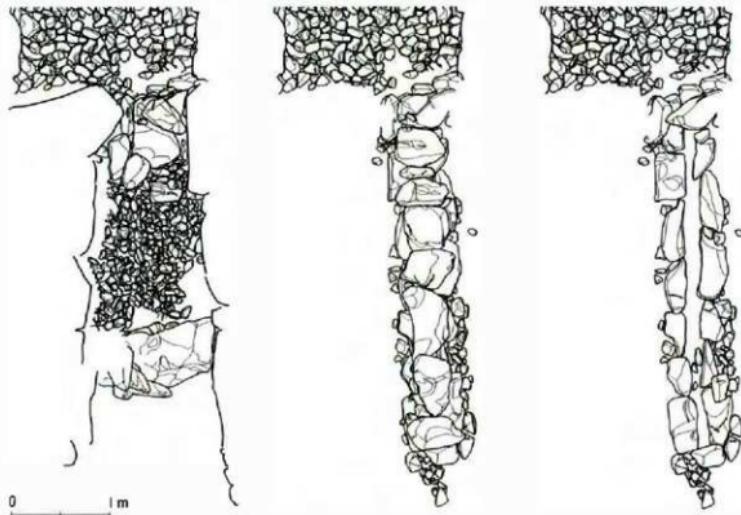
写真 羨道排水溝蓋石検出状況(南より)



写真 奥門・前庭の様子(東より)

### 排水施設

羨道部の粘土層を除去したところ、下から排水溝が検出された。排水溝は、玄門の直下、権石下から始まり、羨門閉塞基底石の下を通り抜けて、羨門直下まで続く。直径40~50cmほどの扁平な凹角形の番石が9個並ぶ。排水溝の内部は、幅約20cm、深さ約15cmで、溝の両側に細長い石を並べる。底部は地山（乳白色粘質土）になっている。前庭から外へは排水溝の石列はみられず、溝状の掘り抜きも検出されなかったが、開口部は外へ向かってゆるやかに傾斜しており、排水を兼ねた施設であったと考えられる。排水溝の始まりと終わりには溝を隠すように溝幅に合わせた長方形の石が充填されている。排水溝埋土は、非常に微小な砂粒が大半を占める灰暗褐色土が入る。遺物は出土していない。



第14図 羨道床石・排水溝実測図



写真 排水溝（開口部より）



写真 排水溝（玄室より）

### 第3節 遺物の出土状況

#### (1) 石室内の遺物出土状況

本古墳の石室内からは多量の須恵器や金属製品が出土した。本古墳は地震などによる石室内部の崩壊が幸いしたのか盗掘をまぬがれており、遺物の残存状況は極めて良い。そのため、最終的な埋葬形態をそのまま残していると思われる。出土遺物は、須恵器（玄室内249点、墓道内9点）金属製品（玄室内105点、墓道内1点）である。

第1表 地区別須恵器出土点数表

器種	I群	II群	III群	IV群	墓道	開口部	計
大型器台	1	0	0	0	0	0	1
脚付長頸壺	0	1	0	0	0	0	1
長頸壺	0	1	0	1	0	0	2
脚付短頸壺	0	4	0	0	0	0	4
短頸壺	2	0	0	2	0	0	4
有蓋高環	0	0	0	0	3	0	3
無蓋高環	3	12	0	0	1	1	17
提瓶	4	1	1	1	0	0	7
甌	1	6	1	0	0	0	8
平瓶	1	1	0	0	1	0	3
坪身	0	0	0	0	0	3	3
坪蓋	0	1	0	1	0	1	3
鉢付蓋	1	1	0	0	1	0	3
蓋	0	6	0	1	0	0	7
鳥形鉢蓋	0	1	1	1	0	0	3
珪	1	0	0	0	0	0	1
計	14	35	3	7	6	5	70

#### 1. 玄室内的遺物出土状況

##### 須恵器

須恵器は玄室内から249点出土した。個体数は59個体である<sup>1)</sup>（第1表）。須恵器の多くは残存状況が良く、中には完形の状態で出土した土器も數多くある。玄室内全体から出土しているが、その多くは玄室の奥壁・側壁・前壁に沿うようにして出土している。出土位置から大きく4つの群に分かれる。I群は、奥壁手前から出土した須恵器群である。II群は、玄門右立柱石前から出土した須恵器群である。III群は、右側壁から出土した須恵器群である。IV群は左側壁から出土した須恵器群である。

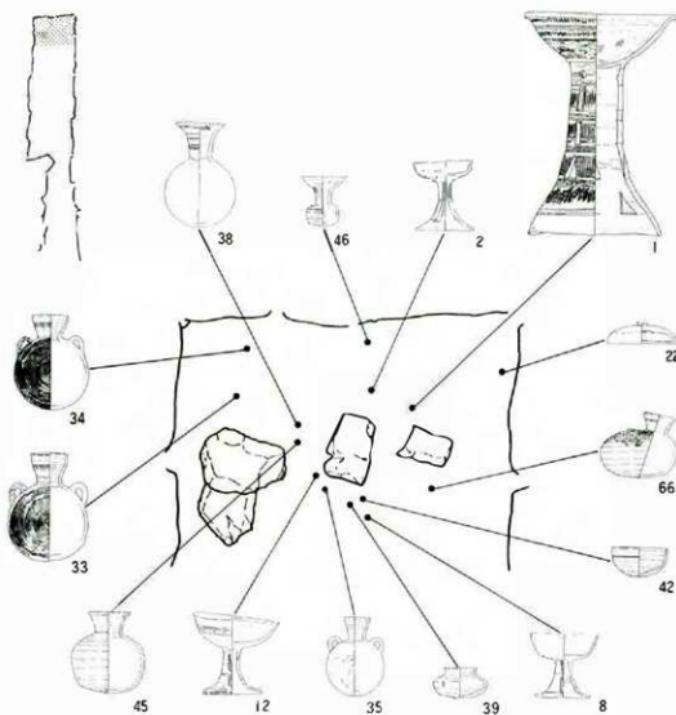
各群の須恵器出土状況は以下のようである。



第15図 石室内遺物出土状況図



第16図 出土遺物分布図



第17図 玄室内須恵器1群出土位置図(S=1/20・イブツ=1/10)

## ① I群（奥壁手前から出土した須恵器群）

出土した須恵器は14個体である。14個体の出土状況は同じI群でも3つに分かれる。I群Aは、奥壁左隅から中央部にかけて出土した一群で、中央部に大型器台（第23図1）が奥壁と平行するように左側へ倒れて出土し、大型器台の下からは小型の壺（第30図46）が出土した。奥壁左隅からは鉢付蓋（第25図22）が出土している。I群Bは、奥壁中央から右隅にかけて出土した一群で、把手付の提瓶（第27図33・34）が馬具類（第35図119～121）と一緒に出土している。I群Bの土器と馬具類は、奥壁右隅に「カタヅケ」されたように固まって出土した。I群Cは、奥壁中央から玄室側へおよそ40cm～1m離れた範囲から出土した一群で、棺台に使用されたと思われる礎の周囲から出土している。出土した須恵器は、把手のない扁平な形の提瓶（第29図8）と把手付提瓶（第28図35）、舟（第29図42）、短頸壺（第29図39・45）、無蓋高壺（第23図2、第24図8・12）、平瓶（第31図66）である。

## ②II群（玄門右立柱石前から出土した須恵器群）

出土した須恵器は、35個体と玄室内出土須恵器の半数以上を占めている。II群は出土状況から2つに分けられる。II群Aは、玄門右立柱石に持たせかけるように固まって出土した一群で、まさに「カタヅケ」の状況が看取される。II群Bは、玄門中央付近や玄門立柱石からやや離れた地点から出土した一群である。

II群Aの須恵器は、26個体である。脚付長頸壺（第26図30）、脚付短頸壺（第25図25・26）と鉢付蓋（第25図24、25とセット）、壺（第30図47・48・51～53）、把手付提瓶（第27図32）、無蓋高环（第23図3・5、第24図7・9～11・13～17）、鳥形鉢付蓋（第31図55）、子持蓋（第31図59・60・62）、壺蓋（第31図56）である。26個体中、高环が11個体が多い。26は、24の蓋がかぶさった状態で出土した。

II群Bの須恵器は、9個体で、脚付短頸壺（第26図27・31）と長頸壺（第29図44）、平瓶（第31図65）、無蓋高环（第23図6）、壺（第30図49）子持蓋（第31図58・61・63）である。その他、小片として鳥形装飾片（第32図92・93）が出土している。

II群の様相は、II群Aの須恵器はBに比べて小品が多いのが目立つ。特に高环は26個体中11個体を占める。位置的にも立柱石に沿うように小品が並ぶ。大型製品は比較的前方に位置している。また、子持蓋という特殊な蓋がII群だけで6点出土しているが、どのような蓋等と組み合わされていたのかは不明であり、蓋の数に比べて対応できそうな蓋類が少ない。II群の須恵器の中で16は、玄門の手前中央に位置し、原位置を留めているように思われる。羨道部より出土した須恵器との関係も考えられる。詳しくは第4節の考察で述べたい。

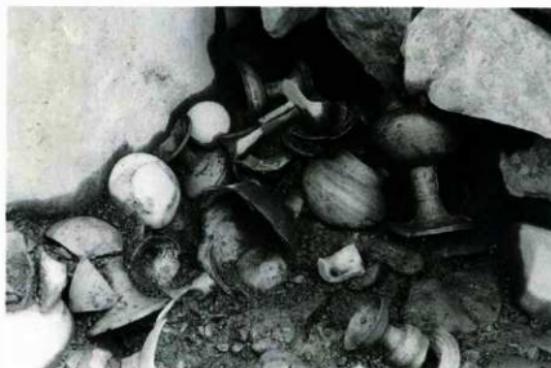
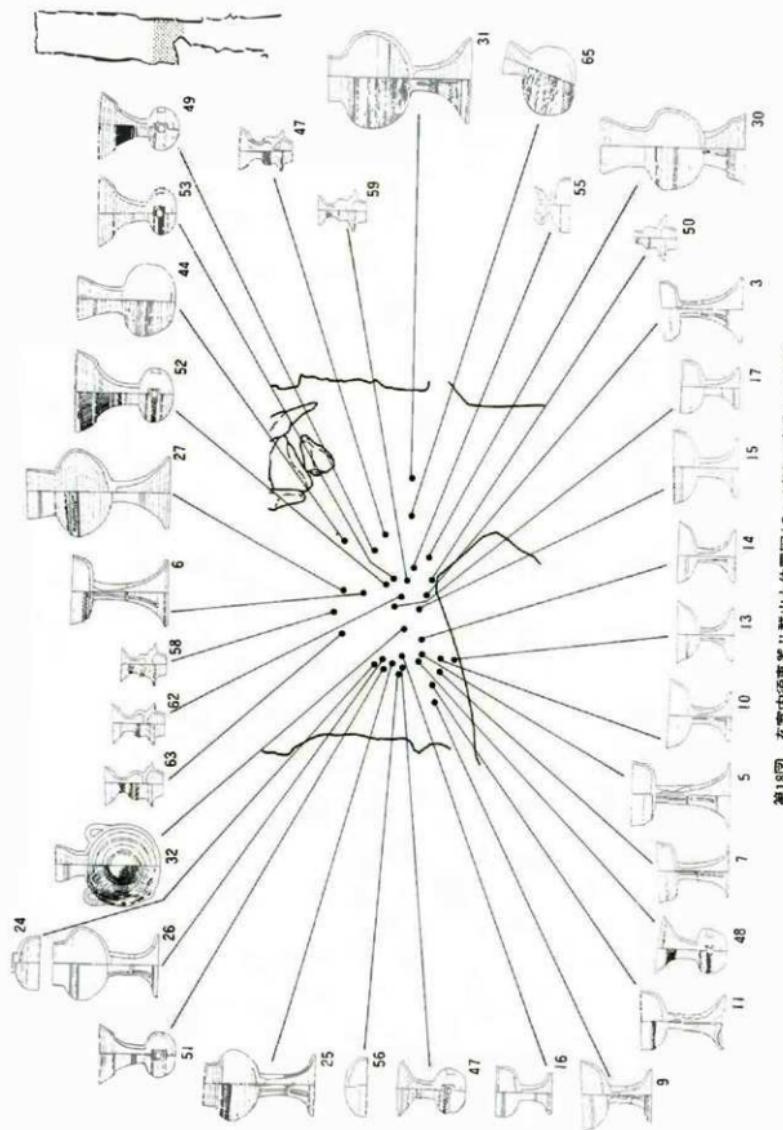
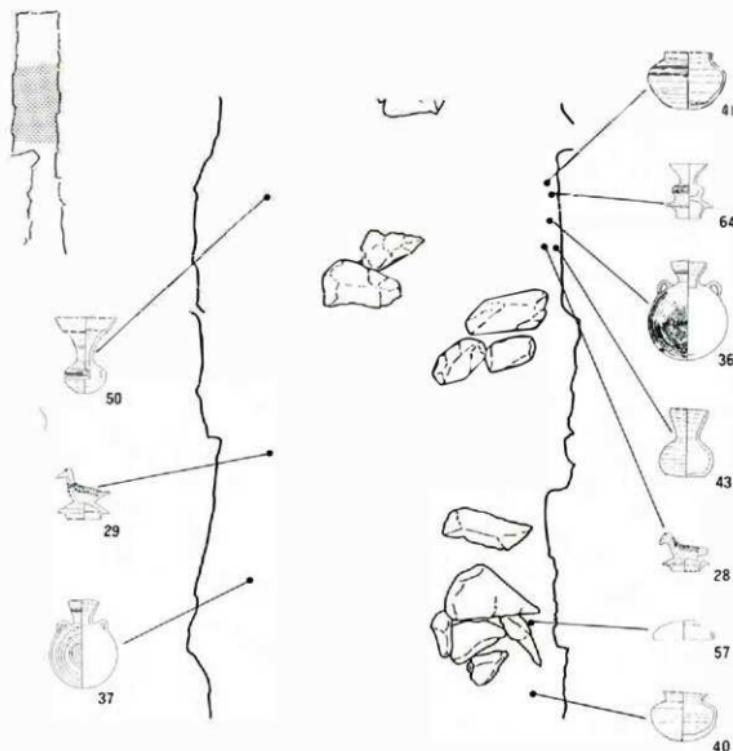


写真 右立柱石下遺物出土状況



第16図 玄室内須恵器!!群出土位置図 (S=1/20・イブツ=1/10)



第19図 玄室内須恵器III・IV群出土位置図 (S=1/20・イブツ=1/10)

## ③Ⅲ群（右側壁から出土した須恵器群）

Ⅲ群の須恵器は、施（第30図50）と鳥形紐付蓋（第26図29）、把手付提瓶（第28図37）の3個体である。いずれも、側壁基底石に沿うように出土した。

## ④Ⅳ群（左側壁から出土した須恵器群）

Ⅳ群の須恵器は、短頸壺（第29図40・41）と鳥形紐付蓋（第26図28）子持蓋（第31図64）、把手付提瓶（第28図36）、長頸壺（第29図43）、环蓋（第31図57）の7個体である。いずれも、左側壁基底石に沿うように出土した。

1) 個体数の計算は、高壺や壺と組み合わせる蓋類もそれぞれ1個体としてカウントした。



写真 遺物出土状況（奥壁右隅）



写真 遺物出土状況（奥壁左隅）



写真 遺物出土状況（右側壁）



#### 金属製品

玄室内からは金属製品が105点出土した。金属製品は須恵器の出土状況と若干様相が異なる。出土状況は、大きく2つに分けられる。1つは、須恵器と同様にカタツケによって動かされたと思われるもの（I群とする）で、玄室の隅（奥壁右隅や玄門右隅）から出土している。2つ目は、玄室の中央部から出土したもので、剥離された元位置を比較的留めていると思われるもの（II群とする）である。I群の金属製品は、馬具類、刀類である。II群の金属製品は、太刀・刀子・耳殻・鉄錐・鉄釘である。

##### ① I群の金属製品

奥壁の左隅からは、鞍金具の前輪（第35図120）と後輪（第35図119）、轡（第35図121）などの馬具が須恵器（提瓶2個）といっしょにカタツケされた状態で出土した。前輪や後輪の背部には木質（木装鞍の木部）がわずかに残存していたが、取り上げた段階で大半が剥がれ落ちてしまった。前輪と後輪は、いずれも鍍金具と州派が3つに分かれた状態で出土した。それらを繋ぎ留めていた緑金具が剥離したためと思われる。

玄門中央から0.4m奥壁よりの地点から笄が1点出土した。（第39図176）、176は二つに割れた状態で出土した。玄門をはさんで羨道部から鋪（第39図179）が出土おり、大きさから同じ太刀の部品と思われる。

玄門右立柱石の手前からは、馬具の鍔鉢の兵車鉢やU字形金具・銛具（第35図122～134）が出土している。いずれも縫食が進み床石に張り付いた状態であった。これらの馬具の製品は奥壁隅から出土

した鞍金具や轡とセットになるものと思われる。

## ②II群の金属製品

太刀（第39図174）は、奥壁から1.6m、右側壁から0.4mの地点で、切先を羨道側に向かって、主軸と平行な状態で出土した。出土したときは腐食のため床石に強固に付着した状態であった。そのため、取り上げは少しづつ床石から剥がすようにして行った。太刀には锷（第39図175）と鍔（第35図178）がついていたが、鞘や柄頭などはみられなかった。太刀の全長は87.0cm、重量は667gを測る。太刀の左側から鞘の足金物と思われる鉄製品（第35図186）と小刀と思われる鉄製品（第35図183）が出土した。その他、刀子と思われる鉄製品（第35図184・185）が玄室中央付近から2点出土した。奥壁から1.4m、左側壁から0.5mの地点からは太刀の部品である鍔（第35図180）が出土した。鍔の大きさから小型の锷（第35図177）に対応すると思われる。177は水洗選別で確認された部品であるため、出土位置は不明である。

奥壁より0.9m、右側壁から0.2～0.4m付近の磯（棺台用か）上から、耳環2点（第37図117・118）が出土した。中空鍍金タイプの耳環である。117はほぼ完形で出土し、118は二つに折れて出土した。また、奥壁から3.3m、左側壁から0.15～0.4m付近の磯（棺台用か）上からも耳環2点（第37図114・115）が出土した。鉄芯金張タイプの耳環である。114・115ともほぼ完形の状態で出土した。耳環はもう1点（第37図116）出土している。116は、細かく伸びた状態で玄門中央から奥壁方向1.3m、左側壁から0.5mの地点から出土した。出土状況から、元位置を留めていない可能性がある。

114・115の0.75m玄門寄りの地点から刀子（第39図181）が出土している。181は、柄部に木質が残存し、鍔もついていた。

奥壁から羨道方向へ1.5m、左側壁から0.2mの付近から鉄鎌（第37図135～150、第38図151～173）が固まって出土した。復元の結果、39本の個体識別ができた。鉄鎌は、茎部を奥壁側へ身部を羨道側へ向けた方向で扇状に広がるように出土した。茎部の多くが束ねたような状態で出土したことから、鉄鎌は埋葬当初、鞘などの筒状あるいは箱状の容器に入れられて、それが羨道方向へ倒れたために広がった状態になったと推定される。

奥壁中央から右側壁方向へ鉄釘が3点（第39図187・189・190）出土した。3点の鉄釘にはいずれも木質が残存していた。木棺の有無は確認できなかったが、鉄鎌に残る木質と木目の方向が違うことから、木棺用の釘と考えた。

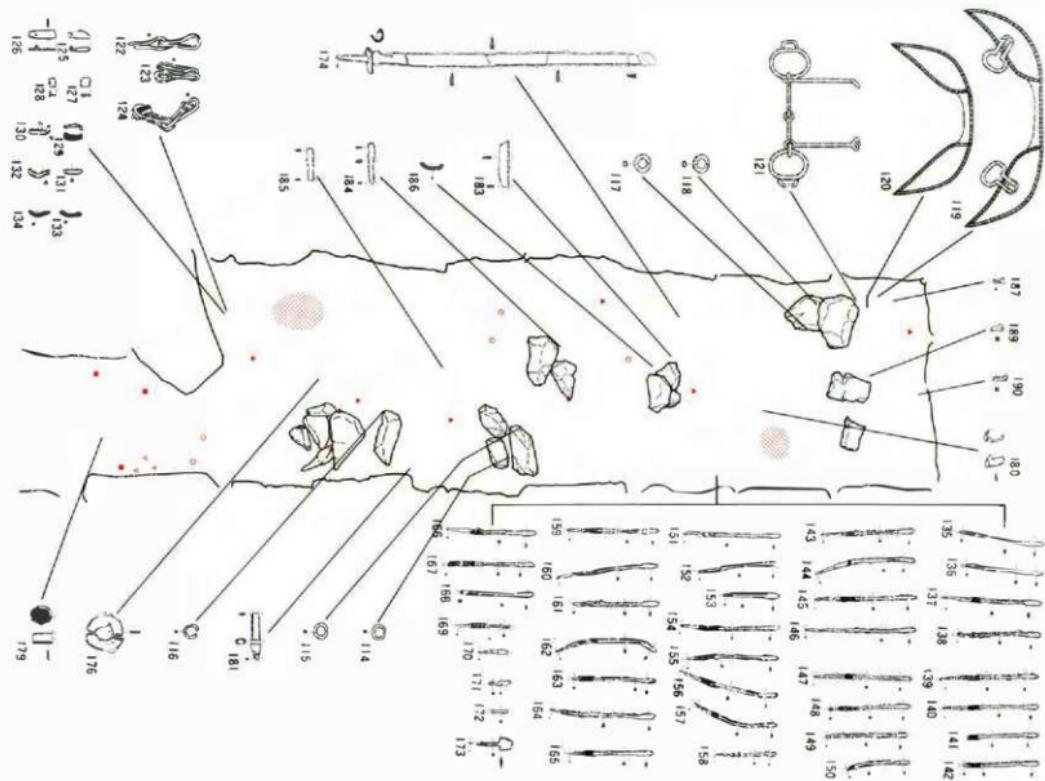


写真 遺物（鉄鎌）出土状況



写真 遺物（太刀）出土状況

第20図 金環状虫出土位置図

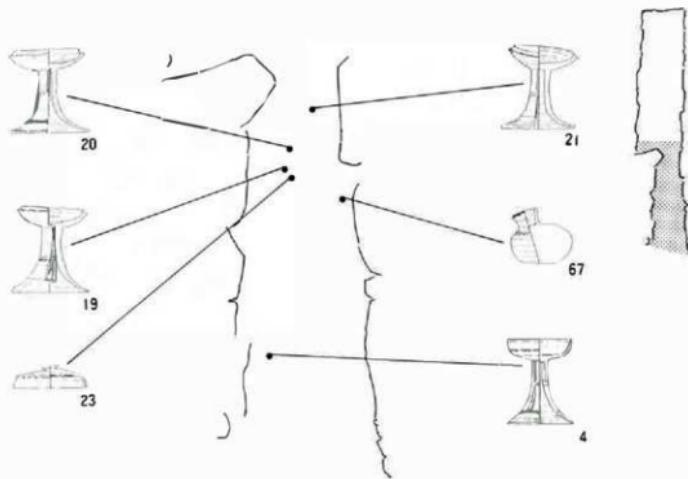


## 2. 羨道内の遺物出土状況

羨道内からは7点の遺物が出土した。須恵器が6点、金属製品が1点である。須恵器は大半が完形の状態で出土した。

玄門直下、樋石の上から有蓋高环（第25図21）が出土した。21から羨門方向に有蓋高环（第25図19・20）と蓋（第25図23）と平瓶（第31図67）、鋪（第39図179）が出土した。33・19・20は、器形の特徴も非常によく似た高环である。23は、高环の蓋である。これらの須恵器は、玄門の入り口に供えられたように出土した。179は、玄室内から出土した矧（176）と同じ太刀の部品であると思われる。67は、羨道左側壁に沿うよう置かれていた。口縁部を人為的に打ち欠いた痕があり、祭祀に関わる行為とも考えられる。

羨門下の開塞基底石付近からは無蓋高环（第23図4）が出土した。4は、割れた状態で出土しており、破片の一部が開口部の埋土や埴丘から出土している。



第21図 羨道内須恵器出土位置図

(S = 1/50 イブツ = 1/10)



写真 遺物出土状況（羨道）

## (2) 外部施設からの遺物出土状況

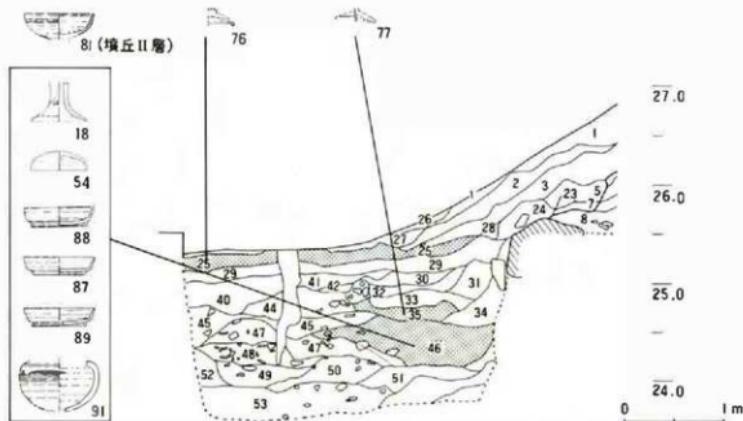
## 1. 前庭部・開口部の遺物出土状況

前庭部及び開口部からは須恵器が60点出土した。その内7点を実測した。(器形の特徴などは観察表に譲る) 25層・46層からの出土点数が多い。追鼎など石室の再利用との関係も考えられる。内訳は、無高环(第24図18)、高台付环身(第32図87・88・89)、脚付壺片(第32図91)、鉢付蓋(第32図76・77)、である。18は、澳門直下の附窓基底石手前の46層から出土した。18と接合すると思われる环部(第32図81)は墳丘II層から出土している。87・88・89は、高台付きの环身であり、46層から出土した。器形の特徴から古墳築造期より新しい時期と思われる。91は脚付壺の脚部片で、肩部に強い張りがみられ、櫛状工具による刺突文が巡る。46層より出土した。器形の特徴から石室内から出土した脚付壺類(25~27・31)と同時期もしくはやや新しい時期と思われる。76・77は、鉢付蓋である。76は、25層より出土し、墳丘II層から出土した須恵器片と接合する。77は、鉢部が玄室内出土の鳥形鉢付蓋(55)の鉢部と非常に類似することから、同様の蓋と思われる。35層から出土した。

## 2. 墳丘及び周溝の遺物出土状況

墳丘及び周溝内からは185点の須恵器が出土した。墳丘から出土した遺物の多くは、II層や墳丘の崩落に伴う土中や周溝と思われるSD IIやその付近から出土している。特徴的な土器としては、装飾付壺片(第33図99~111)がある。破片のため全体の器形を復元することができなかったが、墳丘端部から出土した小壺(第33図95)やSD II埋土から出土した装飾動物片(第33図94)がその壺胴部の凸部上にのっていたと思われる。器形は脚付壺(装飾付壺)<sup>1)</sup>もしくは脚台と思われる。透かし孔は半円抜と長方形がある。

1) 山田邦和「須恵器生産の研究」1998)の編年によれば、装飾付壺II-1類に相当する。



第22図 前庭・開口部須恵器出土位置図(S=1/50, イブツ1/10)

## (2) 出土遺物

## 1. 須恵器 (第23~34図1~113)

石室と開口部から出土した須恵器は70個体であった。詳しくは観察表にゆするが、本墳からは大型器台や装飾須恵器(鳥形鉢付蓋)など特色のある須恵器が出土している。ここでは主な器種毎の要要について述べる。

## 大型器台 (第23図1)

1は、大型器台である。奥壁前の中央から出土した。器高は45.8cmを測る。本墳から出土した須恵器の中で最も大型である。色調は黒色を呈し、やや粗い砂粒を含むものの焼成は非常に良好である。脚部には上から○→□→△の透かしを有し、櫛状工具による波状文や直線文が施される。1に類似した器台は滋賀県野洲町宮山1号墳出土の器台である。透かしの位置や形、施文や調整など非常に類似する。宮山1号墳からは器台が3点とセット関係にある広口壺が3点出土しているが、本墳からは1に対応する広口壺は確認できなかった。

## 無蓋高坏 (第23図2~6、第24図7~18)

無蓋高坏は17点出土した。器形の特徴から3つに分けられる。1つは、4~6・8である。5・6は、器高20cmとほぼ同じ長脚2段三方透かしの無蓋高坏である。两者とも胎土・焼成は非常に良好である。6には坏部にヘラ状工具による刺突文が巡る。4は、器高が17.5cmと前者に比べやや小さいが長脚2段三方透かしの無蓋高坏である。坏部の段が前者に比べやや小さい。8は、色調が黒~灰を呈し、胎土・焼成は良好である。脚部の開きが他の高坏に比べ大きく、様相を異にする。2つ目は、2・3・7・9~14である。2・3・7は、前者に似た長脚2段三方透かしの無蓋高坏であるが、器高が全体に低い。また、坏部の段が小さくなったり、簡略化されるものがある。7の脚部には横位のカキ目が全体に施される。9~14は、脚がやや短い2段三方透かしの無蓋高坏である。坏部は碗状を呈す。下位の透かしは、三角形を呈す。13・14は、上位の透かしが直線上の切り込みだけに省略された1段透かしの様相を呈す。3つ目は、15~18である。透かしが無く、坏部は碗状を呈す。脚部中位には2条の沈線が巡るだけである。

## 有蓋高坏 (第25図19~21)

有蓋高坏は、3点出土した。鉢付蓋は2点(第25図22・23)出土しているが、セット関係が明らかなのは高坏19と蓋23である。19~21は、長脚2段二方透かしの高坏で器高は17.1~17.4cmとほぼ同じである。胎土・色調なども非常に類似する。19の脚部は、20・21に比べやや屈曲して下がる。脚部の成形は絞り上げの痕跡が明瞭である。20の透かしは上段と下段の位置が90°ずれる配置になっている。

## 脚付壺 (第25図25・26、第26図27・30・32)

脚付壺は5点出土した。器形の特徴から2つに分けられる。1つは、30である。幅の広い脚部を有する長頸壺である。脚部には明瞭な段を持ち、胴部に沈線が巡る。頸部は直立して伸び、口縁がやや

内窓する。色調は灰～黒を呈し、胎土・焼成は良好である。2つは、25～27・31である。いずれも脚付短頭蓋である。25・26はやや小型の長脚2段三方透かしの短頭蓋で体部上位に刺突文と沈線が巡る。24（鉢付蓋）と26はセットである。27は、透かしのない長脚短頭蓋で、頭部が長い。体部上位には刺突文と沈線が巡る。31は、大型の長脚2段三方透かしの短頭蓋である。体部及び脚部全体にカキ目や沈線を施す。他の事例から鳥形鉢蓋（第26図29）とセット関係にあると考えられる。

#### 鳥形鉢付蓋（第26図28・29、第31図55）

鳥形鉢付蓋は、3点出土した。器形の特徴から2つに分けられる。1つは、28・29で返りのある蓋である。いずれも羽を閉じた鳥が表現されているが、嘴の形や背の施文表現の違いから鳥の種類が違う。28は、嘴が尖る。水鳥の一類と思われる。29の嘴は平たく鶴類の一類と思われる。器高は、29の方がやや大きく、脚付短頭蓋（31）とのセット関係が考えられる。色調・胎土は両者との似ている。2つ目は、55の蓋である。55は、返りのない蓋で、羽を閉じて頭を下にもたげる様子が表現されている。鳥全体の表現は28・29に比べてやや粗雑である。胎土・色調も明らかに違う。55の鳥に類似する装飾片が石室内から2点（第32図92・93）出土している。92は、蓋頭の側面に貼り付けてあった接合面が残り、鶴冠のついた鳥を表現している。93は、羽を閉じた鳥を表現している。胎土・色調は55と似ている。また、蓋口縁部片（第32図78）は、55の蓋と胎土・色調が類似している。蓋頭部が欠損しているが、装飾紐を有する蓋の可能性も指摘できる。鳥形鉢蓋の出土事例は東海地方に多い。<sup>13)</sup>

1) 鳥形鉢蓋の出土事例は東海地方を中心に19例ある。本項の蓋と形状が似ている例としては、愛知県岩津1号墳、愛知県岡崎市14号墳出土の須恵器がみられる。

#### 子持蓋（第31図58～64）

子持蓋は7点出土した。いずれも器形が類似する。返りのある蓋で鉢部が小型槌の形を呈す。鉢部の体部及び頭部には刺突文を巡らす。鉢部の器形は、槌の47・48に類似する。子持蓋は山田編年<sup>14)</sup>II—I類のⅢ期にあたる。類例は少なく、近くでは愛知県岩津1号墳出土のものがある。県内の出土事例は陽徳寺裏山1号墳出土のものが知られるだけである。<sup>15)</sup>

1) 前述

2) 陽徳寺裏山1号墳出土の子持蓋は、子持器台に付属するもので、返りのない山田編年I—2類の日前期にあたる。

#### 槌（第36図46～53）

槌は、8点出土した。器形の特徴から3つに分けられる。1つは、52である。器高16.3cmを測る大型の槌で、色調は黒、断面がセピア色の胎土・焼成が非常に良好である。胴部及び頭部から口縁部に槌状工具による刺突文や直線文を施す。頭部には明瞭な段を有す。2つ目は、49～51・53の槌である。器高は、12.1～14.2cmと、中型である。頭部から口縁の立上がりは52に似ているが、胴部や頭部の施文が簡略化されている。3つ目は、46～48の槌である。底部が扁平で頭部は直立する。頭部と口縁部の境の段は簡略化されている。46は、器高8.8cmと小型である。胴部及び頭部に刺突文を施すもの

のやや粗雑である。胎土は灰白～灰で、他の壇と様相を異にする。

#### 提 瓶（第27図32～34、第28図35～37、第29図38）

提瓶は7点出土した。器形の特徴から4つに分けられる。1つは、32・33である。体部背面が扁平で腹部は円弧状に張り出す。腹部全体にカキ目調整が施される。口縁部はやや外反気味に立上がり尖る。器高22cm前後と大型である。2つ目は、34・36である。器高は、前者に比べ小振りである。体部背面がやや丸みを帯び、腹部はへら削り調整される。36は、頸部がすぼむ。3つ目は35・37である。前者に比べいっそう小振りになる。腹部の施文はみられず、へら削り調整される。背部と腹部の形状がほぼ同じ扁平な形である。4つ目は、38である。背部・腹部の形状がほぼ同じ扁平な形で、頸部は太く櫛状工具による施文がある。背部と腹部の境には2条の沈線が巡る。口縁部には片口状の押さえが1ヶ所あり、φ1mm程の孔が2つ空けられている。胎土は他の提瓶に比べて赤い赤褐色を呈す。器形の特徴から他に類例がない。比較的似ている資料としては愛知県高蔵寺5号墳出土の提瓶がある。

#### 平 瓶（第31図65～67）

平瓶は3点出土した。器形の特徴から2つに分けられる。1つは、65である。底部はやや平坦で体部は厚みのある半円状を呈す。体部～底部にカキ目を施す。2つ目は、66・67である。66は、底部が平坦で体部はやや扁平である。体部上位にカキ目を施し、2cmほどの粘土粒を貼り付ける。67は、形状が65に似るもの的小型である。刺突文が肩部に巡る。

## 2. 鉄製品

### 馬 具

本墳出土の馬具は、轡（くつわ）（第35図121）、鞍金具（第35図119・120）、鐙轡（みすお）（第34図122～134）などが出土した。

121は鉄製の環状鏡板付轡である。矩形立圓を持つ素環の鏡板付轡である。鏡板の形状は楕円形で長径左8.2（右8.0）cm、短径6.3（6.3）cm。立圓部の右片方は一部欠損するが、幅3.4（3.9）cmで形が隅丸状の長方形である。衡は2連式で長さ17.1cmである。引手は、長さ15.9（15.3）cmで、先端部の環をくの字に屈曲させている。鏡板・衡・引手の連結は、衡先端に鏡板および引手が直接連結している。轡の形態から、6世紀後半と思われる。<sup>1)</sup>

鐙轡は、鉄製で、復元の結果、3連の兵庫鎖の一端に鉤具、もう一端にU字形金具が連結される。銹着が激しいが、長さ8.4～9.0cmの鎖を3連連結して兵庫鎖をなしている。鉤具は、長さ8.2cm、幅4.2cmで、刺金8.5cm、太さ0.7cm。U字形金具は欠損しており、残存長は3.5cmである。U字形金具には、木製の壺燈がつり下げられていたと考えられる。また、鉤具は鞍橋に取り付けられた力革と連結し、吊り下げられたと考えられる。

鞍金具（119・120）は、鉄地金銅装鍍金具で前輪（120）と後輪（119）の1セットが出土した。119には鞍が付く。鞍は、鉄製で、鉤具を持たない円環状の鞍である。円環部は長さ左7.0（右7.1）cm、最大幅5.4（5.7）cm。座金具は長径2.7（2.8）cm、短径2.5（2.6）cm。鍍脚部は長さ5.3cmで、鉤の手状に屈曲して円環部と連結する。120の前輪は、左右の鍍金具と州浜で構成される。鍍金具の周囲

と州浜上部には縁金具が巡る。鍍金具や州浜にはそれぞれ3ヶ所突起があり、そこへ縁金具の紙を打ちこみ、木製の鞍橋を留めたと思われる。119も同様であるが州浜の突起は2ヶ所である。鞍金具の形態から、T K43～T K209の時期と思われる。<sup>75)</sup>

- 1) 澤村進一郎「愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究」南山大学大学院考古学研究報告第5冊 1996
- 2) 宮代栄一「鞍金具と雲珠・辻金具の変遷」『'96特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘 1996

#### 太刀・刀子（第39図174～185）

太刀（第39図174）は全長87.0cm、最大幅3.4cm、重量667gである。刀身には锷（第39図175）・鍔（第39図178）が付く。174は、片刃で、片闊タイプ。茎胴部は中細で、茎尻はやや丸みを帯びる。X線観察の結果、茎胴部に目釘孔らしい孔の痕跡が1ヶ所みられる。175には透かしがみられなかった。175は長径6.83cm、短径5.99cm、厚さ0.4cmを測る。178は、長径3.8cm、短径3.2cm、幅1.9cmを測る。

その他、锷は2点（第39図176・177）出土した。176は、175に比べ一回り大きく、鍔（第39図179）に対応すると思われる。透かしがみられない。177は一番小振りで、鍔（第39図180）に対応すると思われる。186（第39図）は、楕円形の鉄製品で欠損している。形状から太刀の足金物と思われる。

刀子は、4点出土（第39図181・183～185）した。181は、残存長9.4cmで柄部に鍔と木質が残存する。

#### 鉄 鐸（第37図135～150、第38図151～173）

鉄鎌は、39本の個体を確認した。出土した鉄鎌は、柳根鎌（135～172）と広根鎌（173）である。135～172は、身部形が三角形式あるいは柳葉式で身部闊は全て撫闊である。茎部闊は全て疎状闊で茎部には矢柄木質が残るもののが見られる。茎部の木質は、その上に樹皮状の細い皮が巻き付けてあり、漆が塗られていた。（図版42鉄鎌茎部拡大写真）173は身部が三角形で身部闊は角闊、茎部闊は無闊である。茎部に矢柄木質が残存する。

#### 鉄 釘（第39図187～192）

鉄釘は、6点出土した。187・188・190・192には木質が残存していた。いずれも断面が四角形で形状から木棺に使用された釘と思われる。190は、L字状に屈曲する。

### 3. 装身具

装身具としては、耳環が5点（第37図114～118）出土した。サイズや様相は、大きく3つに分かれ。117・118は、大振りであるが、中空のため重量は比較的軽い。114・115は、中間の大きさで重量は一番重い。116は、サイズも一番小さく、一部欠損しているものの重量も軽い。114は、銅芯金板張で鮮やかな黄金色を留めている。金板は耳環の端部で丁寧に折り込まれている。115は、銅芯であるが腐食が進み余ないし銀板張の耳環と思われる。116は、銅芯銀板張と思われる。117・118は、中空の耳環である。断面を観察すると細く白っぽい線が内径側にみられた。銀板を筒状に巻き、「銀纏」

技法によって接合されていると思われる。表面は鍍金されたいわゆる「金銅装」である。

耳環の型式編年ははっきりしていないが、出土状態から「細身型→金張太舟型→金メッキ中空水身型」という形態的変遷がみられることが指摘されている。<sup>1)</sup> この変遷を本古墳に当てはめるならば、116→114・115→117・118となる。この組み合わせと変遷過程から本古墳における埋葬及び追葬過程を探ることができるが、詳しくは第4節で述べる。

1) 森岡秀人「追葬と棺体配置」『考古学論叢』1982



写真 天井石取り外し作業

## 第4節 考 察

### 1. 埋葬形態について

南高野古墳は、後世の地震<sup>1)</sup>などにより石室石材が崩落したために幸いにも盗掘を免れた古墳であり、そのため、埋葬の最終形態を今日に伝える貴重な事例となった。横穴式石室はその構造上から、追葬を前提とした構造になつており、本墳においてもその形態について考えてみたい。

石室内から出土した須恵器は、65個体である。その内約35個体が玄門右立柱石の隅に寄せられたように出土した。この出土状況から、明らかに追葬が行われたことを示す「カタヅケ」の行為がみられ、少なくとも埋葬が2回行われたことは間違いないと思われる。第3節(2)で述べたように、須恵器の器形の特徴からは、器種によって、2タイプや3タイプに分かれることが明らかになった。例えば、無蓋高壺は3タイプ、脚付壺は2タイプ、甌は3タイプ、提版は3タイプ、平瓶は2タイプである。これらのタイプの違いは、その様相から古相・中相・新相と分けることができる。(第2表)

また、棺台の上からは2個1セットになった耳環が2ヶ所から出土しており、この状況も2回の埋葬を裏付ける。しかし、耳環はもう1点出土しており、また耳環の特徴も3時期に分かれることから、埋葬は3回行われたと考えることもできる。その他の金属製品では、太刀の鍔と鏃が3点ずつ出土していることも注目される。一人の被葬者に一振の太刀が埋葬されたと考えるならば、3回の埋葬が行われたことを示している。

このように、須恵器や他の出土遺物から3時期の様相がみられることから、埋葬は少なくとも3回(追葬2回)行われたと考えられる。但し、中相と思われる須恵器の中で、羨道部や玄門直下の閉塞石上から出土した有蓋高壺(19~21)や玄門入り口に置かれていた脚付短頸壺(31)は、埋葬に伴う祭祀的な行為が行われたかのように、玄門をはさんではぼ直線的に置かれていることから、これらの須恵器は原位置を留めていると思われる。このことから、2回目と3回目の埋葬には、それほど時間差がなかったのではないかと考えられる。また、「カタヅケ」の一群の遺物にも新相の須恵器がかなりの数含まれていることは、何を意味するのであろうか。追葬が後になるほど副葬される遺物が簡略化されることから考えると、追葬はさらにもう1回あったとも考えられる。

開口部の埋土を観察すると、石室内からの掻き出しがみられる。(第22図前庭・開口部須恵器出土状況図)掻き出しの層は、第44~53層である。堆積状況から掻き出しあり、3回に分かれていると思われる。1回目は第53層であり、53層中からは短頸壺か長頸壺の洞部片と思われる須恵器が出土している。第2回目は、47~51層の堆積で、多くの須恵器片が出土している。第3回目は45~46層で、須恵器の出土は46層が一番多い。無蓋高壺(第24図18)は、墳丘盛土II層から出土した壺部(第32図81)と接合関係が考えられる。このような開口部の埋土にみられる3回の掻き出しあり、追葬に伴う行為と関連づけることができると思われる。また、石室内(羨道部閉塞基底石付近)から出土した無蓋高壺(4)と接合関係にある須恵器片が墳丘II層中から出土しており、追葬時に破棄されたと思われる。

以上のように、石室内出土須恵器の様相や耳環・太刀の出土状況、開口部の埋土などから、本墳で行われた埋葬は最低3回(初葬と追葬2回)であったと考えられる。ただし、開口部の掻き出しやカタヅケの須恵器様相からするともう1回追葬が行われた可能性を指摘しておきたい。第2表は、須恵

器の様相をもとに削難されたと思われる遺物を表にした。

1) 石室石組みの崩落原因については、遠藤淑彦（揖斐川町立北方小学校教諭）にご教示頂いた。池田町周辺で発生した大地震の最も古い記録は745年6月5日に起きたM7.9の地震である。震源地は美濃国の国府付近（現在の不破郡垂井町）とされ、多数の神社や仏寺などが倒壊したとされる。本埴が盗掘を免れていることからこの地震による石室崩壊の可能性が高ぶる。また、遠藤氏から地震による崩壊を示す痕跡として側壁石材のX型の割れ目が指摘された。しかし、資料が少ないので石室崩壊＝地震という断定はできない。同氏には石室石材は全て池田山周辺に分布する「美濃帯」の砂岩であることが分かった。（関版42巻微鏡写真参照）



写真 側壁石材崩落の様子



写真 遠藤氏による石材破片方向の調査

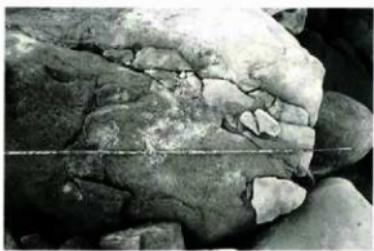


写真 左側壁石材にみられるX型の割れ目

第2表 様相別石室内遺物

様 相	該 当 す る 項 惠 器	共伴すると思われる遺物
古 相	大型器台(1)、無蓋高壺(4~6・8) 脚付長頸壺(30)、提瓶(32~34)、龜(52) 平瓶(65)	馬具(119~134) 耳環(116)
中 相	無蓋高壺(2・3・7・9~14) 有蓋高壺(19~21)、脚付短頸壺(25~27・31) 蓋(22~24・28・29・55・58~64) 提瓶(34・36)、龜(49~51・53)、平瓶(66・67)	耳環(114・115) 刀子(181)
新 相	無蓋高壺(15~18)、提瓶(35・37) 龜(46~48)、壺蓋(56・57)	耳環(117・118)

泰時期差が判然としないものは含めなかった。

## 2. 南高野古墳の墳丘及び石室構造について

南高野古墳は、標高25.5m前後の旧地表面を掘り込み、墓坑を形成した後盛土を3段階に分けて積み上げる工程で築造された。葺石や外護列石はみられなかったものの、埴頂部に厚い粘土層を最後に貼り付け封土としている。墳丘の規模は直徑22mで、周溝との間に2~3mの平坦なテラスを設けている。周溝の幅は2mあり、周溝を含めた規模は直径25mを超える円墳である。

石室は、右片袖式横穴石室で玄室の内面に赤色顔料が塗られた「赤彩古墳」であった。石室の全長は、10.5mを超える大型石室である。玄室長は5.8m、羨道長は3.6m、前庭長は1.1mを測る。石室の設計には畿内で使用されていた「高麗尺」が用いられたと推察されている。<sup>13)</sup> 石室の構造は、墓坑の深さに相当する大型石材を奥壁や玄門、羨門に配し、その間に大型石材と小・中型石材を垂直に積み上げている。玄室の両側壁の石積みには目地が認められるが、羨道の両側壁は目地が描わない。墓坑の掘り方（大型石材の頂部）まで達した後は、持ち送り技法による小口積みによってアーチ上に積み上げた後、天井石を架構している。玄門の上には樋石を配し、前壁を形成している。玄門下には「樋石」を設置し、玄室へは羨道から一段下がるようにして入る構造になっている。奥壁のコーナー上部には襖壁と両側壁をつなぐように「渡し掛け技法」が取り入れられている。

このように、本墳は、前壁を持つ片袖式の横穴式石室であり、「高麗尺」を用いて設計された畿内の片袖式石室の古い様式の影響を受けた構造になっている。しかし、渡し掛け技法や石材の石積みには在地性の特徴もみられる。

1) 成瀬正勝「美濃における後期群集墳形成の一契機一片袖式石室を中心に」『岐阜史学』第93号 1998

### 3.まとめ

南高野古墳は、右片袖式横穴石室を有し、後期古墳の中でも古い様相を呈する古墳である。玄室内壁が赤彩されている古墳としては県内2例目との発見となった。<sup>1)</sup>

副葬品された遺物をみると、須恵器は、その様相から3つに分かれた。古相のものには比較的畿内の影響を受けたものや持ち込まれたと思われる一群がある。特に大型器台は、滋賀県宮山1号墳出土器台と非常に類似している。宮山1号墳からは大型器台が3点出土し、それぞれに広口壺を伴っている。本墳からは広口壺やその破片は1点も出土していない。そこに、宮山1号墳の被葬者との階級的な差を見いだすことができるものの、大型器台を所有することができた階級として畿内との政治的な結びつきを想像させる。大型器台の所有形態から、本墳の最初の被葬者は大型器台を1個用いることができた階層つまり、地域の小首長や有力家長層であったと思われる。<sup>2)</sup>また、大型器台とともに大型鏡(52)や長脚2段三方透かし無蓋高坏(5・6)が出土しているが、これらの須恵器は非常に整形が丁寧で、胎土・焼成も良好であり、畿内及びその周辺地域からの搬入品と思われる。

中相の須恵器群には猿投産のものと思われる須恵器が多く含まれており、東海地方(尾張)の影響がみられる。この古相から中相への須恵器群の様相の変化は、被葬者や彼を取り巻く周辺の権力構造の変化とも考えられる。特に、鳥形鉢蓋の出土事例は県内西部(海津郡南濃町に1点見られるが)にはほとんどみられず、尾張との関連を考える上で興味深い資料となった。

金属製品は、馬具をはじめ、大刀や耳環、刀子等が出土した。特に馬具は、鞍金具や轡、鐙などが出士し、鞍金具は鉄地金銅装の非常に豪華な製品であった。轡の形態編年<sup>3)</sup>では、本墳出土の轡は6世紀後半とされ、このような馬具を副葬することができた階層は畿内との結びつきの強い地域の首長層と考えられている。<sup>4)</sup>

以上のように、石室構造や出土遺物から、本墳の最初の被葬者は、畿内勢力と強く結びついていた人物であり、周辺地域を治める首長層であったと思われる。古墳の築造は6世紀後半と考えられる。その後の追葬における副葬品からは、東海地方、特に尾張との結びつきが想像される。畿内から尾張への様相の変化は、池田町やその周辺地域の政治的变化を示唆していると思われる。その後2回ないし3回の追葬が行われたと思われる。

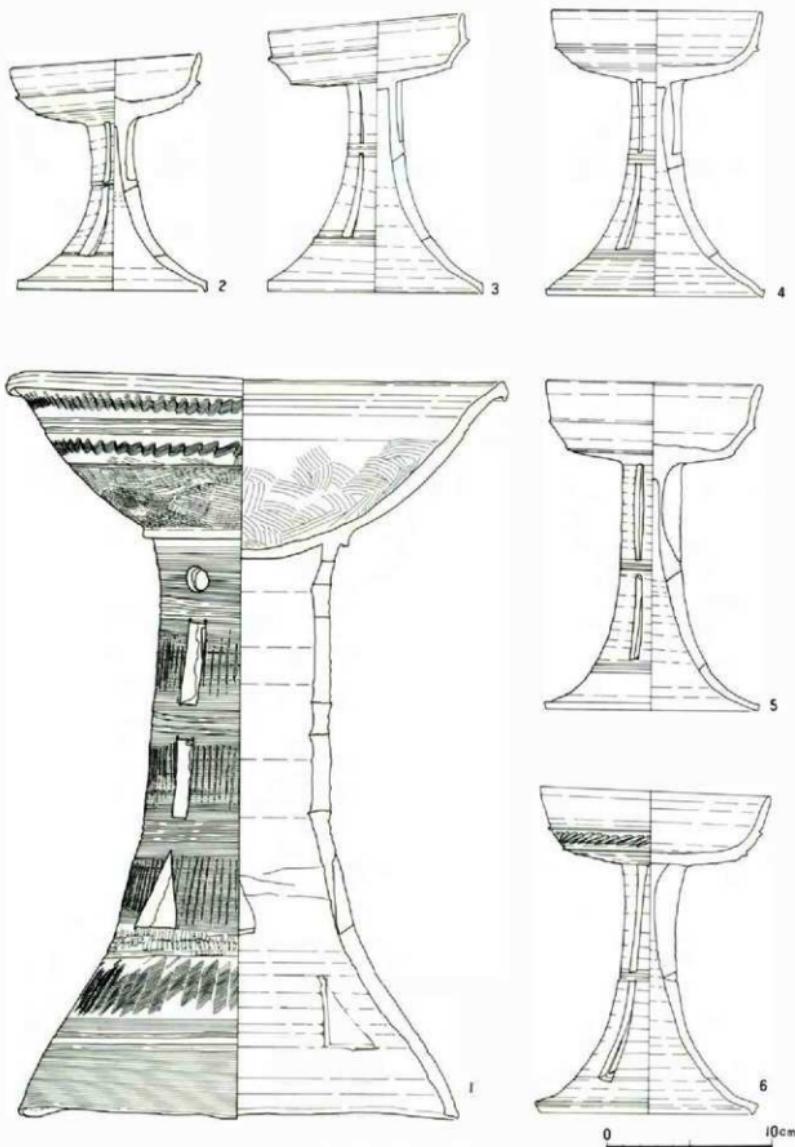
1) 現在確認された県内の赤彩古墳は5例である。

- 蒼老郡上石津町 二又1号墳
- 捨斐郡池田町 南高野古墳
- 本巣郡糸貫町 船木山古墳群第19・272・274号墳

2) 沢村治郎「須恵器大型器台考」『滋賀史学叢誌』第11号 1999

3) 津村雄一郎 前掲書

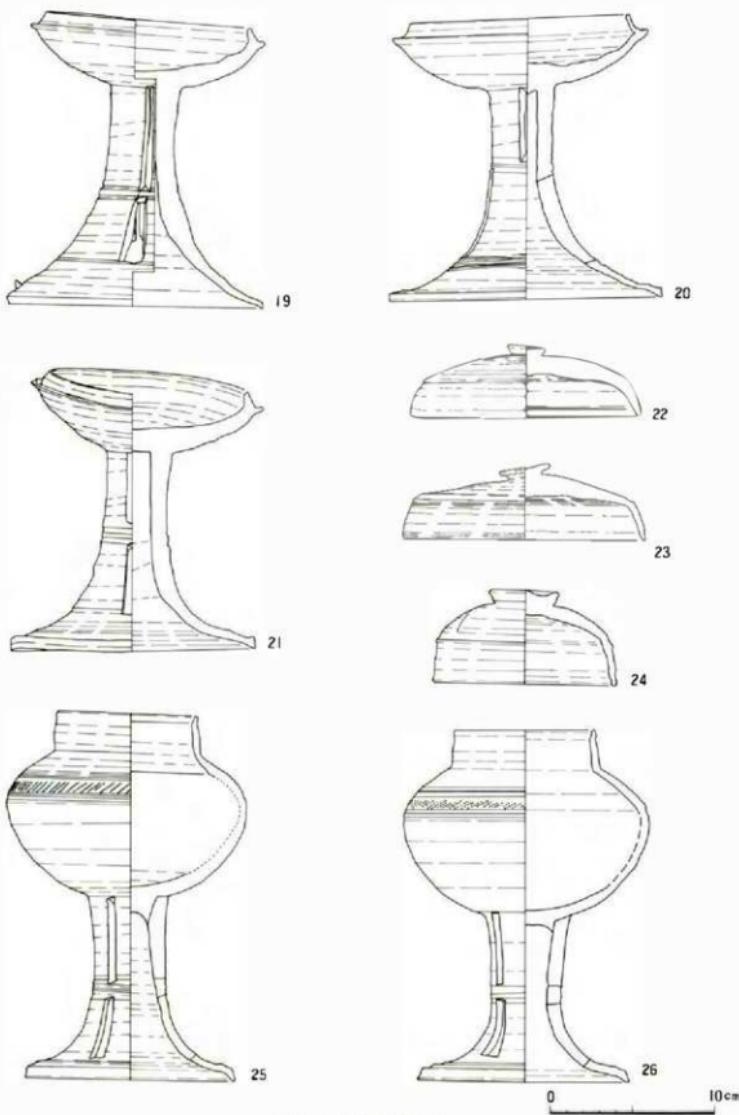
4) 成瀬正勝 前掲書



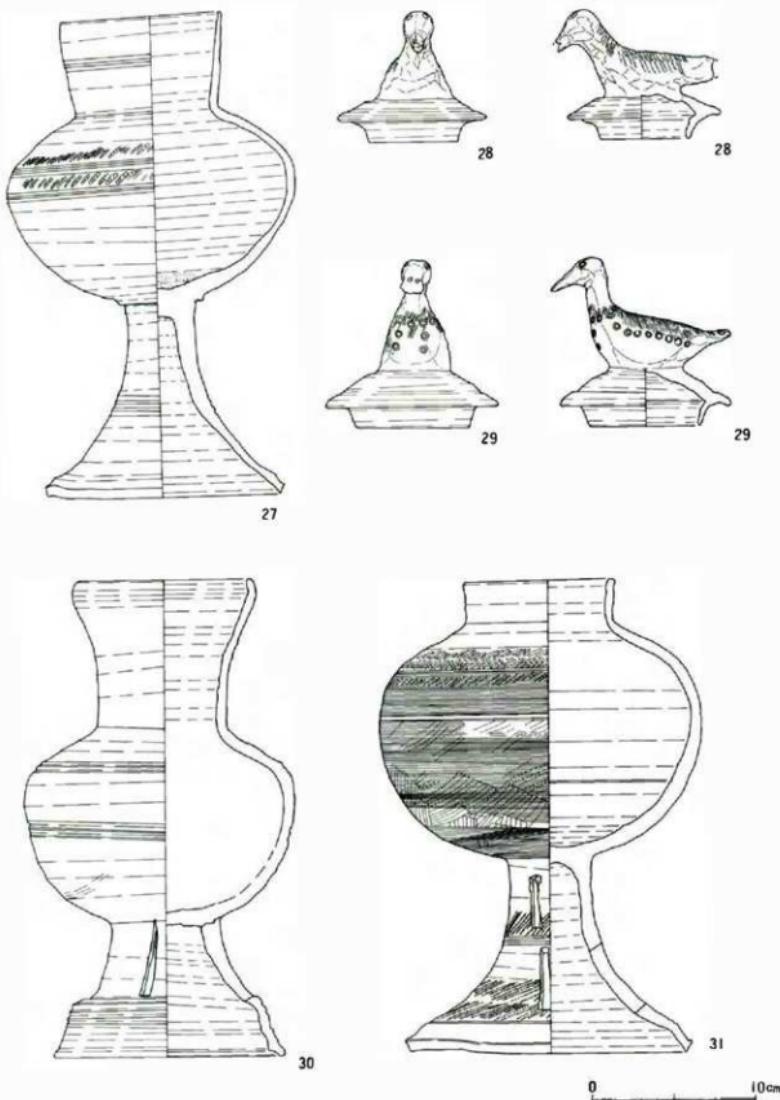
第23図 遺物実測図(1)



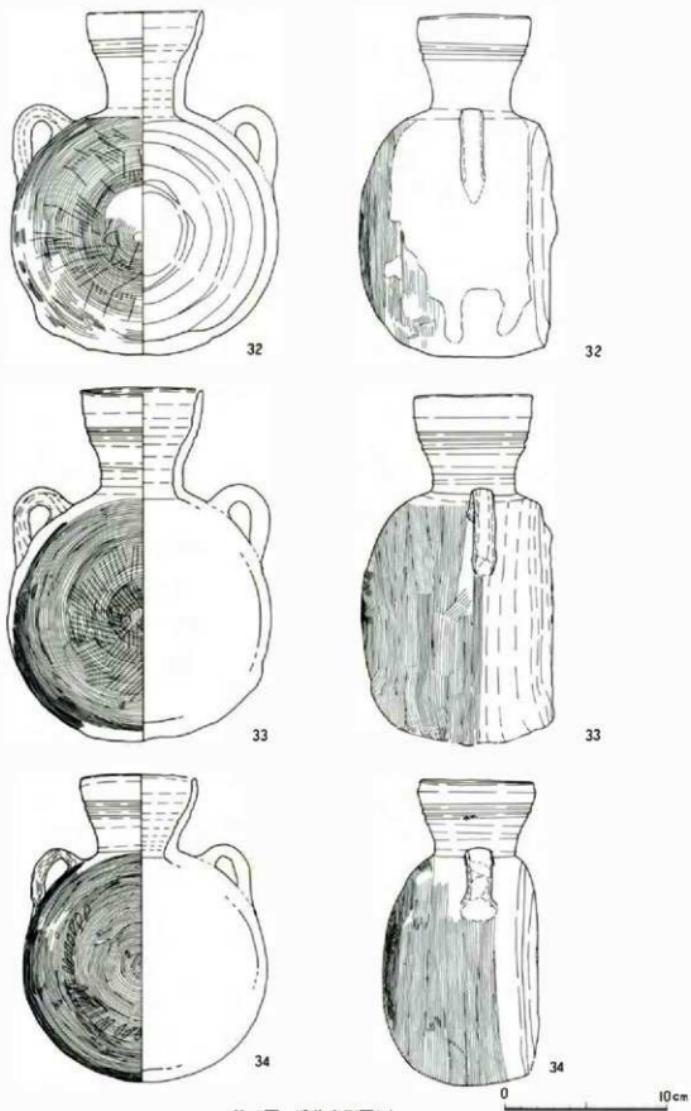
第24図 遺物実測図(2)



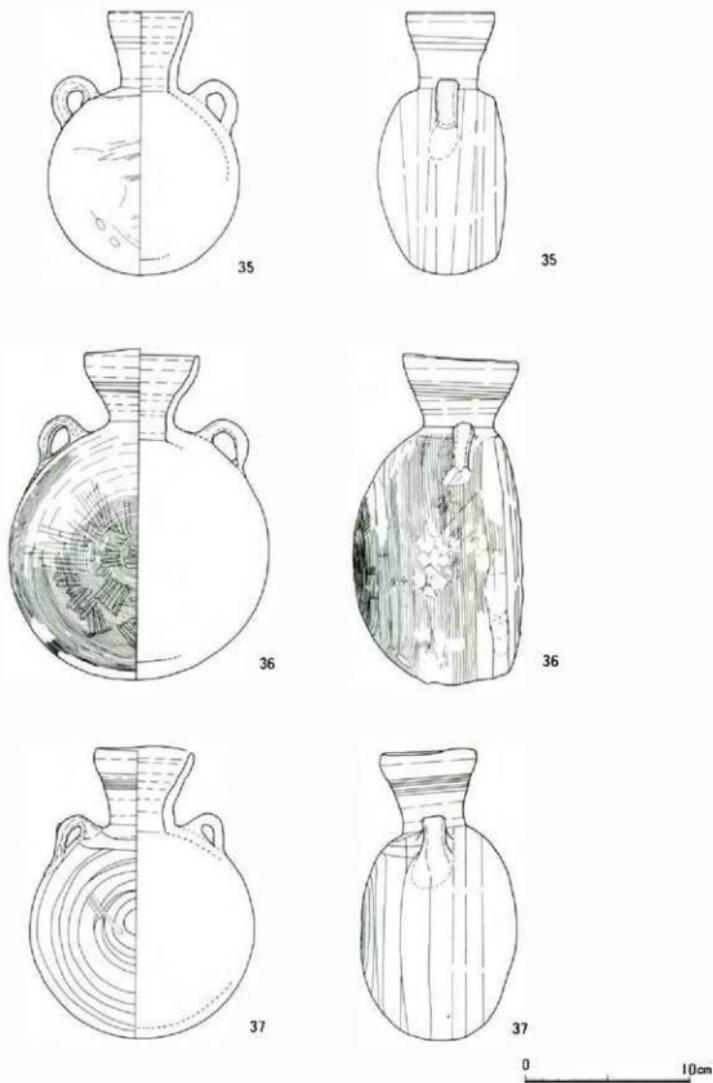
第25図 遺物実測図(3)



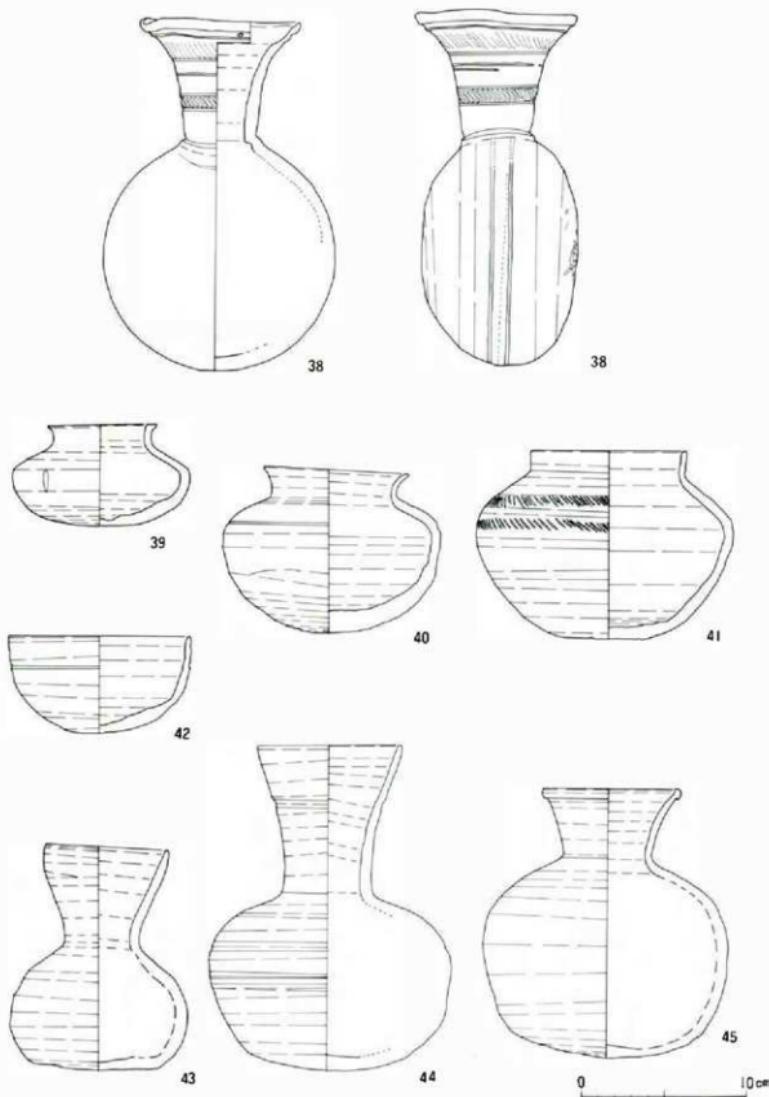
第26図 遺物実測図(4)



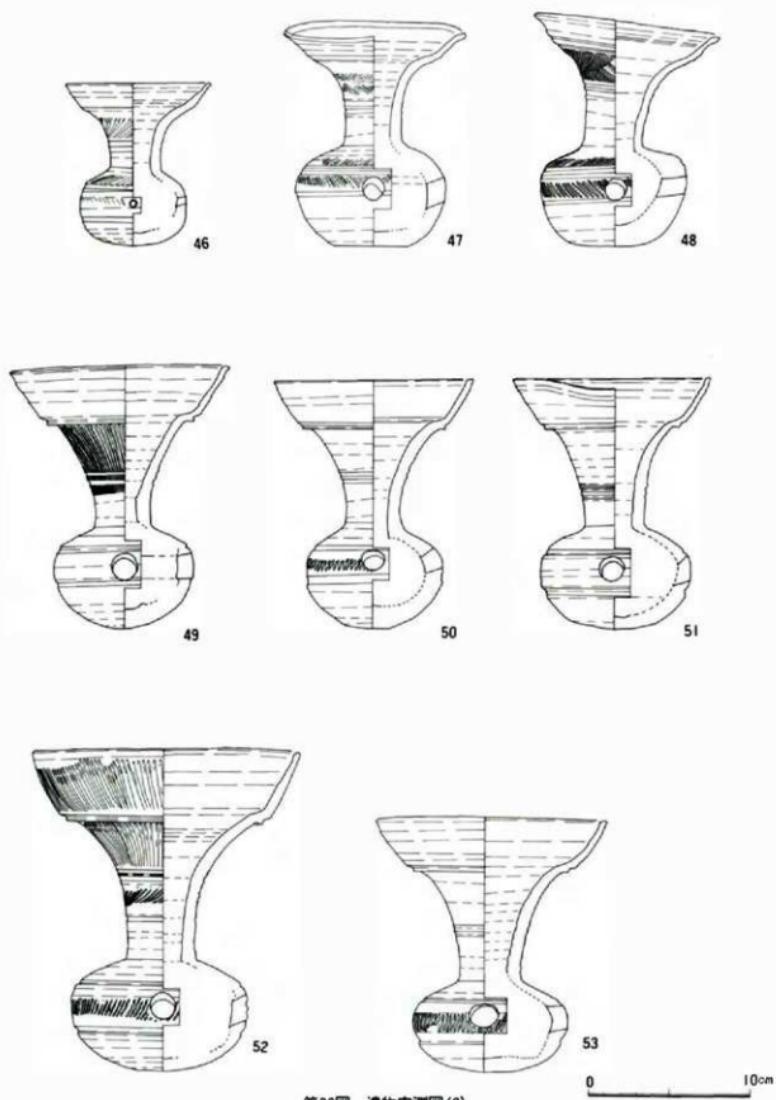
第27図 遺物実測図(5)



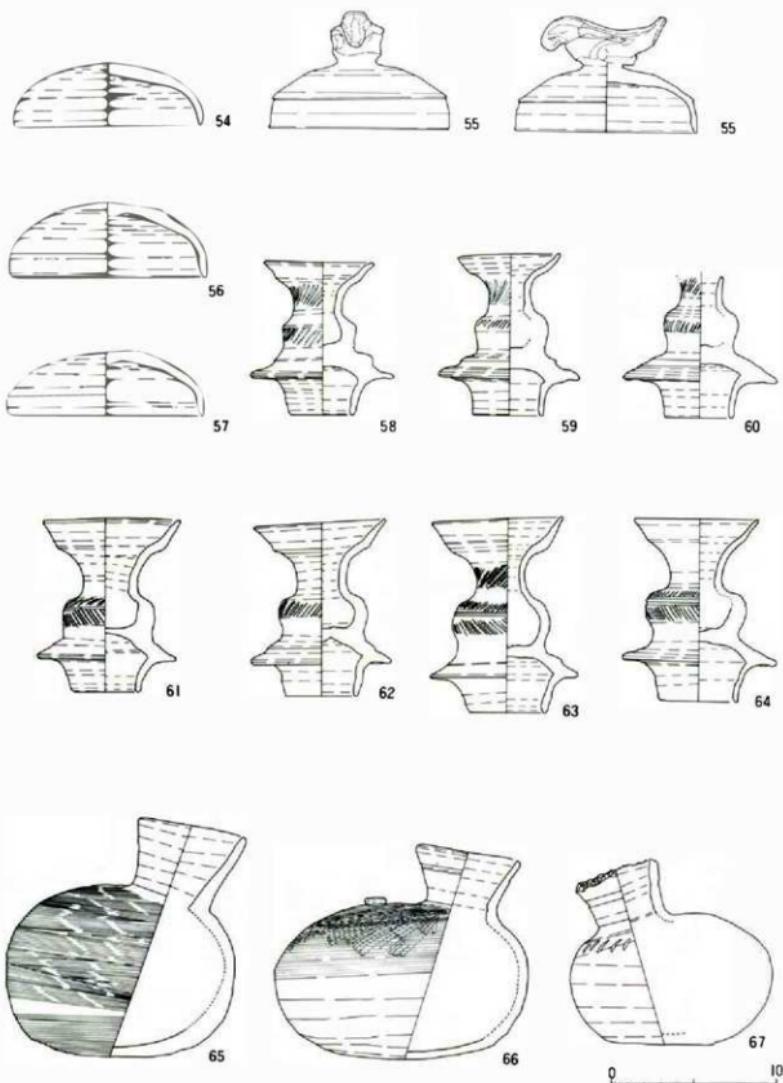
第28図 遺物実測図(6)



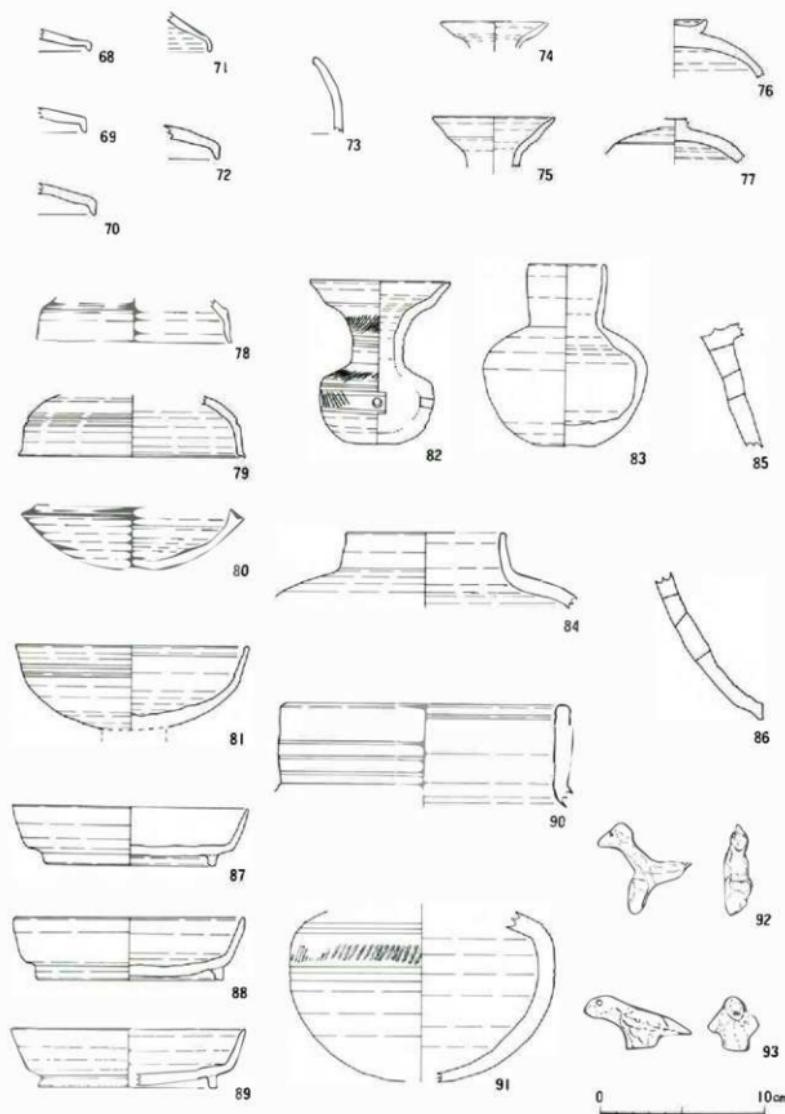
第29図 遺物実測図(7)



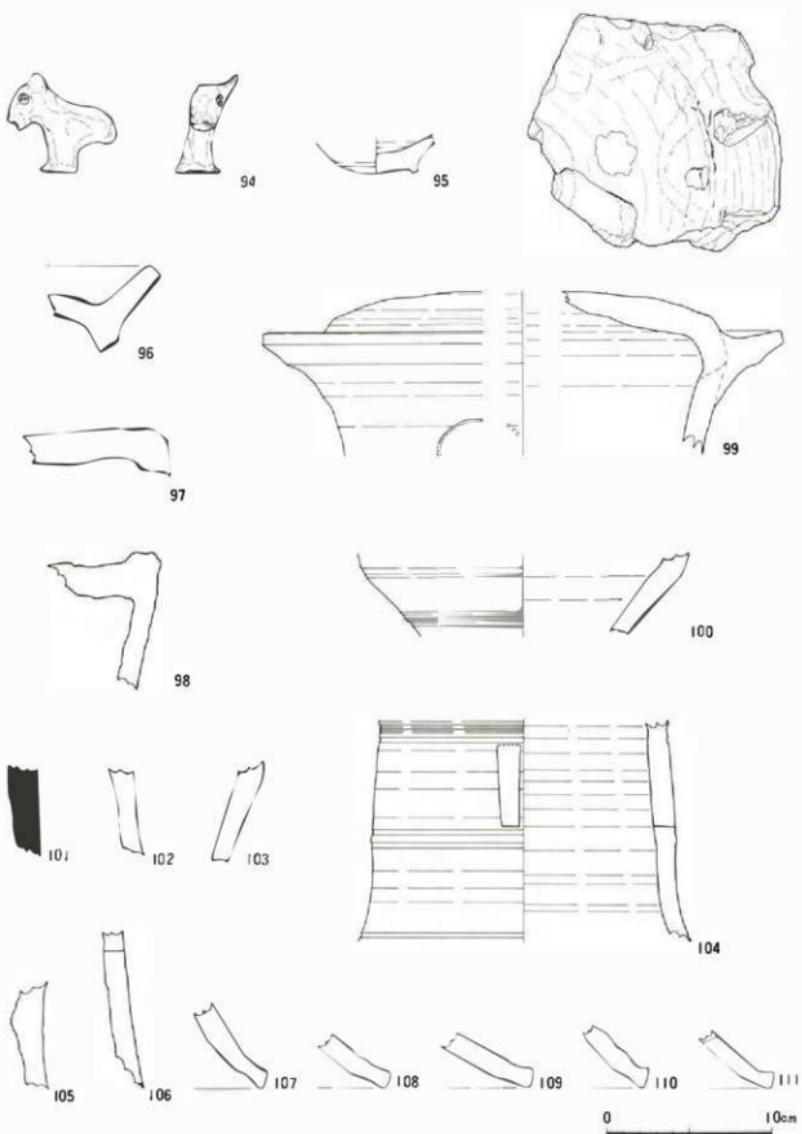
第30図 遺物実測図(8)



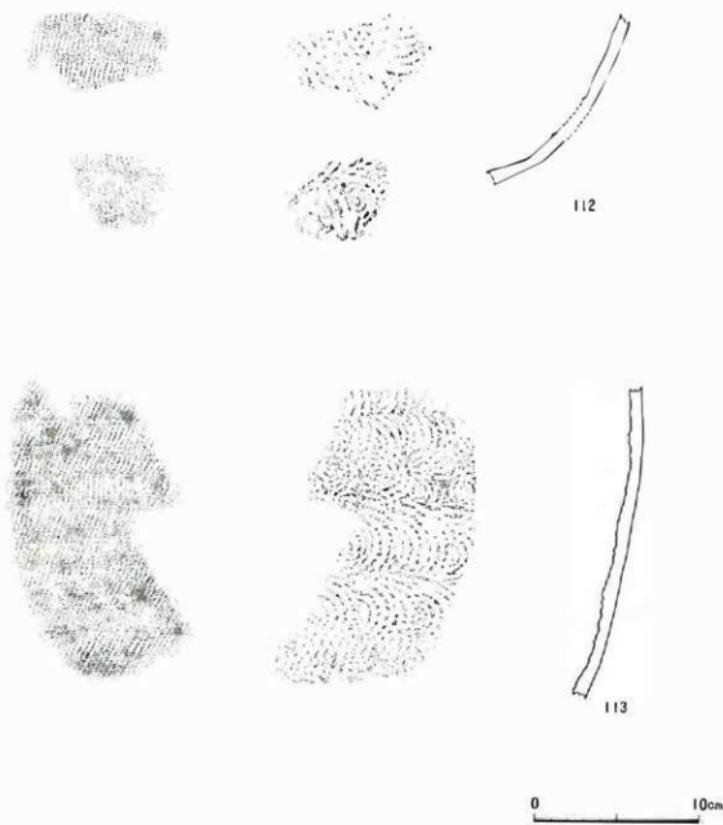
第31図 遺物実測図(9)



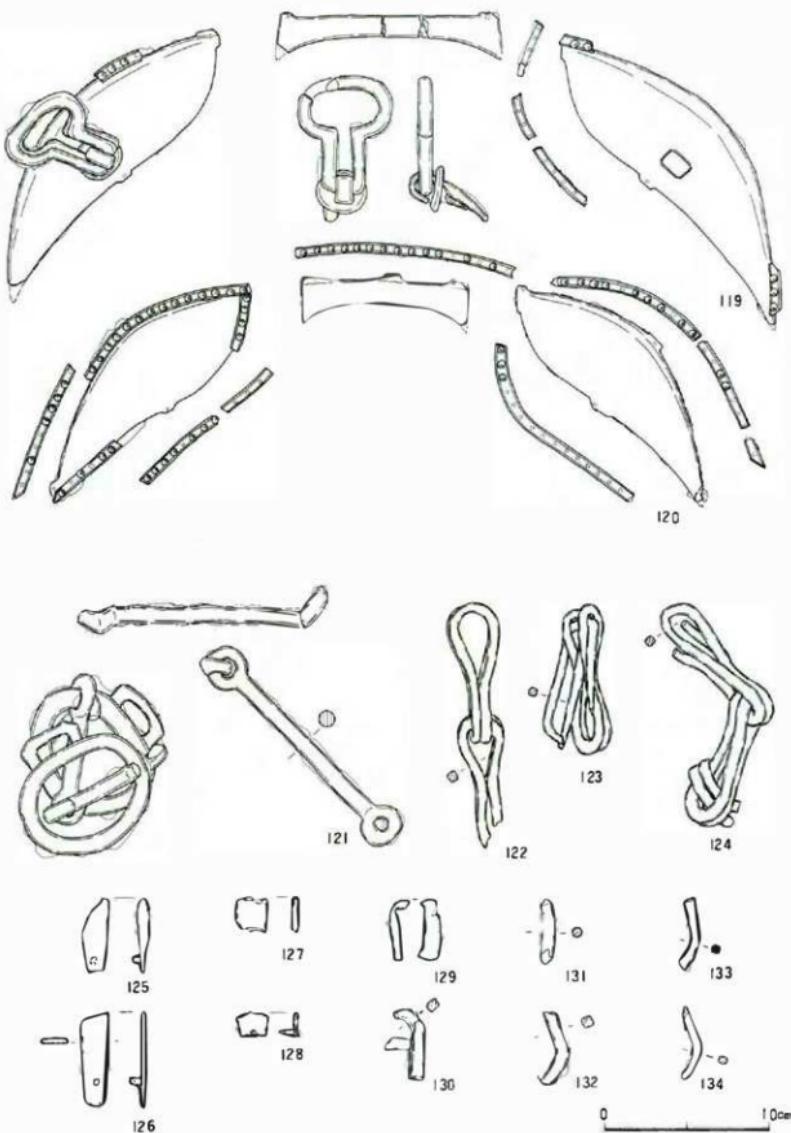
第32図 遺物実測図(10)



第33図 遺物実測図(11)

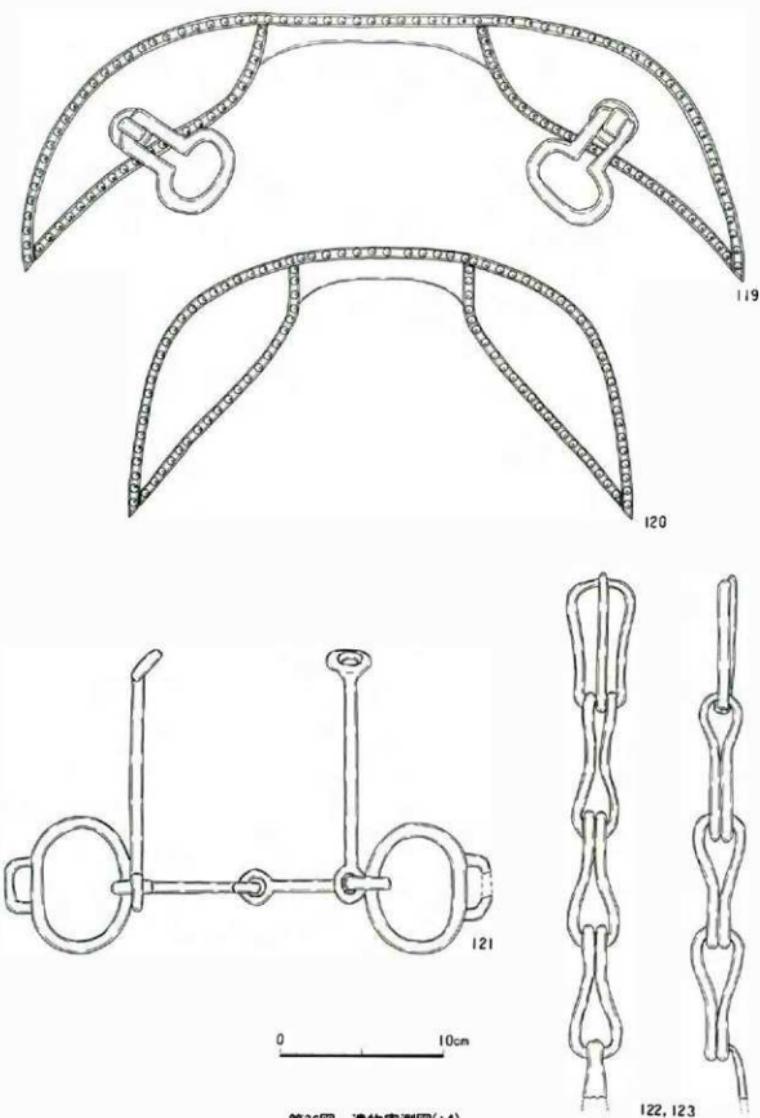


第34図 遺物実測図(12)

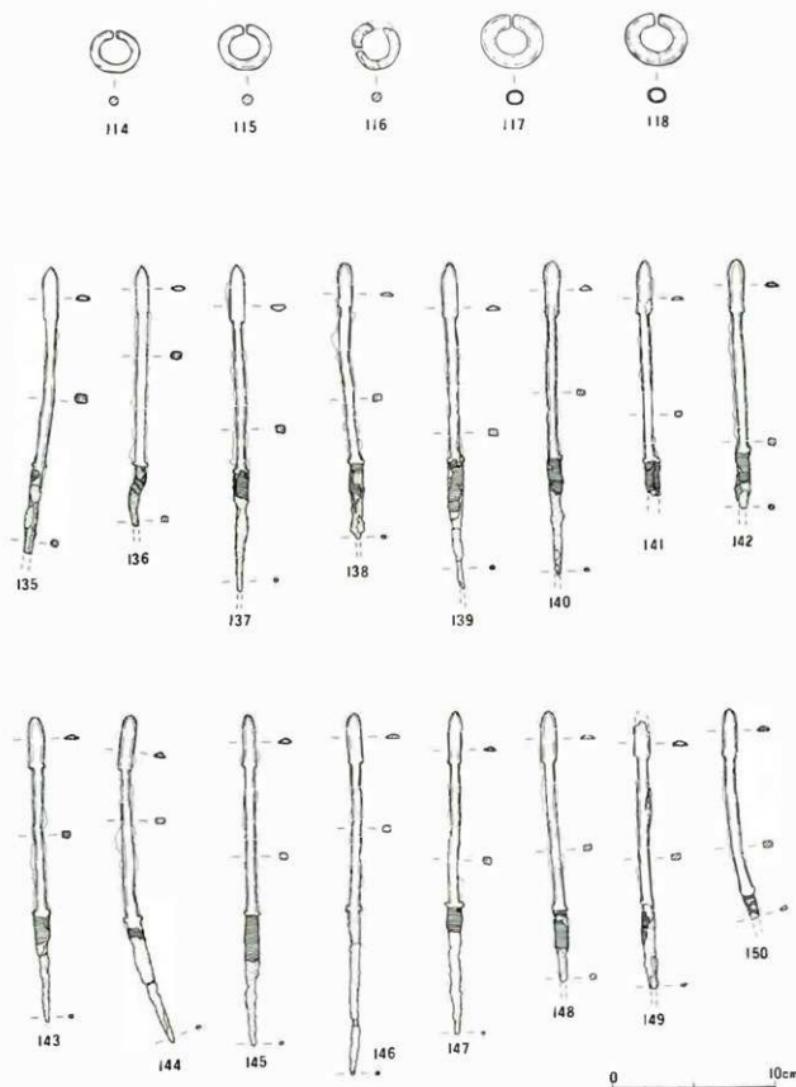


第35図 遺物実測図(13)

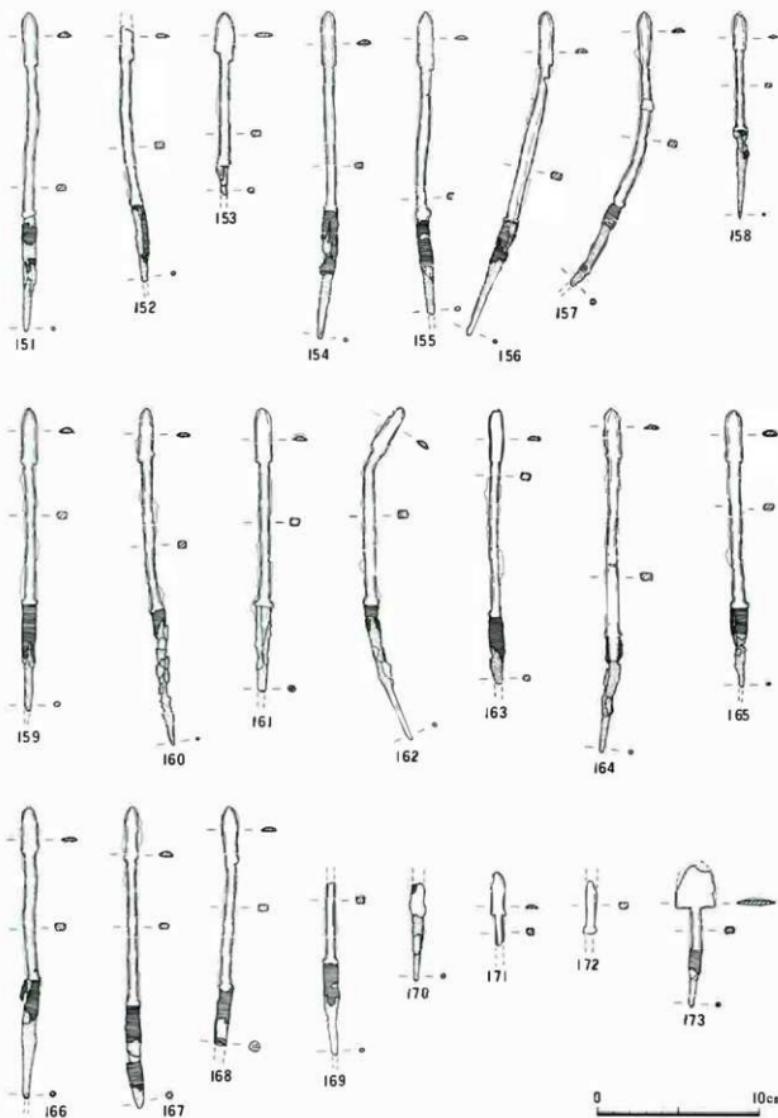
0 10cm



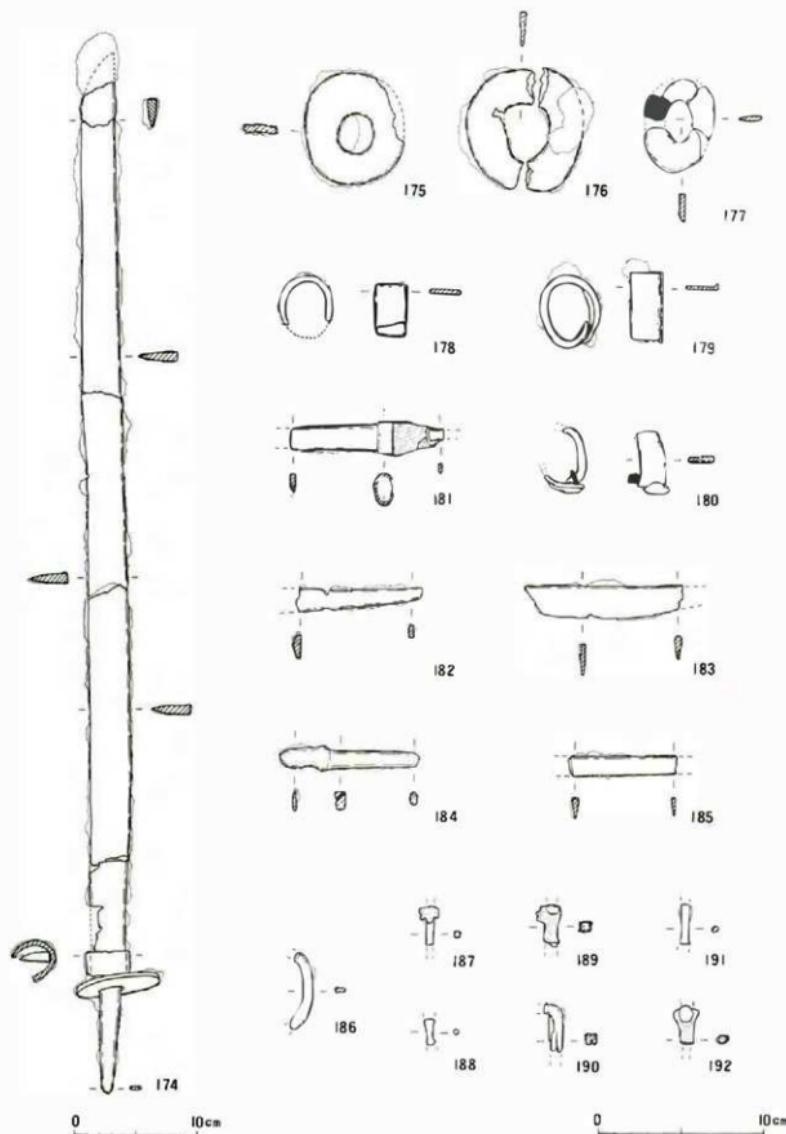
第36図 遺物実測図(14)



第37図 遺物実測図(15)



第38図 遺物実測図(16)



第39図 遺物実測図(17)

第3表 南高野古墳出土須恵器観察表(1)

固 定 番 号	地区 名	所 在 地	器 種	法 規 (cm)			胎 土	色 調	器 形 の 特 徴	成 形 ・ 調 整	その 他 (鉛など)
				口徑	器高	底径					
1	G 1	M 1	大型器台	30.0	45.75	26.9	やや粗、径3mm以下の砂粒、白色粒、長石粒を含む	黒	器台の环部は大きく外方)に開き、口縁端部は上部に引き出される。脚部との境には段を作り、脚部は直立気味にのみた後、内窓気味に外方に開く。脚部端部は尖る。脚部外面には、複数の孔あく丸・長方形・三角形の透かし、孔が3列あり、その間に三角形の透かし、孔か2個施されている。环部に浅く磨削工具による研磨状を施す。脚部外面に磨削工具による波状紋、縦位の直線文、沈線を施す。	环部内部・外縁下方タタキ目、脚部内側磨損ナダ	
2	G 2	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	11.6	14.05	11.55	やや粗、径3mm以下の黑色粒を含む、径1mm以下の白色粒を少箇含む	灰白	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、やや下方に少く縮折、透かしの間に2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位に2つ段をなす。	环部底部内側指ナダ、环部口縁部内外面回転構ナダ、环部底部外側回転ヘラ削り、脚部内外面回転構ナダ	
3	G 3	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	11.9	17.1	13.1	密	黒	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、やや下方に少く縮折、透かしの間に2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位に2つ段をなす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、环部底部中央指ナダ	
4	S 2	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	12.6	17.5	13	密	灰	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、やや内傾する。透かしの間と下段にそれぞれ2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位に2つ段をなしその下に1条の沈線を巡らす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、脚部底部中央指ナダ	
5	G 3	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	12.75	20.0	12.75	密、径3mm以下の砂粒を含む	黒、灰白	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、やや内傾する。透かしの間と下段にそれぞれ2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位に2つ段をなしその下に1条の沈線を巡らす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、环部底部中央指ナダ	
6	G 3	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	13.8	20.5	12.7	密、径2mm以下の砂粒、白色粒を含む	黒	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、やや内傾し地盤は丸い。透かしの間に2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位に2つ段をなしその間にへら状工具による刻突文を巡らす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、环部底部中央指ナダ	
7	G 3	M 2	長脚2段三方透かし無蓋高环	12.1	14.75	10.5	やや粗、径3mm以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白～灰	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、大きく開き端部は肥厚する。透かしの間に1条の沈線を巡らす。脚部外面全体にカキ目を施す。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。本部中位に1つ段をなす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、环部底部中央指ナダ	
8	G 2	M 2	2段三方透かし無蓋高环	13.2	13.15	11.2	やや粗、径4mm以下の砂粒、白色粒を含む	灰	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は、人さく開き端部は縮合して丸く接する。透かしの間に2条の沈線を巡らす。环部は、内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。	环部底部内側指ナダ、环部口縁部内外面回転構ナダ、环部底部外側回転ヘラ削り、脚部内外面回転構ナダ	
9	G 2	M 2	2段三方透かし無蓋高环	14.3	14.05	10.55	やや粗、径3mm以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰白	脚部は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、脚部は縮合端部が実る。透かしの間に脚部はそれぞれ2条の沈線を巡らす。环部は、ゆるやかに内凹しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。(本部下位内側面にそれぞれ1つ段をなす。本部下位外側面に2条の沈線を巡らす。	环部下方外側回転ヘラ削り、その他の内外面回転構ナダ、环部底部中央指ナダ	

第4表 南高野古墳出土須恵器観察表(2)

査定番号	地区 遺構	部位	器種	法 度 (cm)			胎 土	色 調	器形の特徴	成形・調整	その他 (輪郭など)
				口径	器高	底径					
10	G 3	M 2	2段三方透かし無蓋 高环	13.8	13.1	9.9	密、径7mm以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白	輪郭は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、底部は屈折し底部が尖る。透かしの間と底部にそれぞれ1条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、やや外傾する口縁を持つ。体部上位外側にそれぞれ1つ段をなす。体部中位外側に2条の沈線を造らす。	环部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナギ。环部底部中央指ナギ	
11	G 3	M 2	長脚2段三方透かし 無蓋高环	12.2	17.4	10.8	密、径5mm以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白、黒	輪郭は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、底部はやや下方に小さく屈折。透かしの間に2条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、口縁端部は外反する。口縁端部(生地)に段を造る。体部中位に2条の沈線とその下に刺突窓を造らす。	环部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナギ。环部底部中央指ナギ	
12	G 2	M 2	2段三方透かし無蓋 高环	17.2	17.0	11.6	やや密、径5mm以下の白色粒を多く含む、砂粒を含む	灰	輪郭は長脚二段三方透かして、ラッパ状に開き、底部は屈折し底部が尖る。透かしの間に1条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。体部中位外側に3条の沈線と刺突窓を造らす。	环部底部内面指ナギ、环部口縁部内外面回転横ナギ。环部底部外表面回転ヘラ削り。脚部内側面回転横ナギ	环部底部内面ヘラ削り
13	G 3	M 2	1段三方透かし無蓋 高环	12.5	11.7	10.6	やや密	灰	輪郭は長脚一段三方透かして、ラッパ状に開き、底部は屈折し底部が尖る。輪郭中位にカキ目を残す。环部は、ゆるやかに内窓して体部中位から口縁部にかけて外彎する。端部は水平に彎曲する。体部中位外側に刺突窓を造らす。	环部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナギ。环部底部中央指ナギ	
14	G 3	M 2	1段三方透かし無蓋 高环	12.3	11.85	10.6	やや粗、径3mm以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰白	輪郭は長脚一段三方透かして、ラッパ状に開き、底部は屈折し底部が尖る。輪郭中位にカキ目を残す。环部は、ゆるやかに内窓して体部中位で屈曲して外に開く。端部は直立する。(体部中位外側に刺突窓を造る。)	环部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナギ。环部底部中央指ナギ	
15	G 3	M 2	無蓋高环	14.7	13.05	11.7	やや密、径2~3mm以下の砂粒、白色粒を多量に含む	灰	輪郭はラッパ状に開き、底部は屈折し端部は丸く接地する。輪郭中位に2条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、わずかに外反する口縁を持つ。体部中位外側面に2条の沈線を造らす。	环部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転横ナギ。环部底部中央指ナギ	
16	G 3	M 2	無蓋高环	10.0	11.4	8.1	やや密、径4mm以下の砂粒を多く含む、白色粒を含む	灰黄、黒	輪郭はラッパ状に開き、底部は屈折し端部が尖る。輪郭中位に2条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、直立する口縁を持つ。体部中位外側面に2条の沈線を造らす。	环部底部内面指ナギ、环部口縁部内外面回転横ナギ。环部底部外表面回転ヘラ削り。脚部内外面回転横ナギ	
17	G 3	M 2	無蓋高环	10.75	11.85	8.2	やや粗、径1mm以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰白	輪郭はラッパ状に開き、底部は屈折し端部が尖る。輪郭中位に2条の沈線を造らす。环部は、ゆるやかに内窓しながら立ち上がり、やや外反する口縁を持つ。体部中位外側面に2条の沈線を造らす。	环部→脚部内外面回転横ナギ。环部底部内面中央指ナギ	
18	S 3	46	無蓋高环			10.9	やや粗、径1mm以上の砂粒、白色粒を多く含む	灰	輪郭はラッパ状に開き、中位に2条の沈線を造らす。輪郭上位に明顯な3つの段を有す。底部は少し内側に屈折し端部は尖る。	脚部内外面回転横ナギ	脚部片

第5表 南高野古墳出土須恵器観察表(3)

神國 名号	地区 遺構	柄位	器種	法量(cm)			胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他 (釉薬など)
				口径	器高	底径					
19	S 2	M 1	長脚2段二方透かし 有蓋高环	12.35	17.4	15.4	やや密、径6mm以下 の砂粒を含む	灰黄	脚部は長脚2段三方透かしで、ラッパ状に開き、底部は、直立して尖る。透かしの間に2条、下段下に1条の 化粧を運らす。環部は、丸みを持つ底部から強く内縮し ながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に窪く出 る。立上がり部は低く内傾し端部を丸くおさめる。	環部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転模ナデ。環部底部中央指ナデ	
20	S 1	M 1	長脚2段二方透かし 有蓋高环	13.05	17.1	16.45	密、径1mm以下 の白色粒を含む	灰白～褐灰	脚部は長脚2段三方透かしで透かしの位置が上段と下段 で逆である。ラッパ状に開き、底部は直立して尖る。 透かしの間に2条の化粧を運らす。下段下に明瞭な 1つの段を有す。環部は、丸みを持つ底部から強く内縮し ながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に窪く出 る。立上がり部は低く内傾し端部を丸くおさめる。	環部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転模ナデ。環部底部中央指ナデ	
21	S 2	M 1	長脚2段二方透かし 有蓋高环	12.2	17.25	14.9	密	暗オリーブ、 灰白	脚部は長脚2段三方透かしで、ラッパ状に開き。底部は、直立して尖る。透かしの間に2条、下段下に1条の 化粧を運らす。環部は、丸みを持つ底部から強く内縮し ながら受部に至る。受部は、浅く、斜め上方に窪く出 る。立上がり部は低く内傾し端部を丸くおさめる。	環部下方外表面回転ヘラ削り。その他の内外面回転模ナデ。環部底部中央指ナデ	
22	G 1	M 2	蓋	13.9	4.6		密、径2mm以下 の砂粒、白色粒を含 む	灰白	扁平なまみを持つ。天井部は緩やかに内窪し、口縁部 はやや内窪して外方に開く。天井部と口縁部の境に棱を有す。口縁端部はやや尖る。	天井部中位回転ヘラ削り。天井部下 位～口縁部内外面回転模ナデ。天井 部内部指オサエ・模ナデ	
23	S 2	M 1	蓋	14.6	4.7		やや密	灰白	扁平なまみを持つ。天井部は直線的に下り、口縁部は やや内窪して外方に開く。天井部と口縁部の境に棱を有す。口縁端部は尖る。	天井部中位回転ヘラ削り。天井部下 位～口縁部内外面回転模ナデ。天井 部内部指オサエ・模ナデ	19とセット
24	G 3	M 2	蓋	10.9	5.8		密	オリーブ灰、 灰白	中央が大きななまみを持つ。天井部は緩やかに内窪し、 口縁部は垂直に下がる。天井部と口縁部の境には明 瞭な段を有す。口縁端部は丸くおさめる。	口縁部～天井部外面・つまみ回転 模ナデ。天井部内部中央指ナデ	26とセット
25	G 3	M 2	長脚2段三方透かし 脚付短脚壺	8.4	22.45	12.6	密、径4mm以下 の砂粒を含む	黒、灰白、に ぶい堆、灰黄	脚部は長脚2段三方透かしで、ラッパ状に開き、底部は、小さく屈折して端部を丸くおさめる。透かしの間に 2条の化粧を運らす。体部は丸みを帯びて立上がり、肩 部で内窪する。肩部中央に2条の化粧を運らせ、その間 に刻文をめぐらす。口縁部は直立し端部を丸くおさめ る。口縁部上位内面に緩やかな段を持つ。	口縁部～脚部内外面回転模ナデ。体 部底部内部指ナデ	
26	G 3	M 2	長脚2段三方透かし 脚付短脚壺	8.3	21.6	12.75	密	オリーブ灰、 灰白	脚部は長脚2段三方透かしで、ラッパ状に開き、底部は、直立して尖る。透かしの間に2条の化粧を運らす。 体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で内窪する。肩部中央に2条の化粧を運らせ、その間に刻文をめぐらす。口縁部は直立し端部を丸くおさめる。口縁部上位内面に緩やかな段を持つ。	脚部～脚部内外面回転模ナデ。体 部外面下位回転ヘラ削り。体部底部 内部指ナデ	
27	G 3	M 2	脚付短脚壺	9.75	29.6	14.25	密	灰、オリーブ 灰、暗オリーブ 灰	体部は丸みを帯びて立上がり、肩部で屈曲して口部に至る。肩部に2条の刻文を運らせ、その間に2条の化 粧を運らす。口縫部はやや外方に立上がり口縫部に至 る。口縫部中に2条の化粧を運らす。口縫端部は丸く おさめる。	体部下位～体部脚部回転ヘラ削り。 体部上部～口縫部内外面回転模ナデ。 脚部外面回転模ナデ。口縫部～体 部上位回転模ナデ。体部底部内部指 ナデ	

第6表 南高野古墳出土須恵器観察表(4)

調査番号	地区 遺構	所位	器種	法 呈 (cm)			胎 土	色 調	器 形 の 特 徴	成 形 ・ 調 整	その他の (輪郭など)	
				口縁	器高	底径						
28	G 1	M 1	鳥形つまみ付蓋		7.5		密	灰白、灰黄灰、暗黒灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現し、嘴は円錐状の形を呈すか。先端部は欠損している。嘴の上下に輪郭を持つ。唇と鼻孔は、棒状工具で削り突く。胴体側面に輪状工具による刺突文を施し、複数個を表現している。蓋部部はやや丸みを帯びて下り、返りは外反気味に内傾して長く下がる。	天井部上位外面回転へら削り。天井部下位へ口縫部外表面回転模ナダ。口縫部へ天井部内面回転模ナダ。天井部内面中央指ナダ	水鳥の一種	
29	G 3	M 2	鳥形つまみ付蓋				密	灰白、灰黄灰、暗黒灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現し、嘴は横に扁平な形を呈す。目と竹管状工具で削り突く。孔は、竹管状工具で削る。胴体部はかけて竹管状工具による円形の刺突文と棒状工具による刺突文を施し、別の輪郭を表現している。尾は横に扁平な形を呈す。蓋部部はやや丸みを帯びて下り、返りは内傾して長く下がる。	天井部上位外面回転へら削り。天井部下位へ口縫部外表面回転模ナダ。口縫部へ天井部内面回転模ナダ。天井部内面中央指ナダ	鶴の一種	
30	G 3	M 2	脚付長雞壺	10.4	29.3	14.6	密、径 6 mm 以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰~黒	台形は三段三方透かして、外反して開き、台部中位で輪曲して下りる。台部下位には3つの段がある。底部は丸や外輪で輪部を丸くおさめる。(本部は丸みを帯びて立上り立)がり、脚部で輪曲して輪部に至る。底部中位と前部にそれぞれ2~3条の沈線を這らす。輪部は直立てて立上り立がり、中位から外反して口は底部に生る。口縫部は内側に輪曲して輪部を丸くおさめる。	体部下位へ体部山形回転へら削り。(体部外腹下面脚印き目)。体部上部へ口縫部外表面回転模ナダ。脚部内外面回転模ナダ。口縫部へ体部内面回転模ナダ。(本部底部内面指ナダ)		
31	G 3	M 2	長脚2段三方透かし脚付短雞壺	9.1	29.1	17.3	浅	オリーブ灰、灰色	脚部は長脚で、二段三方透かして、ラバ~状に開き、輪部は、内側で輪部は尖る。渦かしの間と下段下子それぞれ2条の沈線を這らす。口縫部に1条に刻突文を施す。(本部は口縫部内に丸みを帯びて立ち上がり口縫部に至る)。中位に1条の沈線を施す。脚部に1条の沈線と1条の刺突文、1条の羽状突起を施す。輪部から底部外表面にカク目を施す。口縫部は内側で輪部を水平におさめる。	口縫部へ脚部内面回転模ナダ。体部外下面脚印き目。体部底部内面指ナダ		
32	G 3	M 2	提籠		7.2	21.4		密	オリーブ黒	口縫部は外上方に外反して開き、口縫部はやや内寄してのびる。輪部は丸くおさめる。口縫部上位に2条1組の沈線を這らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、輪部は円弧状に盛り出すか中央部はやや扁平である。輪部に横状耳がつく。	体部背面回転へら削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口縫部回転模ナダ	
33	G 2	M 2	提籠		7.45	22.1	密、径 2 mm 以下の砂粒、白色粒を含む	黒	口縫部は外上方に外反して開き、口縫部はやや内寄してのびる。輪部は丸くおさめる。口縫部上位に2条1組の沈線を這らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、輪部は円弧状に盛り出すか中央部はやや扁平である。輪部に横状耳がつく。	体部背面回転へら削り、中央指ナサエ。体部腹面カキ目調整。口縫部回転模ナダ	把手付き、大型	
34	G 2	M 2	提籠		7.45	19.3	密、径 1 mm 以下の砂粒を少加含む、白色粒を極少量含む	黒	口縫部は外上方に外反して開き、口縫部はやや内寄してのびる。輪部は丸くおさめる。口縫部上位に2条1組の沈線を這らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、輪部は円弧状に盛り出すか中央部はやや扁平である。輪部に横状耳がつく。	体部背面回転へら削り、中央指オサエ。体部腹面カキ目調整。口縫部回転模ナダ		
35	G 2	M 2	提籠		4.6	16.1	密	灰	口縫部は外上方に外反して開き、口縫部はやや内寄してのびる。輪部は丸くおさめる。口縫部上位に2条1組の沈線を這らす。体部はほぼ円形を呈す。体部背面は扁平で、輪部は円弧状に盛り出すか中央部はやや扁平である。輪部に横状耳がつく。	体部背面回転へら削り、中央指オサエ。(口縫部回転模ナダ)	把手付き、小型	

第7表 南野高古墳出土須恵器観察表(5)

種類 番号	地区 遺構	施位	器 種	法 條 (cm)			粘 土	色 調	器 形 の 特 徴	成 形・調 整	その他の (鉢底など)
				口径	器高	底径					
36	G 1	M 2	罐瓶	8.5	20.3		密、径4mm以下の砂粒を含む	灰~灰白、灰、浅黄、灰黄	口縁部は外方に外反して開き、口縁部はやや内凹してのびる。腹部は丸くおさめる。口縁部上位に2条1筋の沈線を巡らす。体部は横円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すか中央部はやや扁平である。肩部に慶状耳がつく。	体部背面回転へラ削り、中央指オサエ。体部腹面カ4筋調魚。口縁部回転構ナダ	
37	G 3	M 2	罐瓶	5.8	17.9		密、径5mm以下の砂粒を含む	灰白、灰、灰	口縁部は外方に外反して開き、口縁部はやや内凹してのびる。腹部は丸くおさめる。口縁部上位に2条1筋の沈線を巡らす。体部は横円形を呈す。体部背面は扁平で、腹面は円弧状に張り出すか中央部はやや扁平である。肩部に慶状耳がつく。	体部背・腹面回転へラ削り、中央指オサエ。口縁部回転構ナダ	
38	G 2	M 2	罐瓶	9.5	21.5		密	暗赤褐色、にぶい赤褐色、灰白色	口縁部は上方に伸びた後、外反して口縁部に至る。口縁部は側に研削し端部は丸くおさめる。深部直下に棱を巡らす。口縁部に片口縁の押さえと棒状工具による2所の透かし孔を施す。口縁部に上から板状工具による斜位の透か線、3条の沈線。へラ状工具による斜位の透か線を呈す。体部は横円形を呈し、口縁部との境に段を有す。体部背面は扁平な圓弧状を呈し、腹面は円弧状にやや弱く張り出す。	体部腹面・背面回転へラ削り。口縁部回転構ナダ	把手なし、口縁部に2~3所孔有り
39	G 2	M 2	短頸壺	6.6	6.2	4.9	密	青灰	やや平坦な底部を持つ。体部下方が強く張り、底部で屈曲して口縁部に至る。口縁部は底立氣味に立ち上がる。口縫部は強く外反し、口縫部を水平におさめる。	底部~体部中位外面回転へラ削り。肩部~口縫部外面回転構ナダ。口縫部~体部内面回転構ナダ。底部内面指ナダ	
40	G 4	M 2	短頸壺	8.5	10.2		密、径2mm以下の砂粒、白色粒を含む	灰白~灰青褐色	横円形の底部を持ち、丸みを帯びて立ち上がる。体部下位と肩部で屈曲する。肩部に1条の沈線を巡らす。口縫部は外反氣味に開き口縫部に至る。口縫部は丸くおさめる。	底部~(体部中位外面回転へラ削り。その他の内外面回転構ナダ。底部内面指ナダ)	
41	G 1	M 2	短頸壺	9.25	11.55	5.3	密、径1mm程度の白色粒、難を含む	オリーブ灰	平坦な底部から斜め外方に立ち上がり、肩部で屈曲して口縫部に至る。肩部に2条の刺突文を巡らす。口縫部は直立し底部を丸くおさめる。	底部~(体部下位外面回転へラ削り。その他の内外面回転構ナダ。底部内面指ナダ)	
42	G 2	M 2	H	11.15	5.95		密	灰	横円形の底部を持つ。体部下位で屈曲して直立氣味に立ち上がり口縫部に至る。体部上位に1条の沈線を巡らす。口縫部は丸くおさめる。	底部~(体部下位外面回転へラ削り。体部上位~口縫部内外面回転構ナダ。底部内面指オサエ・ナダ)	マリカ?
43	G 1	M 2	長頸壺	7.4	13.85	7.45	密	暗灰~灰	平出な底部から丸みを帯びて立ち上がり肩部で屈曲して肩部に至る。肩部は斜め外方に開く。口縫部はやや内凹し、腹部はやや尖る。	底部へラ削り。体部下位~中位外面回転へラ削り。その他の内外面回転構ナダ	
44	G 3	M 2	長頸壺	8.45	20.0		密、径2mm以下の砂粒を含む	オリーブ灰、灰~灰白	やや丸みを帯びた底部から斜め外方に立ち上がり肩部で屈曲して肩部に至る。体部下位に2条の沈線を巡らす。肩部は直立して立ち上がりし、中位からやや外反氣味に開き口縫部に至る。肩部中位に1条の沈線を巡らす。口縫部は丸くおさめる。	底部~体部中位外面回転へラ削り。肩部へラ削り。体部内面回転構ナダ。底部内面指ナダ	
45	G 2	M 2	短頸壺	8.3	17.5	11.75	やや密	黒	やや丸みを帯びた底部から半円形に立ち上がり肩部に至る。肩部は外方に開く。口縫部は折り返し気味に肥厚し、腹部は水平におさめる。	底部~体部下位外面回転へラ削り。体部上位~口縫部外面回転構ナダ	

第8表 南高野古墳出土須恵器観察表(6)

編目 番号	地区 遺構	格位	器種	法量(cm)			胎土	色調	器形の特徴	成形・調査	その他 (釉薬など)
				口径	器高	底径					
46	G 1	M 2	瓶	8.8	10.2		密	灰	やや扁平な底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。肩部から全体部中位にかけて上から縦状工具による刺突文、2条1組の沈線、縦状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立てて立ち上がり、上位で外反する。口縁部は脣部との境で引出し外反気味に開く。頸部上位で縦状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部中位外側回転ヘラ削り。体部上位～口縁部外面回転横ナギ。口縁部(袖)～頸部(口)袖上位回転横ナギ	
47	G 3	M 2	瓶	11.15	13.95		密、径6mm以下の白色粒、砂粒を含む	灰白	扁平な底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。肩部から全体部中位にかけて上から縦状工具による刺突文、2条1組の沈線、縦状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立てて立ち上がり、上位で外反する。口縁部は脣部との境で引出し外反気味に開く。頸部上位で縦状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～体部下位外側ヘラ削り。(本部中位～口縁部外面回転横ナギ。口縁部～頸部内面回転横ナギ)	
48	G 3	M 2	瓶	11.4	14		密	灰白	扁平な底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。肩部から全体部中位にかけて上から縦状工具による刺突文、2条1組の沈線、縦状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部は直立てて立ち上がり、上位で外反する。口縁部は脣部との境で引出し外反気味に開く。頸部上位で縦状工具による刺突文と2条の沈線を巡らす。	底部～(本部下位外側ヘラ削り。(本部中位～口縁部外面回転横ナギ。口縁部～頸部内面回転横ナギ)	
49	G 3	M 2	瓶	13.2	16.4		極密、径1mm以下の砂粒、白色粒をわざかに含む	黒	丸みのある底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出される。頸部中位から中位に縦位のV字状工具による直線文を巡らす。	底部外側ヘラ削り。体部外側直線文横ナギ。口縁部～頸部内面回転横ナギ	
50	G 2	M 2	瓶	12.3	15.5		密	灰	丸みのある底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。その謂をV字状工具による直線文を施す。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出される。頸部中位に2条1組の沈線を巡らす。	底部～体部下位外側ヘラ削り。(本部中位～口縁部外面回転横ナギ。口縁部～頸部内面回転横ナギ)	
51	G 3	M 2	瓶	12.1	15.6		密、径1mm以下の砂粒、白色粒を含む	黒褐色～黒	丸みのある底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出される。頸部中位に2条1組の沈線を巡らす。	底部～体部下位外側ヘラ削り。体部中位～口縁部外面回転横ナギ。口縁部～頸部内面回転横ナギ	
52	G 3	M 2	瓶	16.3	20.2		密、径3mm以下の砂粒を多く含む。白色粒を含む	黒	丸みのある底部、やや扁平な縁唇を持つ。肩部下に穿孔。口の上下にそれぞれ1条の沈線を巡らす。その謂をV字状工具による直線文を施す。頸部は外反しながら開き、口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出される。頸部中位に上から2条1組の沈線、縦状工具による刺突文、1条の沈線を巡らす。頸部上位と口縁部外側に縦位のV字状文を巡らす。	口縁部～体部下位内外側回転横ナギ。底部外側回転ヘラ削り	

第9表 南高野古墳出土須恵器観察表(7)

神奈 番号	地区 遺構	房位	器種	法 量(cm)			胎 土	色 調	器形の特徴	成形・調整	その他 (釉薬など)	
				口径	器高	底径						
53	G 3	M 2	瓶		14.2	16.0	密、径2mm以下の砂粒、黒色粒を含む	黒、灰~灰白	丸みのある底部、やや扁平な輪郭を持つ。両部下に穿孔。底の上部にそれぞれ2条の弦文を施す。その間をV字状工具による刻突文を施す。腹部は外方へ開き、ながら開口。口縁部は長く外傾する。頸部との境は下方へ小さく引き出す。頸部中位に2条の沈線を施す。	底部~体部下位外面へう削り。体部中位~口縁部外面回転横ナギ。口縁部~頸部内面回転横ナギ		
54	S 2	46	环蓋		11.4	3.9		緻密、白粒を含む	灰	椭円弧を描く天井部を持ち、口縁部は直立する。口縁部は、わずかに内窓しめる。	天井部外面上位へう削り。天井部中位~口縁部内外面回転横ナギ。天井部内面回転横ナギ	
55	G 3	M 2	鳥形つまみ付蓋		11	7.1		やや粗	灰	鳥形つまみを持つ。つまみの鳥形は翼を閉じた状態を表現している。頭部は丸く、目や嘴等の細部の表現はない。鳥とつまみの台座部が別々に作られ接合されている。蓋体部は丸いやや内窓しめる。口縁部から垂直に下がる。体部と口縁部の境には明瞭な棱を施す。口縁部はやや内窓氣味に下がり、底部を丸くおさめる。	口縁部~天井部外面上位回転横ナギ。天井部内面中央指ナギ	
56	G 3	M 2	环蓋		11.8	4.56	やや密、径1mm以下の白色粒を多量に含む	灰	やや扁平な天井部を持ち、口縁部は垂直に下りる。端部は丸くおさめる。	天井部外面上位へう削り。天井部中位~口縁部内外面回転横ナギ。天井部内面回転横ナギ		
57	G 4	M 2	环蓋		11.95	4		密	平坦な天井部を持ち、口縁部は垂直に下りる。端部内面は内傾しめる。	天井部外面上位へう削り。天井部中位~口縁部内外面回転横ナギ。天井部内面回転横ナギ		
58	G 3	M 2	子持蓋		6.7	9.4	やや粗、径3mm以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰	ハック形のつまみを持つ。つまみの体部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲する。中位に上から施されたV字による刻突文を施す。つまみ頭部は外反して立ち上がる。頸部中位に輪状工具による刻突文を施す。頸部と口縁部の境に棱を有し、口縁部は外方に開き底部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に明瞭な段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナギ、蓋底部内面へう削り		
59	G 3	M 2	子持蓋		6.0	9.85	やや粗、径2mm以下の砂粒、白色粒を含む	灰	ハック形のつまみを持つ。つまみの体部は直線的に立ち上がり、頸部で屈曲する。中位に上から施されたV字による刻突文を施す。つまみ頭部は外反して立ち上がる。頸部中位に輪状工具による刻突文を施す。口縁部は内窓氣味に外方に開き底部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に明瞭な段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナギ、蓋底部内面へう削り		
60	G 3	M 2	子持蓋				やや粗、径2mm以下の砂粒、白色粒を含む	灰~灰白	ハック形のつまみを持つ。つまみの口縁部は欠損。つまみの体部は扁平な錐形を呈し、中位に輪状工具による刻突文を施す。つまみ頭部は直立して立ち上がる。頸部と蓋体部の境に棱を有する。蓋体部はややかな丸みを帯びて下がる。返りはやや内窓氣味に長く下がり、端部は丸い。	つまみ・返り内外面回転横ナギ、蓋底部内面へう削り		

第10表 南高野古墳出土須恵器観察表(8)

博物 番号	地区 遺構	施位	器種	法 量(cm)			胎 土	色 調	器形の特徴	成形・調製	その他 (軸部など)
				口径	器高	底径					
61	G 3	M 2	子持蓋	8.4	10.6		やや粗、底5mm以下の砂粒、白色粒を多く含む	灰	ハツク形のつまみを持つ。つまみの体部は垂直に立上がり、頭部で頭曲する。中位に上から椭状工具による刺突文、1条の芯線、椭状工具による刺突文を造る。つまみ頭部はゆるやかに外反気味に立上がる。頭部と口縁部の境に横を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がる。返りはやや外反気味に内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面へラ削り	
62	G 3	M 2	子持蓋	8.1	10.8		やや粗	灰～灰白	ハツク形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球形を呈し、中位に椭状工具による刺突文を造る。つまみ頭部は直立して立上がる。頭部と口縁部の境に横を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りは垂直に長く下がり、端部は丸い。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面へラ削り	
63	G 3	M 2	子持蓋	7.95	12.0		やや粗、底1mm以下の砂粒、白色粒を多く含む	明褐色～灰	ハツク形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球形を呈し、中位に上から椭状工具による刺突文、2条1組の芯線、椭状工具による刺突文を造る。つまみ頭部はやや外反気味に立上がる。頭部中位に椭状工具による刺突文を造る。頭部と口縁部の境に横を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を丸くおさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面へラ削り	
64	G 1	M 2	子持蓋	7.55	11.2		やや粗、浮1mm～2mmのE1砂粒を含む	灰	ハツク形のつまみを持つ。つまみの体部は扁平な球形を呈し、中位に上から椭状工具による刺突文、2条1組の芯線、椭状工具による刺突文を造る。つまみ頭部は直立して立上がる。頭部と口縁部の境に横を有し口縁部は外方に開き端部を丸くおさめる。蓋体部は直線的に下がり、中位に段を有す。返りはやや内傾して長く下がり、端部を水平におさめる。	つまみ・返り内外面回転横ナデ、蓋底部内面へラ削り	
65	G 3	M 2	平瓶	16.35	14.7		密	灰白	やや平坦な底部から半円状に立上がり口縁部に至る。体部下位から底部にカキ目を施す。口縁部は外方に開き、中位でやや内反気味になって口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	底部～体部外面側面へラ削り、体部上位～口縁部外側面回転横ナデ	
66	G 1	M 1	平瓶	6.05	13.35		密、底5mm以下の砂粒を含む	灰褐色～灰白	比較的平滑な底部を持ち、体部は梢円形を呈す。体部上半分にカキ目を施す。口縁部は斜め外方に開き口縁部に至る。口縁部中位に1条の芯線を造る。口縁端部は丸くおさめる。胴部上位に2cm弱の円形粘土塊を1個貼り付ける。	底部～体部下位外面回転へラ削り、体部上位～口縁部外側面回転横ナデ	
67	S 1	M 1	平瓶		11.5	5.7	密	灰白	半球形底部から梢円状に立上がり口縁部に至る。体部の脇部に刺突文を造る。口縁部は直立して立上がり、中位からやや外反する。	底部～体部外面側面へラ削り、体部上位～口縁部外側面回転横ナデ	口縁部を人為的に打ちいたし痕を残す。
68	G 9	IV	直口縁部				密	灰白	天井部は斜め外方に開き、やや縮折した時に口縁部に至る。口縁部は縮折し直後に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	
69	G 9	IV	蓋口縁部				密	灰白	天井部は斜め外方に開き、口縁部は直面して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転横ナデ	

第11表 南高野古墳出土須恵器観察表(9)

編號 番号	地区 遺構	部位	器種	法 質 (cm)			胎 土	色 調	器 形 の 特 徴	成 形・調 整	その他の (釉薬など)
				口径	器高	底径					
70	G 9	IV	蓋口縁部片				衝	灰白	天井部は斜め外方に開き、口縁部は扭曲して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転模ナダ	
71	H 9	VII	高環脚部片				密	暗オリーブ 灰、灰白	脚部下辺はラッパ状に開き、裾部との境に棱を有す。裾部はやや内弯気味に屈曲し、端部は純く尖る。	脚部内外面回転模ナダ	
72	G 9	IV	蓋口縁部片				密	浅黄	天井部は斜め外方に開き、口縁部は扭曲して垂直に下がる。体部は丸くおさめる。	内外面回転模ナダ	
73	G 9	IV	輪口縁部片				やや粗	明青灰	体部上辺より内弯して立上がり口縁部に至る。口縁端部は丸くおさめる。	体部内外面回転模ナダ	
74	G 4	M 2	子持蓋口縁部片	6.4			やや粗	灰	頸部以下欠損。口縁部は外方にやや内弯気味に開き、端部を丸くおさめる。	口縁部内外面回転模ナダ	
75	G 3	M 2	子持蓋口縁部片	7.3			やや粗	灰白	頸部以下欠損。頸部は直立て立上がり、口縁部は外方に開き中位に不明瞭な段を有す。端部は丸くおさめる。	口縁部内外面回転模ナダ	
76	S 6	25	蓋頂部片つまみ付き				やや粗	オリーブ灰	つまみは強張りに凹み、中心部はやや尖る。天井部は丸みを帯びて外下方に向く。口縁部欠損。	内外面回転模ナダ	
77	S 3	35	蓋頂部片つまみ付き				密、径2mm以下の 砂粒、長石を含む	青灰、灰	天井部はやや丸みを帯びて下がる。口縁部欠損。つまみは袋飾り・まみの台部で裝飾部は欠損。	天井部外面回転模ナダ、内面模ナダ	
78	G 3	M 1	蓋口縁部片	12			やや密	灰	天井部欠損。天井部と口縁部の境に明瞭な棱を有す。口縁部はやや内弯気味に外傾して下がる。端部はわずかに外方へ屈折し丸くおさめる。	口縁部内外面回転模ナダ	
79	G 10	II	环口縁部片	13.5			密	緑灰	天井部上位を欠損。天井部下位は丸みをもって下る。天井部と口縁部の境には沈縮状の段を有す。口縁部は外傾して下がり、端部は外方につまみ出して尖る。端部内面に明瞭な段を有す。	天井部左回転ヘラ削り1/2、口縁部内外面・天井部下位回転模ナダ	
80	G 9	VII	环身	12	3.8	4.2	密	灰白	やや凹みのある底部からゆるやかに内弯して受部に至る。受部を斜め上方に短く出る。立上がり部は内傾し端部が純く尖る。	底部外面回転ヘラ削り、中央は指ナダ。[本部～口縁部内外面回転模ナダ。底部内面指ナダ]	
81	G 11	II	高環脚部片	14.25	5.18		やや粗、径7mm以 下の砂粒、白色粒 を含む	灰白	环部の底部はやや丸みを帯びて立上がり、体部中位で屈曲し極端的に立上がり口縁部に至る。(本部中位に2条の沈線を有す)。口縁端部は丸くおさめる。	环部下位外面回転ヘラ削り、その他の内外面回転模ナダ	

第12表 南高野古墳出土須恵器観察表(10)

編號 番号	地区 遺構	部位	器種	法量(cm)			胎土	色調	器形の特徴	成形・調飾	その他 (特徴など)
				口径	器高	底径					
82	G11	II	縦	8.6	10.0		やや粗、底3mm以下の砂粒、白色粒を含む	灰黄、灰	やや扁平な底部、やや扁平な接脚を持つ。口部下に穿孔。口縫から腹部中位にかけて上から縦状1列による刻文又、2条1列の丸線を巡らす。口縫部は直立して立て上がり、上位で外反する。口縫部は腹部との境で屈曲し外反気味に開く。頸部上位に縦状工具による刻文又と2条の沈線を巡らす。	底部～体部中位外側回転ヘラ削り。体部上位～口縫部外側回転横ナデ。口縫部内面～頸部内縫上位回転横ナデ	
83	G 9	IV	短縦造	4.5	11.05	3.4	密	灰	やや扁平な底部から上方方にのび肩部で屈曲して口頸部に至る。口縫部はやや内凹気味に垂直にのび口縫端部を丸くおさめる。	体部～口縫部回転横ナデ、体部下部～底部へラ削り後ナデ	
84	H10	IV	脚付壺口縫部片	9.2			やや密	灰、灰白	頸部はやや丸く上がり、口縫部はやや内凹気味に立ち上がる。口縫端部はやや外方に屈折して底部を水平におさめる。	内外面回転横ナデ	
85			脚付壺口縫部片				密	灰～墨、灰黄	腹部に長方形の透かし孔を2段持ち、その間に2条の沈線を巡らす。	腹部内面へラ削り・横ナデ、外面横ナデ	
86	H10	IV	脚付壺口縫部片				やや粗	灰白	腹部中位に長方形の透かし孔を有す。その上下に2条1列の沈線を巡らす。腹部は外下方に開き、口縫部は屈折して垂直に下かる。底部は直取りされ水平におさめる。	内外面回転横ナデ	95と同じ個体
87	S 5	46	高台付环身	14.3	3.6	10.1	織密、白粒を含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縫端部はとがる。高台は断面四角形で垂直に下がり、接地面はやや丸い。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縫部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
88	S 5	46	高台付环身	14.0	3.9	11.2	密、白粒・黒斑を少し含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縫端部はとがる。高台は断面四角形で外側はやや丸みを帯び、内面は内凹する。端部は外側で接着する。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縫部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
89	S 5	46	高台付环身	14.2	3.65	10.9	密、白粒・黒斑を少し含む	灰白	底部は扁平で斜め上方に立ち上がる。口縫端部はとがる。高台は断面四角形でやや外傾して下かる。	底部外面回転ヘラ削り、体部～口縫部内外面回転横ナデ、底部内面指ナデ	
90	I 11	V1	脚付壺部片	17.0			やや粗、底2mm以下の長石をわずかに含む	灰白	口縫部片で、垂直に立て上がり、底部は水平におさめる。内面に1条の沈線を施す。	内外面回転横ナデ	
91	S 5	46	脚付壺体部片				やや粗	灰	底部及び頸部を欠損。底部より半円状に立て上がり。肩部は屈曲する。肩部から腹部下位に2条2種の沈線が巡り、その間に刻文が巡る。	底部へラ削り後横ナデ、体部外面回転横ナデ、内面指ナデ	
92	G 4	M 2	鳥形装饰片		5.65		密	灰	鳥形装饰片。足部は壺との接合面で剥離しており、大部分の表面に接着されている。内部には隨意のように扁平にならざるところから、内面を剥離せしと思われる。目は棒状工具による骨突で表現されている。鼻孔は非常に鋭い工具で刺突されている。両部は円錐状に丸くおさめる。頭から腹部の断面は各々、頸部下部から底にかけて膨らむ。底は横に扁平なまみ出しで削いでいる。	手づくねによる成形	

第13表 南高野古墳出土須恵器観察表(11)

番号 系号	地区 遺構	施設	器種	寸法 (cm)			胎土	色調	器形の特徴	成形・調整	その他 (釉薬など)
				口径	器高	底径					
93	G 3	M 2	鳥形装飾つまみ片		3.35		密	灰	嘴を閉じた鳥形装飾片。足の部分はつまみ台部に接合すると思われるが下部を欠損。首と鼻孔は竹管状工具による刺突によって素夷されている。羽の模様などの施はみられない。嘴の部分は欠損。【そは横に扁平におさめる。】	手づくねによる成形	
94	G 9	VII	動物装飾片		5.95		密	灰	動物装飾片。足は1本で刺離面が水平に近いことから、窓台など大型土器の窓的な部分に接合されていたと思われる。大きく外反する足(片方欠損)が付けられ、頭は竹管状工具による刺突で表現されている。口はヘラ切りによって横に大きく開けた様子を表現している。頭部にぐらりと羽根は細く、尾は粘土を絞り込んで引き出されている。先端部は欠損する。		
95	G 9	IV	大型器台口縁部片				密、径2.5mm以下の砂粒、長石、雲母を含む	灰、灰黄褐色	天井部はやや丸みを持ち、(体部との境に刺離痕あり。天井部に装飾片等の刺離痕がみられる。(体部は下方に下かる。)	天井部外面・体部外側削りナダ、天井部・体部内面へラ削り	
95	H 11		器台小窓底部片				やや粗、0.5mm以下の白土を多く含む	灰	小窓状の底部。接合用の粘土棒を窓台部に底部に貼り付ける。	底部内面回転ナダ、中央は指オサエ	
96	G 10	II	大型器台口縁部片				密、径3mm以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰	天井部はやや丸みを持ち、体部との境に窓状の粘土帯を廻らす。天井部に装飾片等の刺離痕がみられる。(体部は下方に下かる。)	天井部外面・体部外側削りナダ、天井部・体部内面へラ削り	
98	G 9	IV	大型器台口縁部片				密、径3mm以下の砂粒を含む、長石、石英、雲母を含む	青灰、褐灰	天井部端平、体部との境に斜め外方に粘土を引き出す。装飾片などの刺離痕あり。体部はやや内傾して下かる。	天井部外面・体部外側削りナダ、天井部・体部内面へラ削り	
99			大型器台口縁部片				粗	暗緑灰～緑灰	天井部はやや丸みを持ち、体部との境に窓状の粘土帯を廻らす。天井部に装飾片等の刺離痕がみられる。体部は下方に下かる。梢円形の透かし孔を有す。	内面へラ削り、外面横ナダ	
100	I 12	II	大型器台脚部片				密、径2mm以下の砂粒を含む、長石を多く含む	灰オリーブ	体部片でやや内寄気味に内傾して下かる。2条1組の沈線と梢円形の透かし孔を有す。	体部内面へラ削り。外面横ナダ	
101	G 9	VIII	大型器台脚部片				密、径2mm以下の砂粒を多額に含む、長石を含む	青灰、灰黄褐色	体部片で、直面に下かる。1条の沈線を廻らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナダ	
102	H 11	IV	大型器台脚部片				密、径2mm以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰黄褐色	体部片で、外下方に広がる。2条沈線を廻らせ、梢円形の透かし孔有り。	体部外側削位のへラ削り。内面横ナダ	
103	I 11		大型器台脚部片				密、径2mm以下の砂粒を含む、長石を多く含む	青灰、灰	体部片でやや内寄気味に内傾して下かる。2条1組の沈線と梢円形の透かし孔を有す。	体部内面へラ削り。外面横ナダ	

第14表 南高野古墳出土須恵器観察表(12)

標識 番号	地区	層位	器種	寸 法 量 (cm)			胎 上	色 調	器形の特徴	成形・調整	その他 (釉薬など)
				口径	器高	底径					
104	H11	V1	大型器台軸部片				密、長石を多く含む	灰白	体部片で、外下方にやや開く。2条1組の沈線を2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
104	I11	V1	大型器台軸部片				密、長石を多く含む	灰白	体部片で、外下方にやや開く。2条1組の沈線を2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
105	G11	II	大型器台軸部片				密、径5mm以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰黄褐色	体部片で、外下方に広がる。2条沈線を巡らせ、梢円形の透かし孔有り。	体部外面縦位のヘラ削り。内面横ナデ	
106	G9	IV	大型器台軸部片				密、径5mm以下の砂粒、長石、雲母を含む	灰、暗青灰	体部片で、直角に下がる。2条1組の沈線が2ヶ所に巡らす。長方形の透かし孔有り。	体部内外面横ナデ	
107	H11	V	大型器台軸部片				密、径3mm以下の砂粒を含む。長石を少許含む	灰白、灰黃褐色、灰黃	脚部の軸部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
108	I112	II	大型器台軸部片				密、径6mm以下の砂粒、長石を含む	暗滑灰、灰、灰黃褐色	脚部の軸部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
109	I112	II	大型器台軸部片				密、径4mm以下の砂粒、長石、石英を含む	青灰、灰黄褐色	脚部の軸部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
110	I11	III	大型器台軸部片				密、径2mm以下の砂粒を含む	青灰、灰黄褐色	脚部の軸部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は尖る。	内外面横ナデ	
111	H11		大型器台軸部片				密、径2mm以下の砂粒、長石を含む	青灰、灰	脚部の軸部片で、外下方に下がり口縁部は外に屈曲したのち垂直に下がる。端部は丸くおさめる。	内外面横ナデ	
112	H11	II	覆軸部片				密	オリーブ灰	軸部片、丸みを帯びて立ち上がる。	体部内面渦巻き文当て具窓、体部外面規格子タタキ目文後カキ目調査	
113	H11	II	覆軸部片				密	暗灰~黒	軸部片、やや丸みを帯びて立ち上がる。	体部内面渦巻き文当て具窓、体部外面規格子タタキ目文後カキ目調査	

第15表 耳環計測表

種別番号	地区	層位	長径	短径	断面径	重量	備考
114	G 4	M 1	3.06	1.97	0.55	13.7	銅芯金板張り、内側に加工痕
115	G 4	M 2	3.22	1.80	0.71	16.5	銅芯銀板張り、内側に研磨痕
116	G 4	M 2	2.89	1.75	0.57	6.9	銅芯銀板張り、内側に加工痕、一部欠損
117	G 2	M 2	3.82	1.89	0.96	9.7	中空銅板巻、鏡全、銅板接合部有り
118	G 2	M 2	3.75	1.94	0.91	10.6	中空銅板巻、鏡全、銅板接合部有り

第16表 鉄鎌計測表

単位cm ( )は残存値

種別番号	種別	地区	層位	全長	頭分厚	頭部(座高部)	基部	形状	備考
135	頭部	G 1	M 2	(17.8)	3.2	0.9	9.1	反S	頭部削除、銅皮一部残存
136	頭部	G 1	M 2	(16.2)	2.9	0.8	9.5	0.6	(3.8) 銅頭形
137	頭部	G 1	M 2	20.4	3.6	0.9	9.4	0.6	7.4 銅頭形
138	頭部	G 1	M 2	(17.2)	2.7	0.8	9.8	0.6	(4.7) 銅頭形
139	頭部	G 1	M 2	20.4	3.4	0.9	9.0	0.6	8.0 銅頭形
140	頭部	G 1	M 2	19.6	3.4	1.00	9.0	0.6	7.3 銅頭形
141	頭部	G 1	M 2	(14.8)	3.3	0.9	9.3	0.6	(2.3) 銅頭形
142	頭部	G 1	M 2	(15.3)	3.3	0.9	8.6	0.6	(3.6) 銅頭形
143	頭部	G 1	M 2	(19.1)	3.2	0.9	9.2	0.6	6.8 銅頭形
144	頭部	G 1	M 2	20.8	3.4	0.9	9.4	0.7	8.0 銅頭形
145	頭部	G 1	M 2	20.8	3.3	0.8	9.2	0.6	8.4 銅頭形
146	頭部	G 1	M 2	22.7	3.2	0.8	9.2	0.6	10.31 銅頭形
147	頭部	G 1	M 2	20.2	3.3	0.8	8.9	0.6	8.0 銅頭形
148	頭部	G 1	M 2	(16.9)	3.1	0.9	9.3	0.5	(4.2) 銅頭形
149	頭部	G 1	M 2	(16.7)	2.32	0.9	9.1	0.6	(3.3) 銅頭形
150	頭部	G 1	M 2	(12.1)	3.1	0.8	8.5	0.6	(1.6) 銅頭形
151	頭部	G 1	M 2	19.9	3.4	0.9	9.3	0.7	7.2 銅頭形
152	頭部	G 1	M 2	(15.9)	3.0	1.2	6.5	0.7	(4.8) 銅頭形
153	頭部	G 1	M 2	(11.4)	3.0	1.2	6.5	0.7	(1.9) 銅頭形
154	頭部	G 1	M 2	20.3	3.3	0.8	9.1	0.5	7.9 銅頭形
155	頭部	G 1	M 2	(16.8)	3.6	0.9	9.1	0.6	(6.1) 銅頭形
156	頭部	G 1	M 2	20.7	3.4	0.9	9.8	0.6	7.6 銅頭形
157	頭部	G 1	M 2	(16.0)	3.4	0.8	9.0	0.6	(5.7) 銅頭形
158	頭部	G 2	M 2	(12.7)	2.37	0.7	5.6	0.4	5.4 銅頭形
159	頭部	G 1	M 2	(18.3)	2.9	0.9	8.3	0.6	(7.1) 銅頭形
160	頭部	G 1	M 2	20.9	3.2	0.9	9.3	0.6	8.5 銅頭形
161	頭部	G 1	M 2	(17.6)	3.4	1.0	8.9	0.6	(5.3) 銅頭形
162	頭部	G 1	M 2	21.6	3.1	0.9	9.7	0.7	8.8 銅頭形
163	頭部	G 1	M 2	(17.0)	3.2	0.9	9.6	0.5	(4.1) 銅頭形
164	頭部	G 1	M 2	21.4	3.2	0.9	11.0	0.7	7.2 銅頭形
165	頭部	G 1	M 2	(17.2)	3.3	1.0	9.0	0.6	(4.9) 銅頭形
166	頭部	G 1	M 2	(18.1)	2.8	1.0	7.9	0.7	(7.4) 銅頭形
167	頭部	G 1	M 2	(18.9)	3.3	0.8	9.1	0.6	(6.5) 銅頭形
168	頭部	G 1	M 2	(15.0)	3.5	0.9	7.8	0.6	(3.7) 銅頭形
169	頭部	G 1	M 2	(16.9)	—	—	(4.20)	0.5	(6.13) 銅頭形
170	頭部	G 1	M 2	(6.0)	—	—	—	—	(6.02) 銅頭形
171	頭部	—	—	(4.7)	2.8	(0.8)	(1.90)	(0.4)	— (2.7) 銅頭形
172	頭部	G 1	M 2	(3.3)	—	(3.3)	(0.6)	—	— (2.0) 銅頭形
173	耳環	—	—	(8.9)	(2.7)	2.5	2.6	0.6	3.7 (7.5) 三角形 銅頭 無頭

身先端ノリ、矢柄木質残存、銅皮一部残存

第17表 太刀・刀子計測表

桿図番号	種別	地区	部位	全長(cm)	刃 部		茎 部		重量(g)	備 考
					長さ(cm)	最大幅(cm)	長さ(cm)	最大幅(cm)		
174	太刀	—	—	87.0	—	—	—	—	667	
181	刀子	G 4	M 2	(9.40)	(5.35)	1.59	(4.05)	2.08	23.9	
182	太刀	—	—	(7.70)	—	—	(7.70)	1.44	14.1	太刀の柄部
183	刀子	G 2	M 2	(9.55)	(9.55)	1.97	—	—	19.9	
184	刀子	G 3	M 1	(8.47)	(2.92)	1.20	(5.55)	1.10	17.9	
185	刀子	G 3	M 2	(6.59)	(6.59)	1.22	—	—	8.5	

第18表 鉄製品計測表

桿図番号	種別	地区	部位	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
175	锷	G 2	M 2	6.83	5.99	0.4	45.9	
176	锷	—	—	7.30	3.54	0.37	59.5	
177	锷	—	—	(5.73)	(4.27)	0.3	10.2	
178	鍔	G 2	M 2	(3.8)	3.2	1.9	33.3	
179	鍔	S 2	—	4.45	3.56	1.96	20.4	
180	鍔	G 1	M 2	3.96	—	1.56	9.8	
186	太刀	G 2	M 2	—	—	0.65	2.9	太刀の足金物か

第19表 鉄釘計測表

桿図番号	種別	地区	部位	残存長(cm)	幅(cm)	残存重量(g)	備 考
187	鉄釘	G 1	M 2	(2.4)	0.4	2.2	木棺の鉄釘か、木質残存
188	鉄釘			(1.65)	0.4	0.8	
189	鉄釘	G 1	M 2	(2.6)	0.65	2.8	木棺の鉄釘か、木質残存
190	鉄釘	G 2	M 2	(2.98)	0.64	5.6	木棺の鉄釘か、木質残存
191	鉄釘			(2.95)	0.45	1.7	
192	鉄釘			(2.21)	0.75	2.3	木棺の鉄釘か、木質残存

# 二ノ井遺跡

## 第5章 二ノ井遺跡の調査

### 第1節 A地区の遺構と遺物

#### A地区の概観

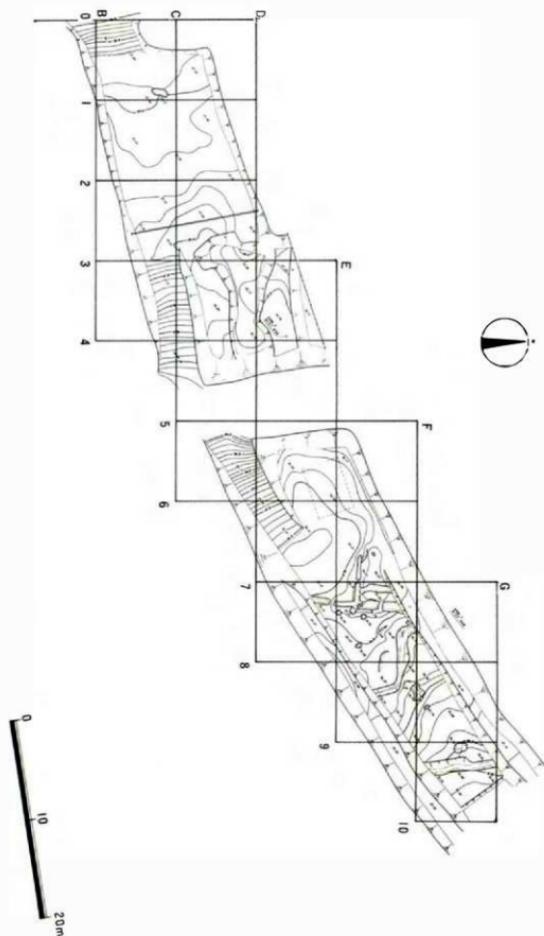
断面観察と検出した遺構からA地区（E 5～G 9区）の概観を述べる。A地区の現地表面は標高29m前後で、耕作土の下に厚さ約2mの砂疊層が堆積している。重機により砂疊層を除去したところ、暗褐色土が検出され、数本の溝状プランが検出された。これらのプランはB地区にも同様にみられ、当該調査区全体を覆う砂疊層の下にみられる近世の旧耕作面ととらえ今回の調査では調査対象から外した。以下、旧耕作面より下から検出した遺構の概要を述べる。

A地区の東端からは、溝状遺構（SD11）を検出した。SD11は、二ノ井遺跡の東に位置する南高野古墳の周溝であることが確認できた。周溝は調査区本層序の第V層より掘り込まれていた。周溝より西7m地点で、調査区全体で確認されているV層が突然無くなってしまい、おそらく古墳築造のために盛土として削られたと考えられる。そのため、古墳築造当時の地表面は基本層序の第V層（標高26m前後）であったと思われる。V層の上にIV層が堆積し、その上にしまりのゆるい土（以下、堆積層と呼ぶ）が不定定な状態で堆積している。F 5区で検出したSD16Bを挟むようにE 4～G 7区にかけては、下からIVb→IVa→IVbと層位が逆転する場所を確認することができた。その層は標高26.5m前後ではほぼ水平になっている。このことから、この層位の逆転はSD16Bの掘削によるものと思われ、SD16B掘削時に同時にSD16B周辺の整地が行われたと考えられる。その目的が開田のためなのか、廻敷等の整地のためなのかは不明である。またSD16Bの下位にはSD16が存在する。SD16については後述するが、SD11と同様に第V層より掘り込まれており、その掘削時期が古墳築造時期に当たり、盛土用の土採取と周辺との区画の両方を意識した溝の可能性も指摘できる。

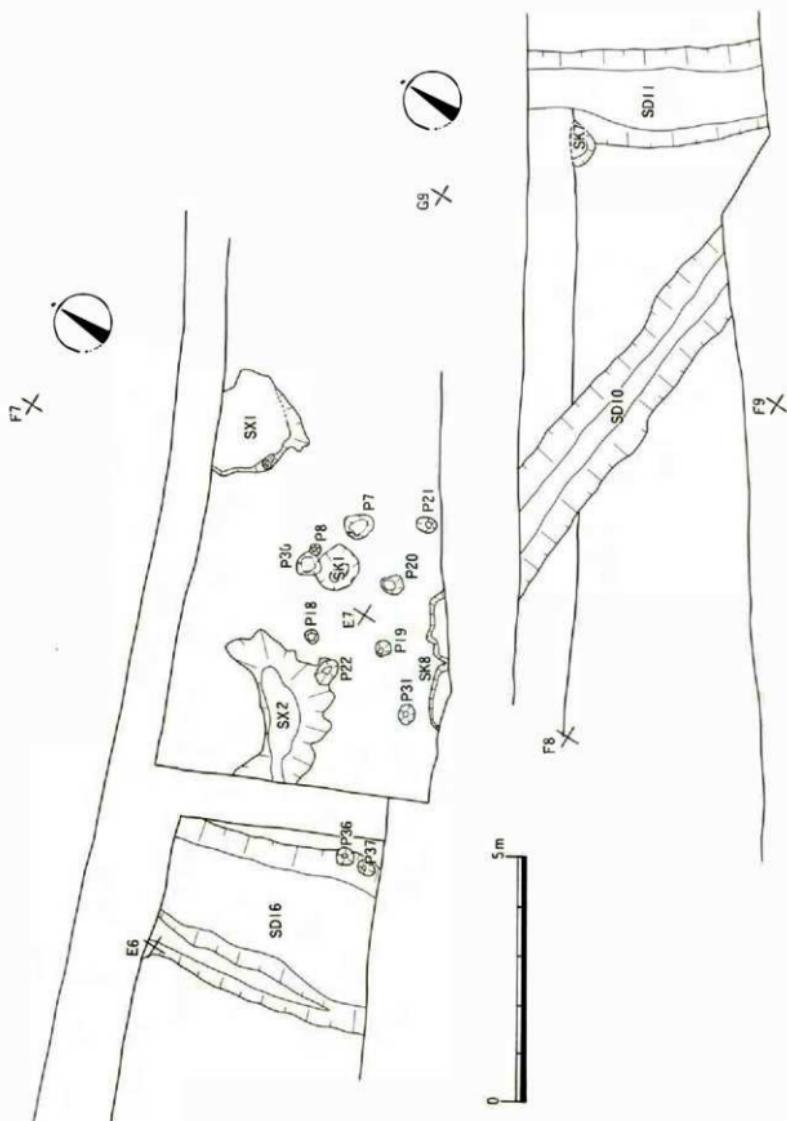
A地区からは、土坑3基（SK 1・7・8）、溝2条（SD 10・16）、土坑状遺構2基（SX 1・2）、ピット（P）9基（P 7・8、P 18～22、P 30・31）を検出した。以下、主な遺構と出土遺物の説明をする。



写真 A地区遺構検出状況（北より）



第10図 二ノ井遺跡地形測量図・グリッド状況図 (1/400)



第41図 二ノ井遺跡A地区遺構配置図 (1/100)

## SK1

SK1は、F6・7区に位置する。プランは標高26.45mの整地層で確認した。長軸0.93m、短軸0.83m、深さ0.4mを測り、平面形は、梢円形を呈す。開田等に伴う整地層より掘り込まれている。埋土には挙大前後の礫を数点含む。

出土遺物は、土師器2点、山茶碗1点、土師器皿12点が出土した。その内土師器皿2点と土師器壺を実測した。

土師器皿（第73図506・514）<sup>1)</sup>

506・514は、土師器皿B類に属し、底部から体部外面に指圧痕がみられ、体部内面は横ナデ調整がされている。506は、底部と体部外面の境に横ナデが1条施される。

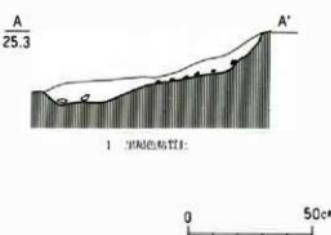
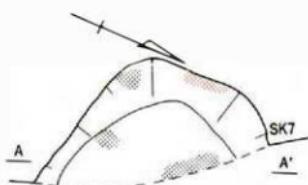
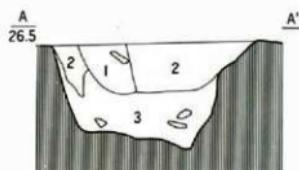
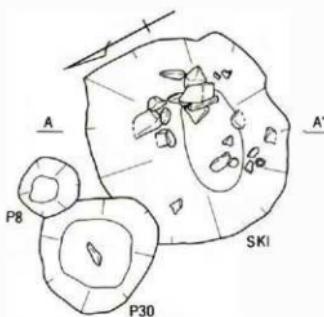
## 土師器（第67図378）

378は、土師器の壺の口縁部片で、口縁部から体部内外面にハケメ調整が施され、頸部外面には指圧痕が認められる。口縁端部はつまみ上げるような形状を呈し、外面に煤が付着する。器形の特徴から奈良期の丸底壺と思われる。出土遺物より、中世墓の可能性も考えられる。SK1の周辺からは数基のピット群を検出したが、それらとの関連は不明である。

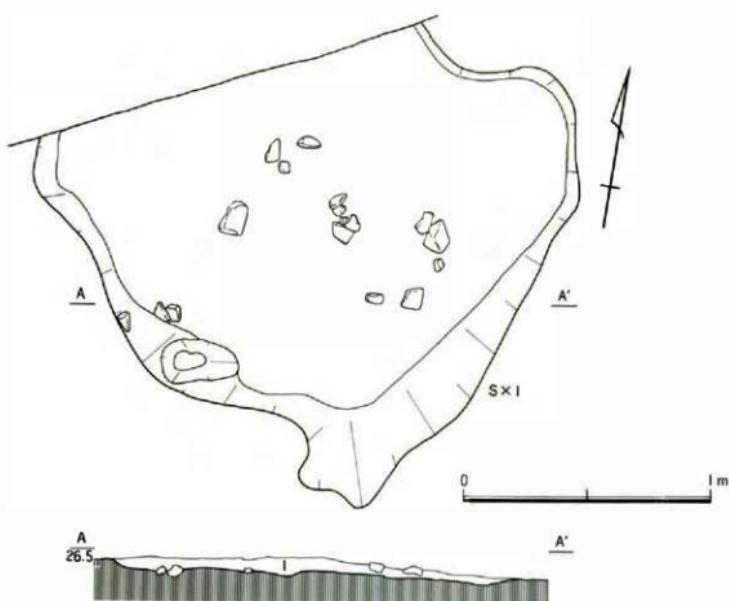
1) 土師器皿の分類は、池田町教育委員会 1997「六之井深池遺跡発掘調査報告書」を参考にした。

## SK7

SK7はG9区に位置する。プランは標高25.3mのVI層直上で確認した。SD11を切るように出土したが、断面観察用のトレンチにより約半分しか確認できなかった。残存する遺構は、長軸0.95m、短軸0.51m、深さ0.10mを測る。平面形は梢円形を呈していたと考えられる。底部からは焼土と炭化物を確認した。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については不明である。



第42図 SK1+7実測図(1/20)



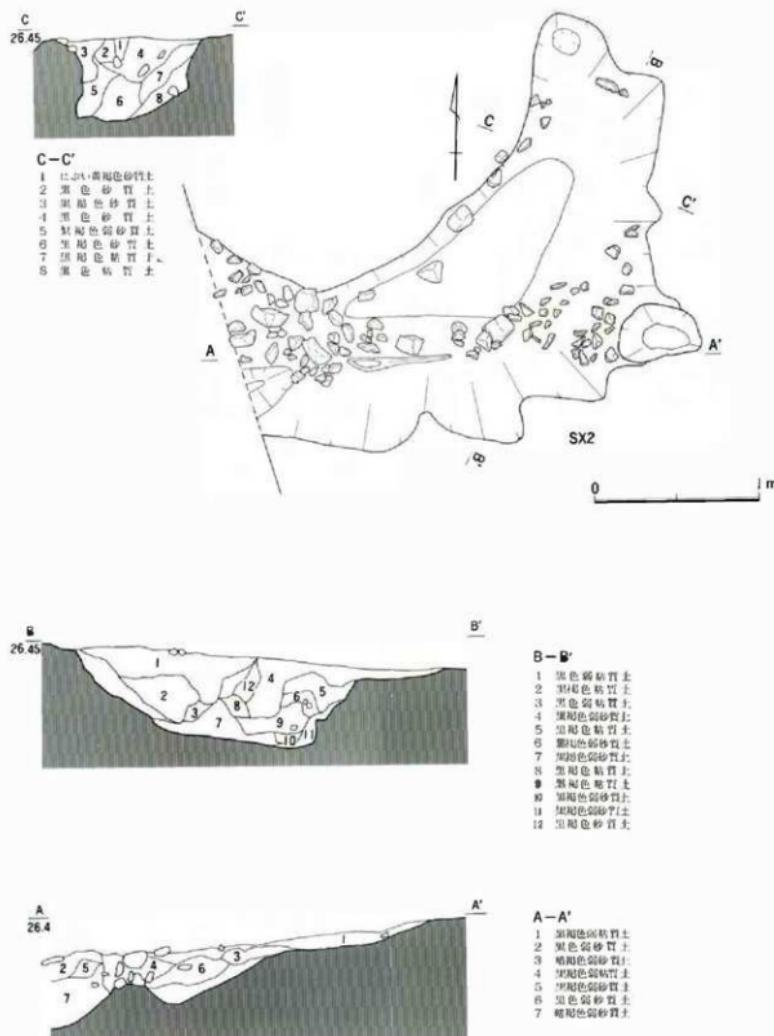
第43図 S X 1実測図(1/20)

### S X 1

S X 1は、F 7区に位置する。プランは標高26.3~26.5mの整地層で確認した。断面観察用トレーナーにより約4分の1が削られているが、残存する遺構は、長軸2.22m、短軸1.71m、深さ0.07mを測り、平面形は四角形を呈していたと考えられる。底部にはわずかに焼土らしき土を確認した。一見堅穴状遺構に思われるが、建物の存在を示す柱穴痕等を確認することはできなかった。出土遺物は、弥生土器・土師器13点、山茶碗1点が出土した。

### S X 2

S X 2は、E 6~F 6区に位置する。プランは標高26.2~26.4mの整地層で確認した。長軸3.28m、短軸1.47m、深さ0.54mを測る。平面形は三日月形を呈す。短軸方向の断面はV字状を呈し、挙大前後の礫が多く入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については不明である。



第44図 SX2 実測図 (1/30)

## SD 10

SD 10は、G 8～G 9区に位置する。プランは標高26.2mの堆積層で確認した。調査区を横切るように西から東へ伸びる。方位は、N—101°—Eである。検出した溝の長さは7.22m、最大幅1.54m、深さ0.78mを測る。断面形状は逆台形を呈す。埋土は砂礫層と砂層が交互に堆積し、用水などの流路と思われる。出土遺物は、縦文土器1点、弥生土器・土師器17点、須恵器8点、瓦2点、山茶鏡5点、土師器皿1点が出土した。その内須恵器1点と瓦1点（第69図388）を実測した。

## 須恵器（第70図402）

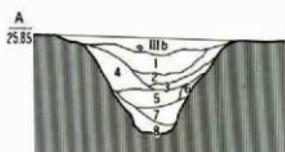
402は、須恵器の环身B類の底部片である。底部内面は平滑である。高台は端部がやや押ししつぶれ、底部外而中央が接地する。

## 瓦（第69図388）

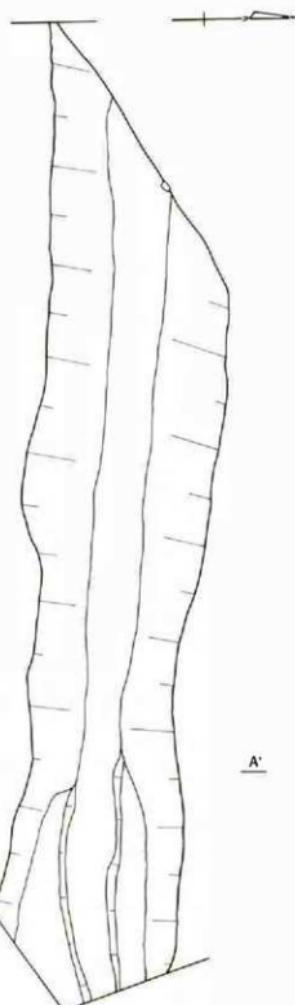
388は、平瓦の端部片である。凸面は格子目叩き調整が施される。焼成は硬質である。

## SD 11

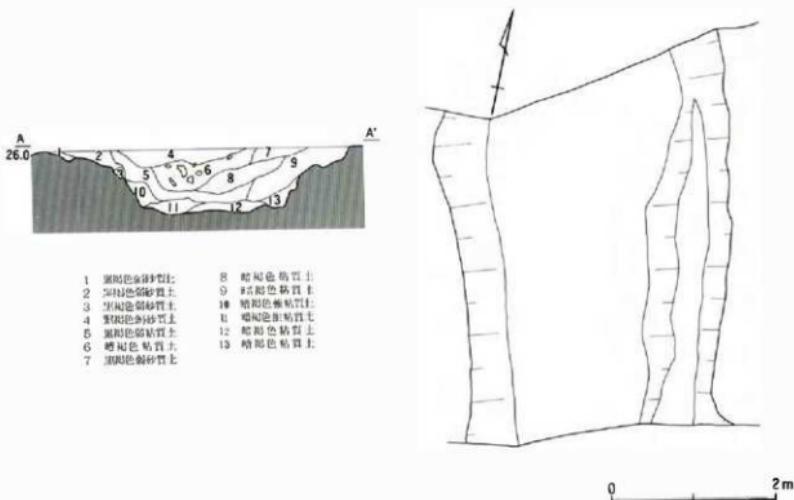
SD 11は、G 9区に位置する。南高野古墳の周溝であることから、詳細は南高野古墳の章に譲る。



- |          |          |
|----------|----------|
| 1 暗褐色砂質土 | 5 暗褐色砂質土 |
| 2 暗褐色粘質土 | 6 暗褐色粘質土 |
| 3 黒褐色粘質土 | 7 黑褐色粘質土 |
| 4 暗褐色砂質土 | 8 暗褐色粘質土 |



第45図 SD 10実測図(1/40)



第46図 SD 16実測図 (1/60)

## SD 16

SD 16は、F 5～E 6区に位置する。プランは標高25.7～25.9mのV型層で確認した。調査区を北西から南東に横切るように伸びる。方位は、N-14°-Wである。検出した溝の長さは4.85m、最幅3.64m、深さ0.81mを測る。断面の形状は逆台形を呈す。埋土の上位は弱砂質性の黒褐色土で、下位は粘性の強い暗褐色土が堆積している。堆積状況から絶えず水が流れた状態を想像することは困難で、むしろ水路ではない空堀のような状況が伺える。この埋土の堆積状況からもSD 16が利水を目的とした溝ではなく、何らかの区画を意図して作出されたものであると思われる。

出土遺物は、須恵器1点がM2（黒褐色弱砂質土）より出土し、それを実測した。

## 須恵器（第70圖407）

407は、須恵器の施片である。頸部までの残存高が6.1cmと小型の施である。体部中位に1条の沈線を施し、底部外面は回転ヘラ削り調整されている。器形の特徴から陶邑編年II-6～III-1段階（TK 209～217）に併行すると思われる。

- SD 16は、SD 16の上位に位置し、断面観察によって遺構の存在を確認したが平面では掘削作業の進行上確認することができなかった。断面での最大幅は6.5m、深さ1.3mである。SD 16Bのさらに上位にSD 16Cがあるが、この溝は基壇より掘り込まれていることから、中世後半以降の溝と思われる。遺物は出土していない。

## 第2節 B地区の遺構と遺物

### (1) B地区の概観

B地区はC 0～E 4区までの範囲を指す。B地区は、標高28.5～29.0mの地表面から下に厚さ約1mの砂礫層が堆積している。その下に近世初頭と思われる水田面(Ⅱ層)があり、その下のⅢ層・Ⅳ層中より遺構・遺物を検出した。遺構面は、標高27.2～27.4m前後の面と標高26.8～27.0m前後の面の2面を検出した。上位の遺構面を第1次遺構面、下位の遺構面を第2次遺構面とする。

第1次遺構面はⅢ層を切るように検出した。但し、B地区的層序が不安定な部分も多く、全ての遺構がⅢ層を切る状況を呈しているとは限らない。検出した遺構は、溝状遺構(SD 1～7・9・13～15)11条、土坑(SK 2～6)5基、ピット群(P 1～5、9～16、23～29、38)21基である。

第2次遺構面は、Ⅳ層及びV層を切るように検出した。検出した遺構は、溝状遺構(SD 17)1条、土坑(SK 9・11～13)4基、ピット群(P 39～73)34基である。

以下、主な遺構について述べる。

### (2) 第1次遺構面の主な遺構と遺物

#### SK 2

SK 2は、C 1区に位置する。プランは標高27.3mのⅢa層で確認した。長軸0.64m、短軸0.63m、深さ0.27mを測る。平面形は橢円形を呈す。埋土は、1層でつまりのゆるい暗褐色砂質土が入り、¢ 1mm前後の炭化物が多く含む。上位には¢ 20～50mm前後の砂礫も含む。土師器皿片が多量に入ることから中世墓の可能性も指摘できる。

本遺構からは、弥生土器・土師器7点、須恵器3点、灰釉陶器1点、山茶碗44点、土師器皿85点、中近世陶器1点の計151点が出土した。その内7点(灰釉陶器1点、山茶碗3点、土師器皿3点)を実測した。

#### 灰釉陶器(第71図420)

420は、段皿である。体部内面にやや不明瞭な段を有す。口縁端部内外面がわずかに施釉されている。体部は外上方にのび、口縁端部は尖り気味である。

#### 山茶碗(第72図485・495・498)

485は、碗の底部片である。高台の形状は台形で、外面はやや丸みを帯びて直立し、内面は外傾する。端部に划痕痕がみられる。495・498は、碗の口縁部片である。495は、口縁端部に面取りがされ

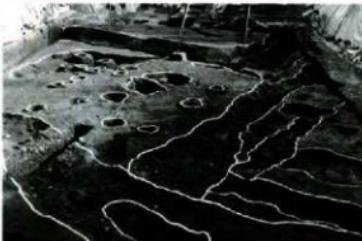
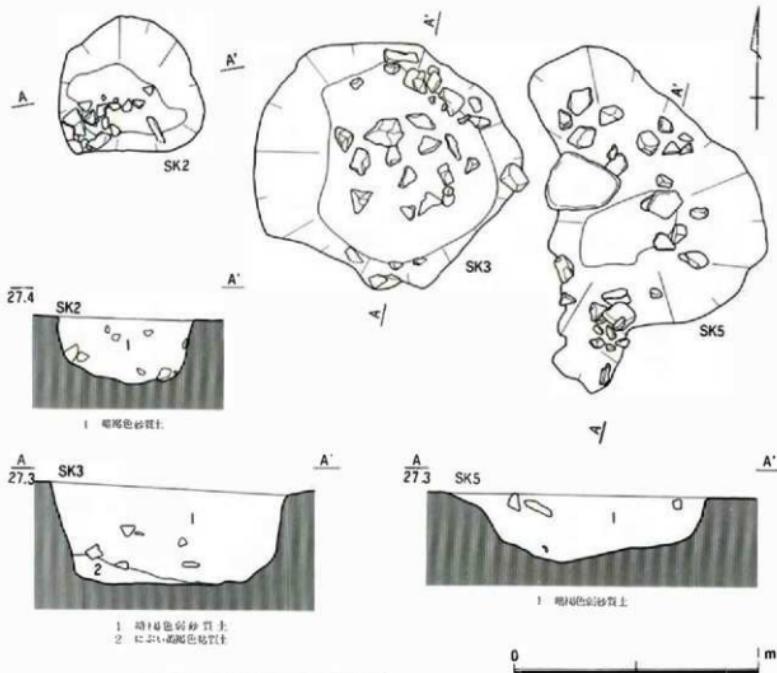


写真 B地区第1次遺構面検出状況（西より）



写真 B地区第1次遺構面検出状況（東より）



第47図 SK 2・3・5 実測図(1/20)

ている。498は、口縁がやや外反する。

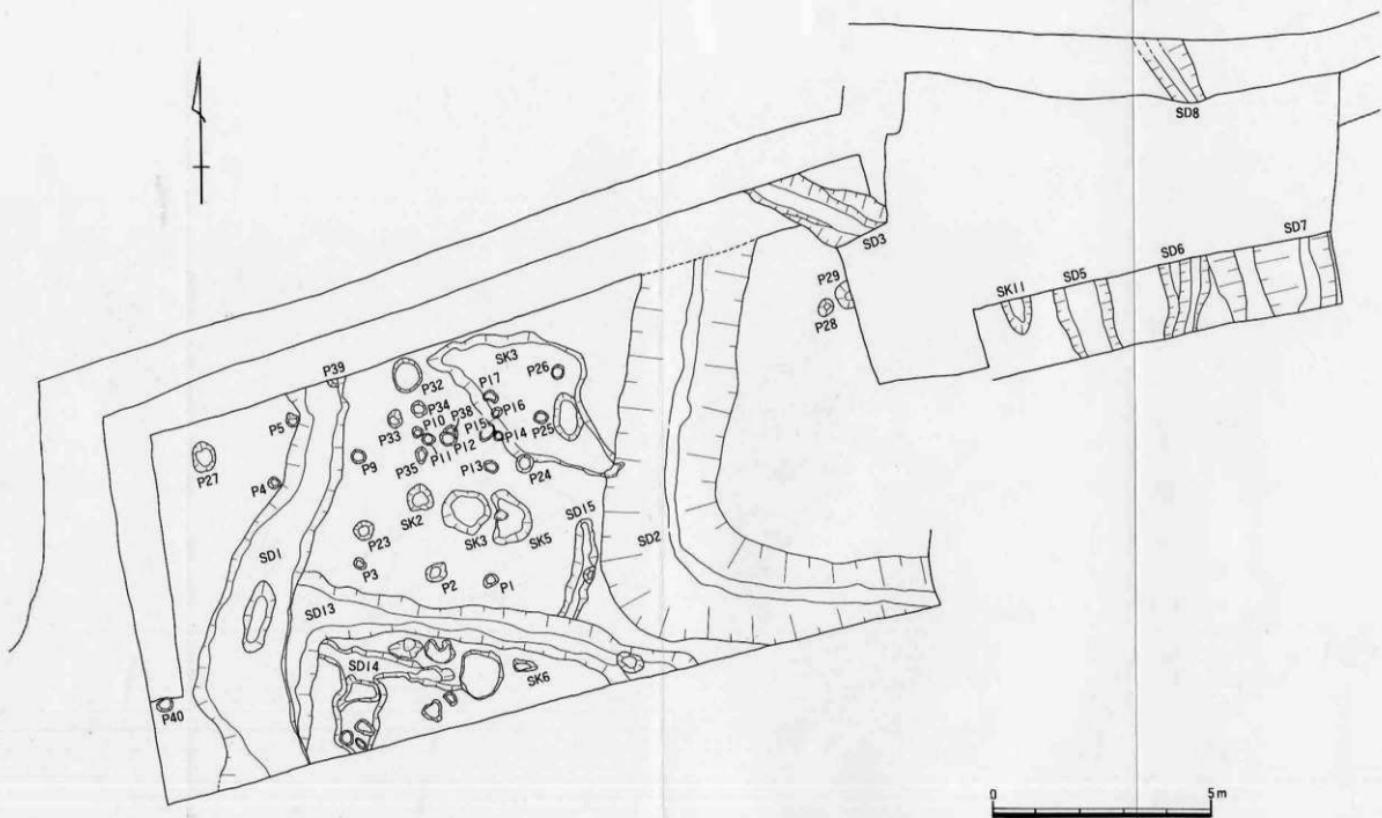
#### 土師器皿（第73図 504・508・509）

504は、土師器皿A類に属し、体部に段を有す。底部外面に指圧痕がみられる。508・509は、B類に属し、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部には明瞭な段を有す。口縁付近に煤が付着している。508は、体部から口縁内面に横ナデ調整がされている。509は、底部基厚が非常に薄く、口縁端部は肥厚する。

#### SK 3

SK 3は、C1区に位置する。プランは標高27.2m前後のⅢa層で確認した。長軸1.10m、短軸1.08m、深さ0.1mを測る。平面形は円形を呈す。埋土は、2層に分層でき、しまりのゆるい暗褐色弱砂質土とその下にぶい黄褐色弱砂質土が入る。暗褐色土中にはSK 2と同様にc 1mm前後の炭化物とc 20~50mmの砂礫を多く含む。また、土師器皿片が多量に入ることから中世墓の可能性も指摘できる。

本遺構からは、弥生土器・土壙器44点、須恵器14点、瓦1点、灰釉陶器7点、山茶碗24点、土師器



第48図 B地区第1次造縫面配置図(1/100)

皿123点、陶器2点の計202点が出土した。その内、3点（弥生土器・土師器2点、土師器皿1点）を実測した。

#### 弥生土器・土師器（第64図320・第67図377）

320は、土師器の高環である。口縁部内面に14条の沈線が施されている。口縁部外面はていねいなミガキ調整になっている。377は、土師器の甕である。口縁部から体部外表面にハケメ調整がなされており、時期は奈良時代と思われる。

#### 土師器皿（第73図505）

505は、土師器皿A類に属し、体部に明瞭な段を有す。外面に指圧痕がみられ、口縁部外表面には煤が付着する。

#### SK5

SK5は、C1区に位置する。プランは標高27.2m前後のIIIa層で確認した。長軸1.44m、短軸0.89m、深さ0.56mを測る。平面形は円形を呈す。埋土は、1層でしまりのややゆるい暗褐色粘土質土が入る。暗褐色土中にはSK2と同様に $\pm 1\text{mm}$ 前後の炭化物と $\pm 20\sim 50\text{mm}$ の砂礫が多く含む。本遺構の性格は、SK3とすぐ隣に位置することから中世墓の可能性も考えられるが、出土遺物の残存状況が良くないため不明である。本遺構の上位には扁平な四角形の礫があるが、本遺構との関連については不明である。本遺構からは、繩文土器8点、弥生土器・土師器44点、山茶碗2点、土師器皿1点、の計55点が出土した。

#### SK6

SK6は、C1区に位置する。プランは標高27.2~27.3mで確認した。周辺の土層ははっきりしない。規模は、長軸2.34m、短軸2.10m、深さ0.28mを測る。平面形は梢円形を呈し、断面形は四角形である。埋土はしまりのかなりゆるい暗褐色粘土質土が入る。底部に拳大の礫を検出し、精査を行ったところ最下部から古銭11枚と土師器皿が出土した。古銭は5枚と6枚の二つに分かれており、一方には古銭を通す縦維がわずかに付着していた。5枚の古銭と6枚の古銭が元来同一になっていたかは不明である。また、土師器皿が出土した付近から白い粘土状の土が検出されたが、骨の風化したものであるかは分からぬ。

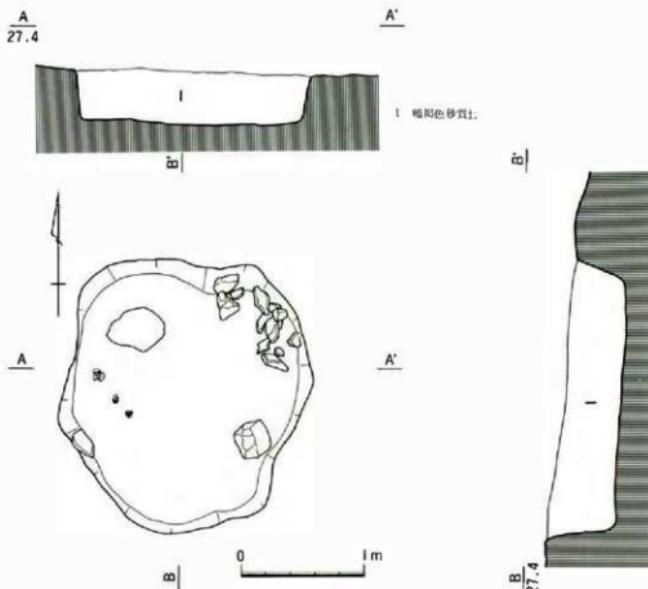
本遺跡からは、弥生・土師器2点、山茶碗5点、土師器皿9点、磁器1点、古銭11点の計28点が出土した。その内12点（土師器皿1点、古銭11点）を実測した。

#### 土師器皿（第73図501）

501は、土師器皿A類に属し、底部から体部外表面に指圧痕がみられる。体部から口縁内部には継ナメ調整がされている。器形の特徴から15世紀後半の時期と思われる。



写真 SK6 遺物出土状況（西より）



第49図 SK 6 実測図 (1/40)

## 古銭（第74図 539～549）

古銭の内訳は次のようにある。539～543は、開元通寶である。開元通寶の鉄造は数回行われているため明確な鉄造時期を特定することはできないが、最終の時期は南唐の960年である。外径は2.45 cmではほぼ等しいが、542はわずかに小さい。内径は0.6～0.65ではほぼ等しい。544は、祥符元寶である。北宋、1009年の鉄造である。545は、元祐通寶である。北宋、1086年の鉄造である。546は、聖宋元寶である。北宋、1101年の鉄造である。547・548は、永樂通寶である。明、1408年の鉄造である。549は、宣德通寶である。明、1433年の鉄造である。

古銭の鉄造年代にはかなりの時期差がみられるが、最終の549（宣德通寶）の時期から考えて、SK 6は、15世紀後半以降の中世墓と考えられる。

## SD 1

SD 1は、D 1～C 0区に位置し、調査区を南北に横切る。方位は、N-16°-Eである。プランは標高27.2～27.5mのⅢa層で検出した。検出した溝の長さは8.85m、最大幅2.15m、深さ0.35mを測る。溝は北から4.5m付近でくの字状に東に曲がる。南から2m付近の溝の中央には非常に固い黄褐色土があり、溝が二股に分かれる可能性も考えられたが、明確なプランを確認することはできなかったため、1条の溝と判断した。溝には大量の人頭大以上の礫と遺物が出土した。礫の検出状況から人為的な配置を確認することはできなかった。くの字状に折れ曲がる部分の溝の底部には、四角く閉ったような石が数個検出されたが、遺物は含まれておらず、溝との関連は不明である。

本遺跡からは、繩文土器58点、弥生・土師器230点、須恵器21点、縁袖陶器1点、瓦1点、灰釉陶器11点、山茶碗70点、土師器皿105点、磁器3点、陶器15点の合計515点が出土した。その内14点（弥生・土師器7点、須恵器2点、縁袖陶器1点、山茶碗1点、土師器皿1点、磁器1点、陶器1点）を実測した。

弥生・土師器（第64図324・327、第65図339・340、第66図348・349、第67図370）

324は、器台片である。脚部に円形の透かし孔を有す。体部から脚部の外面はハケメ調整後ミガキ調整がされている。体部内面はミガキ調整で、脚部内面は板ナデ調整されている。器形の特徴から廻間期と思われる。327は、高环脚部で、脚部に円形の4つの透かし孔を有す。脚部外面はミガキ、内面はハケメ調整がされている。器形の特徴から廻間期と思われる。339は、バレス壺の口縁部片で、口縁部外面と頸部内面が赤彩されている。口縁部内面には羽状刺突文が施され、外面には5条の沈線が巡る。器形の特徴から廻間期と思われる。340は、小型丸底壺片で、口縁部外面上位に棱を有し、端部は尖る。体部外面はミガキ、内面は板ナデ調整されている。口縁部内外面は横ナデ調整されている。器形の特徴から廻間期と思われる。348は、壺の口縁部片で、口縁部外面に2条の沈線を巡らせ、口縁内面に段を有す。小片のため器形の大きさははっきりしないが、時期は山中～廻間期と思われる。349は、バレス壺の口縁部片で、口縁部内面に羽状刺突文が施され、外面には2条の沈線を巡らす。器形の特徴から、山中～廻間期と思われる。370は、S字彫の口縁部片で、頸部に1条の沈線を巡らす。体部から頸部の内外面はハケメ調整されている。器形の特徴から、松河戸期と思われる。須恵器（第70図389・403）

389は、蓋B類である。口縁部内面上方にわずかな返りを有す。器形の特徴から美濃須衛Ⅲ期と思われる。小片のため大きさははっきりしない。403は、環身B類である。高台の断面形は四角形を呈し、端部が外方にやや伸び、端部内面は凹面をなす。底部外面は回転ヘラ削り調整され、内面は平滑である。器形の特徴から美濃須衛Ⅳ期と思われる。

縁袖陶器（第70図418）

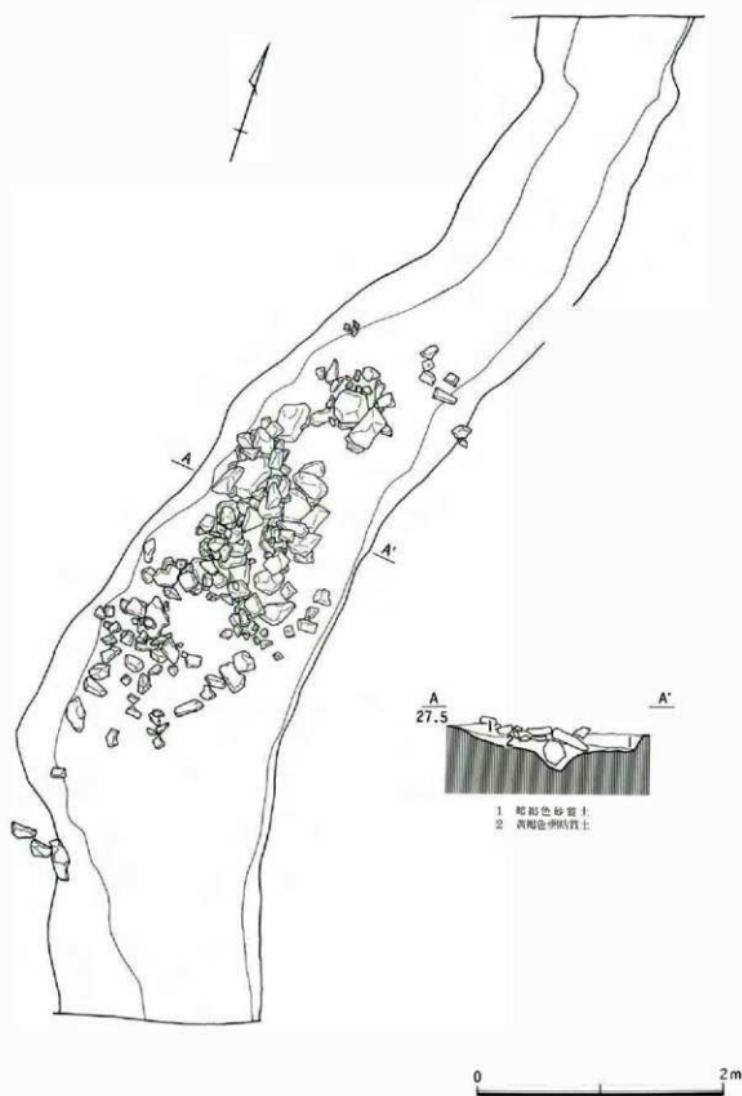
418は、縁袖陶器片である。外面に縁袖が施されている。小片のため器形や時期は不明である。

山茶碗（第72図479）

479は、碗の口縁部片である。器厚は薄手で、体部から口縁部にかけて八の字上に開く。口縁端部は、面取りされている。器形の特徴から北部系大河東1号期と思われる。

土師器皿（第73図516）

516は、土師器皿B類に属し、底部と体部外面の境に1条の横ナデが施されている。体部内面の横ナ



第50図 SD 1 実測図(1/40)

テ調整ははっきりとしないが、爪痕が数ヶ所みられる。口縁端部は肥厚する。器形の特徴から15世紀後半以降と思われる。

#### 磁器（第74図 527）

527は、青磁碗片で、底部内外面が施釉され、高台端部が露胎する。小片のため器形や時期は不明である。

#### 陶器（第74図 534）

534は、天目茶碗片で、鉄錆釉が施され、体部下方が露胎する。小片のため器形や時期は不明である。

#### S D 2

S D 2は、D 3～C 2区に位置し、調査区を横切るように南北に伸び、C 2グリッド杭付近ではほぼ直角に向きを変え、東西に伸びる。方位は、N—5°—EとN—96°—Eである。プランは標高26.8～27.2mのV層及びカクラン層で検出した。検出した溝の長さは12.95m、最大幅3.10m、深さ0.78mを測る。断面形は掘り鉢状あるいはV字型を呈し、西側掘り肩に対して東側掘り肩の傾斜が急である。溝の中位から多量の礫があり、大きさは拳大～人頭大と不均一である。中には獨立柱建物の基礎石と思われる扁平な石も数個混じる。礫に混じって多くの遺物も出土している。溝の底部からは、φ20～50mm程の比較的均一な礫が散き詰められた状態で検出した。本遺構は、意図的な屈曲がみられ、小鍵を底部に配することなどから屋敷等を区画するための溝と考えられる。

本遺構からは、縄文土器76点、弥生・土師器396点、須恵器60点、綠釉陶器1点、瓦38点、灰釉陶器59点、山茶碗322点、土師器皿350点、磁器4点、陶器19点の合計1324点出土した。その内28点（縄文土器2点、綠釉陶器1点、瓦6点、灰釉陶器7点、山茶碗6点、土師器皿1点、中世土師器1点、磁器1点、陶器2点、石鍋1点）を実測した。

#### 縄文土器（第61図 253、第62図 271）

253は、深鉢II Ac類に属す。体部外面は斜位の条痕調整、内面はナデ調整されている。口縁端部は折り返して肥厚する。271は、深鉢I Bc類に属す。口縁部外面は横ナデ調整されている。口縁部下の外面には、ヘラ状工具の押し引きによるD字状の刻目凸溝が1条巡る。

#### 綠釉陶器（第70図 411）

411は、綠釉陶器片で、内外面に綠釉が施されている。内外面とも回転横ナデ調整である。小片のため、器形や時期は不明である。

#### 瓦（第68図 381～384、第69図 385・386）

381は、軒丸瓦で、先端部片である。瓦当部分は確認できないが、通常の丸瓦凸面に粘土がもう一枚塗りつけた痕があることや先端部に剥離痕跡が確認できることから瓦当の外れた軒丸瓦の破片であると判断した。焼成は軟質である。382は、行基式の丸瓦広端部片である。凸面は丁寧にナデ調整されているが、部分的に端叩きの痕跡が認められる。焼成は軟質である。383は、行基式の丸瓦側邊部片である。凸面は丁寧にナデ調整が施されるが、部分的に端叩きの痕跡が認められる。焼成は硬質である。384は、軒平瓦片で、瓦当部分左端のみの残存である。四重弧文である。平面凸面に粘土を張り付け部をつくる。凹面に横骨痕が残るが、瓦当先端にまで及んでいる。焼成は軟質である。385は、平瓦側邊部片である。焼成は軟質で、凸面は風化して調整は明確に観察できない。他の平瓦に比べて

厚い。386は、平瓦広端部片で、凸面はナデ調整が施されるが、部分的に縫合きの痕跡が認められる。

#### 灰釉陶器（第71図421・422・429・443・449・451・453）

421は、段皿である。体部内面に段を有す。体部は外反気味に開き、口縁端部を丸くおさめる。口縁部付近が漬け掛けされている。器形の特徴から狼窯窯V期のものと思われる。422は、皿の底部片である。高台断面形は低い台形を呈す。底部外面に回転糸切り痕が残る。体部下方まで漬け掛けされている。429は、碗である。体部は丸みを持って立上がり口縁部下でわずかに外反する。端部は丸くおさめる。口縁部付近が漬け掛けされている。443・449・451は、碗の底部片である。高台断面形が台形である。443の高台外面はやや内傾し、端部は内側で接地する。内面は内窓気味に外傾する。449は、高台外面が外傾し、中位に稜を有して下がる。端部は内側で接地する。高台は底部と体部との境に付けられている。453は、広口瓶の底部片である。高台の断面形は台形を呈し、端部下位に稜を有す。輪積み成形後にナデ調整されている。底部内面には降灰がみられ、体部はハケ塗りが施されている。

#### 山茶碗（第72図458・477・478・484・487・493）

458は、皿片で、底部外面は糸切り底で、体部は底部より斜め外方に伸び、口縁端部を丸くおさめる。器形の特徴から第5型式（浅間窯下1号期）と思われる。477は、碗の底部片である。高台断面形は低い台形を呈し、端部に粗穂痕が残る。底部外面には回転糸切り痕がみられる。底径は7.3cmである。

478は、碗の底部片である。高台断面形は三角形を呈し、高台外面は弱い棱を持って外方に開く。端部は内側で接地する。底径は7.9cmである。484は、碗の底部片である。高台断面形は小さな台形状を呈す。高台は体部との境から少し内側に貼り付けられ、体部は斜め外方に伸びる。高台外面はやや外窓する。底径は9.4cmである。487は、碗の底部片である。高台断面形は低い四角形を呈し、端部に粗穂痕が残る。底部外面には回転糸切り痕がみられる。体部はやや丸みを持って外方に伸びる。493は、碗である。高台断面形は低くつぶれたような三角形を呈し粗雑である。高台は体部との境からやや内側に張り付く。底部内面中央が丸くぼむ。体部はやや丸みを持って斜め外方に伸びる。口縁はやや外反し、端部は外傾する。器形から在地性の強い第5型式（窯窯1号期）のものと思われる。

#### 土師器皿（第73図502）

502は、土師器皿A類に属し、体部外面と内面全体に横ナデ調整がみられる。底部外面には指圧痕がみられる。

#### 中世土師器（第73図523）

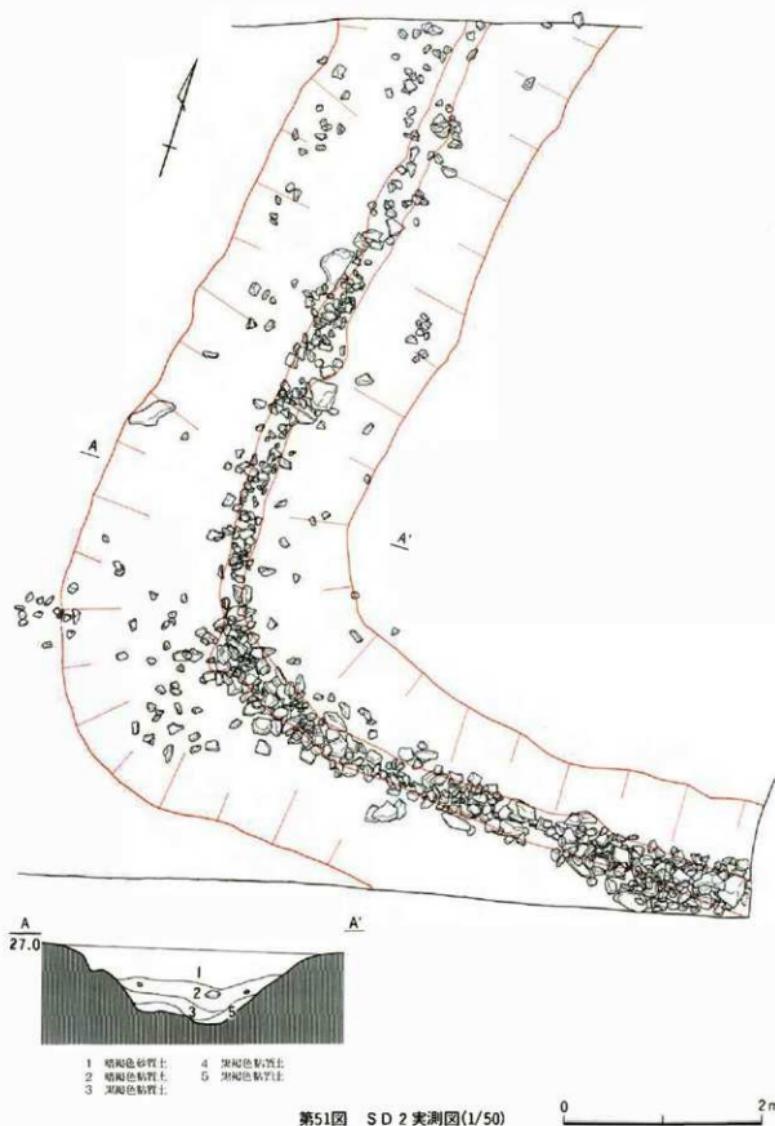
523は、羽釜の口縁部片でA3類に属す。体部外面は横ハケ調整で、内面はナデ調整されている。口縁部は面取りされ、鋤部断面は四角形を呈す。器形の特徴から14世紀後半と思われる。

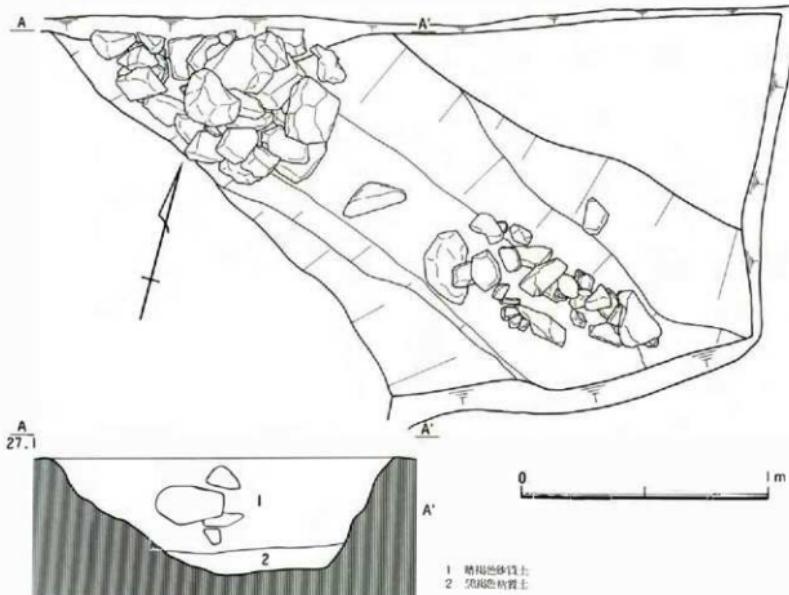
#### 磁器（第74図532・533）

532は、青磁碗の底部片である。胎土は緻密でオリーブ灰色である。底部内面には劃花文が施されている。器形の特徴から13世紀後半以降の龍泉窯系の中國磁器と思われる。533は、天目茶碗片である。体部内外面は鉄釉が施され、下位から底部は露胎する。高台は削りだし高台で外面が凹面をなす。器形の特徴から中國磁器と思われる。時期は不明である。

#### 陶器（第74図526）

526は、搖籃である。口縁端部が外傾して凹面をなす。体部外面はヘラ削り調整されている。内面は平滑である。器形から窯窯III期のものと思われる。





第52図 SD 3 実測図 (1/20)

## 石鍋（第73図 521）

521は、石鍋片である。口縁直下に削り出された鶲が巡る。鶲の断面形は不等辺台形を呈し、やや垂れ下がる。体部はやや内窵して斜め上方に立ち上げる。器形の特徴から13世紀～14世紀と思われる。

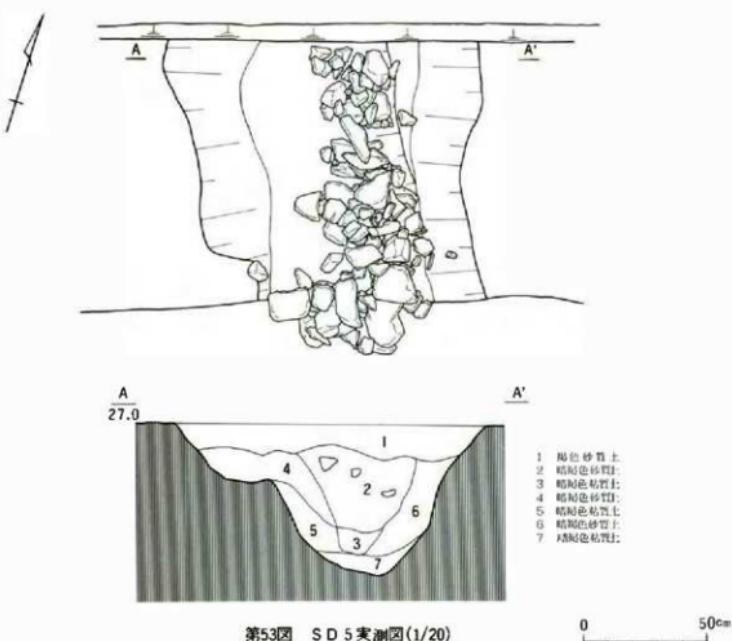
## SD 3

SD 3は、D 2区に位置する。北西から南東に伸びるが、後世（現代）のカクランにより無くなっている。プランは標高26.9～27.1mのⅢa層より検出した。方位はN-114°-Eである。検出した溝は、長さ1.96m、最大幅1.36m、深さ0.48mを測る。溝の断面形はすり鉢状を呈す。溝内には人頭大以上の礫が大量に入る。

本造構から出土した遺物は、弥生・土師器9点、須恵器1点、灰釉陶器2点、山茶碗10点、陶器3点の合計25点である。その内1点（陶器）を実測した。

## 陶器（第74図 537）

537は、甕の口縁部片である。断面がN字状の口縁で折り返し部分の裏側には2条の沈線が施されている。器形の特徴から常滑窯8～9期（14世紀後半～15世紀前半）と思われる。



第53図 SD 5実測図(1/20)

## SD 5

SD 5は、D 3区に位置する。北から南に伸びる溝であるが、後世（現代）のカクランにより大半の遺構は無くなっている。プランは標高26.8mのⅢa層より検出した。方位はN—166°—Eである。検出した溝は、長さ1.13m、最大幅1.29m、深さ0.61mを測る。溝の断面形はすり鉢状を呈す。溝内には人頭大程の礫が大量に入る。

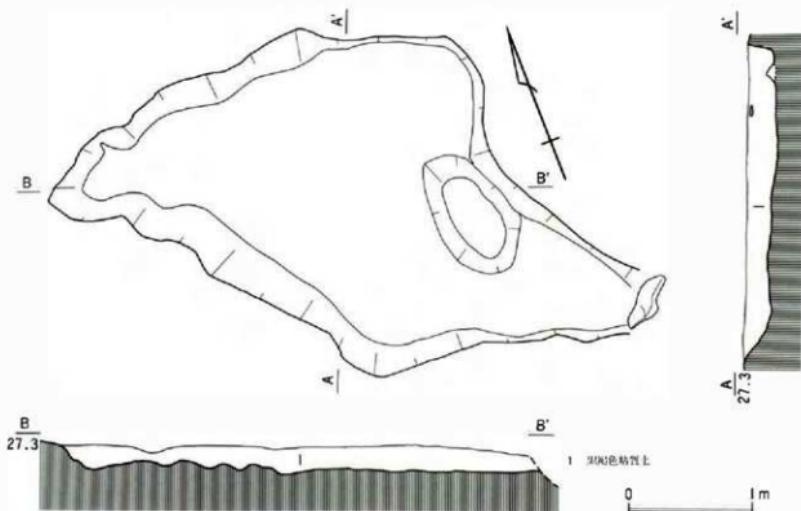
本遺構から出土した遺物は、縄文土器1点、弥生・土師器34点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗10点、中世土師器5点、磁器1点、陶器1点の合計54点である。その内2点（山茶碗1点、磁器1点）を実測した。

## 山茶碗（第72図490）

490は、碗の底部片である。高台断面形は三角形で、高台外面は外反気味に下がり、内面は外傾する。端部は丸くおさめる。底部外面には回転糸切り痕が残り、一部ナデ消しされている。器形の特徴から3～4型式と思われる。

## 磁器（第74図530）

530は、白磁碗である。胎土は緻密で明オリーブ灰色である。口縁部内面に1条の沈線が巡る。口縁部外面は折り返し状に肥厚し、端部は尖る。器形の特徴から12世紀前半の中国磁器と思われる。



第54図 S X 3 実測図(1/40)

## S X 3

S X 3 は、D 1 区に位置する。プランは標高 27.1~27.25m のⅢa 層で検出した。長軸 4.82m、短軸 2.78m、深さ 0.20m を測る。平面形はひし形状を呈す。プラン検出当初は、竪穴住居跡を想定して精査を行ったが、明確な遺構を確認することができなかった。そのため土坑状遺構(S X)とした。

本遺構からは、縄文土器 62 点、弥生・土師器 336 点、須恵器 4 点、灰釉陶器 5 点、山茶碗 15 点、中世土師器 4 点、磁器 1 点の合計 427 点出土した。出土点数では SD 2・1 に次いで多い。その内 7 点（縄文土器 1 点、弥生・土師器 4 点、綠釉陶器 1 点、山茶碗 1 点）を実測した。

## 縄文土器（第59図 206）

206 は、深体Ⅰ B a 類に属す。口縁端部にヘラ状工具の押し引きによる D 字状の刻目が施され、口縁部外縫にヘラ状工具の押し引きによる D 字状の刻目凸帯が 1 条巡る。

## 弥生・土師器（第63図 289・298・301、第64図 335）

289 は、土師器小型鉢である。底部は平底で体部は直立して伸び、口縁端部は尖る。体部外縫は板ナデ調整で内縫には強い指ナデが施される。298 は、台付き盤片である。底部は台状をなし体部との接合部はかなり厚い。台部外縫はハケメ、内縫は指オサエが施され、体部内外縫は板ナデが施される。器形の特徴から朝日期と思われる。301 は、台付盤の台部片である。台部内外縫は指オサエ、体部内外縫はハケメ調整されている。335 は、高環である。脚部は外方に開き、端部を丸くおさめる。环部はやや丸みを帯びて外方に開き口縁部に至る。口縁端部は面取り気味に丸くおさめる。环部内外縫はミガキ調整され、脚部内縫は板ナデが施される。环部に比べて脚部が小型の特殊な器形であり、

時期は不明である。

#### 縁袖陶器 (第70図415)

415は、縁袖陶器片である。内外面に縁袖が施される。器形や時期は不明である。

#### 山茶碗 (第72図496)

496は、碗の口縁部片である。体部から外方に伸びた後、口縁部下で外反し、端部は引き出し気味に丸くおさめる。器形の特徴から3型式と思われる。

#### (3) 第2次遺構面の主な遺構と遺物

##### SK9

SK9は、C0区に位置する。プランは、標高26.9~27.0mのV層で確認した。長軸2.27m、短軸2.16m、深さ0.31mを測る。平面形は梢円形を呈し、SD17を切るように検出した。本遺構からは、弥生・土師器13点が出土している。本遺構の性格や時期は不明である。

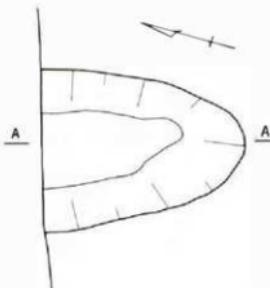


写真 B地区第2次遺構面検出状況（西より）

##### SK11

SK11は、D3区に位置する。プランは、標高26.7mのⅢa層で確認した。本遺構は後世（現代）のカクランのため一部分しか確認できなかった。長軸0.82m、短軸0.69m、深さ0.21mを測る。平面形は梢円形を呈す。埋土の上層には赤褐色の焼土が混じり、遺物も入る。

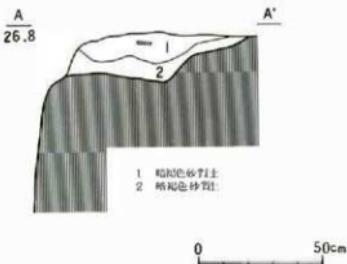
本遺構からは、弥生・土師器9点、土師器Ⅲ1点の合計10点が出土した。本遺構の性格や時期は不明である。



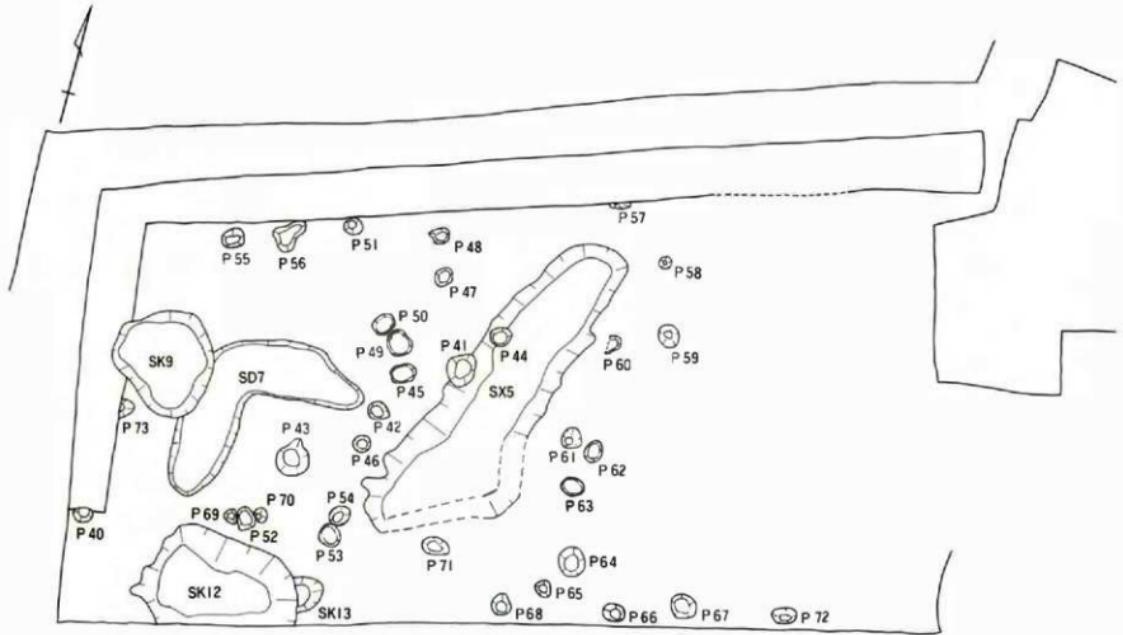
##### SK12

SK12は、C1区に位置する。プランは、標高26.8~27.0mのV層で確認した。長軸3.54m、短軸1.98m、深さ0.68mを測る。本遺構は調査区外へも広がっており、全体を確認するには至っていない。埋土はしまりのゆるい黒褐色粘質土が入る。

本遺構からは、罐文土器18点、弥生・土師器62点、須恵器1点、灰釉陶器1点、山茶碗1点、土師器Ⅲ1点の合計84点が出土した。その内1点（弥生・土師器）を実測した。

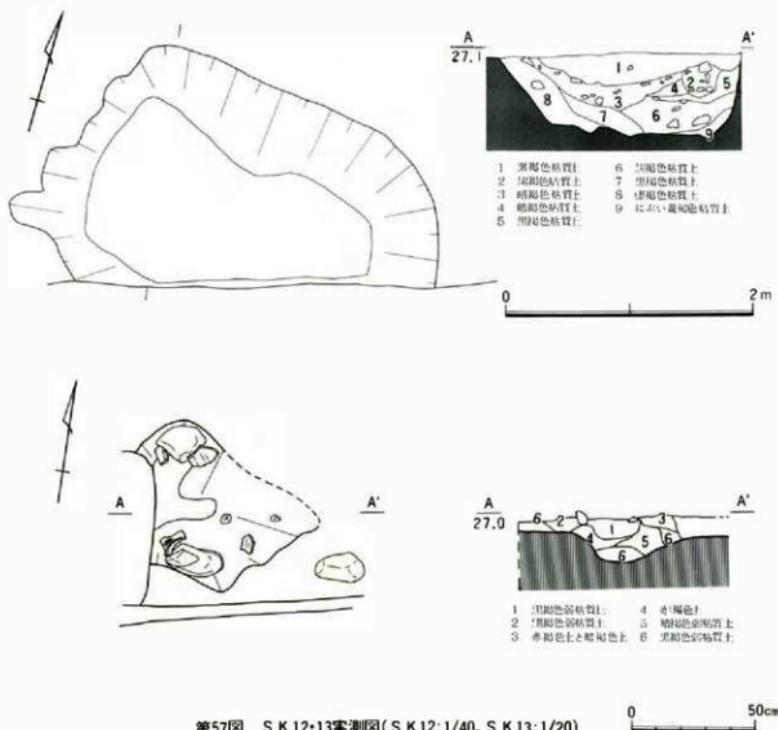


第55図 SK12実測図(1/20)



第56図 B地区第2次遺構面遺構配図 (1/100)





第57図 SK 12-13実測図 (SK 12:1/40, SK 13:1/20)

0 50cm

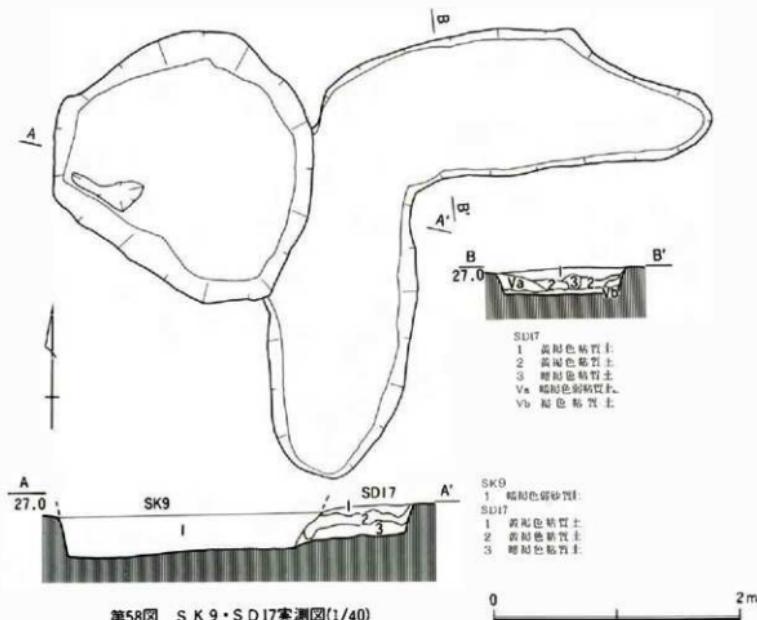
## 弥生・土師器 (第67図 379)

379は、土師器標片で、頭部が強く外反する。口縁端部は尖り氣味である。内外面はハケメ調整されており、頭部外面には指オサエがみられる。器形の特徴から奈良期と思われる。

## SK 13

SK 13は、C 1区に位置する。プランは標高26.8~26.9mのV層で確認した。遺構はSK 12に切り離されているが、長軸0.80m、短軸0.58m、深さ0.18mを測る。埋土上層には赤褐色の焼土がまじり、人頭大の扁平な縁も検出した。掘り肩がはっきりせず、遺構は東へ広がると考えられたが、暖昧な検出になってしまった。焼土が混じる土層中の縁は、炉や竈を意図する配置にはなっていない。赤褐色土の下や周辺には麻面のような硬化した土は検出しなかった。

本遺構からは、縄文土器1点、弥生・土師器8点の合計9点が出土した。小片のため実測はしなかったが、土師器の中にはS字縁の口縁標片もみられる。器形の特徴から古墳時代と思われる。



第58図 SK9 + SD17実測図(1/40)

## SD17

SD17は、C0～C1区に位置する。プランは標高26.9～27.0mのV型で確認した。遺構はL字型の溝で、両端は途切れて土坑状になっている。溝の長さは5.68m、最大幅1.2m、深さ0.22mを測る。断面形は扁平な長方形を呈す。埋土は、しまりのある黄褐色粘質土が入る。プランを見る限りでは、周溝基の周溝のようにも見えるが、遺構内から遺物は出土しておらず、周辺の遺構との関連もはっきりしないため、本遺構の性格や時期は不明である。なお、SD17を切るように検出したSK9のプランの上場は完掘段階より上であった。飛り下げる途中では、はっきりと確認できなかった。

### 第3節 包含層遺物

包含層から出土した遺物は、縄文土器379点、弥生上器・土師器4369点、須恵器360点、瓦22点、灰釉陶器377点、山茶碗1551点、土師器皿1478点、中世陶器100点、磁器38点、石器28点の合計8702点である。遺構面に觸わりのある主な遺物について説明する。

#### 灰釉陶器（第71図）

灰釉陶器は、377点出土した。その内19点を実測した。

435・436は、高台の断面が三日月形を呈す碗である。435は、腰部に棱を有し体部は直線的に立ち上がる。口縁はわずかに外反し、端部は面取りされ外傾する。口縁部から体部上方にかけて施釉されている。高台の外面は棱を有し、内傾して接する。442・445・446は、高台の断面が三角形を呈す碗である。431～434・441・448は、高台の断面が台形を呈す碗である。443は、体部がゆるやかな丸みを帯びて立ち上がり、口縁は外反しない。底部の器厚は厚く、体部は薄い。底部外面には糸切り痕がみられる。口縁部内外面に施釉されている。434は、口縁部から体部上方に漬け掛けの施釉がみられ、腰部の張りは弱い。口縁部はやや外反する。底部外面に糸切り痕がわずかに残る。431は、口径12.7cmと小振りな碗である。口縁部から体部にかけて漬け掛けの施釉がみられる。腰部に明瞭な張りがあり、口縁部は少し外反する。底部の器厚は厚く、体部の器厚は薄い。高台は外に開き気味で、端部は内傾して内側で接する。432は、体部が丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は外反しない。口縁端部は尖る。底部外面に糸切り痕がみられる。441・448は、底部外面に糸切り痕が残り、高台端部を丸くおさめる。426～428・430は、碗の口縁部片である。426・428・430は、口縁が外反する。427は、外反しない。

423は、皿である。口縁付近に漬け掛けの施釉がみられ、高台は低い台形を呈す。底部外面に糸切り痕がみられる。419は、折縁皿の口縁部片である。421・424は、段皿である。424は、体部内面に幅広の段を有し、外面に段はみられない。口縁から胴部にかけて厚い施釉がみられる。高台の外面は外に開き内面は外傾する。端部は丸みを帯びる。421は、内面に段を有し、外面の段は不明瞭である。口縁部に漬け掛けの施釉がみられる。

#### 山茶碗（第72図）

山茶碗は、1551点出土した。その内34点を実測した。

492・500は、碗である。492は、全体の器厚は薄手で、底部より八の字状に立ち上がる。口縁端部がわずかに外反する。高台は三角形を呈し、糸切り痕が残る。初穀痕はみられない。500は、高台が低い四角形を呈す。体部下方に強い張りがある。491は、口径12.6cmの小碗である。器厚が全体に薄手で、体部下方に張りがある。口縁端部はわずかに外反し鈍く尖る。高台は小さい三角形を呈す。

（494・497・499）は、碗の口縁部片である。467～476・480～483・486・488～489は、碗の底部片である。467・468・482は、高台が三角形を呈す。469・475・480・481・483・486・489は、高台が台形を呈す。470・471・473・474・476・488は、高台が低い台形を呈す。

455～457・459～466は、皿である。その内461～464・466は、高台を有す。456は、底部が糸切り底で、口縁端部が面取りされている。457は、底部外面が糸切り底で、口縁端部が尖る。455は、台形の高台を有し、器高が高いため、小碗の雰囲気である。

#### 土師器皿（第73図）

土師器皿（カワラケ）は、1478点出土した。その内8点を実測した。

503は、土師器皿A類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部内面は横ナデ調整されている。

507・510～513・515は、B類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。体部内面は横ナデ調整されている。510・511・512は、体部に明瞭な段を有す。

517は、C類で、底部から体部外面に指圧痕がみられる。

#### 清郷型鉢（第73図522）

522は、清郷型鉢の口縁部片である。断面三角形の鉗状口縁で、口縁端部がくの字状に屈折して水平に引き出される。輪形の特徴から10世紀後半～11世紀前半と思われる。<sup>1)</sup>

1) 1996 永井宏幸「清郷型鉢について」考古学フォーラム定例会資料

1996 第4回東海考古学フォーラム「鉢と櫛そのデザイン」

#### 伊勢型鉢（第73図519）

519は、伊勢型鉢の口縁部片である。口縁端部が折り返されている。胎土は、 $\pm 1\text{ mm}$ 以下の砂粒を多く含む。輪形の特徴から、14世紀後半～15世紀前半と思われる。

#### 石器（第75・76図550～561）

石器は28点出土した。その内13点を実測した。

550・551は石鎚である。550の表裏面は任意。両面とも、二次調整が丁寧に施されている。正面→裏面の順に調整を施し仕上げている。正面の調整剥離痕の打点は、その大部分が失われている。抉りの深さは、 $2\text{ mm}$ 。形態は、凹基無肩式である。551は、茎部の先端と基端部の片方を折損している。腹面に主要剥離面を広く残しており、二次調整は縁辺部にのみ施されている。茎部の残存長は、 $4\text{ mm}$ 。形態は、有茎無肩式である。

552は、石錐である。不定形の剥片を素材として、錐部を作出している。機能部は1ヶ所で、使用のためかかなり摩耗している。錐部の断面は、菱形を呈する。腹面には、主要剥離面の打点が残るが、周辺にはわずかに潰れ痕が認められる。素材となつた剥片の縁辺部2ヶ所に、連続する微細な剥離痕が観察される。

553～556は、石斧である。553は、乳棒状を呈する形態の磨製石斧の折損品で、基部のみが残存している。基端部を中心に調整のための敲打痕が観察される。断面は楕円形を呈する。554は、太型蛤刃石斧とするには、サイズ的に小さいため、両刃磨製石斧とする。側縁はほぼ平行し、断面は扁平な長方形を呈する。調整は、全体を研磨しておらず、基部には敲打痕が認められる。研磨は刃部のみに認められるが、丁寧に研磨されており、再生を繰り返した印象を受ける。基端の剥離痕は、折損によるものか調整剥離なのかは、検討を要する。555は、柱状片刃石斧である。折損品であり、残存している部分がどの部位にあたるのかを決めるのに検討を要したが、仕上げの研磨の観察から「刃部」とした。ただし刃部には、敲打痕が認められる。石斧としての使用痕と捉えるより、折損後に敲石として再利用した際の痕跡と考えられる。周辺には側縁部や刃面に沿って剥離痕も認められる。正面折損部位の一部に、研磨された調整痕が認められるが、「抉入」かどうかは判別が困難である。抉りにしては浅く、どちらかというと「切目」のようである。断面はほぼ方形を呈する。556は、扁平両刃石斧である。全体が非常に丁寧に研磨され成形されている。正面の刃面が裏面に比して広く取られてお

り、弱凸強平片刃に近い？これは刃部の再生のための研磨が繰り返された結果とも考えられる。断面は長方形を呈する。弥生時代の四国、愛知、北陸にみられる。

557は、磨・敲石である。手に持つのに手ごろな大きさの円錐を利用している。機能部は、①正面の中央に浅い凹み状の敲打痕、②正面の敲打痕の周辺ほぼ全体に磨面、③裏面の中央に磨面の3ヶ所が認められる。

558は、石鍤である。手ごろな大きさの扁平な卵形の円錐を利用。中央に全周する1条の幅広い深い溝を敲打によって作出しており、いわゆる「瀬戸内型」と呼ばれる形態を呈する。

朝日遺跡に類例がある。1982年報告書には5例。俵を編むときの糸かもしれない。1993年の朝日遺跡の報告書では、13点が敲打によって溝を作られた石鍤として実測されている。

本遺物には、2ヶ所に敲打痕が認められる。正面下端部と中央部である。素材となっている円錐自体が、手に持って敲打するのに手ごろな大きさであることからも、敲石として使用されていたと思われる。特に中央の溝に重なっている敲打痕は、石鍤として成形される以前のものと思われる。

559は、浮子である。縄文前期後半から後期中葉に出土例が多い。漁網錦川の浮子として使用された可能性が高い。形状、大きさはあまり一定していない。正面左部に、紐掛けのための加工痕が認められる。

560は、砥石である。ほぼ全体が機能面として利用されている。特に裏面は、反りが生じるくらいまで使用されている（安定のよい置き方をしたためこの面が裏面となった）。

561は、石棒（石刀）である。頭部の半面のみが残存する折損品。頭部に型式差が認められ、縄文晩期と想定される。

## 第4節 考 察

### (1) A地区遺構面について

A地区の遺構は、標高25.3~26.5mの堆積層・整地層・V層から検出した。各遺構からは様々な時期の遺物が出土しているが、大きく2時期に分けられることが明らかになった。

1時期は古墳時代から奈良・平安時代にかけての面である。SD16からは7世紀前半の須恵器(407)が出土した。また、SD16近くからは、陶が多数検出され、灰釉陶器が数点出土している。明確なプランを確定することはできなかったが、検出したレベルはSD16とほぼ同じであった。

もう1時期は中世後半の面である。SK1からは15世紀後半の土師器皿(506・514)が出土した。

遺構名	層位	遺物 器種	推定年代
SK1	M2	土師器皿(506・514)	15世紀後半
SK7			不明(遺物なし)
SD10	瓦(388)		8世紀前半
SD16	須恵器(407)		7世紀前半

SK1や周辺のピット群は、IV層の逆転した層位が確認されているいわゆる整地層から掘り込まれていた。この層は、一見基底状に安定した層を成していた。調査区範囲が限られていることからこの整地層全体の様相をとらえることはできなかったが、耕作を目的としたのか、あるいは建物やその区画を目的としたのかは不明である。

SD10の最下層からは瓦が出土しているが、本遺構は前述した整地層より上位のいわゆる堆積層から掘り込まれており、年代を8世紀に求めるのは難しい。

### (2) B地区遺構面について

第1次遺構面ととらえた遺構は、標高27.2~27.4m前後のⅢa層及びカクラン層から検出した。SK2・3・6は、出土した遺物(土師器皿)や遺構の様相から15世紀後半の中世墓と思われる。SD1は、非常に浅い溝状遺構で、耕作に伴う水路というよりは邸宅内の水路的な様相を示す。SD1はSK2・3・6よりもやや上位の層から検出されていることから、墓域として機能していたこの地域に住居が建てられた可能性も考えられる。SD1周辺から検出した多数のピット群は、掘立柱建物としての明確な位置付けをすることはできなかったが、その関連は十分に考えられる。

遺構名	層位	遺物 器種	推定年代
SK2	M1	土師器皿(504・508・509)	15世紀後半
SK3	M1	土師器皿(505)	15世紀後半
SK6	M1	古鉢(549) 土師器皿(501)	15世紀前半 15世紀後半
SD1	M1	土師器皿(516)	15世紀後半
SD2	M2	土師器皿 素瓦(384)	15世紀後半 8世紀前半
SD3	M1	甕(537)	14世紀後半~15世紀前半
SD5	M1	磁器(530)、山茶碗(490)	12世紀前半
SX3	M1	山茶碗(496)	12世紀前半

SD 2は、最下層のM 2から土師器皿が出土しており中世後半とも考えられるが、瓦（四重弧文軒平瓦）が溝の底部に張り付くように出土していることから瓦の時期である8世紀前半という可能性もある。SD 3は、SD 2の上位から検出されており、出土遺物の検討からみても中世後半と考えられる。SD 5とSX 3については、中世前半と思われる。

遺構名	層位	遺物 器種	推定年代
SK 9	M 1	弥生・土師器	不明（小片のため）
SK 11	M 1	土師器III	不明（ “ ” ）
SK 12	M 1	弥生・土師器（379）	8世紀～9世紀
SK 13	M 1	弥生・土師器（S字壺片）	古墳時代
SD 17		遺物無し	不明（遺物なし）

第2次遺構面の年代については、出土遺物が小片や少量であるため確定できる遺構が少ない。SK 12は、奈良期の土師器壺片が出土しており、8～9世紀と想定される。SK 13は、S字壺片が焼土や礫の周辺から出土しており、古墳時代前期と想定される。SK 12は、SK 13を切っており、前後関係にも整合性がみられる。但し、同じ第2次遺構面の他の遺構からは中世の土師器III片なども出土しており、第2次遺構面全体を古墳時代あるいは8～9世紀と断定することはできない。

### (3) まとめ

A・B両地区の遺構の検出状況をまとめると、次のように言える。

期	主となる層位	時 期	主となる遺構
第1期	V層	古墳時代後期～奈良・平安時代	SD 16 SK 13 SD 2 SK 12
第2期	IIIa層下	中世前半～中世後半	SD 3・5 SX 3 SK 1・3・6 SD 1
第3期	II層・堆積層	近世初頭の遺構面	SD 10

当初、二ノ井遺跡については鎌倉～室町時代にかけて2時期の遺構面が存在すると想定して調査を進めたが、検討の結果、同じ2時期に分かれるもののその時代は古墳時代後期まで遡ることが明らかになった。

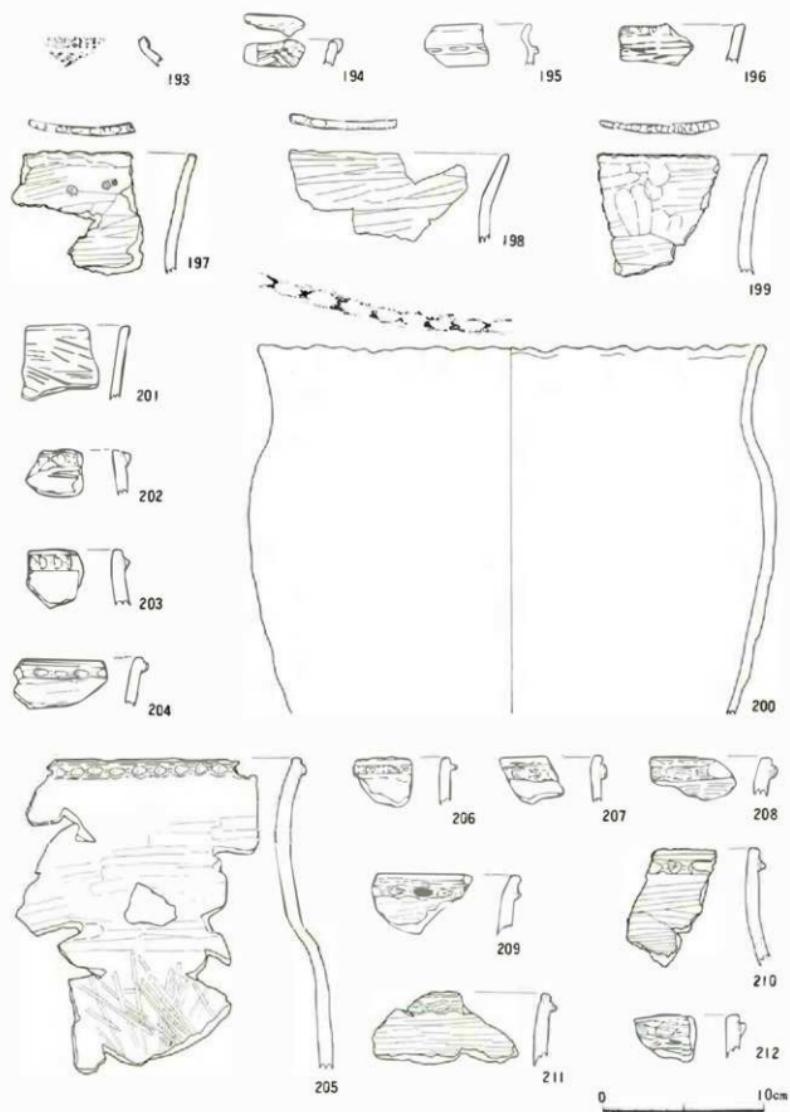
第1期は、二ノ井遺跡調査区内から発見された南高野古墳築造期と同じ時期に当たり、SD 16はその規模からも古墳築造との関連が考えられる。SK 13は、明確なプランを検出することができなかつたが、焼土や礫が検出されたことから住居に関連する遺構と考えられる。また、二ノ井遺跡のすぐ西隣には高畠遺跡があり、平成7年度の当センターの発掘調査によって奈良時代初頭の寺院関連遺構が検出されている。SD 2は、区画を意識した溝であり、出土した四重弧文軒平瓦は高畠遺跡からも出土していることから、SD 2と高畠遺跡との関連については今後十分に検討する必要があろう。

第2期は、中世の遺構面である。検出した遺構としては中世墓や溝などであった。この時期の遺物（灰釉陶器・山茶碗・土師器・磁器・石溝等）は、数が多く、型式も多様性にわたる。本遺跡からは多数のビットを検出したが、掘立柱建物を確認することはできなかったが、連続とした生活の営みを想像することができる。

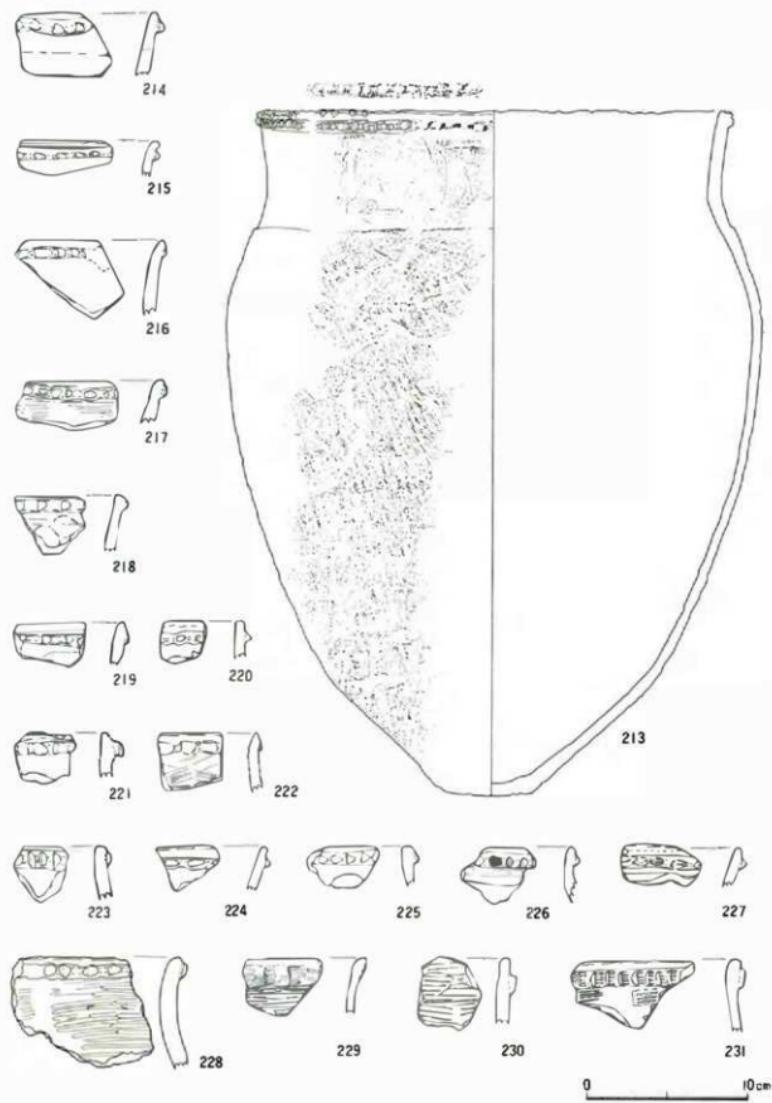
第3期は、近世初頭の遺構面である。調査の進行上、この時期の遺構検出を行わなかったが、断面観察から、水田耕作の様子が観察された。その直後に大量の砂礫によって当該調査区周辺は厚い砂礫層に埋もれたまま荒れ地となり、現在に至ったと思われる。

なお、調査区全体から遺構面としてとらえた時期よりもさらに古い時期の遺物（縄文土器・弥生土器・石器）が出土している。地形形成から考えて大半は流れ込んだ土に含まれたものであると考えられるが、縄文土器には、縄文時代晚期のいわゆる凸帯文土器<sup>11</sup>が多数みられる。二ノ井遺跡の北西に位置する一ノ井遺跡からは縄文時代晚期の遺構が確認されており、二ノ井遺跡やその周辺に同様な遺構が存在する可能性も考えられるが、今回の調査では明らかにすることはできなかった。

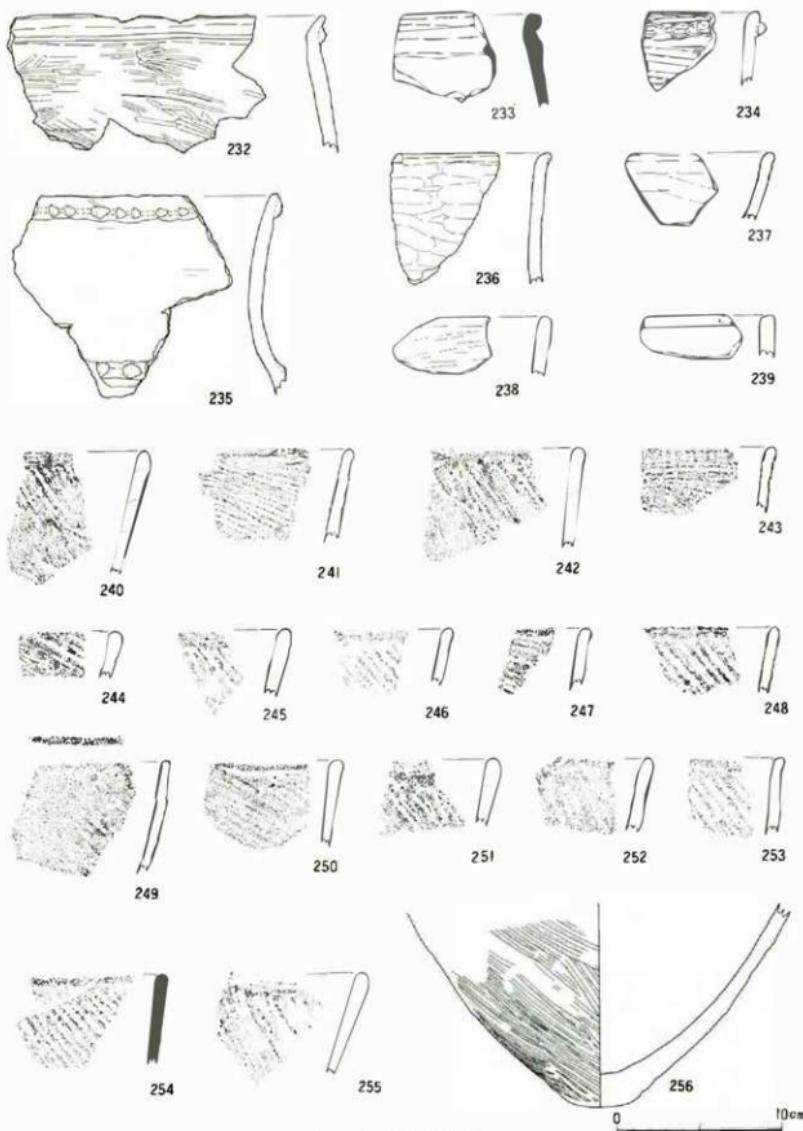
11) 縄文時代晚期深鉢の分類は、豊川市教育委員会 1993「麻生田大橋遺跡発掘調査報告書」の分類に従った。



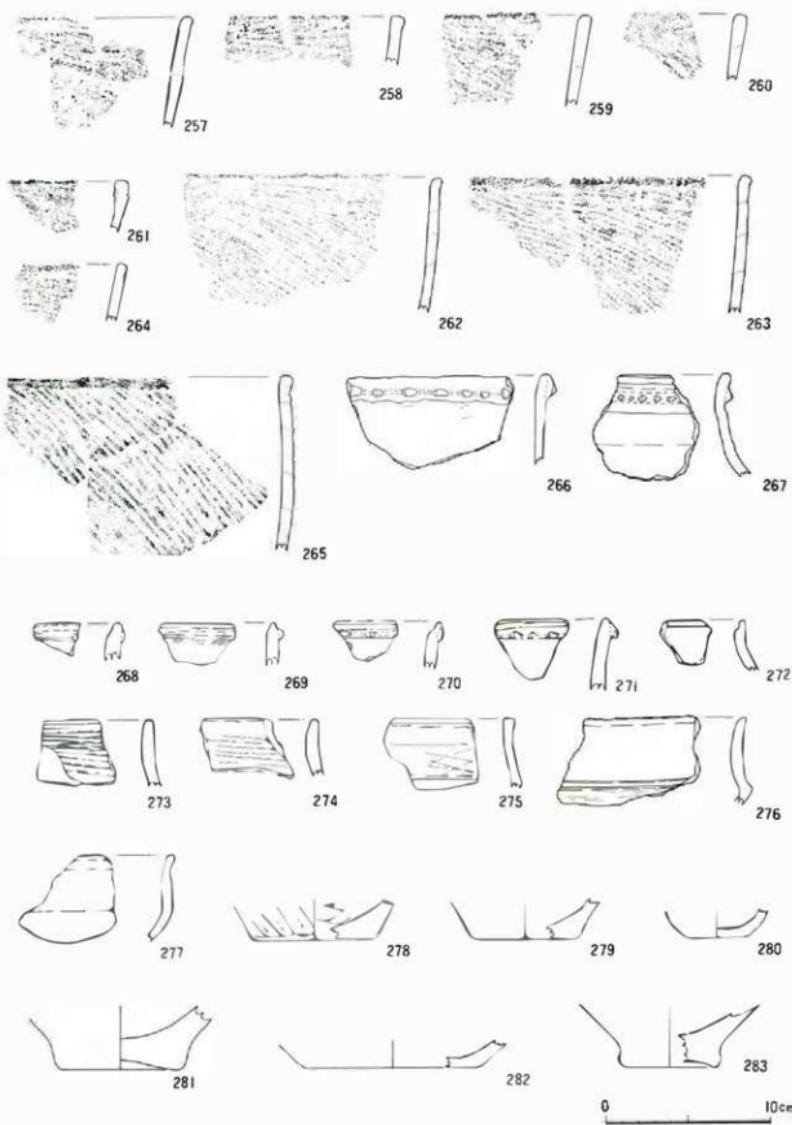
第59図 遺物実測図(18)



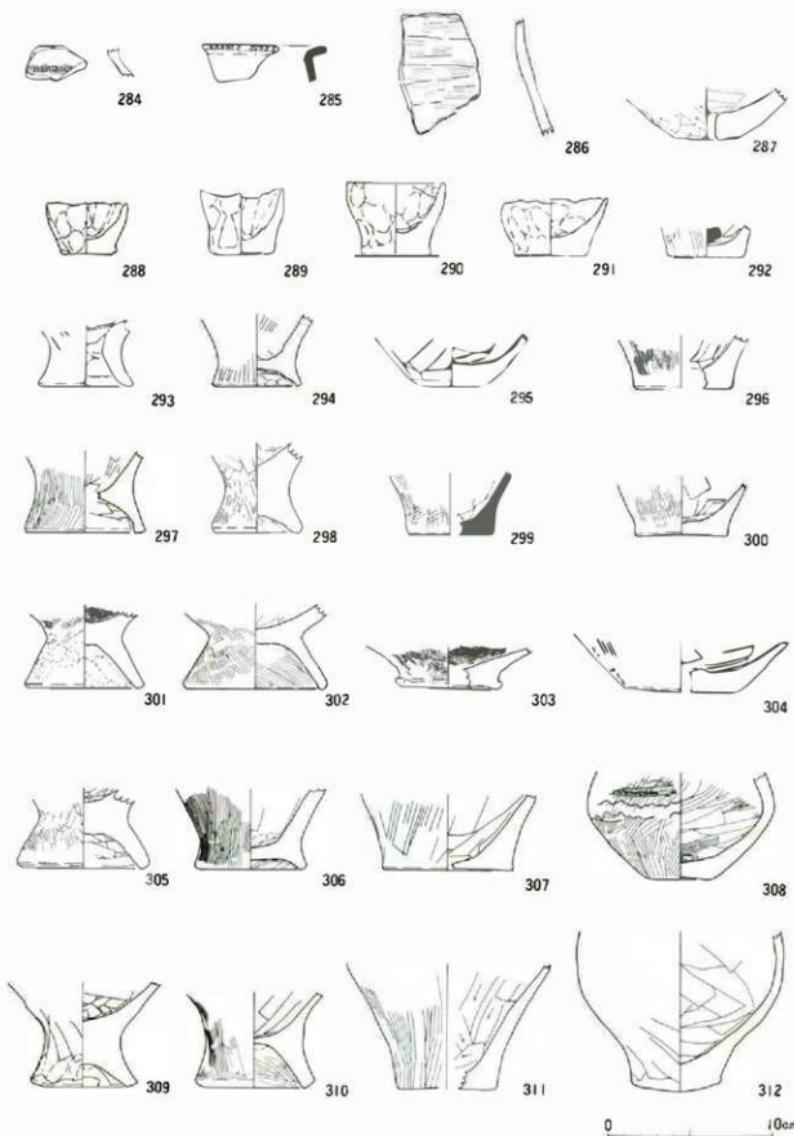
第60図 遺物実測図(19)



第61図 遺物実測図(20)

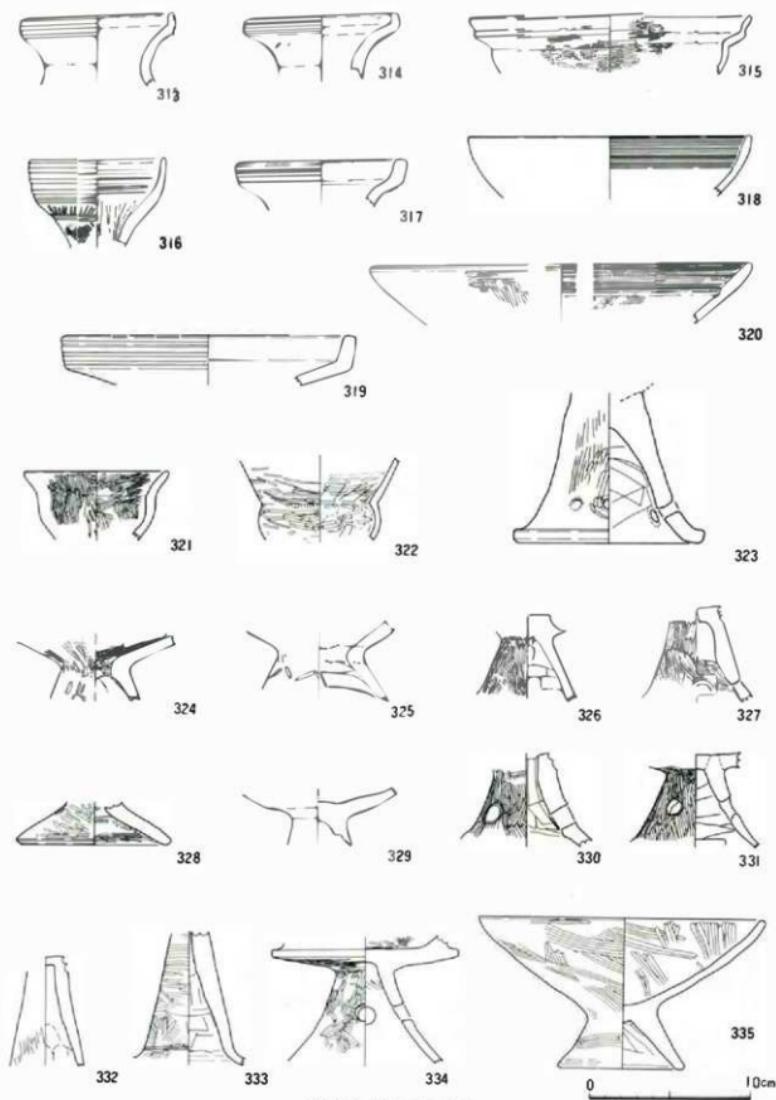


第62図 遺物実測図(21)

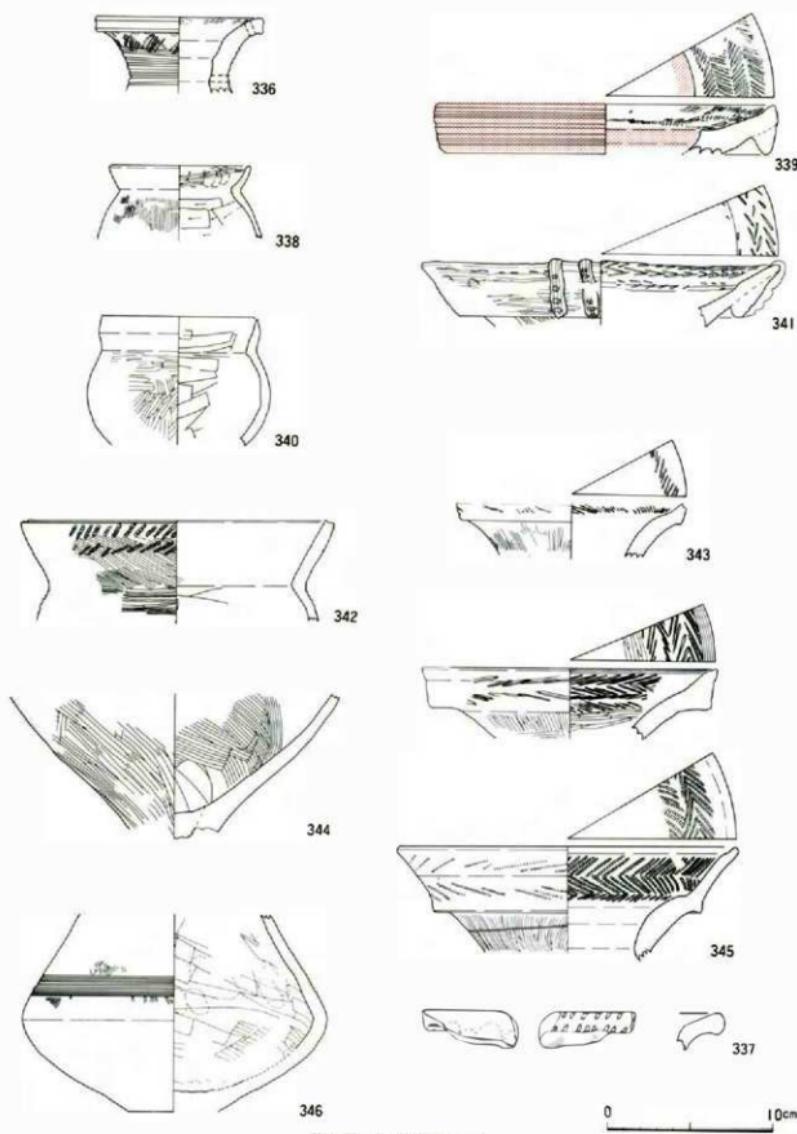


第63図 遺物実測図(22)

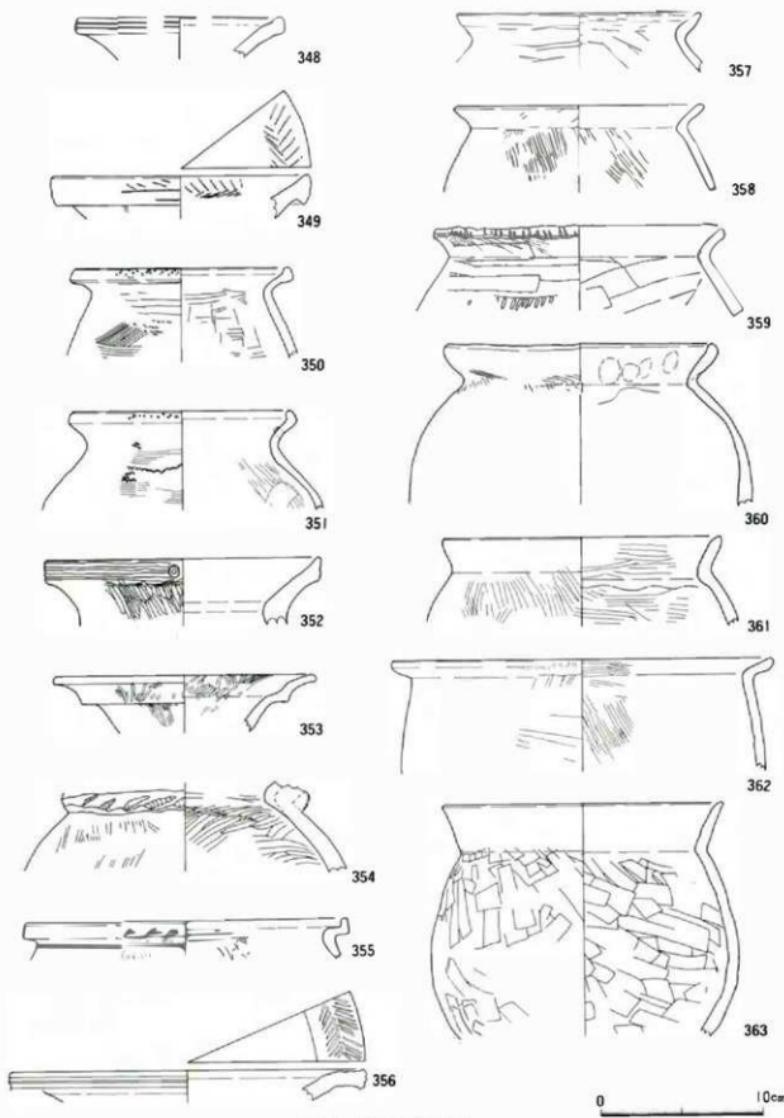
0 10cm



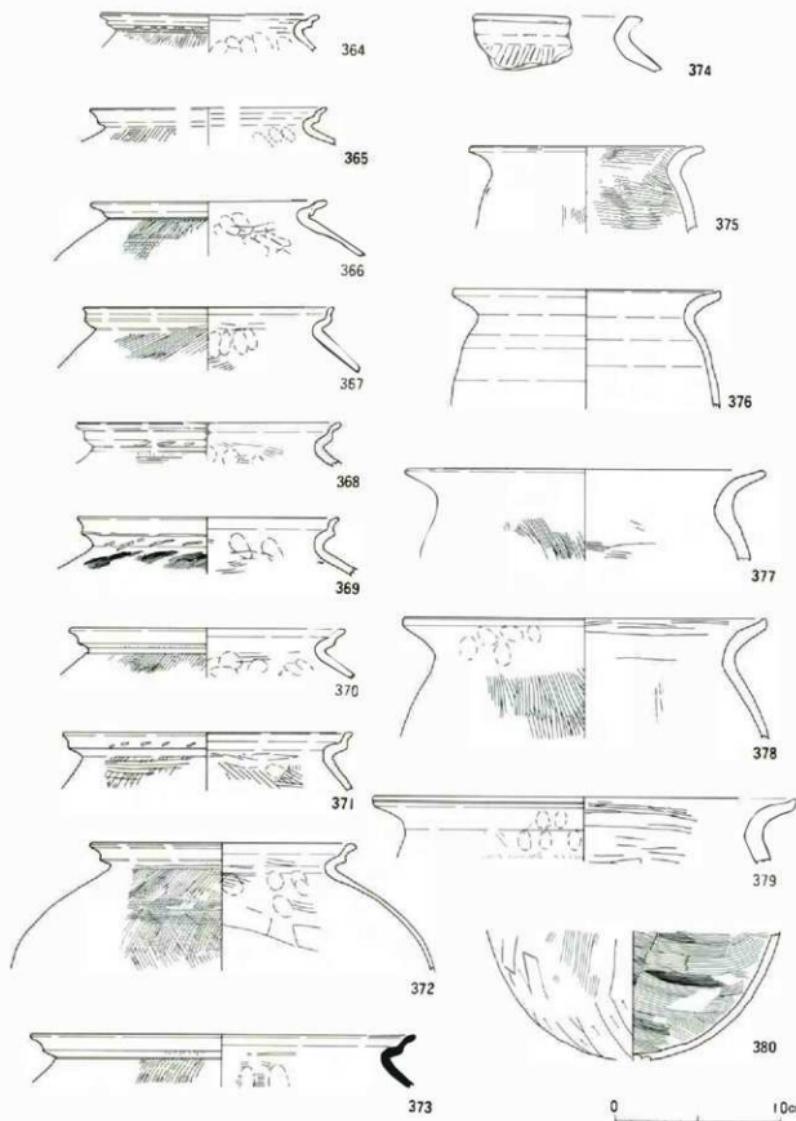
第64図 遺物実測図(23)



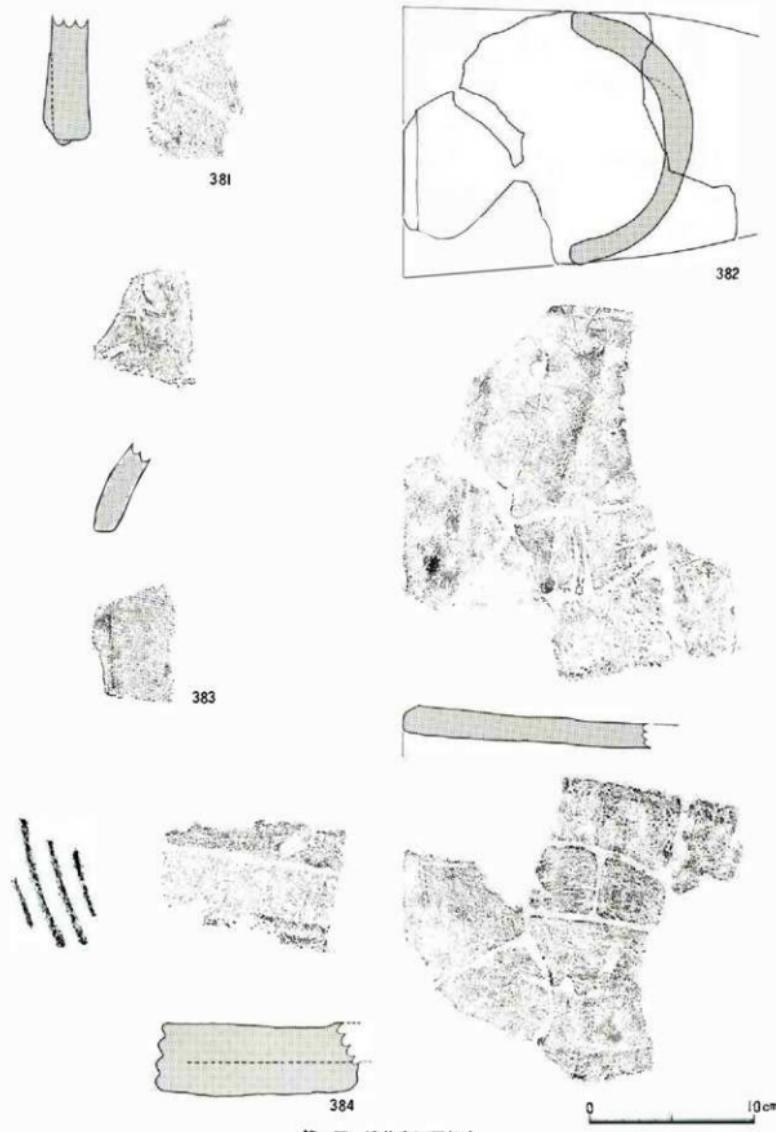
第65図 遺物実測図(24)



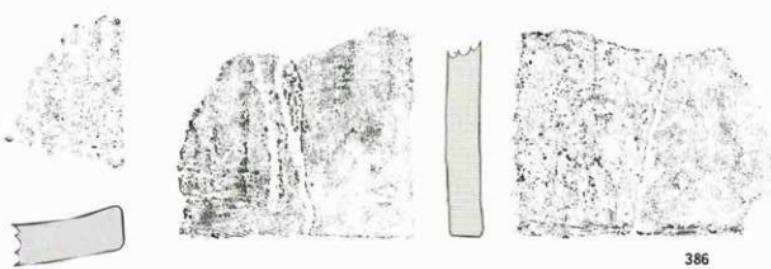
第66図 遺物実測図(25)



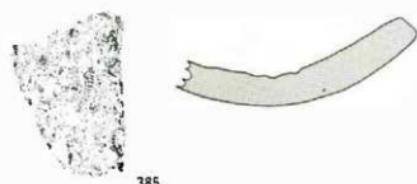
第67図 遺物実測図(26)



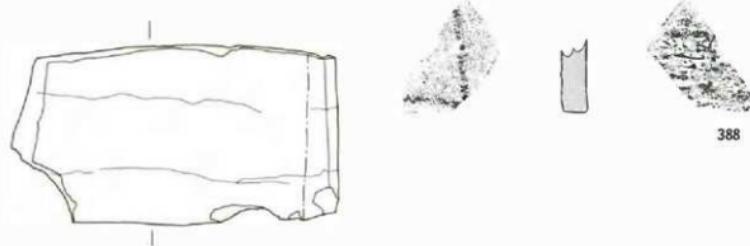
第68図 遺物実測図(27)



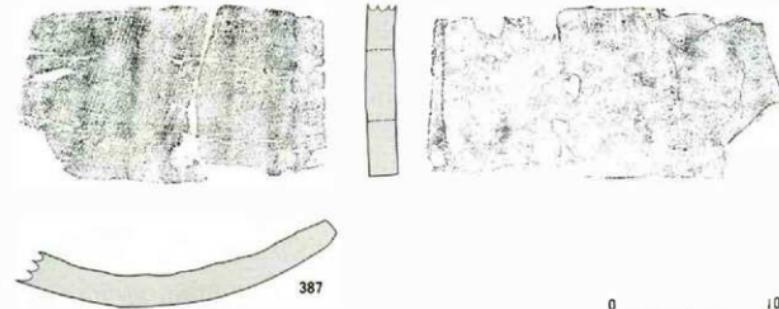
386



385



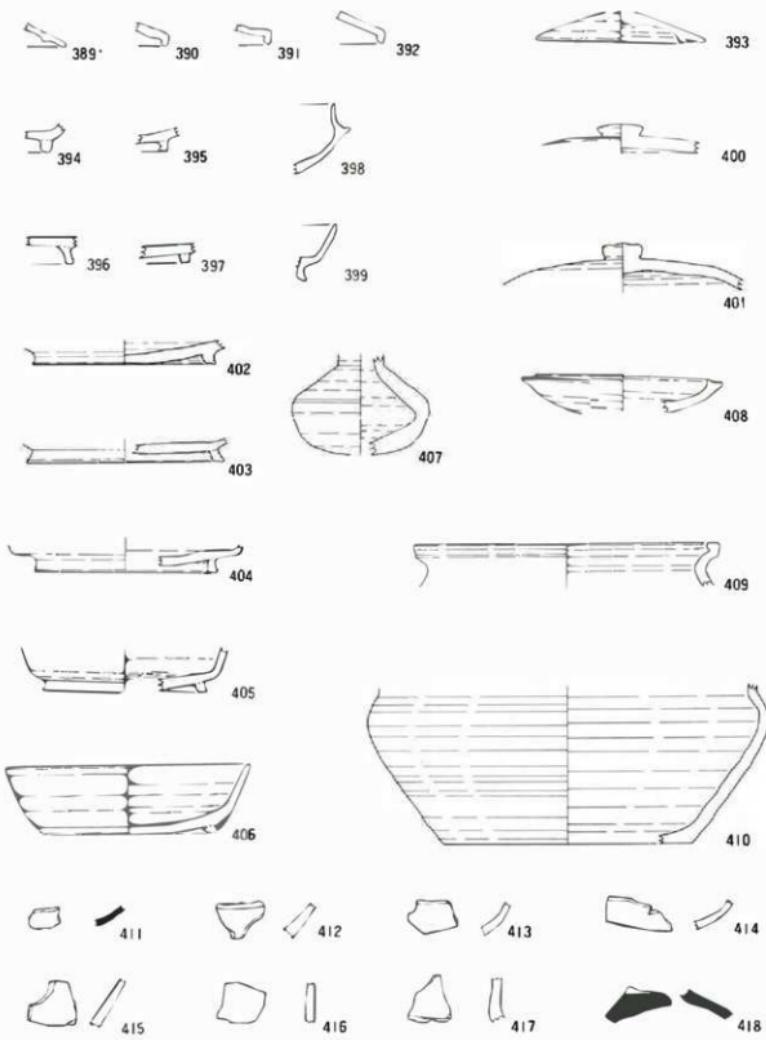
388



387

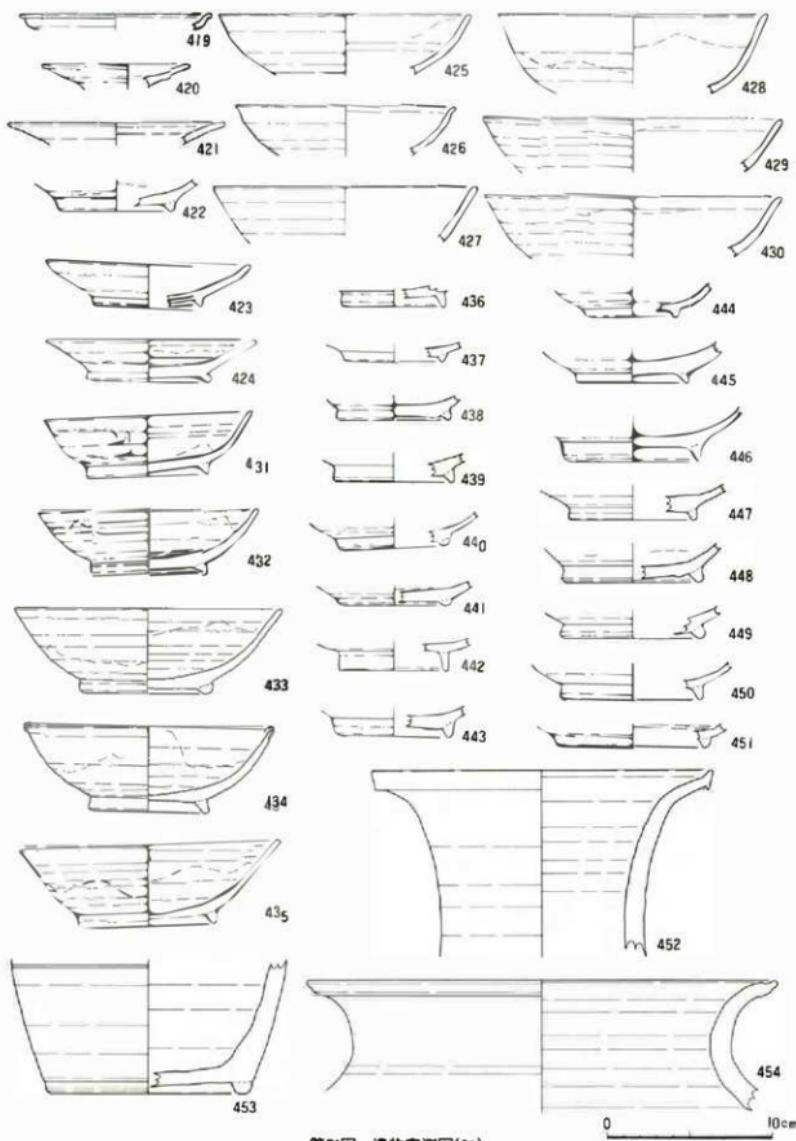
第69圖 遺物實測圖(28)

0 10cm

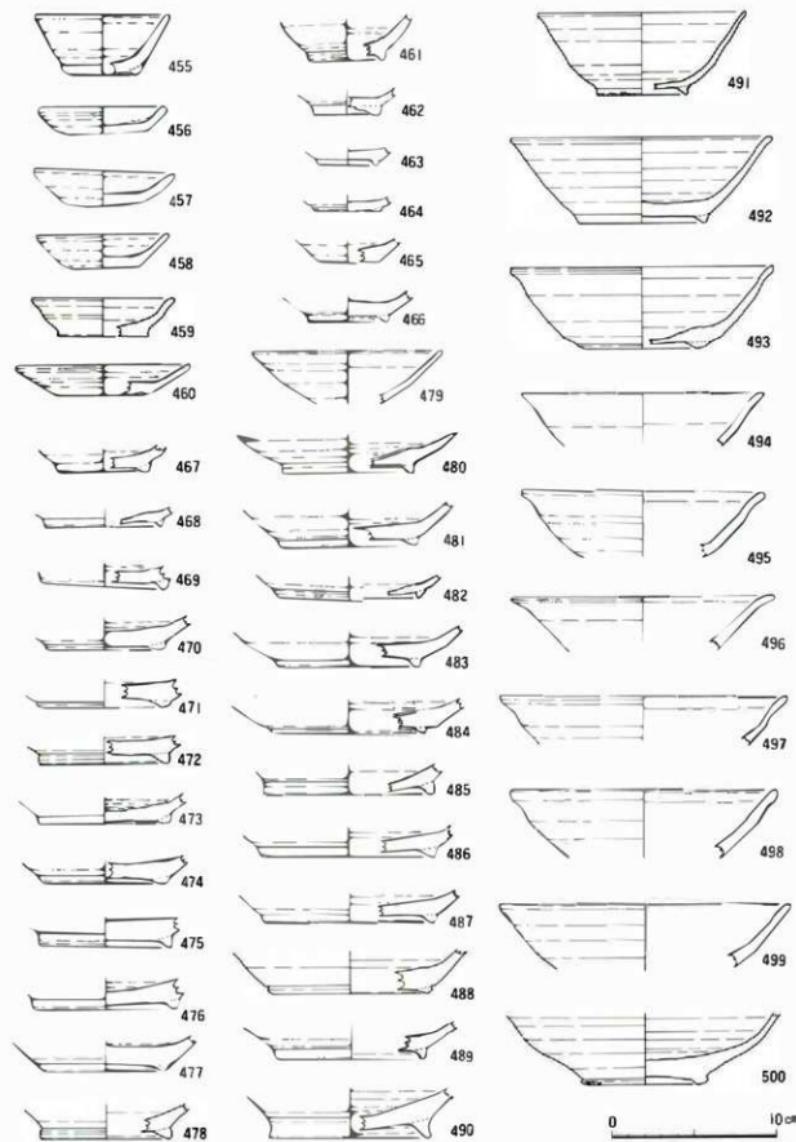


第70図 遺物実測図(29)

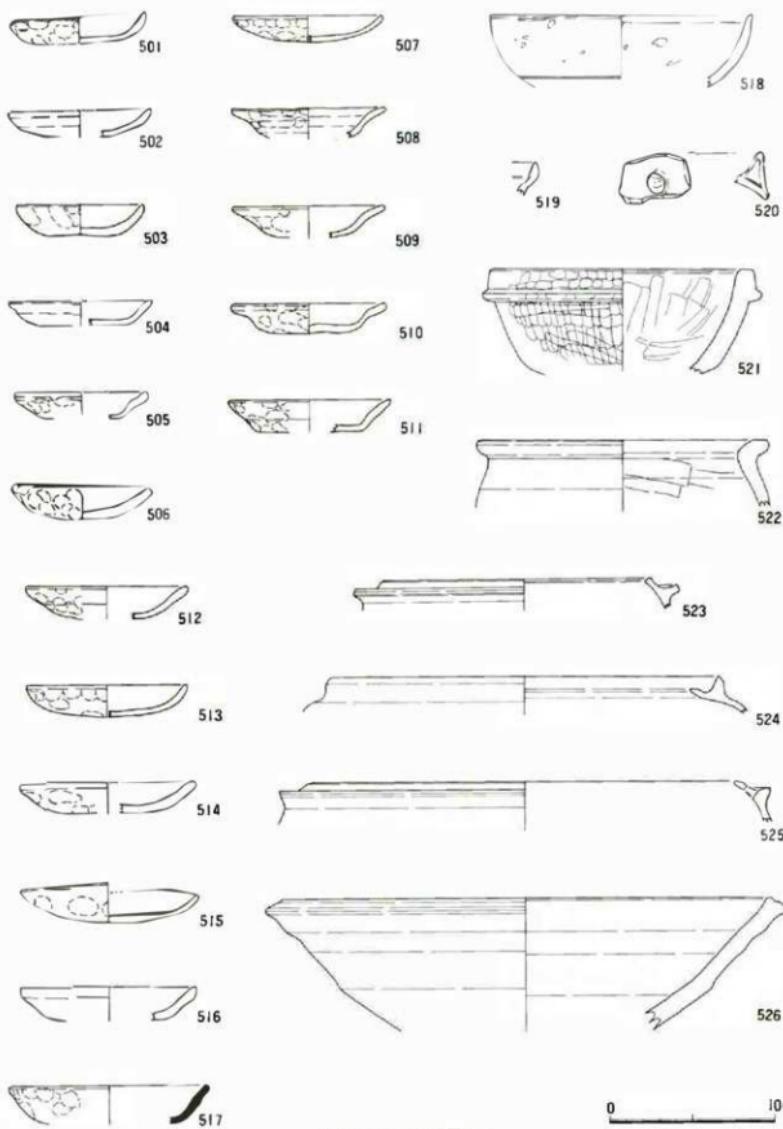
0 10cm



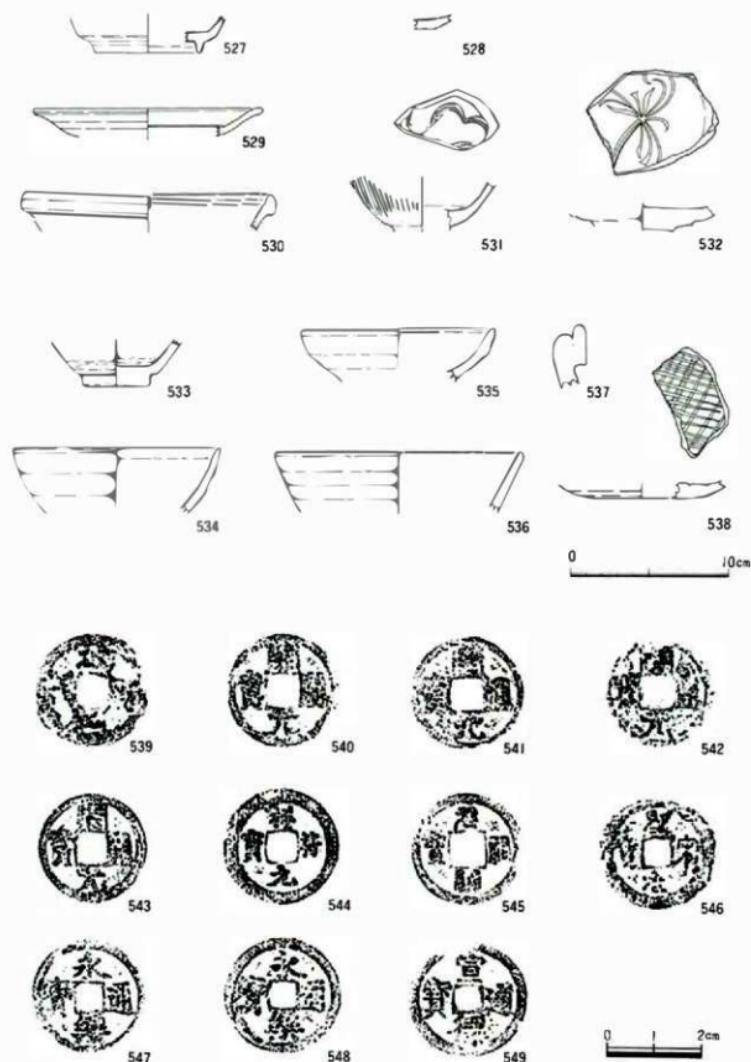
第71図 遺物実測図(30)



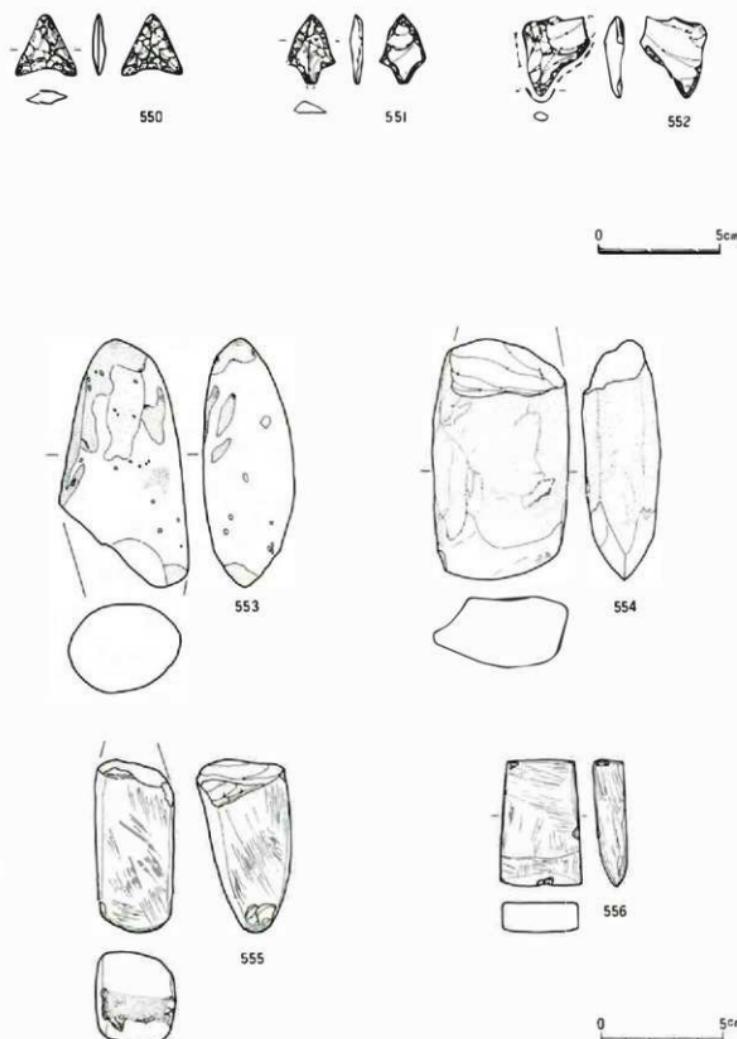
第72図 遺物実測図(31)



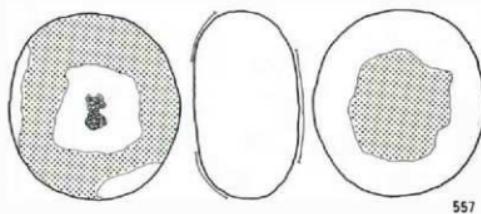
第73図 遺物実測図(32)



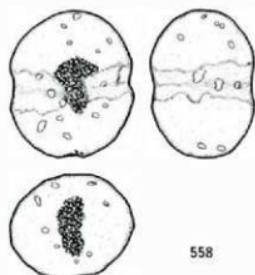
第74図 遺物実測図(33)



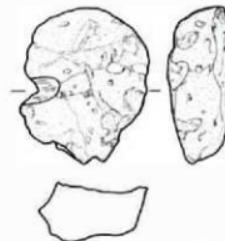
第75図 遺物実測図(34)



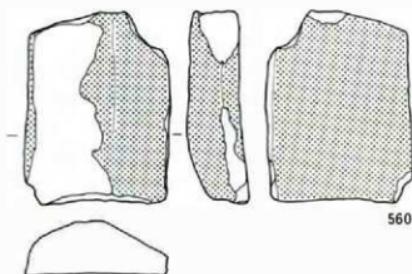
557



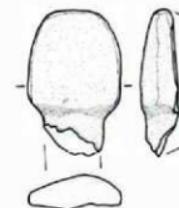
558



559



560



561

0 5cm

第76図 遺物実測図(35)

第20表 二ノ井遺跡出土器類觀察表(1)

第21表 二ノ井遺跡出土土器類觀察表(2)

被用 者名	地区 番号	部位	基準・分類	注 記	高 度(m)	北 壁 厚 度	南 壁 厚 度	胎 土	色 調 (外 面・内 面)	形 状・模 様	その他の 特徴(輪郭など)
224	H10	M	縄文土器 深鉢I-Bc					やや粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む やや粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む	明褐色	口縁部外周縁ナメ	口縁下にへたり押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
225	D 1	N	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む	に赤い斑塊	口縁部にへたり押し引きによるD 字状の割目凸凹1条	
226	I 11	M 1	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む	に赤い斑塊	胸部外周縁ナメ	口縁下にへたり押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
227	H 11	N	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む	に赤い斑塊	口縁部外周縁ナメ	口縁下に引抜き押し引きによ るD字状の割目凸凹1条
228	H 11	N	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径3mm以下の の石英を多く含む	暗	脚部外周縁位の柔軟	口縁下にへたり押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
229	I 10	N	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径2mm以下の の石英・砂利を多く含む やや粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む	暗	体部外周縁ナメ	口縁下にへたり押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
230	F 8	N	縄文土器 深鉢I-Bd					粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む	暗	体部外周縁板条板	口縁下に引抜き押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
231	D 2	N	縄文土器 深鉢I-Bc					粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径1mm以下の の石英・砂利を多く含む	暗	体部外周縁板条板	口縁下に引抜き押し引きによるD 字状の割目凸凹1条
232	D 3	N	縄文土器 深鉢I-Bd					やや粗、径1～5mm 以下の砂利を多く含む	赤い斑塊	胸部外周縁ナメ	口縁下に1条の赤文凸凹
233	H 10	N	縄文土器 深鉢I-Bd					粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む 粗、径3mm以下の の石英・砂利を多く含む	暗灰		口縁部折り返し、口縁下に1 条の赤文凸凹
234	H 10	N	縄文土器 深鉢I-Bd					やや粗、径3mm以下の の石英・砂利・赤泥 混じるを多く含む やや粗、径3mm以下の の石英・砂利・赤泥 混じるを多く含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟	口縁部折り返し、口縁下に手稿 質質感を引きによる多子状の割 目凸凹1条
235	H 11	M 1	縄文土器 深鉢I-C					粗、径1mm以下の の石英・砂利・赤泥 混じるを多く含む 粗、径1mm以下の の石英・砂利・赤泥 混じるを多く含む	赤い斑塊		口縁下・脚部にへたり押し 引きによるD字状の割目凸凹2条
236	C 4	N	縄文土器 深鉢II-Ah					粗、径4mm以下の石 英・長石・雲母を多く 含む	に赤い斑塊	体部外周縁位のVガキ	口縁部外方に肥厚
237	H 10	N	縄文土器 深鉢II-Ah					やや粗、径3mm以下の の石英を多く含む	暗	体部外周縁ナメ	口縁部外方に肥厚
238	I 10	N	縄文土器 深鉢II-Ab					やや粗、径3mm以下の の石英・砂利・雲母 を多く含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟	
239	D 1	N	縄文土器 深鉢II-Ab					やや粗、径3mm以下の の石英・砂利・雲母 を多く含む	赤い斑塊	体部外周縁ナメ	
240	I 11	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を含 む	に赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
241	I 11	M 1	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を含 む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
242	H 10	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
243	I 11	M 1	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を含 む	暗	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
244	H 10	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	暗	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
245	I 12	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
246	S 5	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	暗	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
247	H 10	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
248	I 11	V	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を含 む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	口縁部折り返して肥厚
249	H 10	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	口縁部折り返して肥厚
250	H 9	V	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を含 む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	口縁部折り返して肥厚
251	I 11	M 1	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	暗	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
252	H 9	N	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	
253	SD 2	N	縄文土器 深鉢II-Ac					やや粗、径3mm以下 の石英・長石・雲母 を多く含む	暗灰	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	口縁部折り返して肥厚
254	H 11	V	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	赤い斑塊	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	口縁部折り返して肥厚
255	I 11	M 1	縄文土器 深鉢II-Ac					粗、径3mm以下の石 英・長石・雲母を少 なく含む	暗灰	体部外周縁位の柔軟、 内面ナメ	

第22表 ニノ井遺跡出土土器類型表(3)

件数 番号	地区 遺跡	層位	基準・分類	法面 口径 基高 法面			取 土	色、調 (乳白、内面)	形状・構造	その他(他など)
				口径	基高	法面				
256	C 2	Ⅲb	縄文土器 深鉢Ⅱa			3.8	削。径3.8mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	明褐色。に赤い塊	体部。底面外側斜面 内面ナメ	
257	H 11	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
258	H 10	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
259	I 11	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
260	—	—	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	灰褐色	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
261	H 10	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り。口縁端部内方 へ折り返す
262	I 11	M 1	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。很少ない	褐色	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
263	H 11	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。(径3.5mm以下)の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
264	H 10	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
265	H 10	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。蓋母を少しだけ 含む	褐色	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
266	I 11	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅱa				直。径3.5mm以下の石 器。長石。長石を多く含む	浅褐色		口縁下にへたり押し引きによる扁 平なD字状の削り凹第1段
267	C 1	Ⅳ	縄文土器 直面Ⅱ				直。径3.5mm以下の石 器。蓋母。白色粘土。 黑色絞を多く含む	に赤い塊		口縁底部面取り。口縁下にへたり 押し引きによるD字状の削り凹第1段
268	H 10	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰa				やや粗。径3.5mm以下 の石器。蓋母。長石 を多く含む	ソリーブ形		口縁下にへたり押し引きによるO 字状削り凹第1段。口縁内方に 凹
269	H 10	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰa				やや粗。径3.5mm以下 の石器。蓋母。長石。 砂粒を含む	相		口縁下に1条の糸文凸筋
270	I 10	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰa				やや粗。径3.5mm以下 の石器。蓋母を多く含む	灰白		口縁下にへたり押し引きによるO 字状削り凹第1段。口縁内方に 凹
271	SD 2	M 1	縄文土器 深鉢Ⅰa				直。(径3.5mm以下)の石 器。長石。長石を多く 含む	に赤い塊	口縁底部面取り	口縁下にへたり押し引きによるD 字状の削り凹第1段
272	I 11	Ⅳ	縄文土器 深鉢Ⅰa				直。径2.5mm以下の砂 粒を多く含む	褐色		口縁底部下に赤成灰。口縁内 方に凹
273	I 11	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅰa				やや粗。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	褐色	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縁底部面取り
274	I 11	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅰa				直。径2.5mm以下の石 器。蓋母。白色絞を 多く含む	に赤い塊	体部外表面斜面の朱絞。 内面ナメ	口縫縫隙回み。肩部と製部の境 に段
275	I 11	Ⅹ	縄文土器 深鉢Ⅰa				直。径2.5mm以下の石 器。蓋母。長石を多く 含む	に赤い塊	肩部外表面斜面の工具の痕 ナメ	
276	H 10	IV	縄文土器 深鉢Ⅰa				やや粗。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	黒	肩部外表面カキ。肩部 外表面凹凸	口縫縫隙回み。肩部と製部の境 に段
277	H 12	Ⅳ	縄文土器 底面部			7.5	やや粗。径2.5mm以下 の石器。蓋母。長石 を多く含む	に赤い塊		口縫縫隙回み
278	H 11	Ⅳ	縄文土器 底面部			7.5	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	体部外表面。底面部内面 縫隙回み。底面部。底面部 内面凹凸ナメ	
279	H 10	N	縄文土器 底面部			6.0	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	黒	体部。底面部外表面ナメ	底面部外表面凹む。底面部立ち上がり に横
280	I 11	Ⅹ	縄文土器 底面部			3.8	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	浅褐色	体部。底面部外表面ナメ	
281	C 1	N	縄文土器 底面部			7.4	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	体部。底面部外表面ナメ	底面部凹面に
282	H 11	Ⅳ	縄文土器 底面部			10.4	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	浅褐色	体部外表面ナメ	
283	—	—	縄文土器 底面部			5.6	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	体部。底面部外表面ナメ	底面部外表面凹む。底面部立ち上がり に横
284	G 9	Ⅳ	弥生土器 壺				やや粗。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	明褐色	体部内面ハケナメ	体部外表面2名尖突。斜光穴、通 透孔ナメ
285	H 11	Ⅳ	弥生土器 壺				やや粗。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	体部外表面ナメ	口縫縫隙回み。底面部内面 凹凸ナメ
286	D 1	Ⅳ	弥生土器 壺				直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	難波外ハケナメ	網内網?
287	D 1	Ⅳ	土師器 壺			4.0	直。径2.5mm以下 の砂粒を多く含む	に赤い塊	底面部ナメ。体部外 表面凹凸ナメ。底面部内面 凹凸ナメ	底面部。底面部内面

第23表 二ノ井遺跡出土土器類觀察表(4)

被目 番号	地区 遺構	層位	基種・分類	法量 (cm) 口径 高さ	底形	土	色調 (外面・内面)	形態・調査		その他 (知見など)
								表面	底面	
288	C 0	IV	土器器 小切跡	4.9	3.1	3.15	灰、径3mm以下の砂 粒を含む	暗灰、赤褐	体部外側面サエ・板 ナメ、底部内側面ナメ	
289	SX 3	M 1	土器器 小切跡			3.8	灰、径3mm以下の砂 粒を含む、長石を含む	灰褐、赤褐	体部外側面サエ・板 ナメ、底部内側面ナメ 体部内側面ナメ	
290	H 10	V 1	弥生土器 壺			4.05	灰、径3mm以下の砂 粒を含む	暗灰、黑褐	体部外側面サエ・板 ナメ、底部内側面ナメ	高麗期?
291	C 0	IV	土器器 小切跡	6.2	4.2	3.45	灰、径3mm以下の砂 粒を含む	灰、灰1mm以下の砂 粒を含む	灰、灰1mm以下の砂 粒を含む	体部外側面・底部内側 面サエ、底部内側 面ナメ
292	D 0	IV	弥生土器 壺			4.6	灰、径1mm以下の砂 粒を含むや多く含む、 金葉付、石英を含む	浅黄褐、灰白	体部外側面ハケメ、内面 板ナメ	高麗期?
293	H 10	WBc	弥生土器 台付壺			3.3	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 石英付、石英を含む	浅黄褐、灰白	体部外側面ハケメ、内面 板ナメ	高麗期?
294	H 9	IX	弥生土器 壺			5.4	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 石英付、長石を含む	浅黄褐、灰 灰白	体部外側面サエ・脚 サエ、外側ハケメ、底面 内側面ナメ	高麗期?
295	H 10	V 1	土器器 口			4.0	灰、径6mm以下の砂 粒を含む	灰白	底部内側面ナメ	
296	F 6	IIIa	弥生土器 壺			5.75	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 少頭、長石を含む	灰白、灰 灰白	体部外側面ハケメ、 内面板ナメ	高麗期?
297	H 9	X	弥生土器 壺			6.6	灰、径3mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 基盤を含む	灰、灰 灰白	体部外側面ハケメ、内面 板ナメ、底部内側面ナ メ	高麗期?
298	SX 3	M 1	弥生土器 壺			12.0	やや灰、径3mm以下 の砂粒を含む	灰褐色	体部外側面ハケメ、 内面板ナメ、底部内側面ナ メ	台脚片、朝日期?
299	H 10	V 1	弥生土器 壺			5.0	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、長石を含む	灰、灰 灰白	体部外側面ハケメ、 内面板ナメ	高麗期?
300	D 3	V	弥生土器 壺			5.5	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 石英付、石英を含む	浅黄褐	体部外側面ハケメ、 内面板ナメ	
301	SX 3	M 1	土器器 台付壺			6.6	灰、径3mm以下の砂 粒、石英、長石、ナ イフトを多く含む	暗	台脚内側面オサエ、 底部内側面ハメ	
302	C 0	IV	土器器 台付壺			8.3	灰、径3mm以下の砂 粒、石英、長石、石 通路を含む	灰 灰白	底部内側面ナメ、底部 外側面ハメ	底部・台脚片
303	H 9	V 1	弥生土器 壺			6.5	灰、径1mm以下の砂 粒を多く含む	灰、赤黒	体部外側面ナメ、底部 外側面ナメ	
304	H 11	V	弥生土器 壺			6.9	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 少頭、長石を含む	浅黄褐、深 灰	体部外側面ナメ、 内面板ナメ	高麗期?
305	C 0	IV	弥生土器 壺			7.1	灰、径4mm以下の砂 粒、石英、基盤、赤 褐色を多く含む	灰 灰白	台脚内側面ハメ、台 脚内側面ナメ	台脚片、朝日期?
306	H 11	V 1	弥生土器 台付壺			5.9	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 少頭、長石を含む	灰 灰白	台脚外側面ナメ、底部 外側面ナメ	高麗期?
307	H 10	V 1	弥生土器 壺			7.9	灰、径2mm以下の砂 粒を多く含む、長石 を含む	灰、暗灰、深 灰	体部外側面ナメ、 内面板ナメ、底部内 側面ナメ	高麗期?
308	H 11	V 1	弥生土器 口			3.1	灰、径3mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 少頭、長石を含む	灰 灰、灰灰	体部外側面ナメ、底部 内側面ナメ	体部外側面中位に灰 斑、底部内側面ナメ
309	H 10	IX	弥生土器 台付壺			6.5	灰、径3mm以下の砂 粒を含む、灰石を含 む	暗	底部内側面ナメ、台 脚内側面ナメ	底部内側面ナメ
310	I 11	XII	弥生土器 台付壺			7.8	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 長石を含む	灰灰、灰 灰白	底部内側面ナメ、台 脚外側面ナメ	高麗期?
311	H 10	V	弥生土器 壺			5.9	灰、径1mm以下の砂 粒を含む、金葉付、 少頭、長石を含む	浅黄褐、灰白	体部外側面ナメ、 内面板ナメ	高麗期?
312	D 1	IV	弥生土器 壺			5.2	灰、1.2mm以下の砂 粒を含む	明赤褐、黑 褐色	体部内側面ナメ	体部下位煤付着
313	H 11	V	弥生土器 壺	9.6			やや灰、径3mm以下 の砂粒、石英、雪化 粧を多く含む	浅黄褐	口縁・体部外側面 ナメ	口縁外側面2条皮膚
314	D 2	IV	弥生土器 小型 二重切跡	9.6			やや灰、径3mm以下 の砂粒、石英、雪化 粧を多く含む	灰白	口縁・体部外側面 ナメ	口縫外側面3条皮膚、 底部皮膚状
315	C 1	IV	土器器 小型 二重切跡	17.4			やや灰、径3mm以下 の砂粒、石英、雪化 粧を多く含む	明赤褐	口縁・体部外側面 ナメ	口縫・体部片
316	D 1	V	弥生土器 壺	8.4			やや灰、径3mm以下 の砂粒、石英、雪化 粧を多く含む	口縫・体部外側面 ナメ	口縫・体部外側面 ナメ	口縫・底部外側面 2条皮膚
317	I 10	XII	弥生土器 壺	9.7			灰、径6mm以下の砂 粒を含む	浅黄褐	口縫内側面ナメ	口縫底部外側面
318			土器器 高环	17.5			灰、径5mm以下の砂 粒を含む	暗	口縫内側面ナメ	

第24表 ニノ井遺跡出土土器類観察表(5)

地番 番号	地区 道機	層位	器種・分類	法 量 (cm) 口径 基高 底径	胎 土	色 調 (外側・内面)	整形・調整	その他 (釉薬など)			
								青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を少々含む。	浅黄褐	口縁部内外横ナメ	口縁部外面3条深羅
319	H 10	X	弥生土器 壺	17.2							
320	SK 3	M 1	土師器 高环	23.4				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を少々含む。	浅黄褐	口縁部内外面に沿 い槽、灰	口縁部内面14条深羅
321	H 10	IX	土師器 小型丸底壺	8.9				青、ぼく1mm以下の砂 粒を少々含む。	明赤褐	頭部～体部内外面に 沿う。	頭部～体部片
322	H 10	IX	土師器 小型丸底壺					青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。	明赤褐、棕	頭部～体部内外面に 沿う。体部内面凹ササ、 頭部内面凹ナメ	頭部～体部片
323	F 7	IV	弥生土器 壺	11.2	やわら			青、ぼく1mm以下の砂 粒・長石・石英を含 む。	浅黄褐、棕	頭部内面凹ナメ、頭部 外面ハメ後、カキ	頭部片 高縁期 2個の透かし 孔
324	SD 1	M 1	土師器 壺台					青、ぼく1mm以下の砂 粒・長石・石英を含 む。	棕	受流部内外面ハメ 後、カキ	頭部透かし孔
325	G 11		土師器 壺					青、ぼく1mm以下の砂 粒を多々含む。金玉 母・長石・茶色を含 む。	棕	頭部外側ハケメ、頭部 ～体部内面板ナメ	体部外側斜文
326	F 7	IIIb	土師器 高环					青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	明赤褐	頭部外側・底面内面に 沿う。頭部内面凹ナメ	
327	SD 1	M 1	土師器 高环					青、ぼく1mm以下の砂 粒・長石・茶色を含 む。	棕	頭部内面ハケメ、外面 カキ	頭部片、頭部下端4cmに透 かし孔、頭部内面中央に伸状の刺 突有利
328	I 11	VI	土師器 壺台	9.0				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・茶 色を含む。	赤褐色	頭部外側面ハキ	
329	D 1	IIIa	土師器 高环					やわら。ぼく1mm以下の砂 粒を含む。	灰白	环部内面横ナメ	
330	C 0	IV	土師器 壺台					青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	明赤褐	受流部内面ハキメ、頭部 内面凹ササ、内面ハサ マシカキ	頭部片、頭部上位3cm透かし 孔
331	G 11		土師器 高环					青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	浅黄褐	頭部外側面ハキメ、内面 板ナメ	
332	G 10		土師器 高环					青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	頭部外側面ハケメ、内面 凹ササ	頭部片
333	I 10	X	土師器 高环					やわら。ぼく1.3mm以 上の砂粒を含む。	棕	頭部外側面ハキメ、内面 板ナメ	頭部片、外側下位1条深羅、内 面中央刺突
334	H 10	VII	土師器 高环					やわら。ぼく3mm以 上の砂粒を含む。	浅黄褐	頭部外側面ハキメ、内面 板ナメ	頭部片、4cm透かし孔。 頭部2段
335	SX 3	M 1	土師器 高环	17.5	9.6	7.5		青、ぼく5mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	环部内面凹カキメ、頭 部外側面ハキメ、頭部内 面板ナメ	口縁～頭部、頭部小型斜面無 し?
336	H 9	VII	弥生土器 壺	16.4				青、ぼく5mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	浅黄褐	口縁部～頭部内外面横 ナメ	口縁～頭部、口縁部19cmの透 かし孔、頭部外側面に細密の三角 形文、成形窓、輪入筋?
337	C 1	IIIa	弥生土器 壺					青、ぼく5mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	頭部内面横ナメ	口縁部外側斜文、朝日期?
338	H 10	IX	土師器 小型壺	8.4				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	口縁部内面ハキメ・指 ササエ、頭部外側面ハ ケメ、体部内面削り	
339	SD 1	M 1	土師器 壺・片口壺	20.6				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。	棕	口縁～頭部内外面横ナ メ	口縁部外面・頭部内面斜文、口 縁部内面羽状斜文、口縁部5cm 底深羅
340	SD 1	MM	土師器 壺・空壺	9.5				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。	棕	口縁内面横ナメ、体 部内面ハキメ、内面板 ナメ	
341	H 10	VII	土師器 壺・片口壺	21.45				青、ぼく5mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	頭部外側面ハキメ	口縁～頭部片、口縁部内面羽状斜 文、口縁部外側斜文
342	C 0	IV	土師器 壺	19.1				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	明赤褐	口縁～体部外側面ハキメ、 体部内面板ナメ	口縁部底面・口縁部内面斜文、口 縁部外側面羽状斜文
343	G 5	IV	土師器 壺・坪型壺	15.9				青、ぼく1mm以下の長 石・石英・金玉・ナ ードを含む。	明赤褐	口縁部内外面横ナ メ	口縁部～頭部片、口縁部底面・ 頭部坪型在上部、頭部外側面 羽状斜文、頭部外側面のハ タメ
344	C 0	IV	土師器 壺・坪型壺					やわら。ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	体部外側面ハキメ、内面 板ナメ・ハサマ	1部外側削り口
345	F 5	IV	土師器 壺・坪型壺	20.7				青、ぼく1mm以下の長 石・石英・金玉・ナ ードを含む。	棕	口縁部内外面横ナ メ	1部底～頭部片、頭部外側面C 型、口縁部外側削り口見によ る状状の刃削文、頭部外側面最 高部のハケメと成形窓が並ぶ
346	H 9	VII	弥生土器 壺					青、ぼく1mm以下の長 石・石英・金玉・ナ ードを多く含む。	灰白	体部下位外側面ハ ケメ、体部中位内面横ナ メ、体部下位～底面内面 ハケメ	体部～底部片、体部上位～中位 に腰彌刺斜文、体部上位～中位 に腰彌刺斜文、成形窓・組文
347	V	Ⅰ脚2 脚・耳型壺	17.6					やわら。ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を多々含む。	明赤褐	頭部外側面ハキメ・ハサ マ、頭部内面カキ	口縁部外側羽状斜文
348	SD 1	B	土師器 壺	12.5				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。	灰白	口縁～頭部内外面横ナ メ	口縁部外側2条深羅
349	C 1	V	脚2 脚・2脚出	16.8				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	頭部外側面ハキメ	口縁部外側斜文、内面羽状 斜文
350	D 1	IV	弥生土器 壺	13.2				青、ぼく1mm以下の砂 粒を含む。長石・石 英を含む。	棕	体部外側面ハキメ、内 面一部板ナメ	口縁部外側斜文、頭部透かし 孔、体部外側波文

第25表 二ノ井遺跡出土土器類観察表(6)

件名	地区 遺構	種類	基幹・分類	寸法 (cm)	地 質	胎 土	色 調 (外面・内面)	特 徴	観察	その他 (難点など)
底高	底径	底高	底径							
351	H 9	■	陶生土器 壺	13.5	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい暗 赤	体部外表面ハケメ、内 面一部剥落ナメ	□輪郭外側突出、輪底通かし 孔、体部外側底突起 92と同一 個体
352	C 9	IV	土師器 壺	16.9	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	明赤褐、にぶ い黃褐	輪郭外表面ガキ メ	□輪郭外沿3条沈線、円形削尖 文
353	I 10	VII	土師器 壺	16.0	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい暗 赤	体部外表面ハケメ、内面 上4段、輪底内面ハケ メ	□縁部へ剥離片
354	H 10	■	土師器 壺		泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい暗 赤	体部外表面ハケメ、内面 上4段、輪底内面ハケ メ	□縁部へ剥離片、輪部に削尖文 ある凸部へ至
355	F 7	■■	陶生土器 壺	19.05	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい暗 赤	口縁～輪郭部外表面ハケ メ、剝離片底付オサメ	□近江系縦入人型口縁部外表面削 尖文、外縁保有者
356	F 8	IV	土師器 壺	21.8	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい暗 赤	口縁内外面織ナメ	□縁部外沿3条沈線、内面削尖 文
357	C 0	IV	土師器 壺	14.7	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む	にびい赤褐	口縁～体部内外面織ナ メ	
358	I 11	VII	土師器 壺	14.8	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	口縁～体部外表面ハケメ、 体部内面ハケメ	□口縁部外表面付
359	SK10	M I	土師器 く字型	17.7	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい赤褐	口縁外表面ハケメ、体部 内面織ナメ	□縁部外表面、体部外表面削尖文
360	C 0	IV	土師器 く字型	15.2	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	赤褐	輪郭外表面ハケメ、口縁 部内面織オサメ	
361	C 0	IV	土師器 く字型	17.0	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい赤褐、 明赤褐	体部外表面、口縁部内 面織ナメ、口縁外表面 織ナメ	□縁～体部片
362	E 6	IV	陶生土器 壺	23.3	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	口縁～体部内外面ハケ メ	朝日系？
363	C 0	IV	土師器 く字型	17.2	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	黒褐、赤褐	口縁～体部外表面織ナ メ、体部内面ハケメ	□縁～体部片
364	H 10	VII	土師器 く字型	13.2	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	輪郭～体部内面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～輪郭片、頭部外表面削 尖文、外縁保有者
365	H 10	IX	土師器 く字型	14.5	泥質 砂質	灰白	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	体部内面織オサメ、外 面ハケメ	
366	H 10	X	土師器 く字型	14.1	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	体部内面織オサメ、外 面ハケメ	
367	H 10	VII	土師器 多腹	15.2	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	赤褐	輪郭～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～輪郭片、外面保有者
368	土師器 苦	泥質 砂質	16.0	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	輪郭～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～輪郭片、頭部外表面削 尖文、外縁保有者	
369	H 10	VII	土師器 苦	15.8	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい黄褐	頭部～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～輪郭片、頭部外表面削尖文、 外縁保有者
370	SD 1	M I	土師器 苦	16.4	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい黄褐	輪郭～体部内面ハケ メ、体部内面織オサメ	□縁～体部片、頭部I 基沈線
371	H 10	VII	土師器 苦	17.6	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	輪郭～体部内外面ハケ メ、黒、輪指モザイク	□縁～輪郭片、頭部外表面削 尖文、外縁保有者
372	SD 1	M I	土師器 苦	20.0	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい黄褐	輪郭～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～体部片、頭部内外面 織ナメ
373	H 10	VII	土師器 苦	23.25	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	明赤褐	輪郭～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～輪郭片、外面保有者
374	H 10	VII	土師器 苦		泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	体部外表面ハケメ、口縁 部内面織ナメ	
375	D 2	IV	土師器 壺	14.1	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	口縁～体部内外面ハケ メ	□縁～体部片、奈良期？
376	D 1	II	土師器 壺	16.1	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白、 浅黃褐	口縁～体部内外面ハケ メ	調整板塗札
377	SK 3	M I	土師器 壺	11.5	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	浅黃褐	口縁～体部内外面ハケ メ	□縁～体部片、奈良期？
378	SK 1	M I	土師器 壺	11.7	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	口縁～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	□縁～体部片、外面保有者
379	SK 12	M I	土師器 壺	25.5	泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白	口縁～体部内外面ハケ メ、輪指モザイク	
380	H 10		土師器 壺		泥質 砂質	灰	（1.8 cm以下の砂 質）4段の長石・基 盤色：黄褐色を含む 底2 cm以下砂質を含む やや粗、底2 cm以下 の砂質を含む	にびい白、 浅黃褐	底部外表面ハケリ、底 部内面ハケメ、底部 内面織ナメ	体部～底部片、底部丸底、体部 内面織付
381	SD 1	III a	須志器 基盤		砂質	灰				ありり有り
382	F 8	IV	須志器 基盤		砂質	灰白				口縁端部屈曲し直下に下る
383	G 8	III a	須志器 基盤		砂質	灰白				口縁端部切出し直下に下る
384	F 7	III b	須志器 基盤		砂質	明キーパー灰				口縁端部屈曲し直下に下る

第26表 ニノ井遺跡出土土器類觀察表(7)

番号 通号	地区 遺構	部位	器種・分類	量 (g)		地 土	色 調 (外面・内面)	整形・調整	その他 (輪郭など)	
				目	基					
393	C 0	IV	直筒器 直B	7.4	(1.8)	灰	灰	天井部外面回転へラ削り	返り端部残地。天井部隕灰	
394	F 7	Ⅳ	直筒器 环身B			やや粗	灰白	底面外周回転へラ削り		
395	C 1	B	直筒器 环身B			やや粗	灰白	底面外周回転へラ削り		
396	F 7	Ⅳ	直筒器 环身B			素	灰白	底面外周へラ削り		
397	D 2	B	直筒器 环身B			やや粗	灰白	底面外周へラ削り		
398	F 7	Ⅳb	直筒器 环身A			細末	灰、黒、灰オーラープ	底面外周回転へラ削り		
399	G 8	Ⅳ	直筒器 环身B			やや粗	灰白	底面外周回転へラ削り	底部隕灰	
400	C 1	Ⅳa	直筒器 直B		(1.7)	やや粗	灰白	天井部外面回転へラ削り	つまみは扁平で中央ふくらむ、天井部隕灰	
401	F 7	Ⅳa	直筒器 直B		(3.0)	粗	灰白	天井部外面回転へラ削り 天井部内面中央部	つまみは中央やふくらむ	
402	SD 10	M 1	直筒器 环身B		11.1	やや粗	灰白	底面外周中央部、底面外周へラ削り	底部内面平滑	
403	SD 1	M 1	直筒器 环身B		12.0	素	灰白	底面外周回転へラ削り	底部内面平滑	
404	F 8	Ⅳ	直筒器 环身B		11.1	やや粗	灰白	底面外周へラ削り		
405	F 8	Ⅳ	直筒器 环身B		9.9	やや粗	灰白	底面外周へラ削り		
406			直筒器 环身B	14.7	4.2	素	灰白	底面外周へラ削り		
407	E 6	24	直筒器			素	灰オーラープ	底面外周回転へラ削り		
408	C 0	B	直筒器 环身A	8.9	(2.2)	素	灰	底面外周へラ削り	底部隕灰、蓋の可能性有り	
409	F 8	Ⅳ	直筒器	16.2	(3.0)	粗	灰白	底面外周へラ削り		
410	C 2	Ⅳa	直筒器 枝		15.6	やや粗	灰白	体部内面乳頭ナギテ、体部外下面下段回転へラ削り		
411	SD 2	M 1	横切腹器			素	灰オーラープ	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
412	C 1	Ⅳa	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
413	D 2	M 1	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
414	C 2	B	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
415	SX 3	M 1	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
416	D 1	Ⅳa	横切腹器			素	灰オーラープ	外縁部付乳頭ナギテ	内外面碌地	
417	D 1	Ⅳa	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	外縁地	
418	SD 1	Ⅳa	横切腹器			素	灰	外縁部付乳頭ナギテ	外縁地	
419	C 2	Ⅳb	弧形陶器 斜壁型		11.6	素、径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白	口縁部所縫		
420	SK 2	M 1	弧形陶器 放置		9.0	素、径2mm以下の石英を複数に含む	灰白	体部内面に不明瞭な段	口縁部付花避け掛け	
421	SD 2	M 1	弧形陶器 放置		13.1	素、(径2mm以下の長石、(径2mm以下の長石を複数に含む	灰白	体部内面に段	口縁部付近掛け掛け	
422	SD 2	Ⅳb	灰陶陶器 直		6.6	素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白	高台断面直(正方形、底面外周へラ削り)	体部下方まで造出付け	
423	G 9	Ⅳ	灰陶陶器 直	12.4	2.7	6.4	素、(径1mm以下の石英を複数に含む	高台断面直(正方形、底面外周へラ削り)	口縁部付近掛け掛け	
424	D 1	Ⅳ	灰陶陶器 直	12.6	2.6	7.2	素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	浅黄褐	口縁部付近掛け掛け	
425	SX 4	M 1	灰陶陶器 素	15.2		素、(径1mm以下の長石を複数に含む	灰	口縁部わざかに外側	口縁部内面碌地	
426	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素	13.3		素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白	口縁部外側	口縁部付近掛け掛け	
427	F 6	Ⅳ	灰陶陶器 素	16.0		素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白			
428	C 1	Ⅳa	灰陶陶器 素	16.3		素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白	口縁部や外反	口縁部～体部上方に掛け掛け	
429	SD 2	M 1	灰陶陶器 素	18.0		素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白		CH4部付近掛け掛け	
430	C 1	Ⅳa	灰陶陶器 素	17.9		素、(径1mm以下の砂粒を複数に含む	灰白	口縁部や外反	口縁部付近掛け掛け	
431	F 6	Ⅳ	灰陶陶器 素	12.7	3.7	7.3	やや粗、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形、口縁部底部わざかに外反、体部外周張り	掛け掛け
432	C 1	Ⅳa	灰陶陶器 素	13.5	4.0	6.8	素	体部外周下方(直)へラ削り	掛け掛け	
433	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素	16.3	5.2	7.5	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形、底面外周も切られ	掛け掛け
434	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素	15.0	5.2	7.2	素、(径2mm以下の砂粒を少數含む	浅黃	高台断面下方(直)へラ削り、高台断面台形、底面外周も切られ	掛け掛け
435	E 6	Ⅳ	灰陶陶器 素	15.65	5.1	7.9	素、(径1~4mmの砂粒を少數含む	灰白	高台断面直(日月形)、底面外周も切られ	掛け掛け
436	I 12	B	灰陶陶器 素		6.0	素、(径1mm以下の長石を多く含む	灰白	高台断面直(日月形)、底面外周も切られナデ酒		
437	D 0	B	灰陶陶器 素		6.0	素、(径2mm以下の長石を多く含む	灰白	高台断面三角形		
438	P 23	M 1	灰陶陶器 素		6.6	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形		
439	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素		6.8	素、(径2mm以下の長石を複数に含む	灰白	高台断面台形		
440	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素		6.0	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形		
441	C 1	Ⅳ	灰陶陶器 素		6.4	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形、底面外周も切られ		
442	C 1	B	灰陶陶器 素		6.6	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面直(日月形)の角		
443	SD 2	Ⅳb	灰陶陶器 素		6.7	素、(径1mm以下の砂粒を少數含む	灰白	高台断面台形、底面外周も切られ		

第27表 二ノ井遺跡出土土器類觀察表(8)

件名 番号	遺構 遺構	層位	器種・分類	法 量(cm) 口径 高さ 底径	施 土	色 調 (外面・内面)	整形・調整	その他(釉薬など)		
								底 部	高 度	
444 C I	B c	灰陶陶器 瓢		5.2	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形			
445 G 10	IV	灰陶陶器 瓢		6.6	素、径2mm以下の長石を僅かに含む	灰白	高台断面幅の狭い三角形、底部外側面斜め系切り			
446 H 11	II	灰陶陶器 瓢		8.2	素、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面幅長の三角形、底部外側面斜め系切り			
447 G 9	VII	灰陶陶器 瓢		7.2	やや粗、径1mm以下の砂粒を含む	に赤い黃澄	高台断面台形			
448 C 2	I	灰陶陶器 瓢		4.0	やや粗、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	に赤い黃澄	高台断面台形、底部外側面斜め系切り			
449 SD 2 M 1		灰陶陶器 瓢		8.2	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形			
450 SX 4 M 1		灰陶陶器 瓢		8.0	素、径2mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面三日月形			
451 SD 2 M 1		灰陶陶器 瓢		8.6	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形			
452 D 1	V	灰陶陶器 底口瓶	20.6	素、径3mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	輪積み、ナデ調整	内外面ハケ埋り			
453 SD 2 M 1		灰陶陶器 底口瓶		12.0	素、径3mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	輪積み、ナデ調整	底面内面陥没、体部下方ハケ埋り		
454 S 3	I	灰陶陶器 瓢			やや粗、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	輪積み、ナデ調整			
455 D 0	IV	山茶碗 瓢	7.9	3.65	やや粗、径1mm以下の砂粒を少額含む	灰白	高台断面台形、口縁端尾や内外反、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
456 F 7	III	山茶碗 瓢	7.3	1.7	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	回転糸切り底、口縁端尾			
457 D 1	IV	山茶碗 瓢	8.45	2.1	4.1	やや粗、径1~4mm以下の砂粒を最も含む、底部黒色斑点多く含む	灰白	回転糸切り底、体部中央に横		
458 SD 1 III b	山茶碗 瓢	7.9	2.0	4.3	やや粗、径1~5mm以下の砂粒を少額含む、黒色斑点を含む	灰白	口縁端部丸い、体部に横、糸切り底	北部系		
459 D 0	IV	山茶碗 瓢	8.6	2.35	5.5	やや粗、径1~5mm以下の砂粒を少額含む、底部黒色斑点多く含む	灰白	回転糸切り底、体部に横、口縁端部肥厚		
460 F 7	III	山茶碗 瓢	10.45	1.83	やや粗、径1~2mm以下の砂粒を少額含む	灰白	回転糸切り底、体部不明瞭な横			
461 G 8 III a	山茶碗 瓢			4.5	素、径1mm以下の長石、砂粒を多く含む	灰白	高台断面三日月形			
462 D 1 III a	山茶碗 瓢			4.0	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	高台断面台形、底部外側面斜め系切り			
463 D 2 III b	山茶碗 瓢			3.8	素、径2mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面四角形			
464 C 2 III b	山茶碗 瓢			3.8	素、径2mm以下の素白、長石を含む	灰白	高台断面長い台形、底部外側面斜め系切り			
465 D 1 III a	山茶碗 瓢			3.6	素、径1mm以下の砂粒を多く含む	灰白	回転糸切り底			
466 H 9 IV	山茶碗 瓢			4.8	素、径2mm以下の長石、石英を含む	灰白	高台断面台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
467 C 1 II c	山茶碗 瓢			4.9	素、径1mm以下の砂粒を僅かに含む	灰白	高台断面三脚形、底部外側面斜め系切り			
468 E 6 VI	山茶碗 瓢			7.15	粗	灰白	高台断面長い台形、底部外側面斜め系切り、口縁端部肥厚	在地性?		
469 D 2 III a	山茶碗 瓢			7.2	やや粗	灰白、オーラ ブル、黒	高台断面台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
470 D 2 IV	山茶碗 瓢			7.1	粗	灰白	高台断面長い台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
471 D 2 III	山茶碗 瓢			7.0	粗	灰白	高台断面長い台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
472 C 2 IV	山茶碗 瓢			7.9	粗	灰白	高台断面長い台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
473 H 9 IV	山茶碗 瓢			7.9	粗	灰白	高台断面長い台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
474 F 8 III a	山茶碗 瓢			7.1	粗	灰白	高台断面長い台形、高台断面斜め系切り、底部外側面斜め系切り			
475 G 9 IV	山茶碗 瓢			7.9	粗	灰白、黄灰	高台断面長い台形、底部外側面斜め系切り一芯ナメ			
476 C 2 IV	山茶碗 瓢			8.1	やや粗	灰白	高台断面長い台形、底部外側面斜め系切り			
477 SD 2 M 1	山茶碗 瓢			7.3	やや粗	灰白	高台断面台形、底部外側面斜め系切り			
478 SD 2 III b	山茶碗 瓢			7.9	素	灰白	高台断面三角形			
479 SD 1 M 1	山茶碗 瓢			11.5	素、径1mm以下の砂粒を含む	灰白	口縁端部肥厚	北部系		

第28表 ニノ井遺跡出土土器類觀察表(9)

名目 番号	地区 遺棲	編位	器種・分類	重 量 (kg)	口徑 前高 壁厚	地 土	色 調 (外面・内面)	整形・調整	その他(軸裏など)
480	D I	B	山茶碗 細		7.8	や中粗	灰白	高台端 部斜削、底部外側削 れ切り	
481	D I	■a	山茶碗 細		7.95	粗	灰白	高台端 部斜削、底部外側削 れ切り	
482	C I	■a	山茶碗 細		8.65	粗	灰白	高台端面 三角形、高台 端部斜削、底部外側 木打削	
483	D I	IV	山茶碗 細		8.65	粗	灰白	高台端面四角形、底部 外側削、底部 外側斜削	
484	SD 2 M 1	■a	山茶碗 細		8.4	や中粗	黄灰	高台端面小さな台形	
485	SK 2 ■a	山茶碗 細		13.0	や中粗	灰白	高台端面四角形、高台 端部斜削		
486	SZ 1	■a	山茶碗 細		10.75	や中粗	灰白	高台端面行削、高台端 部斜削、底部外側削 れ切り	
487	SD 2 M 1	山茶碗 細			10.4	粗	灰白	高台端面直角形、 高台端部斜削、底部 外側斜削	
488	D I	■a	山茶碗 細		9.6	粗	灰白	高台端面直角形、 高台端部斜削、底部外 側斜削	
489	D I	B	山茶碗 細		8.7	や中粗	灰オーラブ	高台端面行削、高台端 部斜削、底部外側削 れ切り	
490	SD 5 M 1	山茶碗 細			9.6	や中粗	灰白	高台端面直角形、底部 外側削、底部 外側斜削(ナメなし)	
491	D I	■a	山茶碗 細	12.6	5.0	5.4	黒	墨厚済手、高台端面三 角形	小振りの小輪
492	G 9 IV	山茶碗 細	15.8	5.25	7.8	や中粗	灰白	墨厚済手わざかに内削。 底部外側削、底部 外側斜削	
493	D I	■a	山茶碗 細	15.8	5.0	6.7	や中粗。径1mm以下 の砂粒を含む	口縁部墨厚や外反、高 台粗削	
494	I II IV	山茶碗 細	14.6			や中粗。	灰白		
495	SK 2 ■a	山茶碗 細	14.6			や中粗。	口縁部や外反		
496	SX 3 M 1	山茶碗 細	15.8			や中粗。	口縁部外反		
497	F 7 ■a	山茶碗 細	17.3			や中粗。	口縁部外反		
498	SK 2 ■a	山茶碗 細	8.0			や中粗。	口縁部外反		
499	D 0 IV	山茶碗 細	19.5			や中粗。	口縁部外反		
500	G 9	山茶碗 細		6.55	底、径1～2mm以下 の砂粒を少量含む	灰白	体部下方墨手、高台端 部墨手内削、10mm 底部外側斜削、底部 外側斜削		
501	SK 6 V	土器器皿A類	8.2	1.8	黒	にふい槽	にふい槽		
502	SD 2 M 1	土器器皿A類	8.6		黒	にふい槽	体部内外削直角 部内削直角		
503	F 8 ■a	土器器皿A類	7.6	1.85	黒	にふい黃槽、 底	にふい黃槽、 底	体部～底部外側削直角、 体部内削直角	
504	SK 2 M 1	土器器皿A類	8.8		黒	底	底	底部外側削直角	底部外側削直角
505	SK 3 M 1	土器器皿B類	8.1		黒	にふい槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ、体部 三明削な段、口縁部 墨厚	口縁部内外削に埋け若	
506	SK 1 M 2	土器器皿B類	8.35	3.05	黒	灰黄褐	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
507	D I B	土器器皿B類	9.05	1.6	黒	にふい槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
508	SK 2 M 1	土器器皿B類	9.3		黒	地	体部外側削直角、内削 直角	口縁部外側墨付着	
509	SK 2 M 1	土器器皿B類	9.2		黒	地	体部～底部外側削直角、 口縫部墨付着	口縁部外側墨付着	
510	D I ■b	土器器皿B類	9.2	1.8	黒	にふい黃槽、 灰	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ、体部 三明削な段		
511	D I ■b	土器器皿B類	9.75		黒	にふい槽、現 灰	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ、体部 三明削な段		
512	C I ■a	土器器皿B類	9.85		黒	にふい黃槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ、体部 三明削な段		
513	D I B	土器器皿B類	9.85	2.00	黒	にふい槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
514	SK 1 M 1	土器器皿B類	10.6		黒	にふい黃槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
515	D I B	土器器皿B類	10.9	2.4	黒	にふい槽	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
516	SD 1 M 1	土器器皿B類	10.7		黒	灰白	体部～底部外側削直角、 体部内削直角ナメ		
517	C 1 ■a	土器器皿C類	12.00		黒	浅墨	体部～底部外側削直角		

第29表 ニノ井遺跡出土土器類觀察表(10)

地名 番号	地名 番号	位置	岩相・分類	厚度 (cm) □底層 △中層 ○上層	地 質	地 形	地 調	地形・調整		その他 (鉢類など)
								外 面	内 面	
518	D 3	■a	丹波り石	15.9	泥	丘台、輪郭、本 面				口縁～内部内面凹凸型
519	E 6	■	伊勢型鉢			手取形、直径1m以下 の砂利を多く含む	にびい縁			口縁部内側に折り返し
520	F 6	■	羽州面皿2種			手取形、直径1m以下 の砂利・杂质を多く含む	浅盤			内縁部が五角形の外耳、孔有り
521	S12	■b	石織紋土器	15.8 (6.4)	粗	灰	体部内面面凹凸型、 底部削り出し	底部内面面凹凸型、 底部外側に環 状有り		
522	C 1	IV	羽州型碗IV期	(17.3)	やや粗	暗緑、黒	体部内面面凹凸型、 底部	前部三角形の背伏口縁、口縁 の内側に斜削し水平に仕切		
523	SD 2	■b	羽州A 3種	17.0	泥	灰縁	体部外側面ハ、内面 ナホ	口縁面取り、周部断面四角形		
524	SK 4	■b	羽州A 4種	20.2	泥	にびい縁				口縁内面に環付有り
525	D 9	IV	羽州A 3種	25.4	泥	灰縁	底盤下に厚さ1cm の砂利、底部外側下に環 状有り、周部断面三角形			
526	SD 2	M 1	縦縞	29.5	やや粗	灰	体部中位へ削り	体部平滑		
527	SD 1	M 1	凸縞	6.0	粗	粗	体部下方に種	底部外側に環付有り		
528	E 6	■a	西日本縞		細	粗	体部と底部間に段			
529	D 1	■a	白磁小鉢	14.55	細	灰白、白	口沿部内面に斜削1条、 口縁部膨らみ			
530	SD 5	M 1	白磁碗	15.7	細	灰	体部内面斜込み、外面 面凹凸			
531	F 7	■a	西日本縞		細	白灰	底部外側削り			
532	SD 2	M 1	青磁?		細	オーリーブ灰				
534	SD 1	M 1	天目系碗	13.15	泥	にびい縁				鉄筋、体部下方露胎
533	SD 2	M 1	天目系碗	3.7	泥	灰素、頭縫、 裏	体部下方回転へ削り	鉄筋、削り出しがち、体部下方 以下丸脚、中間脚部		
535	E 6	■a	天目系碗	12.25	泥	白				鉄筋
536	D 1	■a	瓶	15.55	泥	オーリーブ灰～ 白				
537	SD 3	M 1	甕		泥	灰素				N字状口縁、常滑
538	C 2	■b	切端	5.8	やや粗	にびい縁				灰地

第30表 古鏡計測表

地名 番号	地図番号	地 区	外 径	内 径	厚 さ	重 量 (g)	備 考	
							上 縁	下 縁
開元通寶	539	S K 6	2.45	0.60	0.137	3.3	南唐、960年	
開元通寶	540	S K 6	2.45	0.65	0.125	3.1	南唐、960年	
開元通寶	541	S K 6	2.40	0.65	0.114	2.8	南唐、960年	
開元通寶	542	S K 6	2.30	0.65	0.119	2.1	南唐、960年	
開元通寶	543	S K 6	2.45	0.60	0.130	3.1	南唐、960年	
祥符通寶	544	S K 6	2.50	0.65	0.116	2.9	北宋、1009年	
元祐通寶	545	S K 6	2.48	0.75	0.120	2.7	北宋、1086年	
聖宋通寶	546	S K 6	2.45	0.60	0.119	2.8	北宋、1091年	
永樂通寶	547	S K 6	2.50	0.55	0.143	4.0	明、1408年	
永樂通寶	548	S K 6	2.50	0.55	0.142	3.6	明、1408年	
宣德通寶	549	S K 6	2.50	0.55	0.160	2.0	明、1433年	

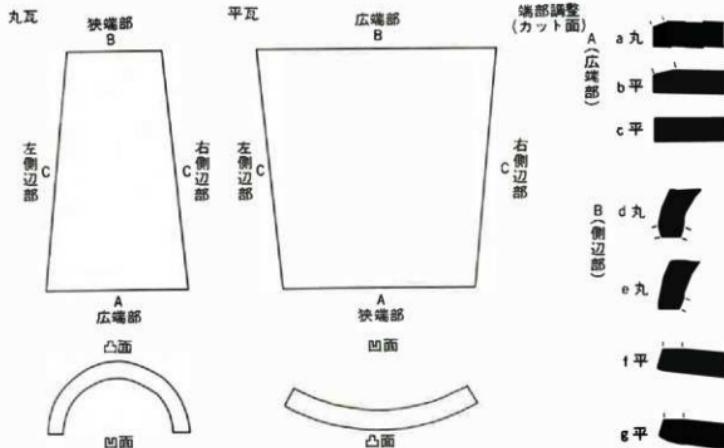
第31表 石器計測表

地図番号	岩種	岩 材	長 さ	幅	厚 さ	質 量 (g)	(単位 cm)	
							上 縁	下 縁
550	石器	サスカイト	19	19	4	0.8		
551	石器	チャート	22	14	4	0.9		
552	石器	チャート	25	21	6	1.8		
553	磨製石斧	安山岩質凝灰岩	103	54	37	245.1	乳鉗狀	
554	磨製石斧	安山岩	108	56	33	287.1	西刀	
555	磨製石斧	安山岩	72	34	39	161.7	柱狀片刀	
556	磨製石斧	泥岩	53	34	13	47.6	扁平刀	
557	磨・敲石	安山岩	79	72	45	373.8		
558	石器	佐賀青	62	53	44	155.8	敲石軒用	
559	浮子	ダイモイド質輕石	66	54	27	16.7		
560	砾石	田代斑石	82	62	26	163.7		
561	石棒	粘晶石岩	62	40	16	49.8		

第32表 瓦觀察表

序號 番号	地盤 地質	層位	種類	残存部	質量(g)	凸面調整	端部調整			物 土	色 調	機成	備 考
							A	B	C				
381	S D 2	M 1	軒丸瓦 (瓦当なし)	先端部	280	不明	-	-	-	密 2mm以上 の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	行基式丸瓦 に接続カ
382	S D 2	M 1	丸瓦	広端部	680	側で (窓叩き痕有り)	a	-	a	密 2mm厚の 砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	行基式
383	S D 2	M 2	丸瓦	側縁部	100	側で (窓叩き痕有り)	-	-	b	密	凸灰白 凹灰	硬	
384	S D 2	M 1	軒平瓦	瓦当部	730	側で	-	-	-	密 2mm以上 の砂粒多く含 む	凸灰白 凹灰	軟	四重張文
385	S D 2	M 1	平瓦	側縁部	280	不明	-	-	c	密 1~2mm 段の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	一枚作りカ
386	S D 2	M 1	平瓦	広端部左隅	600	側で (窓叩き痕有り)	c	-	d	密 1~2mm 段の砂粒含む	凸灰白 凹灰白	軟	
387	H 9	V 1	平瓦	広端部左隅	700	丁寧な割り (窓 叩き痕有り)	d	-	d	密 2mm厚の 砂粒含む	凸灰白 凹灰白	硬	粘土絆輪積
388	S D 10	M 2	平瓦	端部	80	格子目叩き	c	-	-	密 1mm厚の 砂粒含む	凸灰白 凹灰白	硬	
			丸瓦		9	180	側で5 不明2	b1	-	a2 b1			軟
			平瓦		10	1540	側で5 不明3	d2	-	c1 e1			軟
			不明		6	90							

※ 報告書開載分以外について、質数以外の欄の数字は点数を表す。



第77図 瓦関係模式図

第33表 二ノ井遺跡遺構別遺物出土点数表

遺構名	縄文土器	弥生・土師	須恵器	瓦	灰釉陶器	山茶碗	中世土師器	磁器	陶器	貨幣	合計
P 6				1		1					2
P 7	2	1							1		4
P 9					1	1					2
P 12			0		1						1
P 16							1				1
P 17							1				1
P 23							2	11			13
P 32	1	1									2
P 33		2									2
P 34		4									4
P 38		11									11
P 41		5									5
P 42		1									1
P 43						1					1
P 45								2			2
P 51	5		1	1	2		3				12
P 52		2									2
P 59		15									15
P 64	2	8					1				11
P 66		7									7
P 67		3									3
SD 1	58	230	22	1	11	70	105	3	15		515
SD 2	76	396	60	38	59	322	350	4	19		1324
SD 3	9	1			2	10					25
SD 5	1	34	1		1	10	5	1	1		54
SD 6	13	47	3		1						64
SD 7	4	9									13
SD 9	1	3									4
SD 10	1	17	8	2		5	1				34
SD 11				3			1				4
SD 13	3	6					2				11
SK 1	2					1	12				15
SK 2	7	3		11	44	85		1			151
SK 3	44	1	1	7	24	123		2			202
SK 4		3			4	4	3				10
SK 5	8	44			2	2	1				56
SK 6		2				5	5	9	1		28
SK 9		13									13
SK 10		5									5
SK 11		9					1				10
SK 12	18	62			1						84
SK 13	1	8									9
SK 14		2									2
SX 1		13				1					14
SX 3	62	336	4		5	15	4	1			427
SX 4		11			2	10	2				25
SX 5	3	21				1					25
合計	253	1398	109	43	104	533	722	10	42	11	3225

第34表 二ノ井遺跡地区別遺物出土点数表

グリッド	縦文土器	片手・土器	須磨器	瓦	灰陶陶器	山茶碗	土器土器類	石器	陶瓶	骨器	合計
B 2	4	42	1				1				46
C 0	66	628	26	1	13	71	143	3	17		956
C 1	68	603	78	9	138	447	589	4	39		1972
C 2	46	176	39	1	49	175	126			8	614
C 3	3	62			1	2	5				73
D 0	11	271	15		17	70	78	3	1		466
D 1	76	718	56	3	95	317	369	5	12		1651
D 2	29	353	47	2	44	156	166	2	5		743
D 3	58	401	6	2	1	11	7		1		490
D 4						1					1
E 2		15					3				18
E 4	1	1				1					3
E 5		4						1	1		6
E 6		113	6		7	56	10	5	7		205
E 7	1	18				5	2				21
F 6	2	79	11		4	71	10	6	5		188
F 7	15	553	51		5	110	28	6	8		723
F 8	3	287	22	1	3	31	8	3	1		358
G 8	4	167	8	3	1	24		1			178
G 9	19	214	1	1	6	25		1	1		166
G 10	15	324	6	1		3					349
G 11	11	51	4								66
H 9	45	1858	8	1		8					1920
H 10	624	12048	16	2	1	1					12692
H 11	527	1834	47		1	4					2413
H 12			2			6			1		9
I 10	79	1782	2								1863
I 11	238	1855	21	5	2	1					2122
I 12	56	62	20		2	4					141
合計	1995	34537	486	32	389	1603	1478	40	102		30661

第35表 ニノ井道路断面測量表

測点名	番号	長径	短径	深さ	測点名	番号	長径	短径	深さ	(単位 m)	
										ピット (P)	スカート (SK)
1	0.35	0.30	0.10	0.10	2	0.60	0.41	0.14	0.10	52	0.48
3	0.36	0.34	0.17	0.17	4	0.29	0.26	0.13	0.16	54	0.42
5	0.36	0.32	0.16	0.16	6	0.41	0.38	0.12	0.16	55	0.44
7	0.58	0.48	0.13	0.13	8	0.25	0.24	0.17	0.17	57	0.42
10	0.23	0.22	0.10	0.10	11	0.29	0.24	0.09	0.10	58	0.24
12	0.37	0.30	0.13	0.13	13	0.33	0.25	0.10	0.10	59	0.47
14	0.36	0.25	0.11	0.11	15	0.43	0.38	0.10	0.10	60	0.39
16	0.32	0.21	0.07	0.07	17	0.34	0.26	0.05	0.05	61	0.44
18	0.36	0.34	0.15	0.15	19	0.35	0.32	0.11	0.11	62	0.47
20	0.41	0.34	0.16	0.16	21	0.41	0.32	0.14	0.14	63	0.47
22	0.96	0.40	0.23	0.23	23	0.44	0.41	0.22	0.22	64	0.61
24	0.41	0.36	0.15	0.15	25	0.31	0.28	0.17	0.17	65	0.32
26	0.33	0.27	0.14	0.14	27	0.66	0.51	0.17	0.17	66	0.42
28	0.34	0.25	0.13	0.13	29	0.51	0.28	0.16	0.16	67	0.54
30	0.51	0.48	0.16	0.16	31	0.42	0.34	0.20	0.20	68	0.50
32	0.76	0.64	0.26	0.26	33	0.41	0.33	0.14	0.14	69	0.27
34	0.37	0.32	0.11	0.11	35	0.38	0.27	0.16	0.16	70	0.29
36	0.41	0.34	0.06	0.06	37	0.41	0.27	0.26	0.26	71	0.57
38	0.43	0.36	0.05	0.05	39	0.23	0.31	0.26	0.26	72	0.46
40	0.35	0.28	0.20	0.20	41	0.76	0.61	0.34	0.34	73	0.42
42	0.45	0.37	0.19	0.19	43	0.80	0.68	0.24	0.24	74	0.83
44	0.48	0.44	0.25	0.25	45	0.50	0.40	0.16	0.16	75	0.42
46	0.35	0.33	0.26	0.26	47	0.41	0.32	0.13	0.13	76	0.44
48	0.42	0.31	0.11	0.11	49	0.55	0.46	0.06	0.06	50	0.49
51	0.35	0.34	0.19	0.19	52	0.35	0.34	0.10	0.10	53	0.19

# 市 場 遺 跡

## 第6章 市場遺跡の調査

### 第1節 層序

調査区は、西より東に向かって緩やかに傾斜する扇状地の扇頂部に位置する。現在は茶畠に利用されているがそれ以前は水田であった。そのため、表土（I層）は耕作土であり、その下に旧水田耕作土は入る。断面観察から、水田は3段になっていた。遺物包含層（VI・VII層）は、遺跡の西側には見られず、東に向かって徐々に厚く堆積している。本来遺跡全体に広がっていたと思われるが開田の際の地形改変によって削平されたと考えられる。V層以下は堆积性の堆積層である。

以下、各土層の性状を概述する。

第I層：10Y R3/2、しまりのゆるい黒褐色土。径2～5mmの礫を少し含む。茶畠の耕作土で遺跡全体に広がる。

第II層：10Y R4/4、しまりのゆるい褐色土。径1～2mmの砂粒を非常に多く含む。旧水田耕作土。

第III層：5Y 4/2、しまりのややある灰オリーブ土。礫をほとんど含まない。

第IV層：2.5Y 5/2、しまりのない暗灰褐色土。径5～20mmの亜円礫が大半を占める。

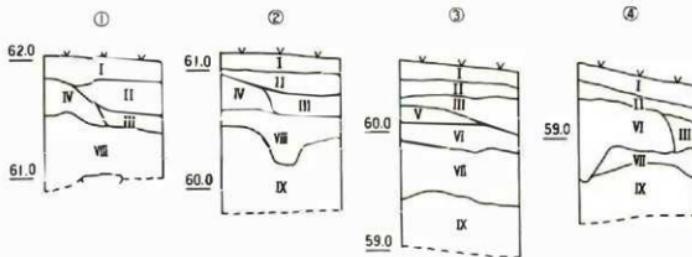
第V層：7.5Y R4/4、しまりのゆるい褐色土。礫をほとんど含まない。

第VI層：10Y R3/2、しまりのややある黒褐色土。径5～20cmの亜円礫がわずかに入る。

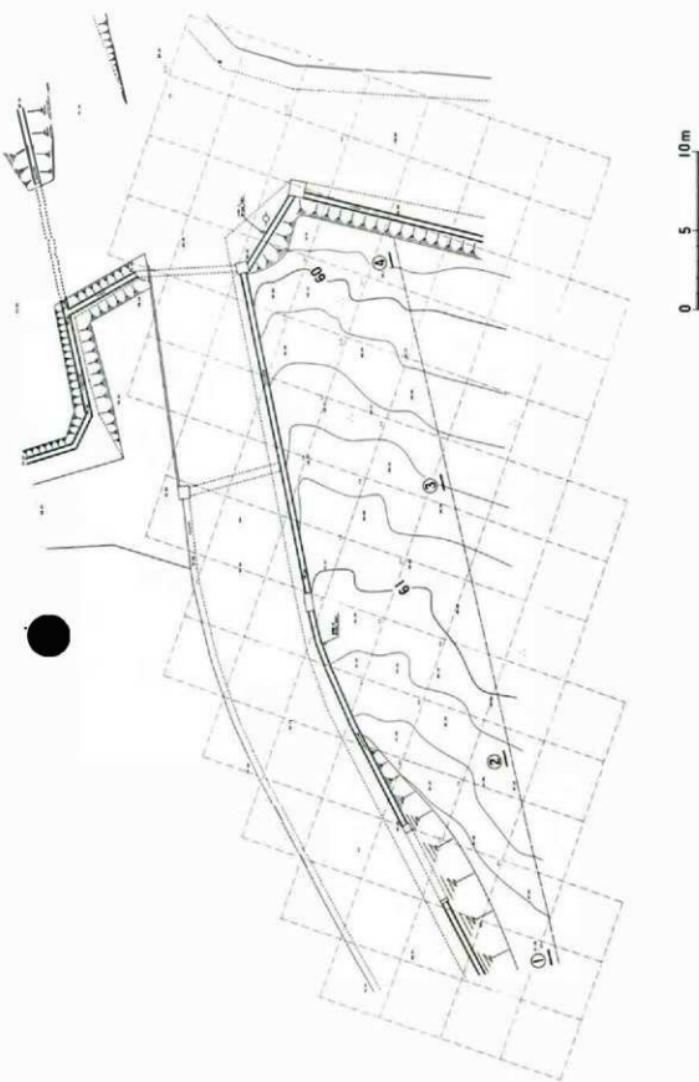
第VII層：10Y R3/4、しまりのある暗褐色土。礫をほとんど含まない。下部（mm b層）は、やや薄めの土色で粘性が高くなり、径10～20cmの亜角礫が多く入る。

第VIII層：5Y 5/2、しまりのゆるい灰オリーブ土。下部ほど粒子の粗い砂質土となり、鉄分が付着した礫岩も多く入る。

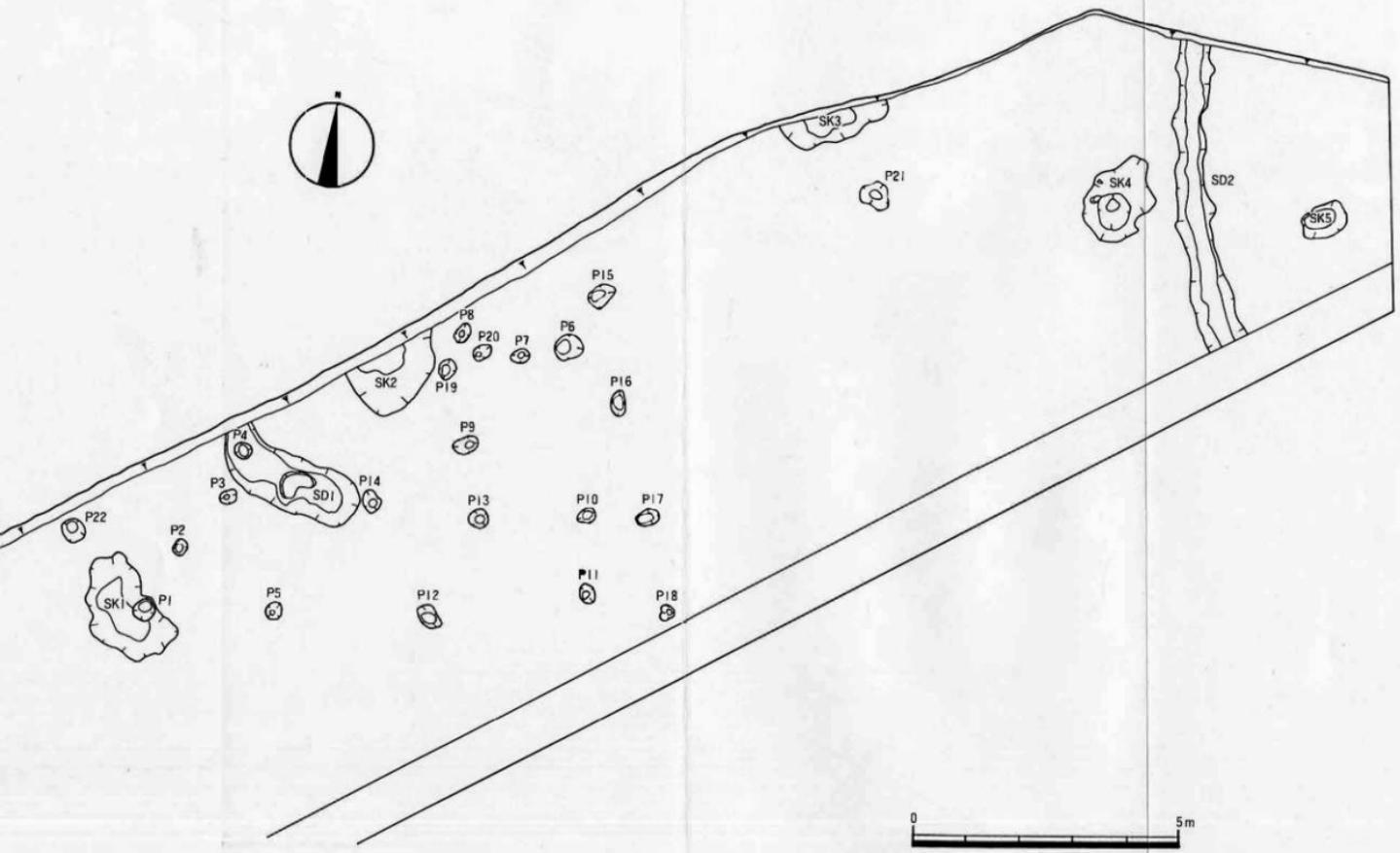
第IX層：5Y 5/3、しまりのゆるい灰オリーブ土。土色・土質は第VIII層と非常に似ており、同じ堆积性の堆積状況を示す。



第78図 トレンチセクション図



第79図 市場遺跡地形測量図 クリット設定図 (1/300)



第80図 市場造跡造構配圖 (1/80)

## 第2節 遺構

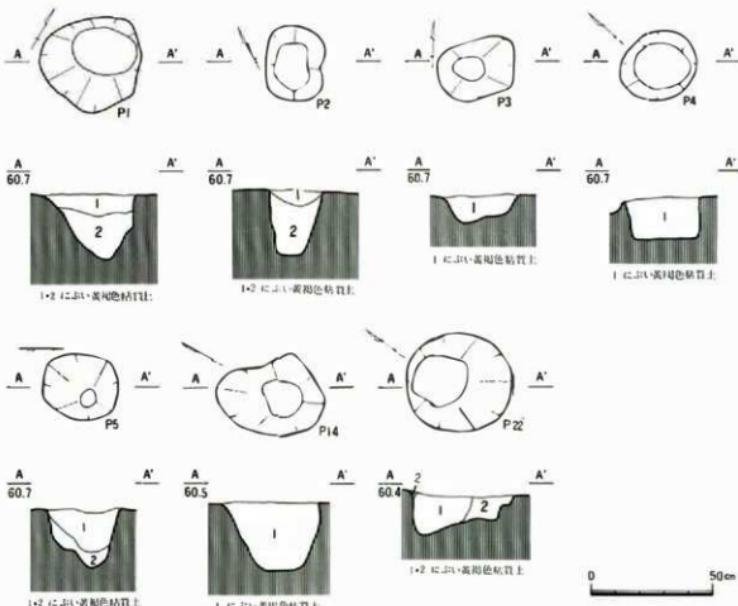
今回の調査で検出された遺構は、ピット群22基、土坑5基、溝2条である。

### ピット群（第81図）

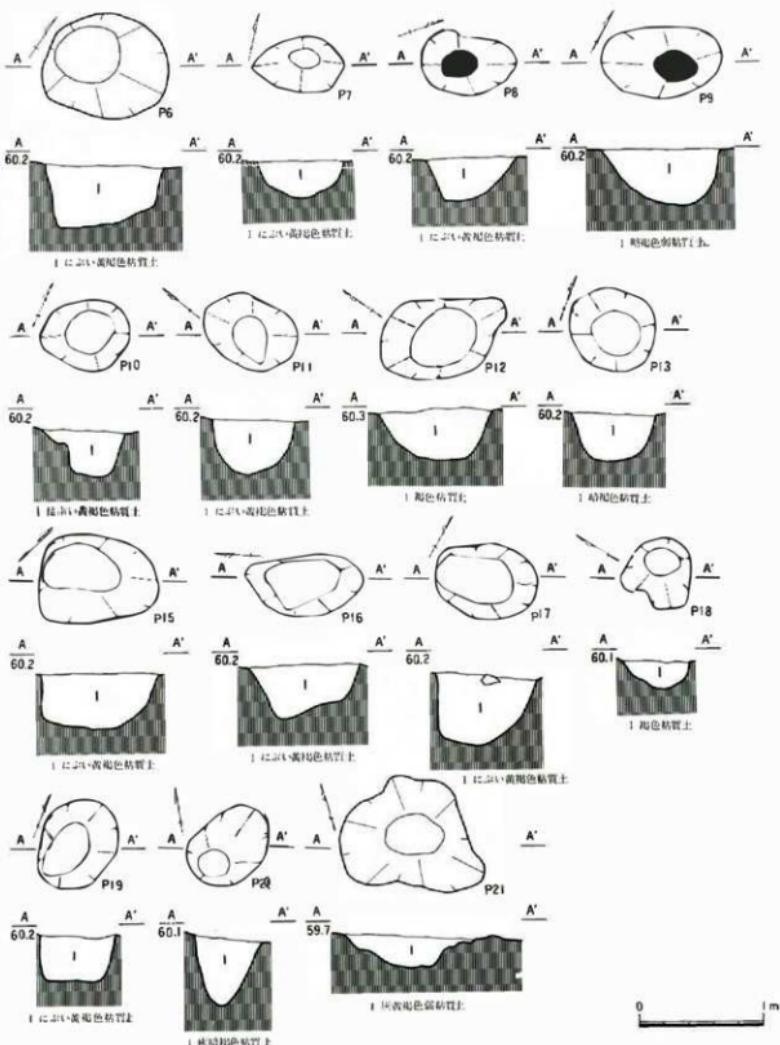
ピットは22基検出した。P11より縄文時代早期の土器片が1点出土しただけで、他のピット埋土から遺物は出土していない。そのため、ピット群の時期を特定することはできない。ピット群は、検出場所や検出されたレベルから3群に分けられる。

第1群は、P1～5・14・22で、F5区～G6区にかけて位置する。いずれも標高60.6m前後のレベルに描い、VI層より掘り込まれており、にぶい黄褐色弱粘質土が入る。特に、P1・2・5・14・22は、径0.3mm～0.4m、深さ0.25m～0.3mを測り、他のピット比べて大きい。そのため、掘立柱建物に伴う柱穴と想定してみたが、明確な位置関係を示すことはできなかった。

第2群は、P6～13・15～20で、F7区～G8区にかけて位置する。標高60.1m前後のレベルに描い、VI～VII層より掘り込まれている。にぶい黄褐色弱粘質土が入るピット群（P6～8・10～11・15～17・19）と褐色あるいは暗褐色弱粘質土が入るピット群（P9・12・13・18）、灰黃褐色弱粘質土



第81図 ピット1群実測図



第82図 ピット2・3群実測図

が入るピット群（P20）に分かれる。また、P 6・9・12・15～17は、径0.4m～0.5m、深さ0.2m～0.3mを測り、他のピットに比べて大きい。そのため、掘立柱建物に伴う柱穴と想定してみたが、明確な位置関係を示すことはできなかった。

第3群は、P21で、H 9区に位置する。標高は他のピット群に比べ59.65mと低く、VII層より掘り込まれており、灰黄褐色弱粘質土が入る。径0.52m、深さ0.14mを測り、浅いすり鉢状の形を呈す。

#### 土坑（SK）（第図）

土坑は、5基検出した。

##### SK 1

SK 1は、F 6区に位置する。平面形は、楕円形を呈し、長軸2.15m、短軸1.12m、深さ0.28mを測る。VII層より掘り込まれており、埋土はVI・VIIa層が入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

##### SK 2

SK 2は、G 7区に位置する。プランは調査区北に統いており、検出されたプランの平面形は、半円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.04m、深さ0.53mを測る。埋土はにぶい黄褐色弱粘質土や暗褐色粘質土が入り、疊をほどんど含まない。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

##### SK 3

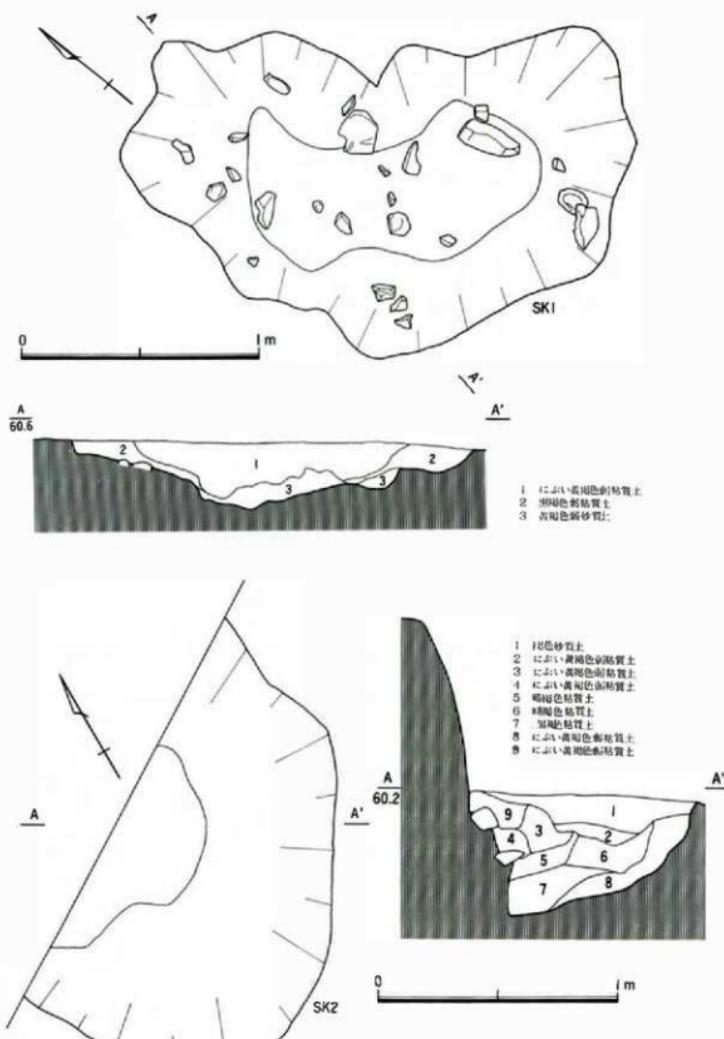
SK 3は、H 9区に位置する。プランは調査区北に統いており、検出されたプランの平面形は、半楕円形を呈し、長軸2.07m、短軸0.54m、深さ0.26mを測る。VI層より掘り込まれており、埋土は、粘性の高い黒褐色土が入り、径0.2m～0.3mの疊が流れ込んだように入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

##### SK 4

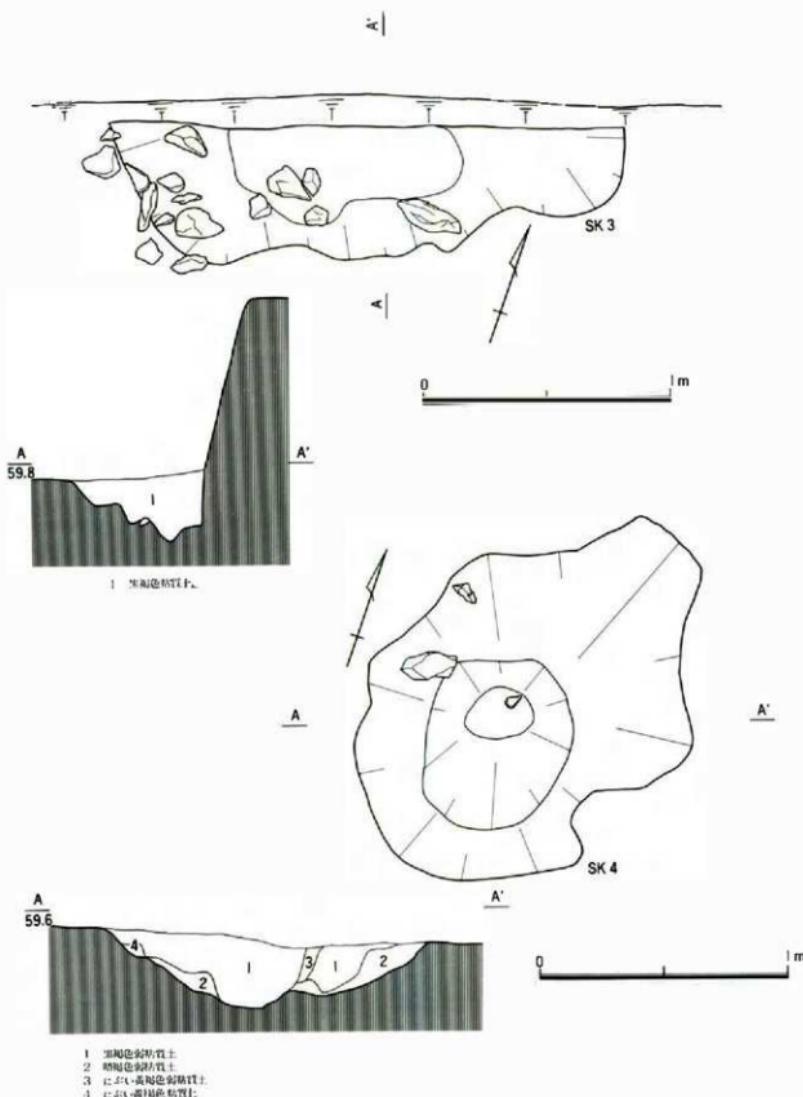
SK 4は、H 10区に位置する。平面形は、楕円形を呈し、長軸1.81m、短軸1.17m、深さ0.3mを測る。VI層より掘り込まれており、埋土1からは縄文土器片が3点、フレイク2点、被熱し赤褐色に変色した疊1点が出土している。縄文土器片は、いずれも押型文が施された縄文時代早期の土器である。VI層からは、他の地点で中近世陶磁器も出土しており、SK 4が縄文時代早期の遺構と断定することはできない。

##### SK 5

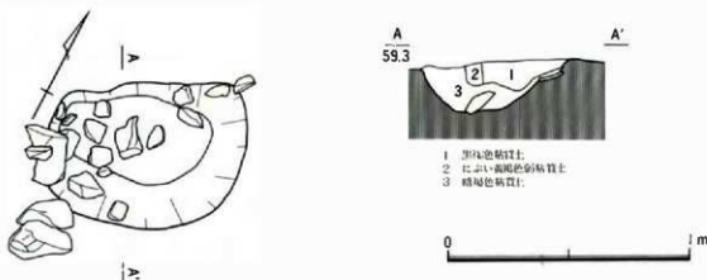
SK 5は、H 11区に位置する。平面形は楕円形を呈し、長軸0.87m、短軸0.64m、深さ0.22mを測る。VIIa層より掘り込まれ、底部はVII層に達している。埋土にはVI層と円柱状ににぶい黄褐色弱粘質土が入る。底部にはVI層とVII層の混入土が入る。遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。



第83図 SK 1・2 実測図 (1/20)



第84図 SK 3・4 実測図 (1/20)



第85図 SK5実測図 (1/20)

### 溝 (SD)

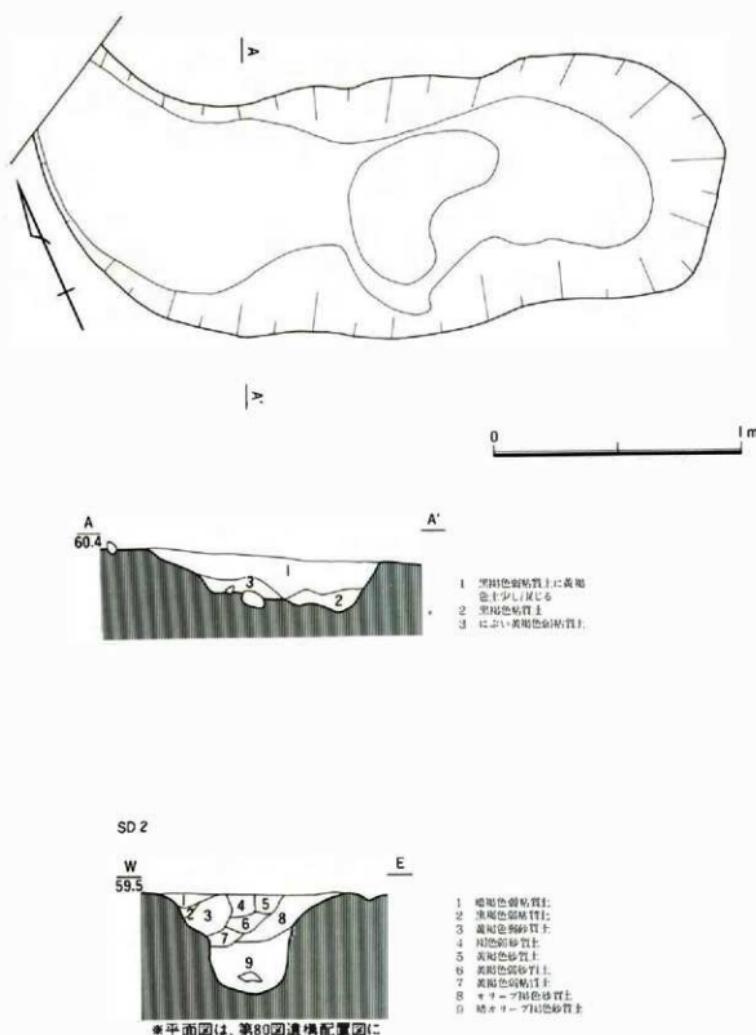
調査区からは2条の溝を検出した。

#### SD1

SD1は、F6・7区に位置する。溝は北西方向より南東方向に至り、その南端はF7グリッド杭付近で途切れているが、北端は調査区外へ続いており確認できない。検出した溝は、全長2.78m、幅1.06m、深さ0.46mを測り、VII層より検出された。埋土は3層に分層される。遺物は、無文の縄文土器片が1点、フレイクが2点出土している。遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。

#### SD2

SD2は、G11区～I10区に位置し、III層より検出された。溝はほぼ南北に走り、その両端は調査区外に続いており確認できない。検出した溝は、全長5.8m、幅0.78m、深さ0.58mを測る。溝の断面形は折形を呈す、埋土は9層に分層される。底部には暗オリーブ褐色砂質土が堆積している。近世以降に開田された旧水田の用排水路と考えられるが、遺物は出土しておらず、遺構の性格、他の遺構との関連については明らかではない。



第86図 SD 1・2 実測図 (1/20)

### 第3節 遺 物

調査区より出土した遺物は、土器124点（縄文土器61点、弥生土器9点、須恵器2点、山茶碗1点、中近世陶磁器51点）、石器75点（石錐1点、スクレイバー1点、コア6点、フレイク54点、U・F10点、くさび形石器1点、その他2点）である。そのうち、土器14点、石器3点を図示した。

#### 縄文土器（第87図1～13）

縄文土器は、3群に分けられる。1群は、縄文時代早期の土器群（1～11）である。2群は、中期の土器（12）である。3群は、後期の土器（13）である。

##### 1群の土器（1～11）

1～3は、外面に楕円形の押型文が施されている。器壁は厚く、繊維痕を含む。3は口縁部片である。4・5は、外面に山形の押型文が施されている。6～10は、外面に網目状燃糸圧痕文が施されている。器壁は厚く、繊維痕を含む。11は、外面に縦位・斜位の沈線が5条施されており、沈線文系の土器と思われる。

##### 2群の土器（12）

12は、外面に半截竹管による横位の沈線が3条施され、その下に横位の連続刺突文が2条施されている。

##### 3群の土器（13）

13は、口縁内面端部が肥厚し、口縁外端部の下に横位の沈線が1条施されている。沈線は途中で途切れているが口縁形状に合わせて波状あるいは山状になると思われる。

#### 須恵器（第87図14）

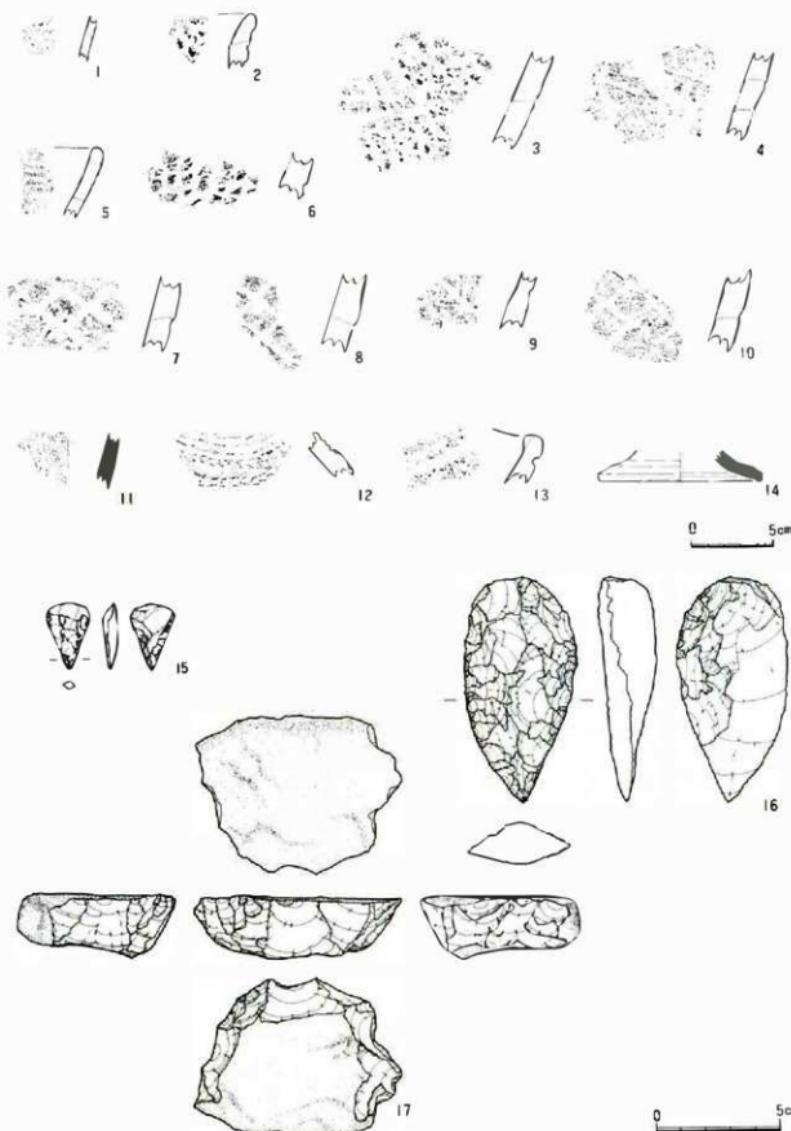
14は、B1区V層より出土した。高環の脚部片で、ラッパ状に開く。脚部端部はやや丸い凸面を成して内側で接地する。

#### 石 器（第87図15～17）

15は、石錐である。石材はサスカイトで、背面・腹面に素材の面を残す。素材の二次調整は表面を粗く、裏面は細かくなされている。また、先頭部から基部に向かって調整されている。機能部断面形はひし形である。機能部はかなり摩耗している。

16は、スクレイバーである。石材は、緻密な黒色チャートで、素材はかなり厚めの大きな縦長剥片である。主要剥離面の打点近くに大きなバルバスカーがある。刃部は左右側縁に裏面から表面へと片面調整されており、刃部の角度は左右とも50°である。刃部には使用によると思われるつぶれ状の剥離がみられ、先端部には摩耗がみられる。

17は、コアである。石材は泥岩で、板状の蹠を素材とする自然面が多く残っている。広く平坦な自然面を打点とし、その縁辺から剥片剥離作業を行っている。打点転移は行わず、作業面は裏面を除き3面に及ぶ。剥離された剥片は、下端部に自然面を有するものが多い。



第87図 遺物実測図(36)

#### 第4節 まとめ

今回の調査によって明らかになった点は以下である。

市場遺跡からは、土坑・溝・ピット群を検出した。造構の時期を明らかにすることはできなかったが、縄文時代早期から中近世陶磁器に至るまで幅広い時代の遺物が出土した。このことから、当該遺跡周辺には縄文時代早期から人々の営みが続いていたことを知ることができた。

また、わずか2点ではあったが、古墳時代後期に属する須恵器片が出土したことは、市場遺跡北西部に広がる金地峯古墳群の存在を側面的に裏付ける結果となった。

市場遺跡は、その名のいわれが「市」にあり、中世の物語にも片山の市場として登場する。今回の調査で「市」に関する造構の検出も期待された。出土した遺物には中近世陶磁器が含まれていたがいずれも細片であり、中世と断定できる造構を残念ながら確認することはできなかった。近世以降の開田によって、地形が改変された可能性も指摘できる。

## 第7章 調査関連資料

### 第1節 南高野古墳石室内赤色顔料の蛍光X線分析

菱田 量(パレオ・ラボ)

#### 1. はじめに

高畠遺跡の調査では、6世紀中墳から後半に構築された、玄室およびこれに通する廊道からなる横穴式石室が見い出された。この玄室を構築する岩石表面には赤色顔料が付着していた。ここでは、これらの赤色顔料の元素組成を明らかにするため、蛍光X線分析によって定性的に調べた。

#### 2. 試 料

顔料を採取した試料は、玄室を構築する岩石表面と床面の岩石表面から採取した(第36表)。試料は、赤色顔料が付着した部分あるいは赤味がかった部分などに、セロハン粘着テープを張り付けて採取した。これらは全体に赤色を呈しているもの、やや色調が淡いもの、あるいは灰白色を呈する試料である。なお、試料③は、床面の壁の上に重なる障の裏側から採取した試料で、顔料付着面積が4mm以下と小さいためマイラー容器に入れて測定した。

第36表 蛍光X線分析した玄室内赤色顔料等

試料No	位 置	色 調	備 考
①	玄室右壁奥側	灰白色(粘土質)	
①	玄室奥壁	赤色	大型岩石
③	玄室床面石裏側	赤色	
●	玄室右壁手前側	灰白色(粘土質)	
⑤	玄室手前	赤色	大型岩石
●	玄室手前	灰白色(粘土質)	大型岩石
●	玄室床面石	灰白色(粘土質)	

#### 3. 分析方法

剥離試料は、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、含まれる元素を定性的に測定した。

分析装置は、車上型蛍光X線分析計SEA-2001L(セイコー電子工業製)である。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10mm、電圧50KV、試料室内は真空充氮気である。

#### 4. 結 果

第1図～第7図に、各試料の蛍光X線スペクトルを示した。これらの試料には、主な主成分元素として鉄(Fe)が顕著に検出され、その他にアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、マンガン(Mn)のピークが見られる。また、硫黄(S)や亜鉛(Zn)の小さなピークが認められる。また、試料③では、ルビジウム(Rb)やジルコニウム(Zr)のピークも確認された。

なお、(Rh)のピークはX線管球ターゲットによるものなので、試料に由来するものではない。

#### 5. 考 察

##### (1) 分析試料の赤色顔料について

一般的に、赤色顔料の種類として、水銀朱(HgS)、ベンガラ( $Fe_2O_3$ など)、鉛丹( $Pb_2O_3$ )が知られている(たとえば市毛、1984)。

試料②や試料③あるいは試料⑤は赤色を呈し、赤色顔料であることが理解されるが、鉄(Fe)の大きいピークが認められことから、赤色顔料の1つであるベンガラである。

これ以外の試料は、肉眼的には赤色とは認められないものの、一般的な粘土に比べて鉄のピークが高いことから、周辺と同様ベンガラ成分が含まれているものと考えられる。ただし、顔料として塗布したものか、偶然周辺の顔料成分が付着したものかは明らかでない。

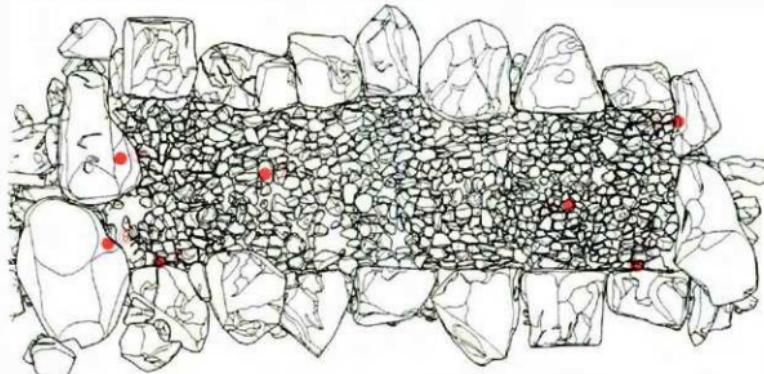
なお、鉄以外の元素ピークが検出されているが、採取時に顔料以外の付着粘土物も同時に付着したため、ケイ素やアルミニウムといった元素が検出されているものと考える。

##### (2) ベンガラについて

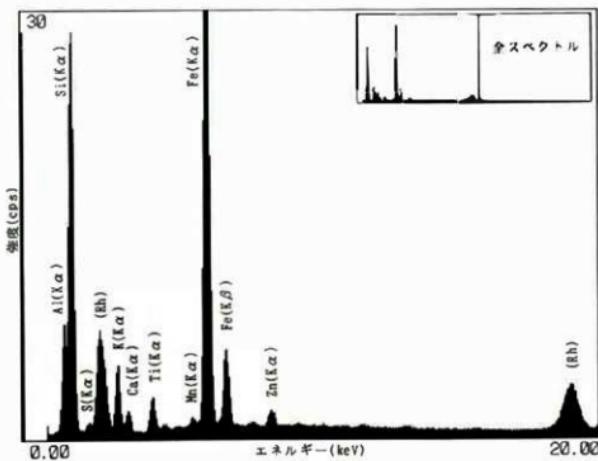
ベンガラは、赤色の由来となる主成分元素が鉄(Fe)のものを総称してい(本田、1995など)。古代においては、鉄分に富んだ土壤(たとえば褐鉄鉱を含むものなど)を焼いてつくられたと考えられている(山崎、1987など)。もちろん、天然の赤鉄鉱などの鉄鉱石を採取して製造した場合もあると思われる。また、北野(1994)によると、近世においては、上記の他に、硫化鉄(磁鐵鉱:  $FeS$ 、黄鉄鉱:  $FeS_2$ )が風化して形成された錆礫(りょくばん、硫酸鉄( $FeSO_4 \cdot 7H_2O$ ))を原材料とし、これを焙焼して酸化鉄を製造し、ベンガラを生産していたことが知られている。さらに、矢彦沢ほか(1995)は、黄鉄鉱を含むグライ土層の堆積物の風化過程において、含水酸化鉄( $Fe_2O_3 \cdot nH_2O$ )が沈積することを確認し、これがベンガラの原材料になる可能性を示唆している。また、最近の研究では、縄文時代や弥生時代の赤色漆に用いられた赤色顔料中に珪藻化石が見られるところから、水成環境下で生成した酸化鉄であることも分かってきた(岡田、1997)。このように、ベンガラの原材料や製法については、いくつかのものが示されている。なあ、ここで分析した試料は、鉄以外にイオウ(S)の小さなピークが認められるため、硫化鉄起源のベンガラであることも考えられる。

## 引用・参考文献

- 市毛 紘 1984 「埴輪 朱の考古学」、第2版、考古学選書12、雄山閣出版、p.324
- 本田光子 1995 「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』、31・32、pp. 63-79
- 北野信彦 1994 「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点II—文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について—」『古文化財の科学』、39、pp. 93-102
- 永嶋正春 1985 「縄文時代の漆工技術—東北地方出土齋胎漆器を中心にして—」『国立歴史民俗博物館研究報告 第6集』、国立歴史民俗博物館、1-54
- 永嶋正春 1995 「古代漆の源流」『古代に挑戦する自然科学』、第9回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、クバプロ、pp. 82-93
- 岡田文男 (1997) バイプ状ベンガラ粒子の復元、第14回大会研究発表要旨集、pp. 38-39、日本文化財科学会
- 矢彦沢清允・画角秀俊・藤松 仁・村上 奏・森崎 稔 1995 「弥生式土器の塗彩に使われたベンガラの由来—フィッサマグナ東端地域を中心として—」『考古学雑誌』、80、4、pp. 75-87
- 山崎一雄 1987 『古文化財の科学』、思文閣出版、p. 352

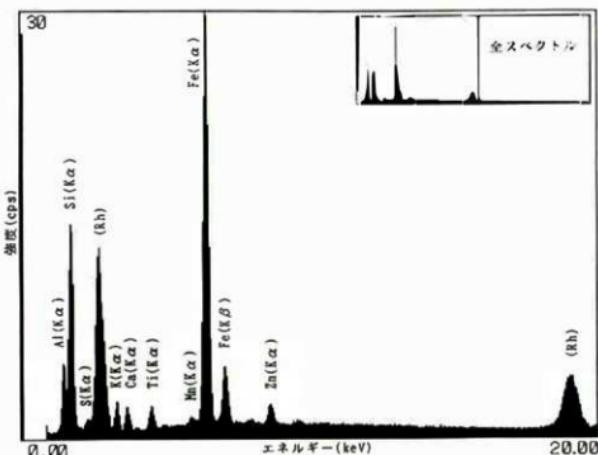


第88図 分析試料採取位置図



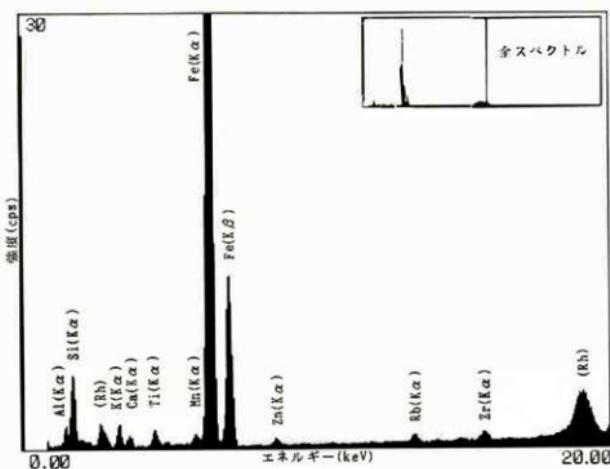
第89図 灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料①)

Al:アルミニウム,Si:ケイ素,S:硫黄,K:カリウム,Ca:カルシウム,Ti:チタン,Mn:マンガン,  
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ジルコウム(X線管球ターゲットから)



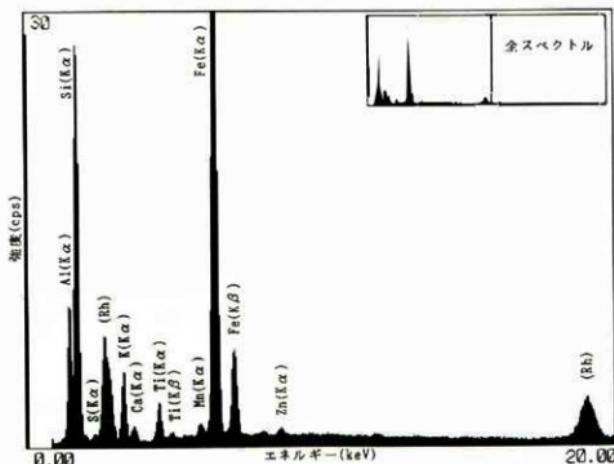
第90図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料②)

Al:アルミニウム,Si:ケイ素,S:硫黄,K:カリウム,Ca:カルシウム,Ti:チタン,Mn:マンガン,  
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ジルコウム(X線管球ターゲットから)



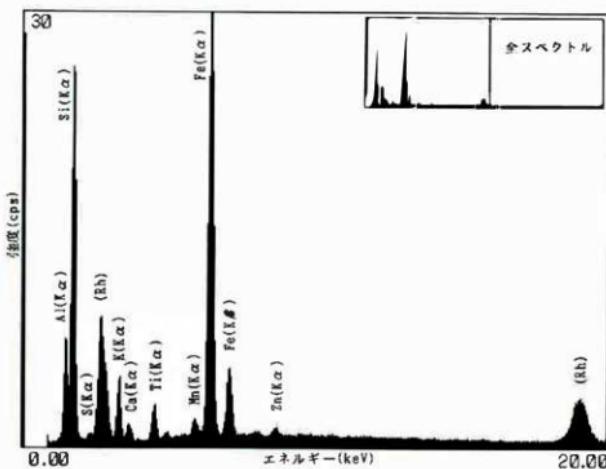
第91図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料③)

Al:アルミニウム, Si:ケイ素, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタニウム, Mn:マンガン, Fe:鉄,  
Zn:亜鉛, Rb:リビウム, Zr:ジルコニウム, (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)



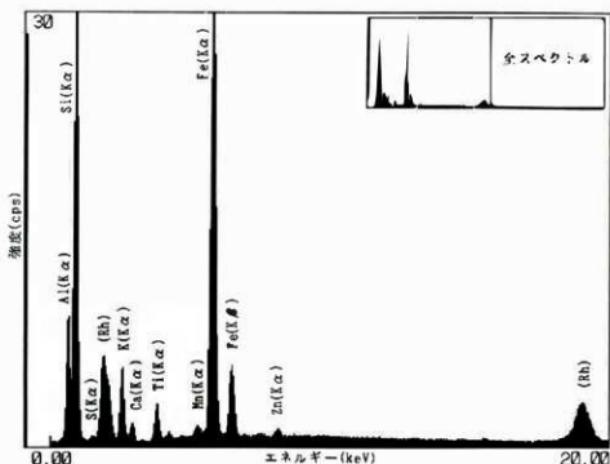
第92図 灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料④)

Al:アルミニウム, Si:ケイ素, S:硫黄, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタニウム, Mn:マンガン,  
Fe:鉄, Zn:亜鉛, (Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)



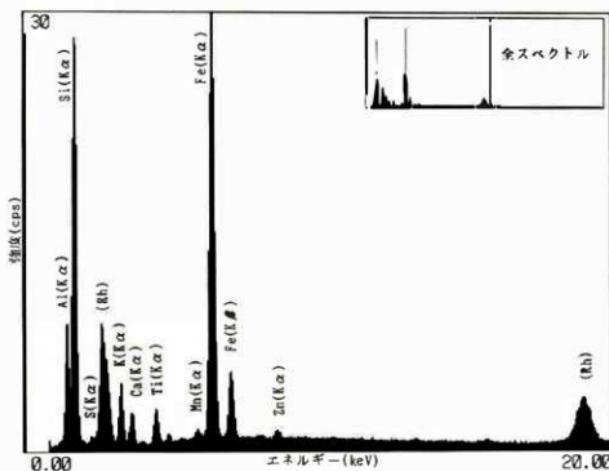
第93図 赤色顔料の蛍光X線スペクトル図(試料⑤)

Al:アルミニウム, Si:ケイ素, S:硫黄, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタン, Mn:マンガン,  
Fe:鉄, Zn:亜鉛, (Rh):リジウム(X線管球ターゲットから)



第94図 灰色部の蛍光X線スペクトル図(試料●)

Al:アルミニウム, Si:ケイ素, S:硫黄, K:カリウム, Ca:カルシウム, Ti:チタン, Mn:マンガン,  
Fe:鉄, Zn:亜鉛, (Rh):リジウム(X線管球ターゲットから)



第95図 灰白色部の蛍光X線スペクトル図(試料⑦)

Al:アルミニウム,Si:サイ素,S:硫黄,K:カリウム,Ca:カルシウム,Ti:チタン,Mn:マンガン,  
Fe:鉄,Zn:亜鉛,(Rh):ロジウム(X線管球ターゲットから)

## 第2節 南高野古墳の3次元測量と復元CGの作成

木村 寛之（イビソク）

### はじめに

南高野古墳周辺では高圧電線が低く空撮図化ができない状態であった。そこで、トータルステーションで地形測量を行い、図面作成には自動等高線算出ソフトと地図CADを利用して作成した。また、石室内部の崩壊の可能性が高いことから、石室の計測には3次元デジタイザを利用した立体計測を行い、図面作成は計測データを3次元CADで解析・加工して展開図などを作成した。これらの計測データをもとに、墳丘の復元予想CGを作成した。

### 1. 3次元デジタイザによる測量

#### (1) 機器

多関節アームとコンピュータ（計測CAD）から構成される接触型3次元計測システム。

#### (2) 測量箇所

①天井石（平面・裏面・朱の痕）

②玄室（奥壁・左右側壁・敷石・朱の痕）

側壁の計測は崩壊が激しく、計測後に石を外し発掘。石が出土すれば計測の繰り返しで作業が進んだ。そのため地盤で崩壊した様子が記録できた。

③羨道（左右側壁・敷石・閉塞石・出土立体状況）

発掘段階で羨道が狭いプランか地盤の為か判断が付かず数回に分け左側壁を計測、前回の計測データを画面で確認しながら同一の石か確認しながら計測した。

④排水溝（蓋平面・蓋を取り除いた平面）

蓋の厚みは、蓋を外した土の跡を計測した。

#### (3) 作成図面と解析・加工

石室内部の図面作成には3次元CADを利用して作成した。視点変換・属性表示の変更・陰線処理などの機能を組み合わせて必要な図面を作成した。陰線処理にはデータを基に面を付加する作業が伴う。

#### 作成図面

- 敷石及び基底石の平面図：属性表示のみ。
- 奥壁・左右側壁・排水溝の立面図：属性表示と視点変換を利用。
- 天井石・閉塞石・排水溝蓋の断面図：計測データより断面データを作成。その後で視点変換。
- 敷石の断面及び見通し図：石室センターより左側に断面処理を5本作成。その後に属性表示、非表示、視点変換、陰線処理を利用。
- 天井石平面図：属性表示のみ
- 羨道床石平面図：属性表示のみ
- 排水溝平面図：属性表示のみ
- 奥壁・前壁コーナー図：属性表示、非表示、視点変換、陰線処理を利用。

- 地形図：地形測量の成果と単点より自動算出された等高線を地図CADで編集。その後で2)で作成された平面図を地図CAD上で同一点を基に合成して作成。
- 仰向図（床から天井を見た図面、未使用）：断面処理・属性表示・視点変換・陰線処理

## 2. 墳丘復元CGの作成

### 1) 墳丘規格の復元

地形図から読み取れるデータを基に復元規格を図面作成し、調査担当者による考古学視点より検証を繰り返す手法をとった。これにより2つの違う視点が入り復元データとしての価値が上がると思われる。但し、この現場では路線内の調査のために発掘できない場所があり、周溝など一部で実データを利用できなかった。

#### <作業工程>

- 地形図には半分程度の墳丘と思われる跡がある、なるべく離れた位置で同じ高さ(26.5m)を3点探し、CADを利用して3点の中心が石室奥壁付近へくる円を探した。同じ方法で周溝も復元、但し1点は周溝に固定。周溝は天端と同じ高さで墳丘と同じ方法で中心を復元。この時点では同心円でない墳丘を想定。
- 担当者により検証。
- 復元のポイントを決定してもらう。
- ポイントに合う位置に来る様に円を変更。同心円の復元予想を想定。

### 2) 墳丘復元予想CGの作成

- 3次元で墳丘を復元する為に、断面を復元し自動等高線ソフトを利用してCG基礎データを作成する手法を採用した。この手法は、短時間で作業ができるのと常に復元状況を等高線で確認できるのが特長である。

#### <作業工程>

- 1) の墳丘規格の復元図から、古墳中心から放射状に断面データを取得。そのデータを自動等高線ソフトにより墳丘の復元モデルを作成。
- 次に周溝に水が流れるように勾配をつけた、但し周溝部分は発掘範囲外に当たり実データは一部の利用したが無理であった。そこで、地形より周溝左から時計周りに水が流れ右側で流れ落ちるよう位相した。
- 前庭付近では周溝とつじつまが合うように等高線をしながら水が石室方向へ流れないと单点データの高さを処理。簡易的な3次元設計の利用を試みた。これも発掘データは無く実データを利用していない。
- 周溝より外側は復元するにはデータが少なく、現地形や発掘データより想定したイメージ図である。最終的には発掘時に撮影した池田山をフォトレタッチソフトを利用して現在の構造物（鉄塔・家）などを消した写真と合成した。古墳の位置と石室の向きは現地にはば合せてある。

### 3) 天井石実測CG

計測された天井石の3次元データを基に輪切りデータを作成しCGを作成。このCGと透かし処理した2)の墳丘復元CGとを合成したCGに利用し構造を把握できるようにした。

## 4) 玄室俯瞰図(未使用)

奥壁・敷石・右墓底石を左30度、仰角-15度で俯瞰観。3次元CADでモデリングしながら最適な角度を探し視点を決定した。3次元計測データを利用した俯瞰図が利用された報告書としては「山城再興九谷塚跡」加賀市埋蔵文化財報告書第35集に古墳ではないが利用されている。

## 5) 玄門立柱石及びまぐさ石の復元(未使用)

3次元CADを利用して、傾いている玄門立柱石をセンター方向上に見ながら傾きを補正その上にまぐさ石が積まれていたように位置を移動し復元した。石を取り除く過程で計測されていない石が存在し完璧な復元とはいえないが報告書には利用されなかった。

最後に、南高野古墳は、地震などによる影響によって大半の石室石材が崩落していた。こうした悪条件の中では、通常の測量作業に様々な制約があると思われ、3次元計測システムが有効に利用された現場であったといえる。特に天井石を外し裏面計測・壊れた側壁を計測しておいてからの図面作成には有効であったと思う。

また、本墳のように道路改良工事に伴って消滅してしまう石室のデータが、発掘前の立体的な状態で記録されている事は大変有意義なことだと思う。



写真 3次元測量の様子

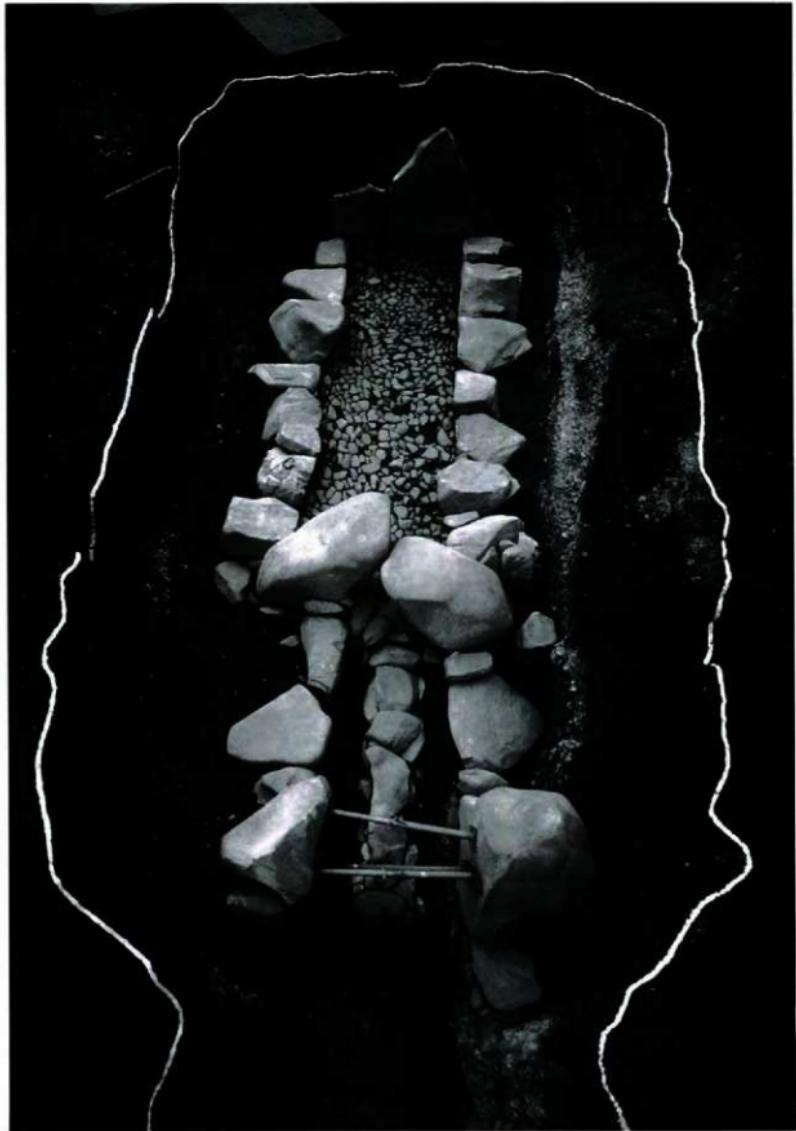
## 参考文献

- ・野村忠夫 1980 『古代の美濃』
- ・井上喜久男 1992 『尾張陶磁』
- ・中世土器研究会編 1995 『概説中世の土器・陶磁器』
- ・山田邦和 1998 『須恵器生産の研究』
- ・美濃古墳文化研究会編 1992 『美濃の後期古墳』
- ・中村 浩 1993 『考古学ライブラリー5 須恵器』
- ・白石太一郎 1985 『考古学シリーズ19 古墳の知識 墳丘と内部構造』
- ・玉口時雄・小金井 靖 1984 『考古学シリーズ17 土師器・須恵器の知識』
- ・鴻見 浩 1988 『國解 技術の考古学』
- ・森 郁夫 1983 『瓦と古代寺院』
- ・中村 浩 1981 『須恵器大成』
- ・岐阜県 1995 『岐阜県の活断層』
- ・『古代の土器5-1 7世紀の土器(近畿東部・東海編)』1997 古代の土器研究会
- ・中村 浩 編 1998 『古墳出土須恵器集成 第1巻近畿編1』
- ・中村 浩 編 1998 『古墳出土須恵器集成 第2巻近畿編2』
- ・中村 浩 編 1998 『古墳出土須恵器集成 第3巻東海編1』
- ・『宇田遺跡発掘調査報告書』1975 岐阜市教育委員会
- ・『廻間遺跡』1990 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- ・『山中遺跡』1992 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- ・『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』1993 豊川市教育委員会
- ・『松河戸遺跡』1994 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- ・『朝日遺跡V』1994 財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
- ・『賀徳寺渓山古墳群』1976 岐阜県中小企業福祉センター・関市教育委員会
- ・『岐阜市北山3号墳』1998 (財)岐阜市教育文化振興事業団
- ・『六之井溝池遺跡発掘調査報告書』1997 池田町教育委員会
- ・『舟子古窯跡一灰原の調査一』1994 池田町教育委員会
- ・『池ノ表古墳』1995 豊田市教育委員会
- ・『鰐山古墳群』1987 総社市文化振興財團
- ・『塚穴古墳群発掘調査報告書』1993 岐阜県美濃市教育委員会
- ・『井田川茶臼古墳』1988 三重県教育委員会
- ・『物集女車塚』1988 向日市教育委員会
- ・『国立歴史民俗博物館研究報告第65集 千葉県成東町駄ノ塚古墳発掘調査報告書』1996 國立歴史民俗博物館
- ・東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会 1996 『第4回東海考古学フォーラム 鍋と甕のデザイン』
- ・東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会 1998 『第6回東海考古学フォーラム 土器・墓が語

る』

- ・図録『黄金に魅せられた倭人たち』1996 島根県八雲立つ風土記の丘資料館
- ・『シンボジウム美濃の後期古墳』1991 岐阜市歴史博物館
- ・図録『古代の造形美 装飾須恵器展』1995 愛知県陶磁資料館
- ・成瀬正勝 1998 「美濃における後期群集墳形成の一契機一片袖式石室を中心にー」『岐阜史学』第93号
- ・闌 義則 1986 「古墳時代の後期鉄鎌の分類と編年」『日本古代文化研究』第3号
- ・杉山秀宏 「古墳時代の鉄鎌」『櫛原考古学研究所論集8』
- ・八賀 晋 1998 「須恵器制作の一視点—ロクロ成形と置き台ー」『植崎彰一先生古希記念論文集』
- ・岡安光彦 1984 「いわゆる素戔の巻について—環状鏡板付巻の型式学的分析と編年ー」『日本古代文化研究』創刊号
- ・臼杵 勲 1984 「古墳時代の鐵刀について」『日本古代文化研究』創刊号
- ・宮代栄一 1996 「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心とする—」『日本考古学』第3号
- ・宮内明子 1998 「近江における古墳出土の鉄鎌について」『滋賀考古』第20号
- ・石黒立人 1988 「伊勢湾地方と琵琶湖地方、あるいは東西の結節点—弥生後期の土器様相を中心としてー」『古代』第86号
- ・横幕大祐 1997 「いわゆる外護列石について」『美濃の考古学』第2号
- ・渡辺博人 1996 「美濃の後期古墳出土須恵器の様相—蓋环の型式設定とその編年試案ー」『美濃の考古学』創刊号
- ・渡辺博人 1997 「美濃における後期古墳時代の地域相(1)」『美濃の考古学』第2号
- ・小野木 学 1996 「角之御前遺跡出土の中世遺物について」『美濃の考古学』創刊号
- ・小野木 学 1997 「美濃地方における中世前期の土師器皿の様相」『美濃の考古学』第2号
- ・井川様子 1997 「15世紀後半から16世紀前葉の土師器皿—中濃地方を中心としてー」『美濃の考古学』第2号
- ・森岡秀人 1983 「追葬と棺体配置—後半期横穴式石室の空間利用原理をめぐる二、三の考察ー」『考古学論叢』
- ・沢村治郎 1999 「須恵器大型器台考」『滋賀史学会誌』第11号
- ・澤村雄一郎 1996 「愛知県・岐阜県内古墳出土馬具の研究」南山大学大学院考古学研究室
- ・村上 隆 「古代金工における金屬接合技術—銀鍍による「鍍接」技法を中心にー」『奈良國立文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢II』
- ・水野敏典 1993 「古墳時代後期の軍事組織と武器副葬—長頸鎌の形態変遷と計量の相間に見る武器供給からー」『古代』第96号

# 図 版

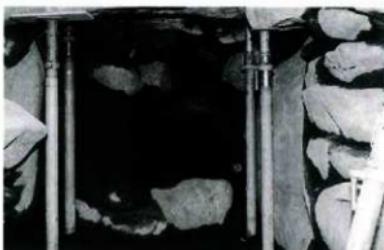


南高野古墳石室全景

図版 2



内側に押し出された両側壁石材（奥壁側より）



崩落した羨道の石材（前庭より）



奥壁右側の掘り方と盛土状況



奥壁左側の掘り方と盛土状況



墳丘（東より）



墓坑完竣状況（西より）



遺物出土状況（玄門右立柱石前）



遺物出土状況（奥壁前）

南高野古墳遺構・遺物



SD 1 確検出状況（南より）



SD 1 完掘状況（南より）



SD 2 確検出状況（西より）



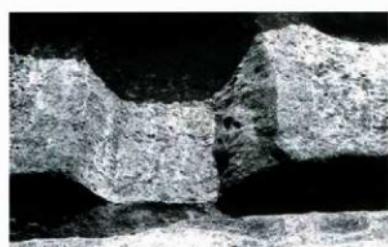
SD 2 完掘状況（北より）



SD 2 遺物出土状況



SK 2・3・5 完掘状況（南より）



SD 16 完掘状況（北より）



SD 16 断面（南より）

二ノ井遺跡遺構・遺物

図版 4



市場遺跡調査前風景（西より）



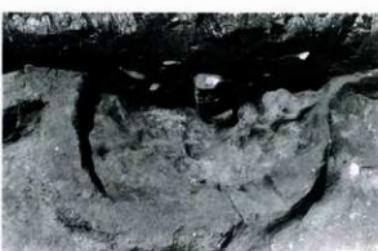
A区 完掘状況（東より）



SD 1 検出状況（南より）



ピット群 完掘状況（南西より）



SK 2 完掘状況（南より）



SK 4 完掘状況（南より）



SK 5 完掘状況（南より）



遺物出土状況

市場遺跡遺構・遺物



1



3



2

南高野古墳遺物(1)

图版 6



6



5



4



7

南高野古墳遺物(2)



南高野古墳遺物(3)



12



18



17



15



16



20

南高野古墳遺物(4)



22



23



19



24



21



26

南高野古墳遺物(5)



25



31



30



27



29



29



28



28



55



55

南高野古墳遺物(7)



33



33

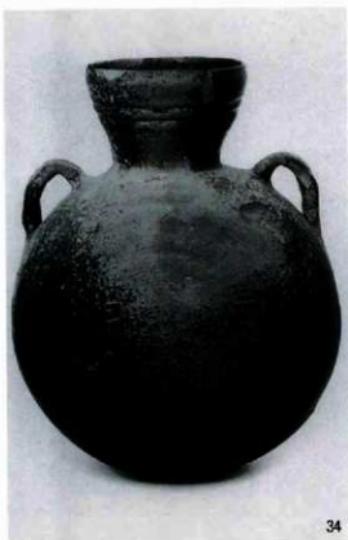


32



32

南高野古墳遺物(8)



34



34

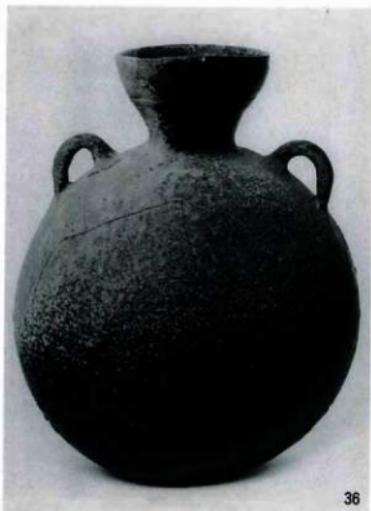


35



35

南高野古墳遺物(9)



36



36



37



37

南高野古墳遺物(10)



南高野古墳遺物(11)



南高野古墳遺物(12)



46



49



51



50



52



53

南高野古墳遺物(13)



57



58



59



60



61



62



63



64

南高野古墳遺物(14)



63



62



60



67

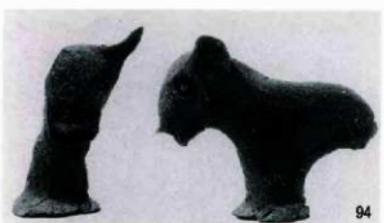
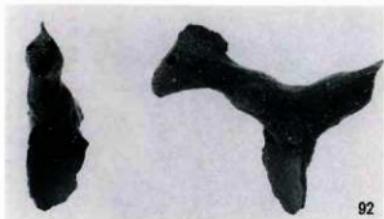


66

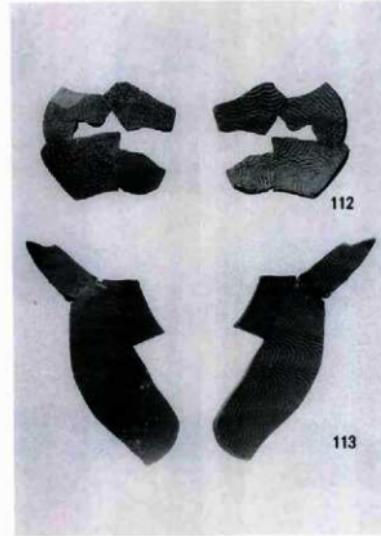
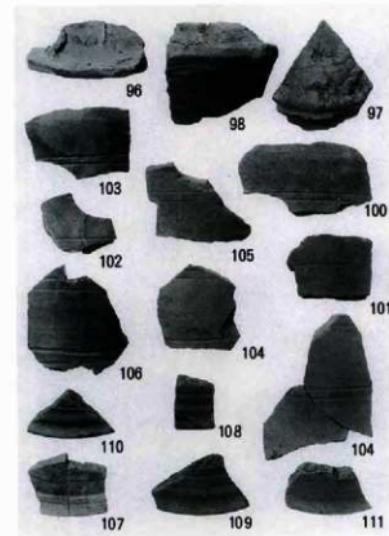
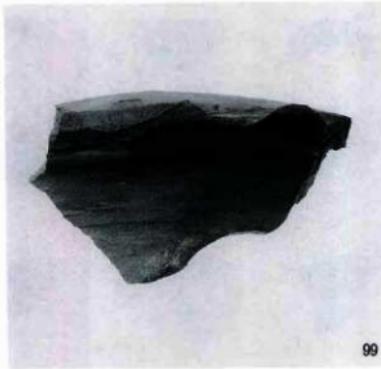


65

南高野古墳遺物(15)

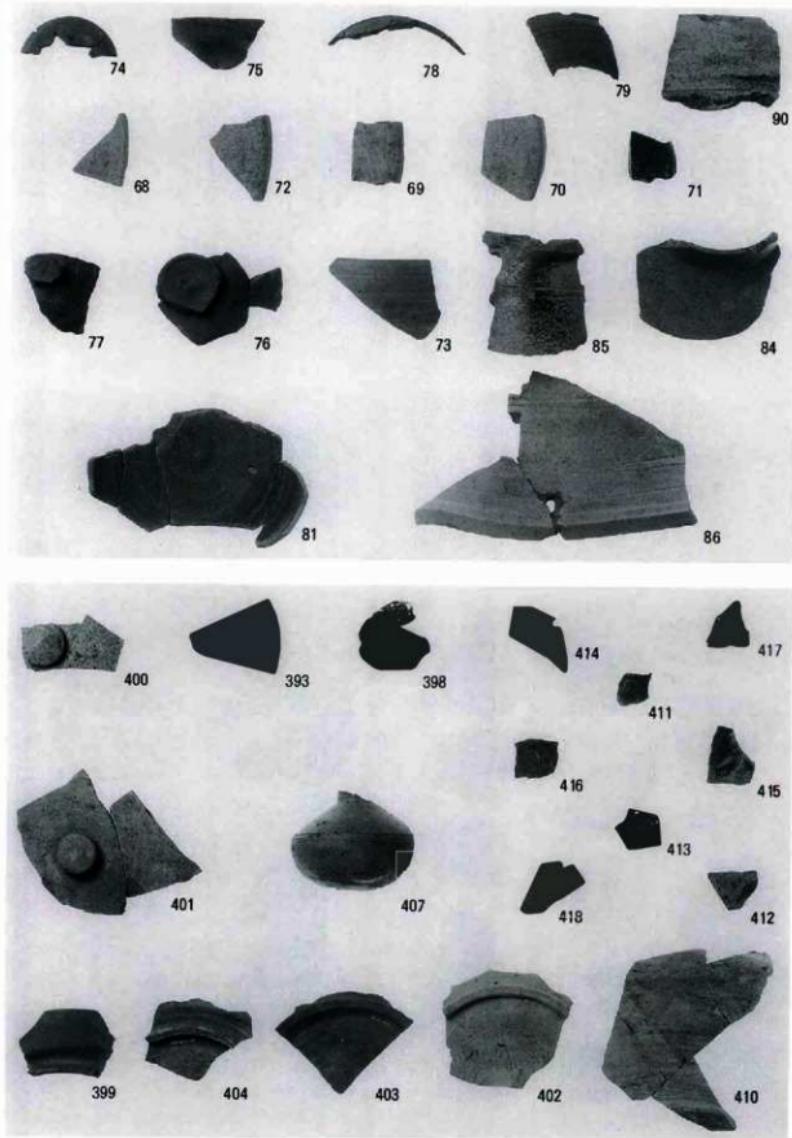


南高野古墳遺物(16)

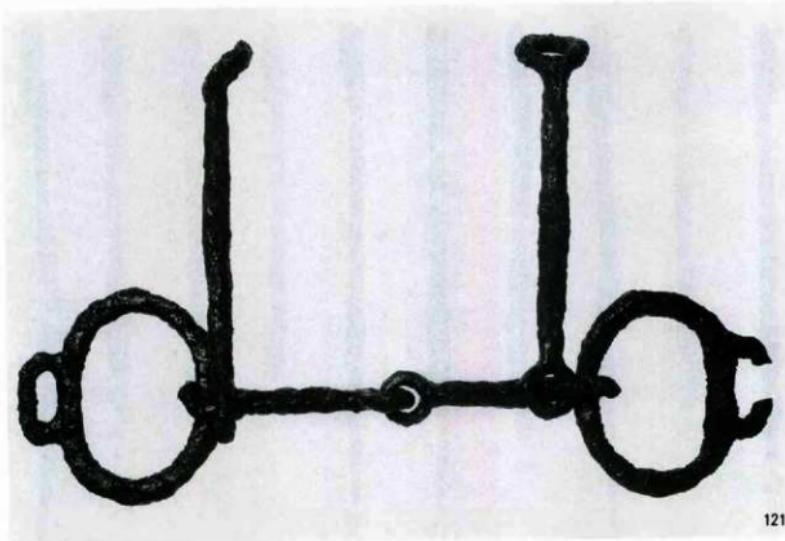


南高野古墳遺物(17)

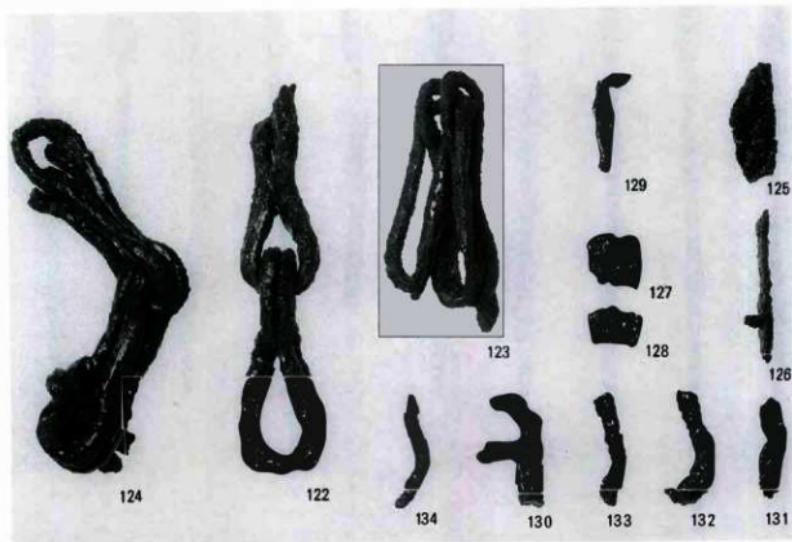
図版22



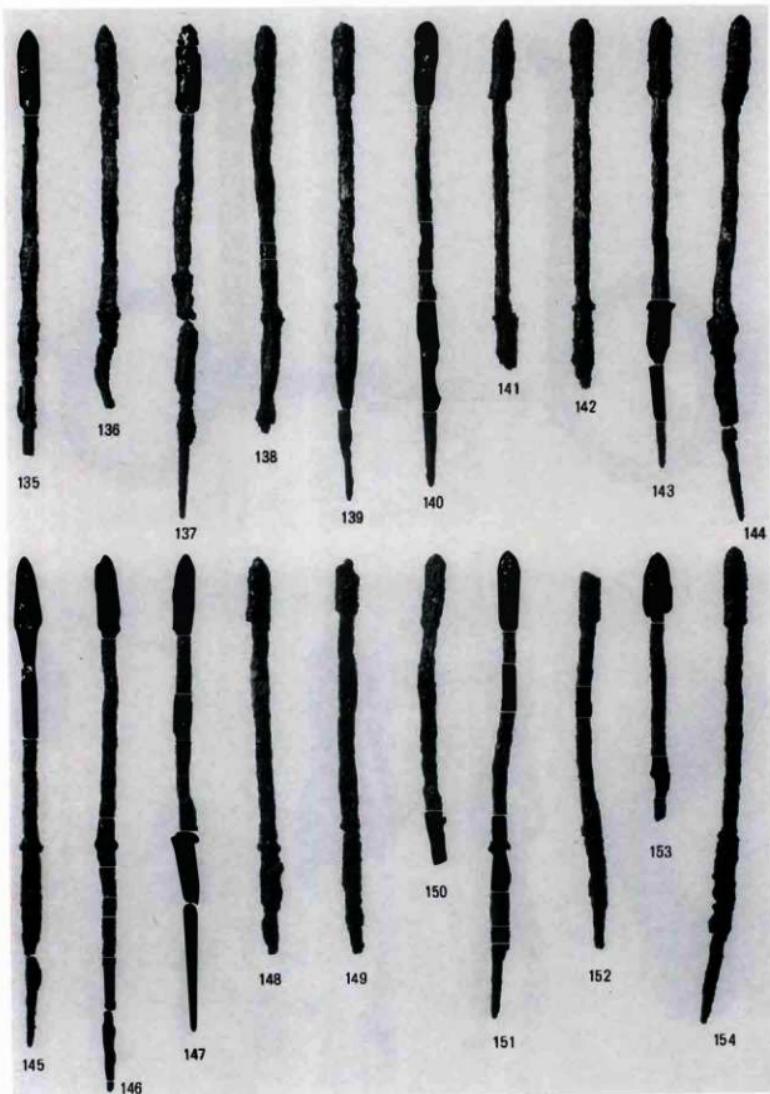
南高野古墳遺物(18)



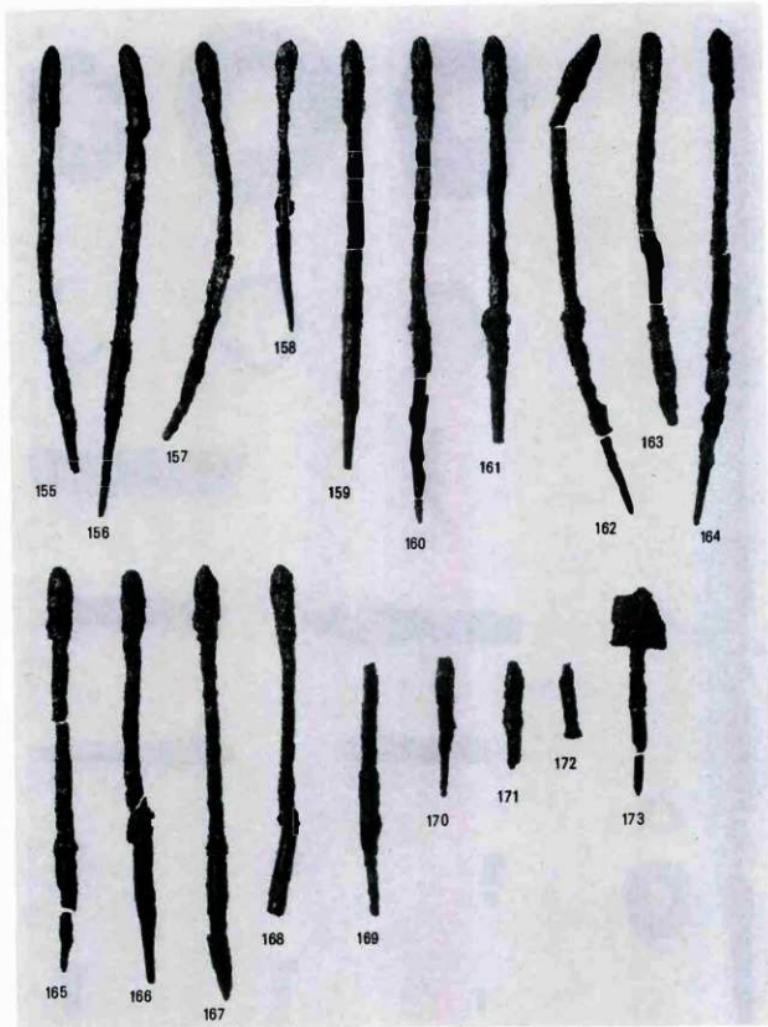
121



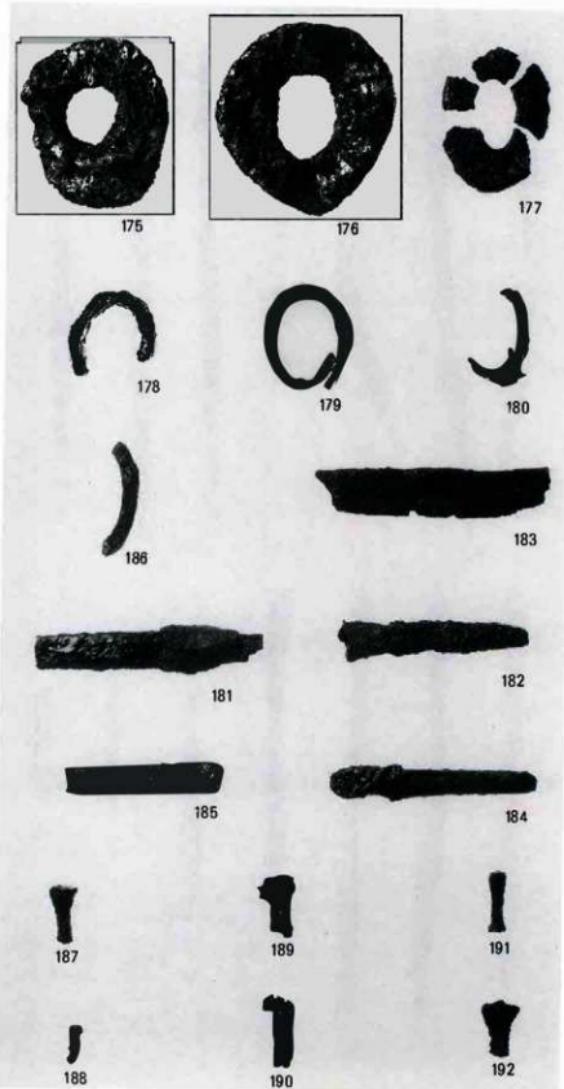
南高野古墳遺物(19)



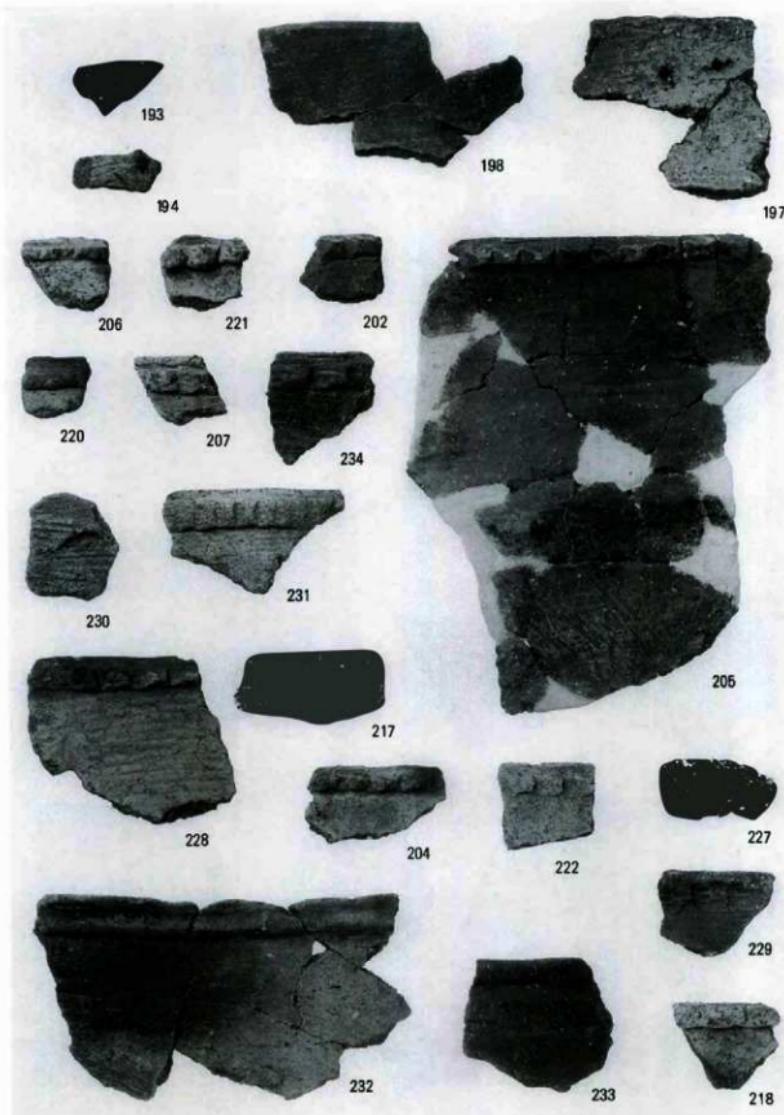
南高野古墳遺物(20)



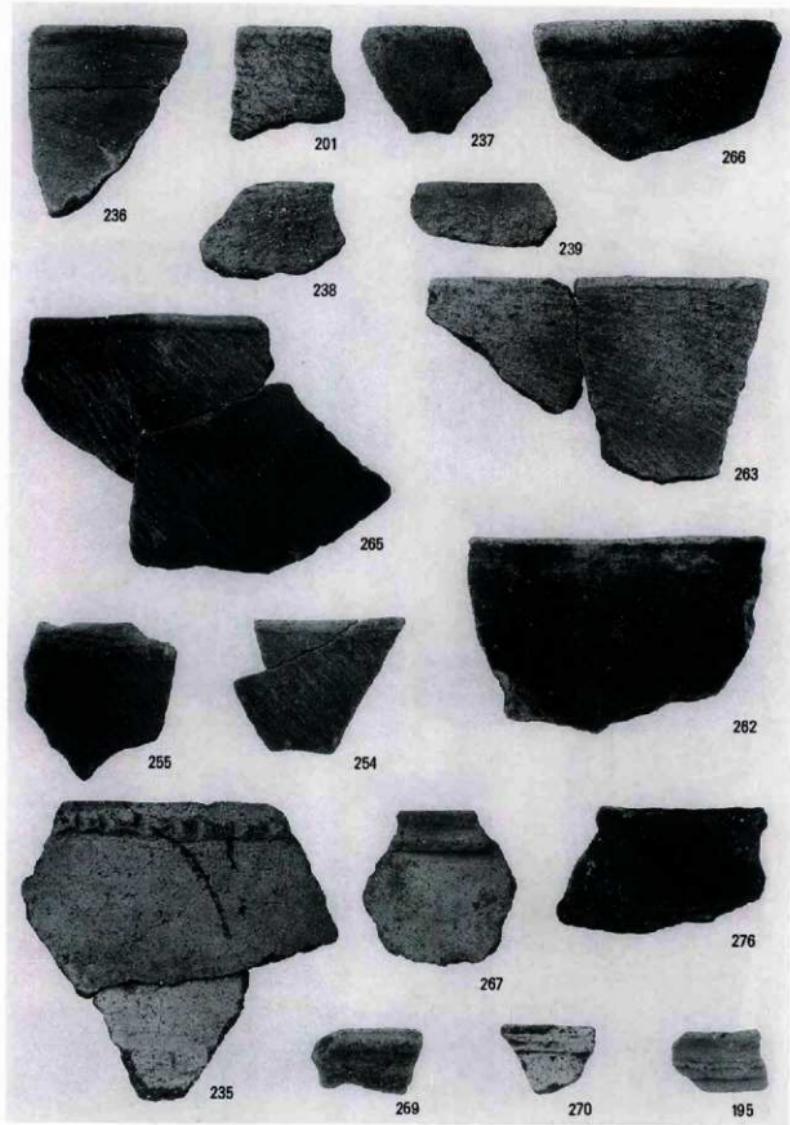
南高野古墳遺物(21)



南高野古墳遺物(22)



二ノ井遺跡遺物(1)



二ノ井遺跡遺物(2)



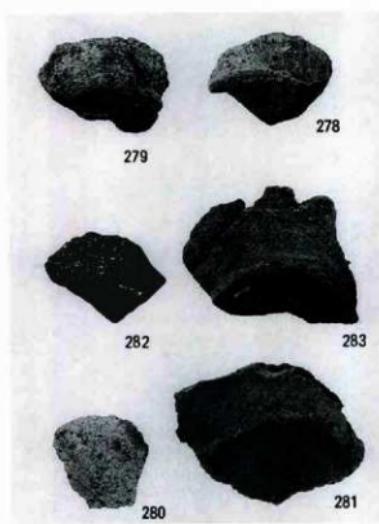
213



256



200



279

278

282

283

280

281



316



346

二ノ井遺跡遺物(3)



345



335



334



323



331



330

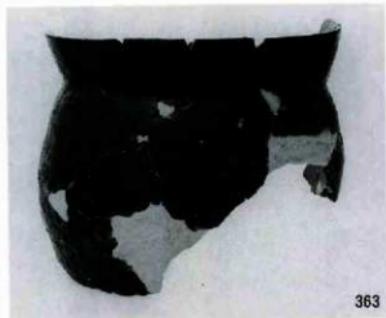


333



327

二ノ井遺跡遺物(4)



363



312



309



310



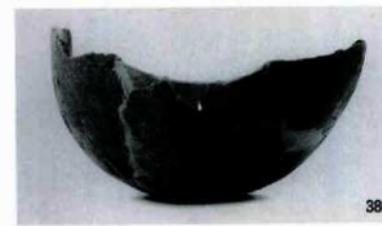
304



308

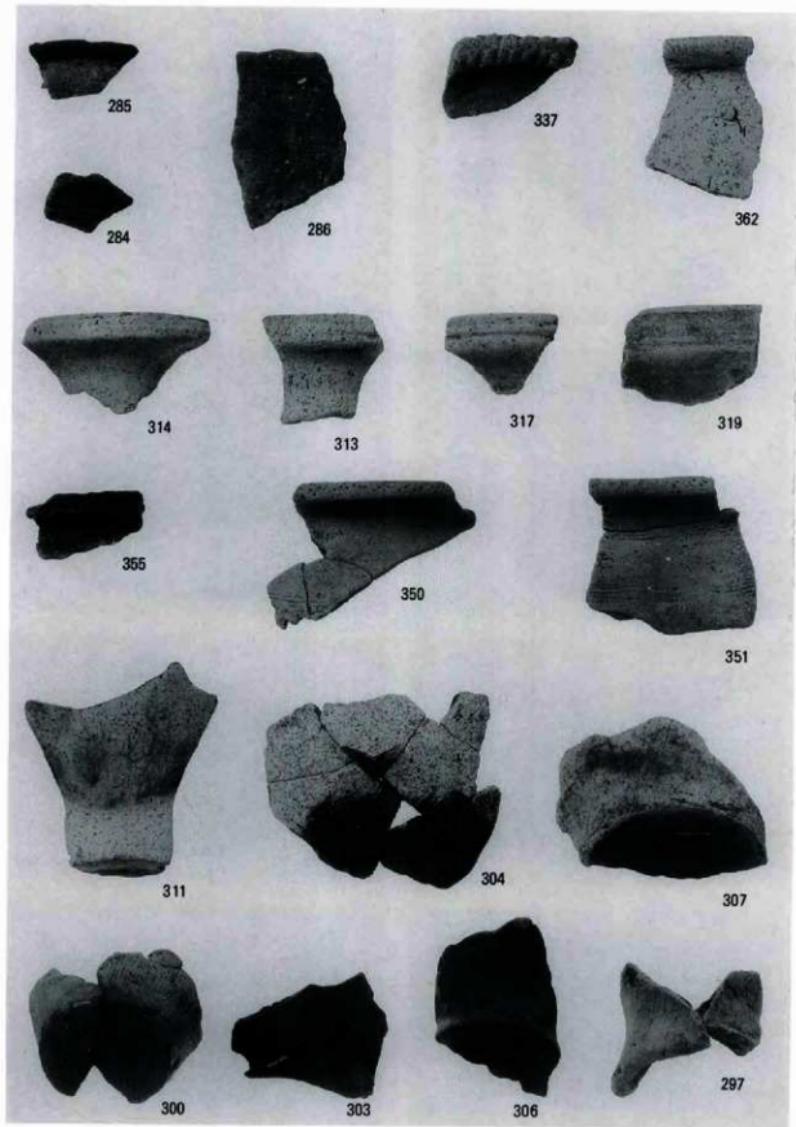


336

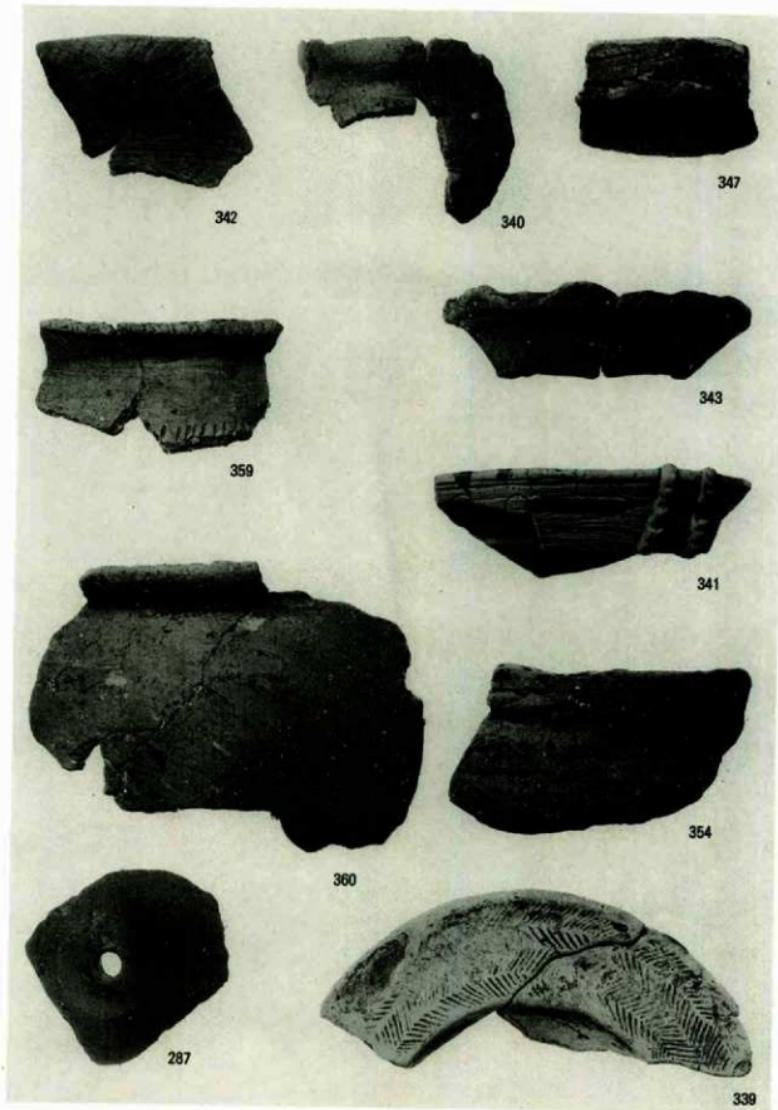


380

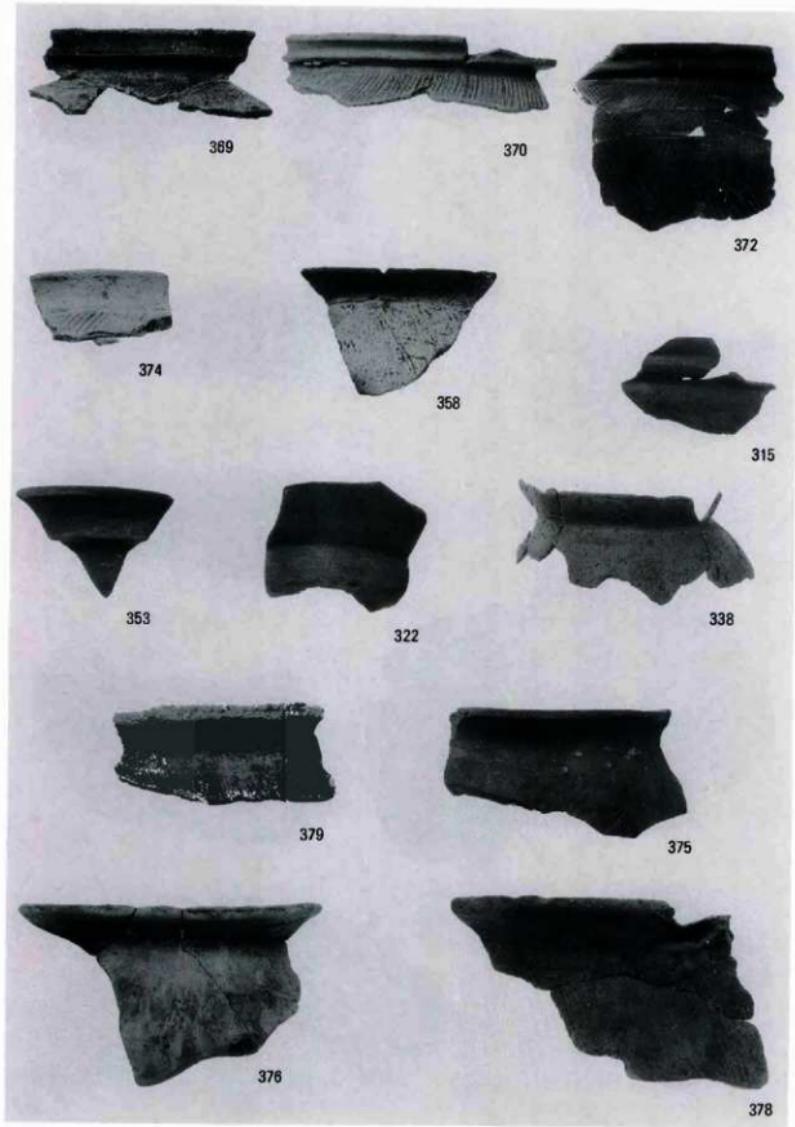
二ノ井遺跡遺物(5)



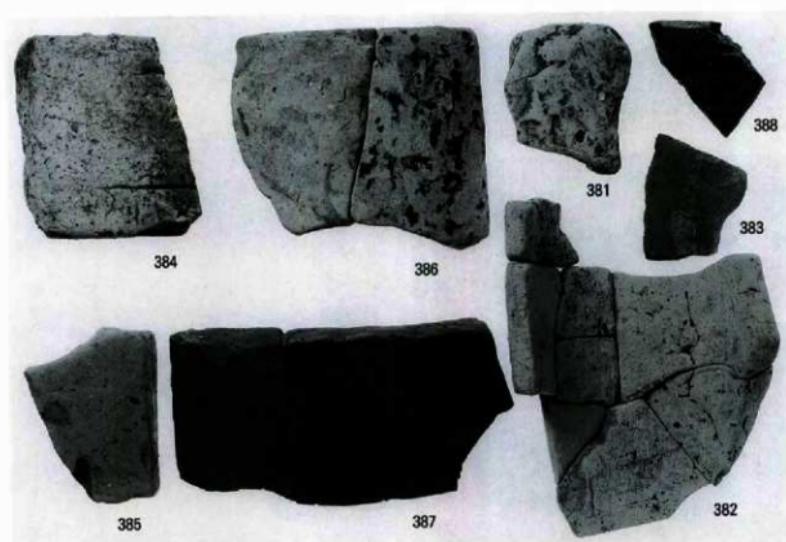
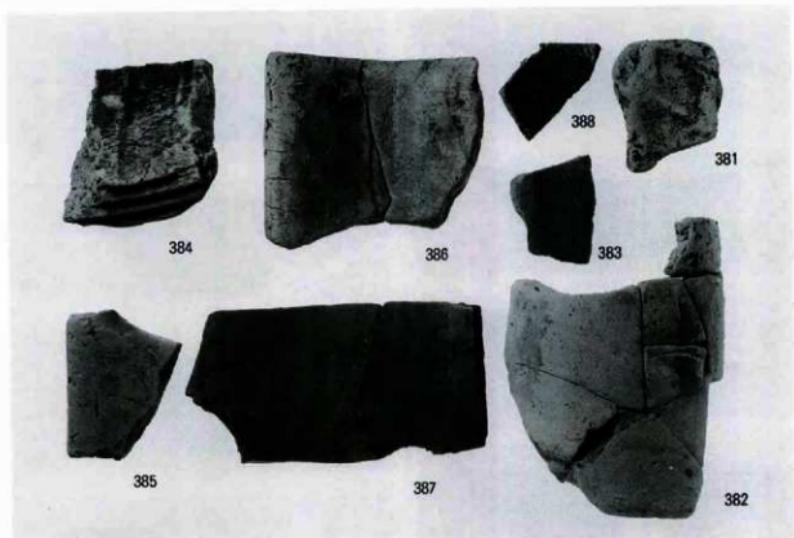
二ノ井遺跡遺物(6)



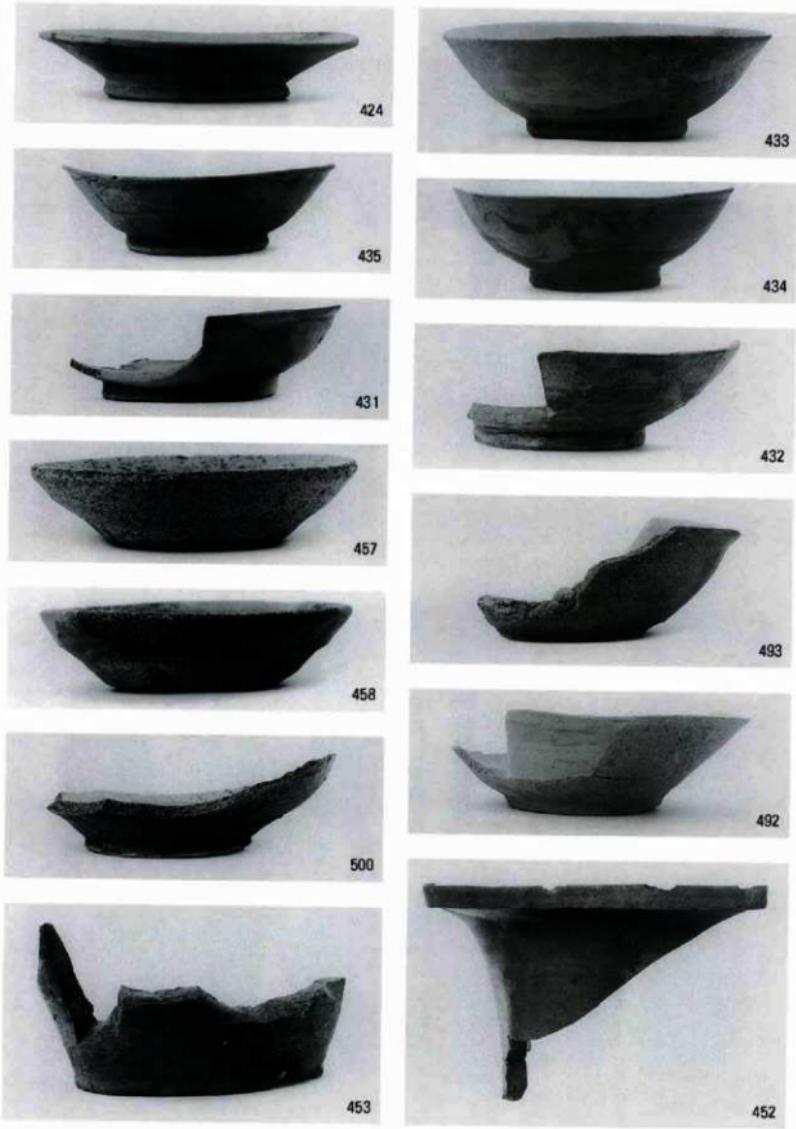
二ノ井遺跡遺物(7)



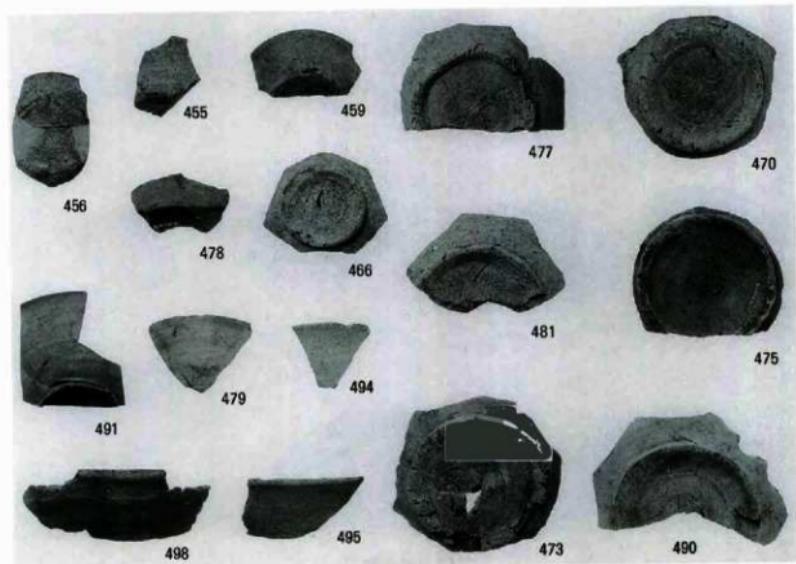
二ノ井遺跡遺物(8)



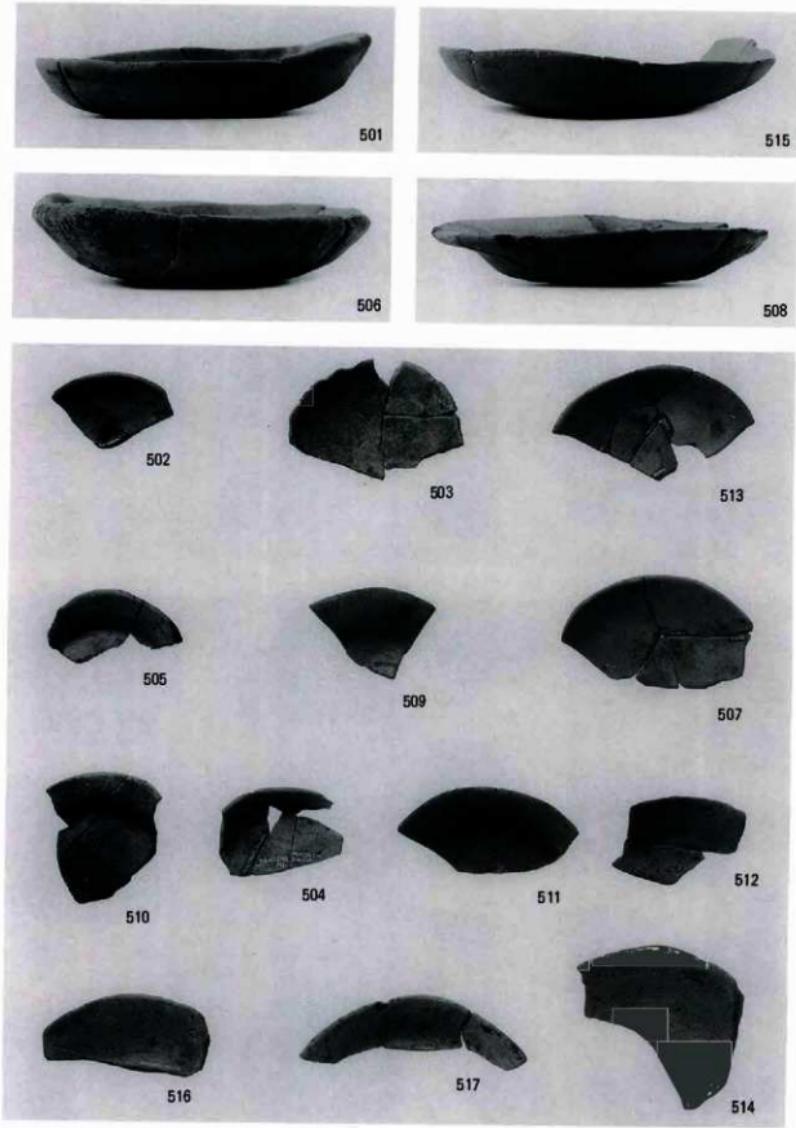
二ノ井遺跡遺物(9)



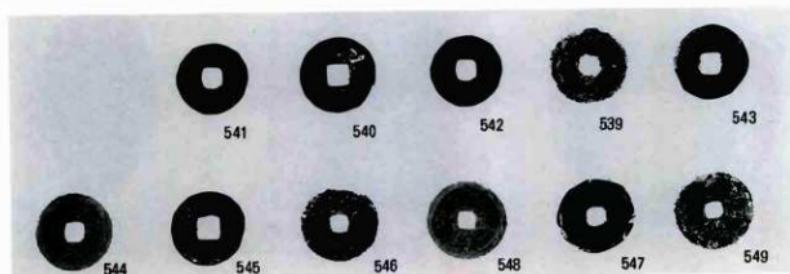
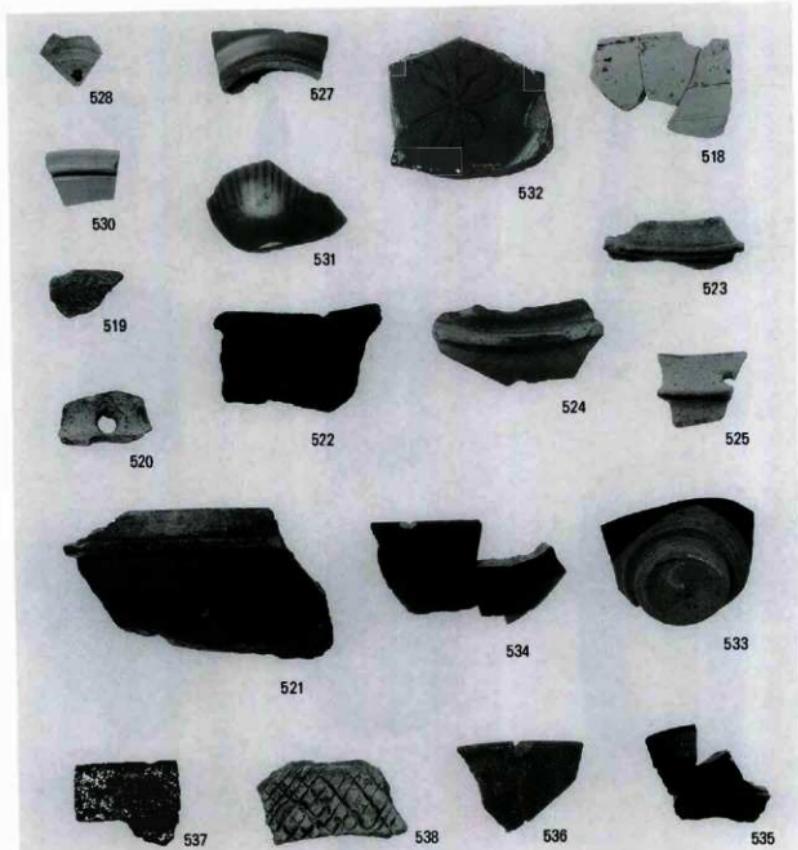
二ノ井遺跡遺物(10)



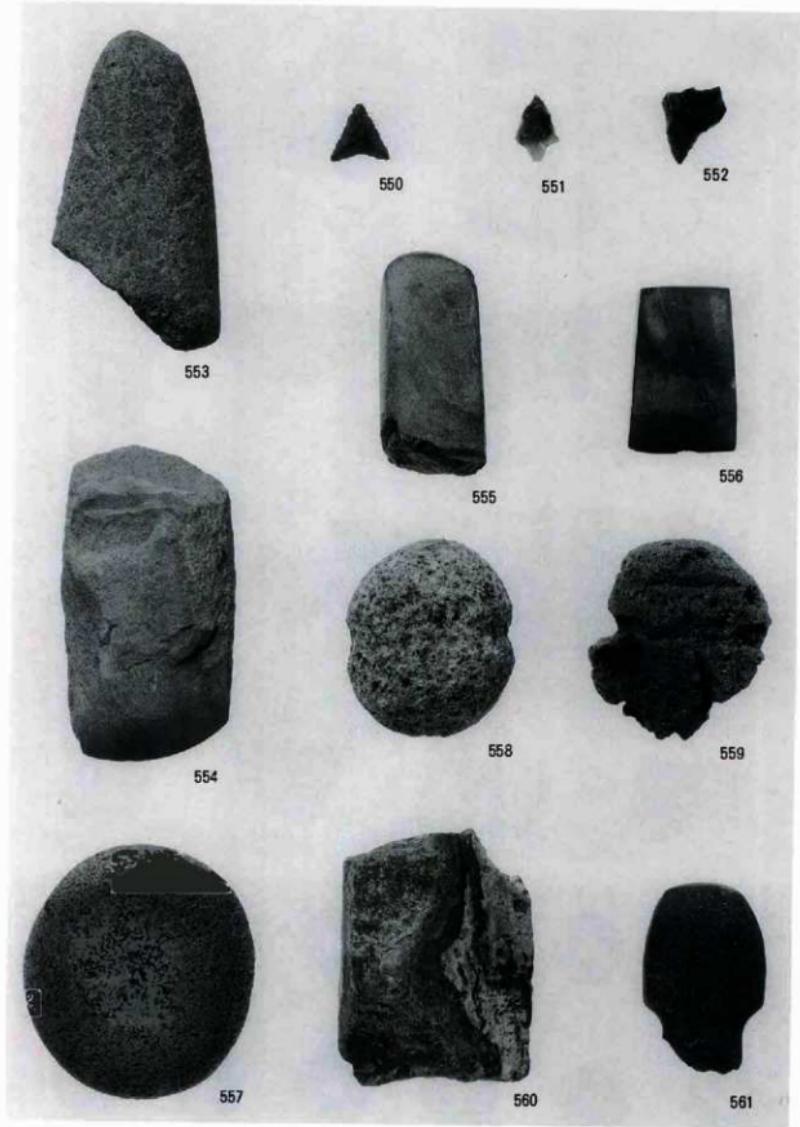
二ノ井遺跡遺物(11)



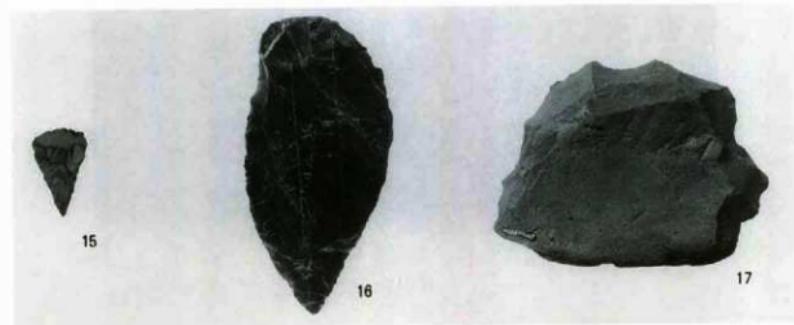
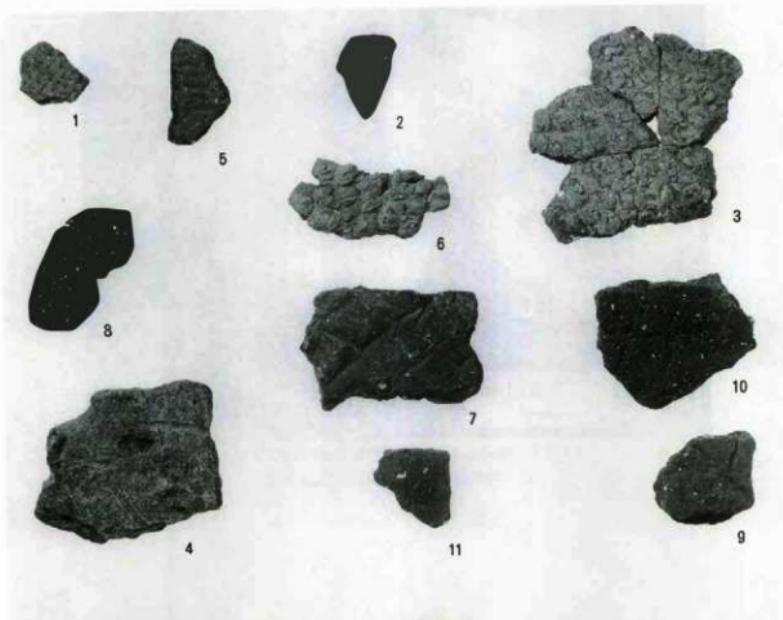
二ノ井遺跡遺物(12)



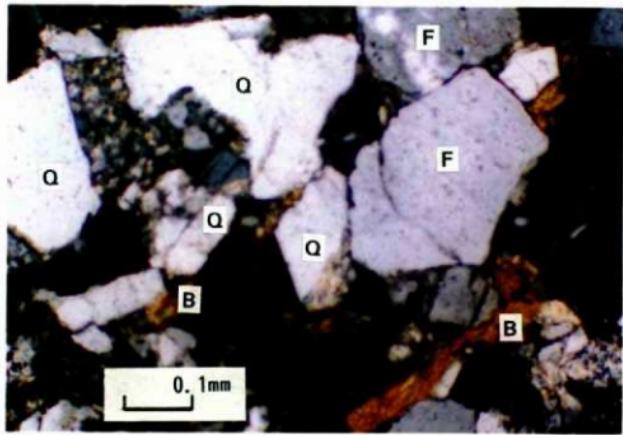
二ノ井遺跡遺物(13)



二ノ井遺跡遺物(14)



市場遺跡遺物(1)



玄室天井壁の砂岩の偏光顕微鏡写真 (1997. 2. 14)

B : 黒雲母 F : 長石 Q : 石英



石室石材顕微鏡写真・鉄錆基部拡大写真



南高野古墳復元 CG

## 報告書抄録

ふりがな	みなみたかのこふん・にのいいせき・いちばいせき						
書名	南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡						
調書名							
卷次							
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター 調査報告書						
シリーズ番号	第51集						
編著者名	青木健太郎 近藤大典 菱田 厘 木村寛之 飯沼暢康						
編集機関	財團法人岐阜県文化財保護センター						
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1 Tel 058(237)8550						
発行年月日	西暦2000年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド			調 査 期 間	調 査 面 積	調査原因
南高野古墳 二ノ井遺跡	岐阜県揖斐郡 池田町片山字南高野	21404	08769	35° 13' 25' 34'	951116～ 960322 960415～ 970314	510m <sup>2</sup> 2,490m <sup>2</sup>	主要地方道 岐阜関ヶ原 線道路改良 工事に伴う
市 場 遺 跡	同町片山字市 場	21404	08768	35° 13' 24' 33' 58° 42'	980506～ 980808	500m <sup>2</sup>	
所収道路名	種 別	主な時代	主な遺構	主 な 遺 物			特記事項
南高野古墳	古 境	古墳時代	古 境	須恵器・馬具・鉄製品			玄室内が赤 彩された古 墳
二ノ井遺跡	散布地	室町時代	中世墓 溝	山茶碗・土師器皿 古鏡・中世陶磁器			
市 場 遺 跡	散布地	绳文時代	土坑・溝	绳文土器			

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第51集

**南高野古墳・二ノ井遺跡・市場遺跡**

2000年3月31日

編集・発行　財団法人 岐阜県文化財保護センター  
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1  
印 刷　舟橋印刷株式会社